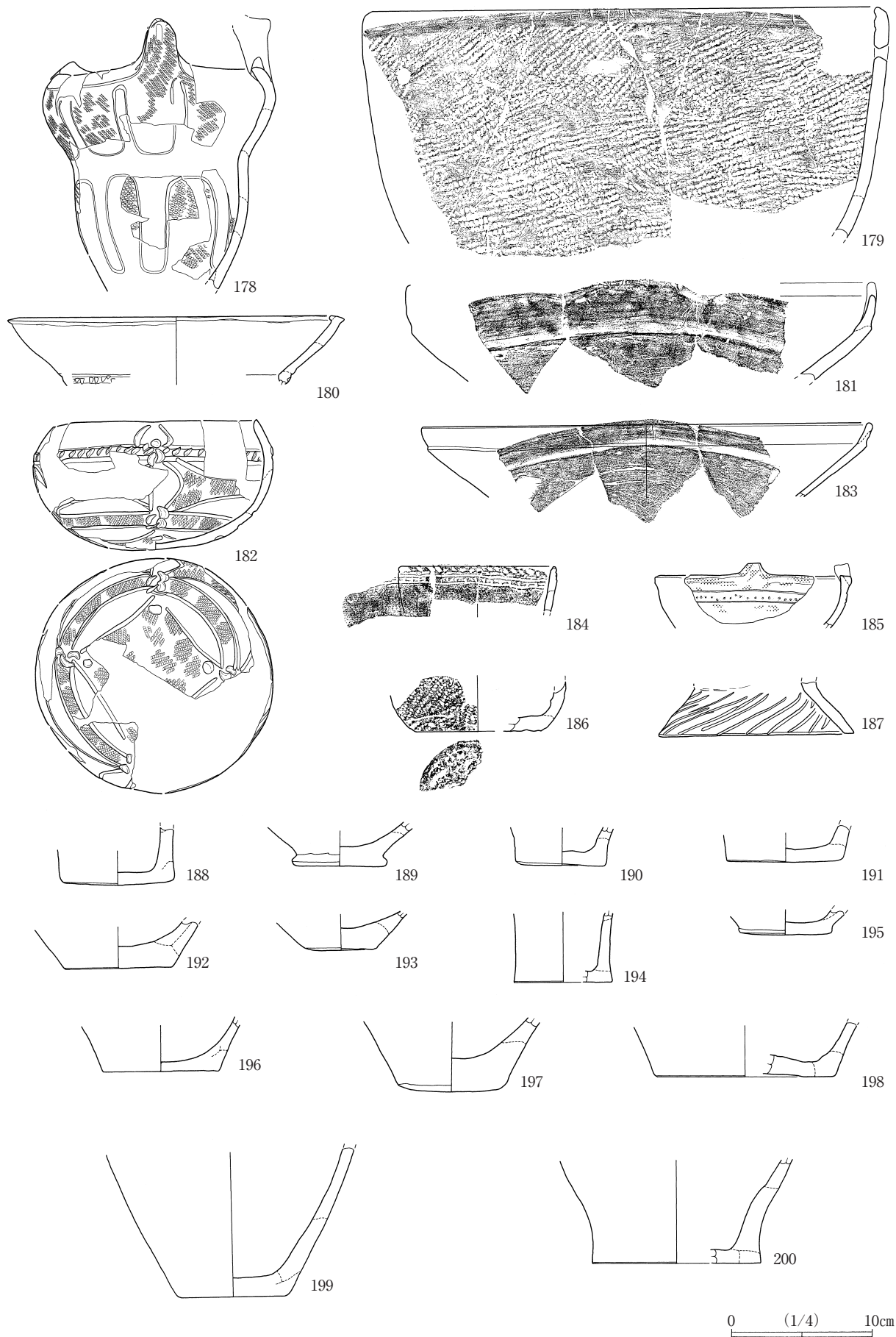
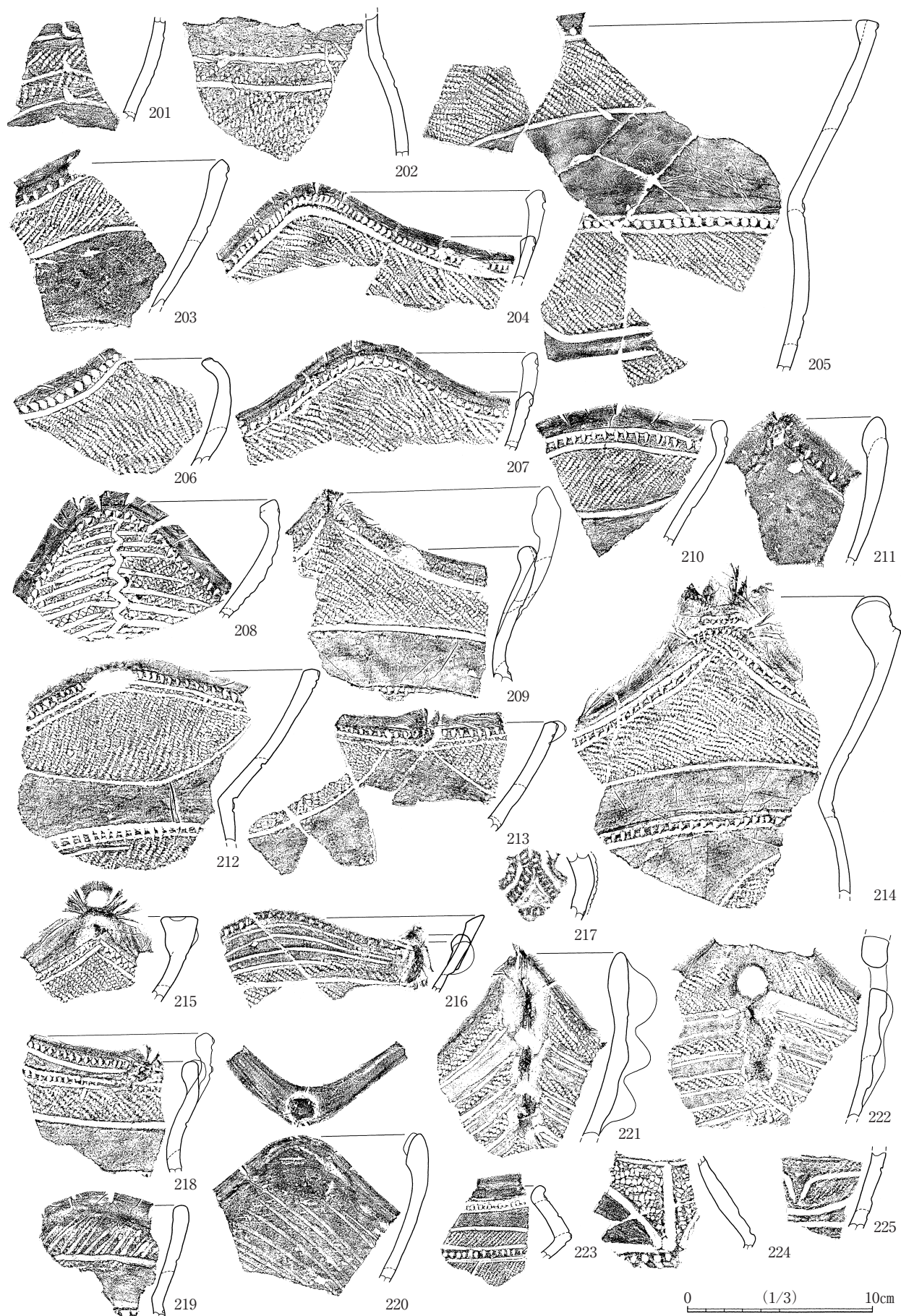
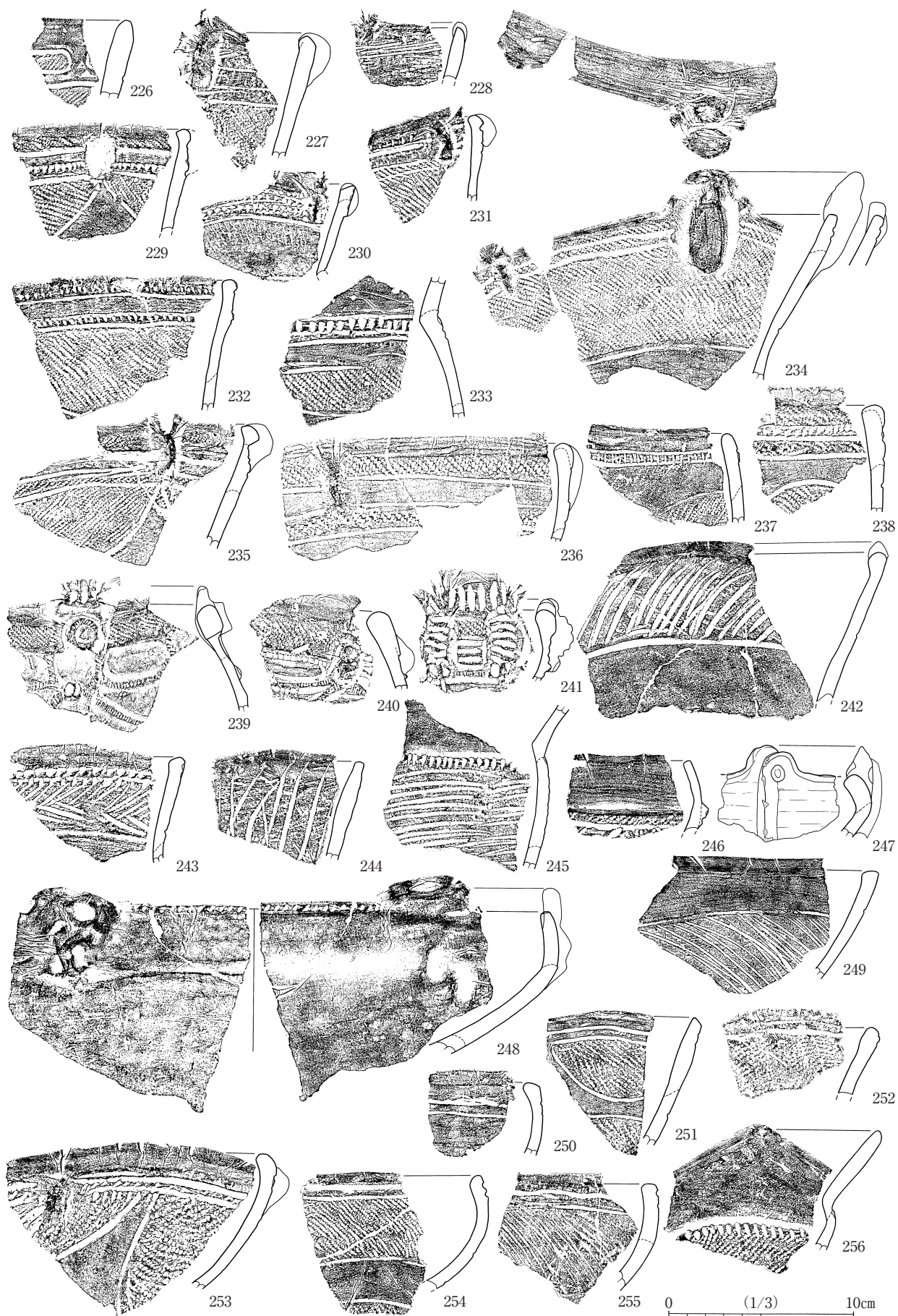




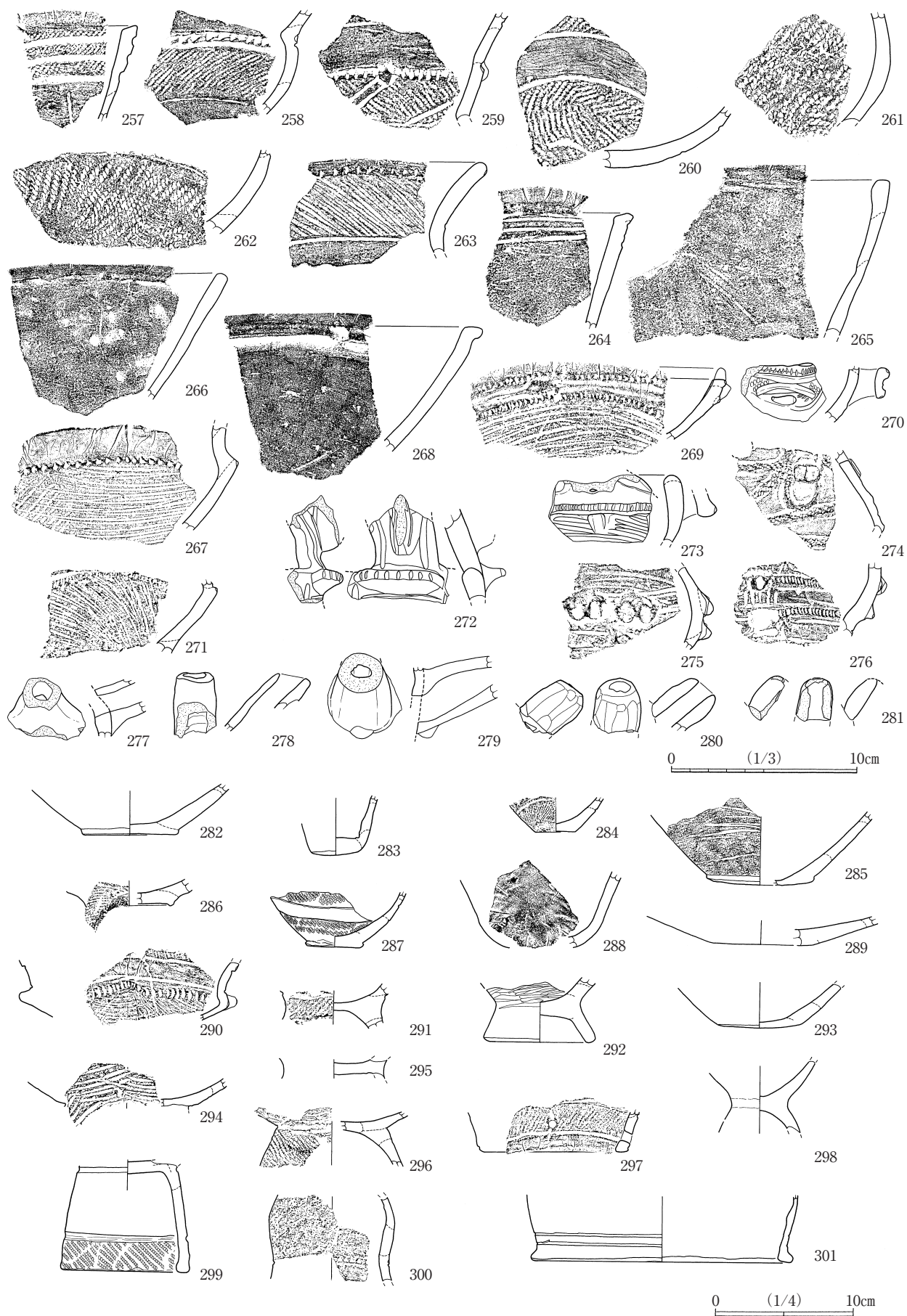
第261図 3次調査区グリッド出土土器 (5)



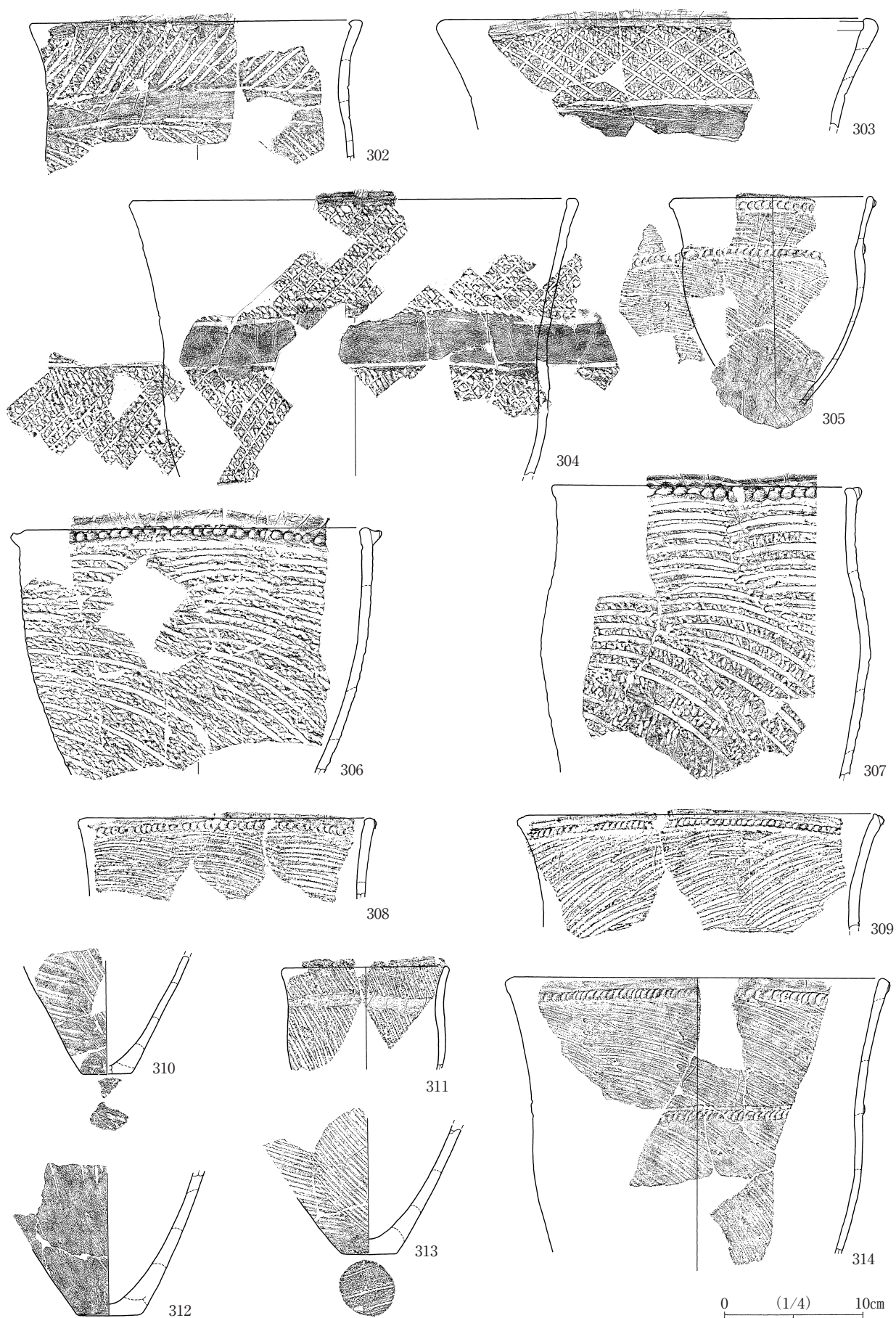
第262図 3次調査区グリッド出土土器 (6)



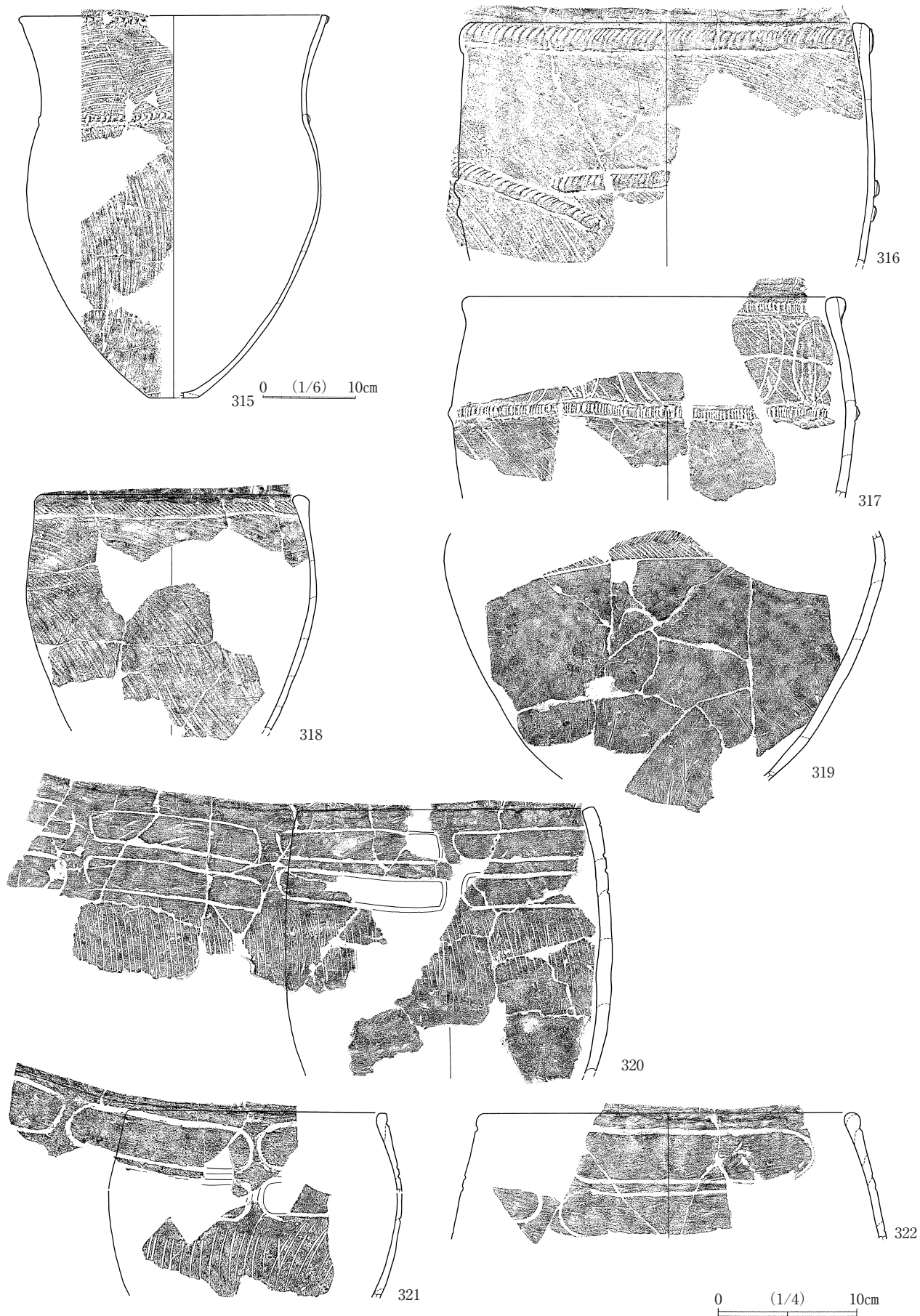
第263図 3次調査区グリッド出土土器 (7)



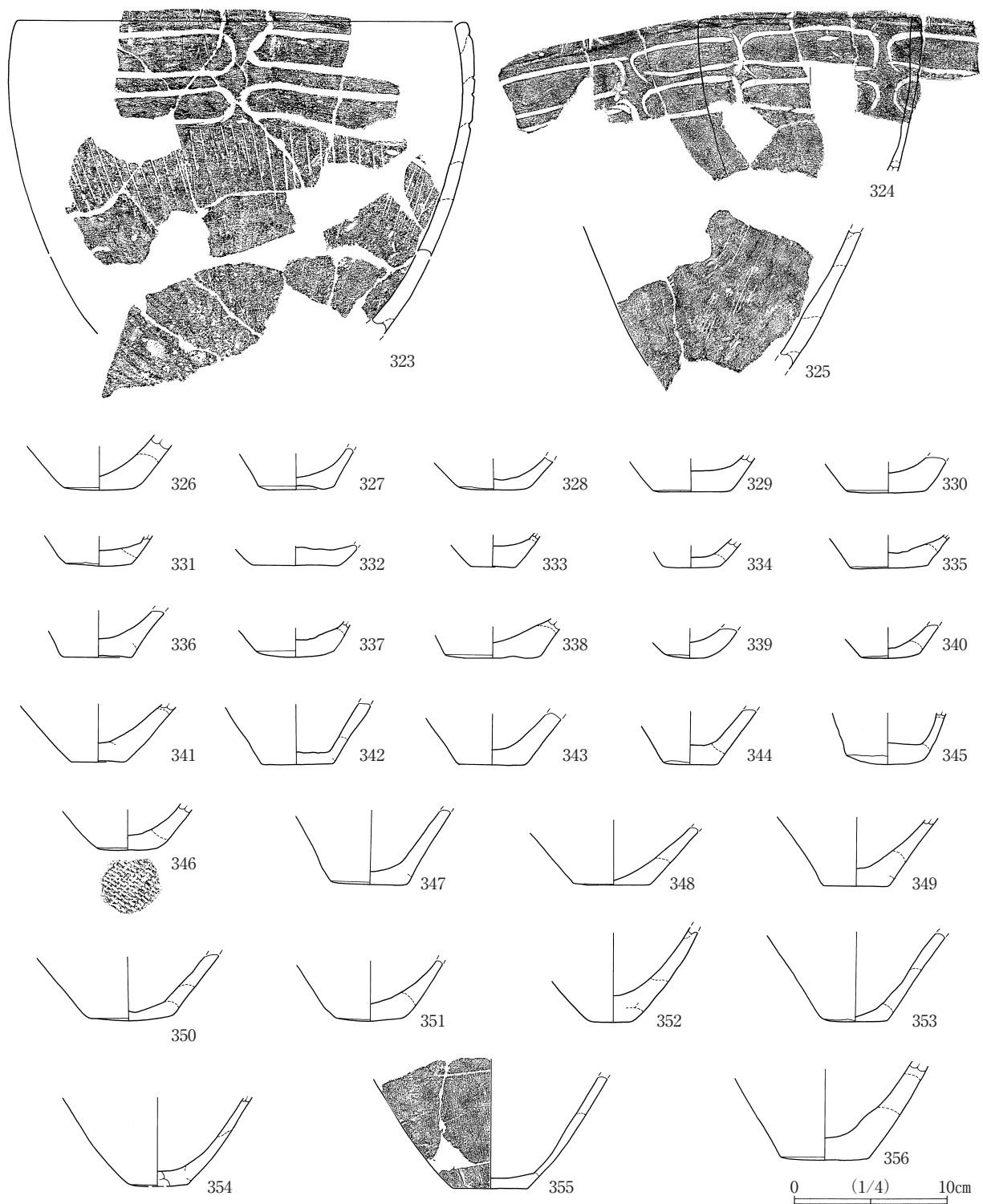
第264図 3次調査区グリッド出土土器 (8)



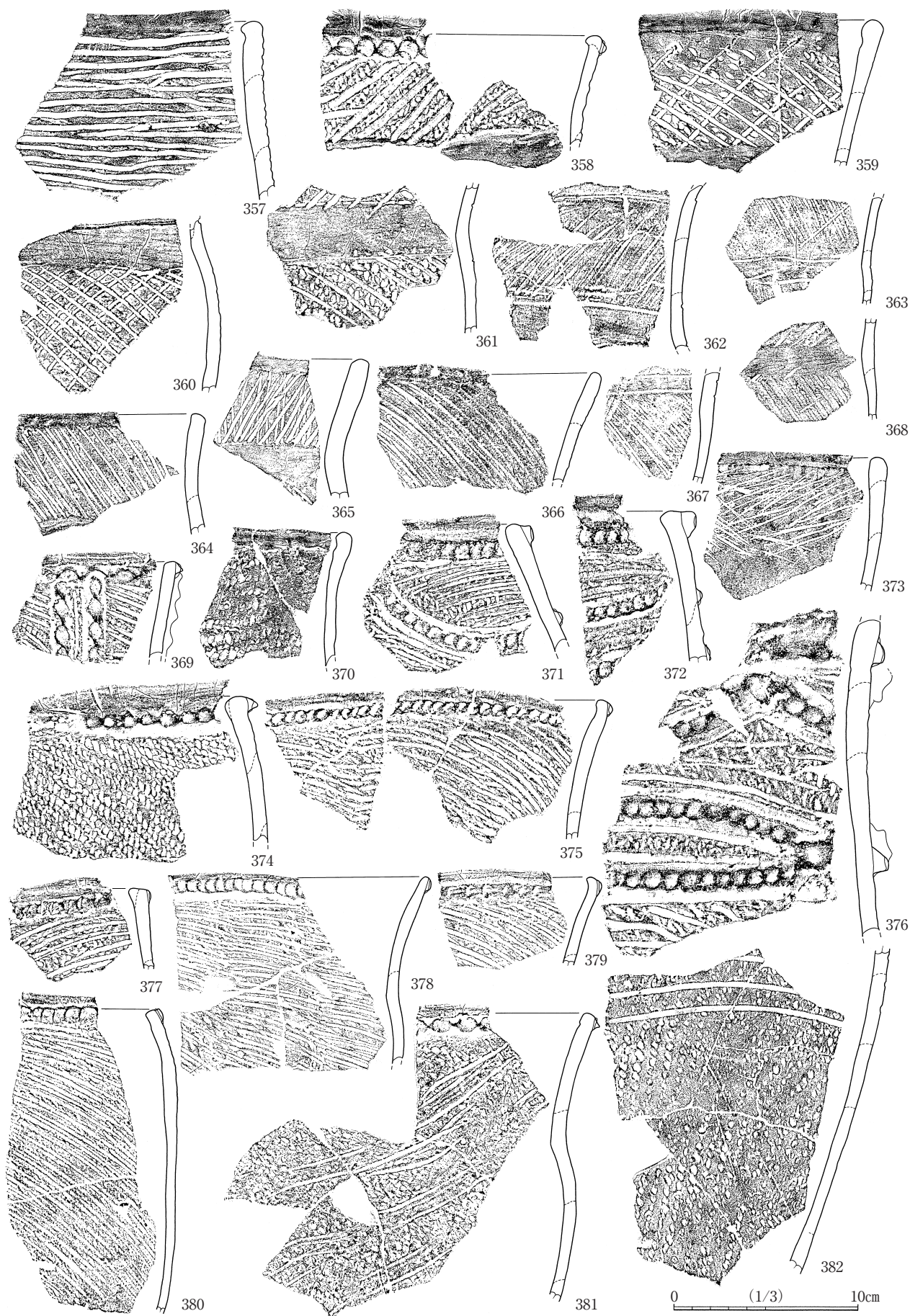
第265図 3次調査区グリッド出土土器 (9)



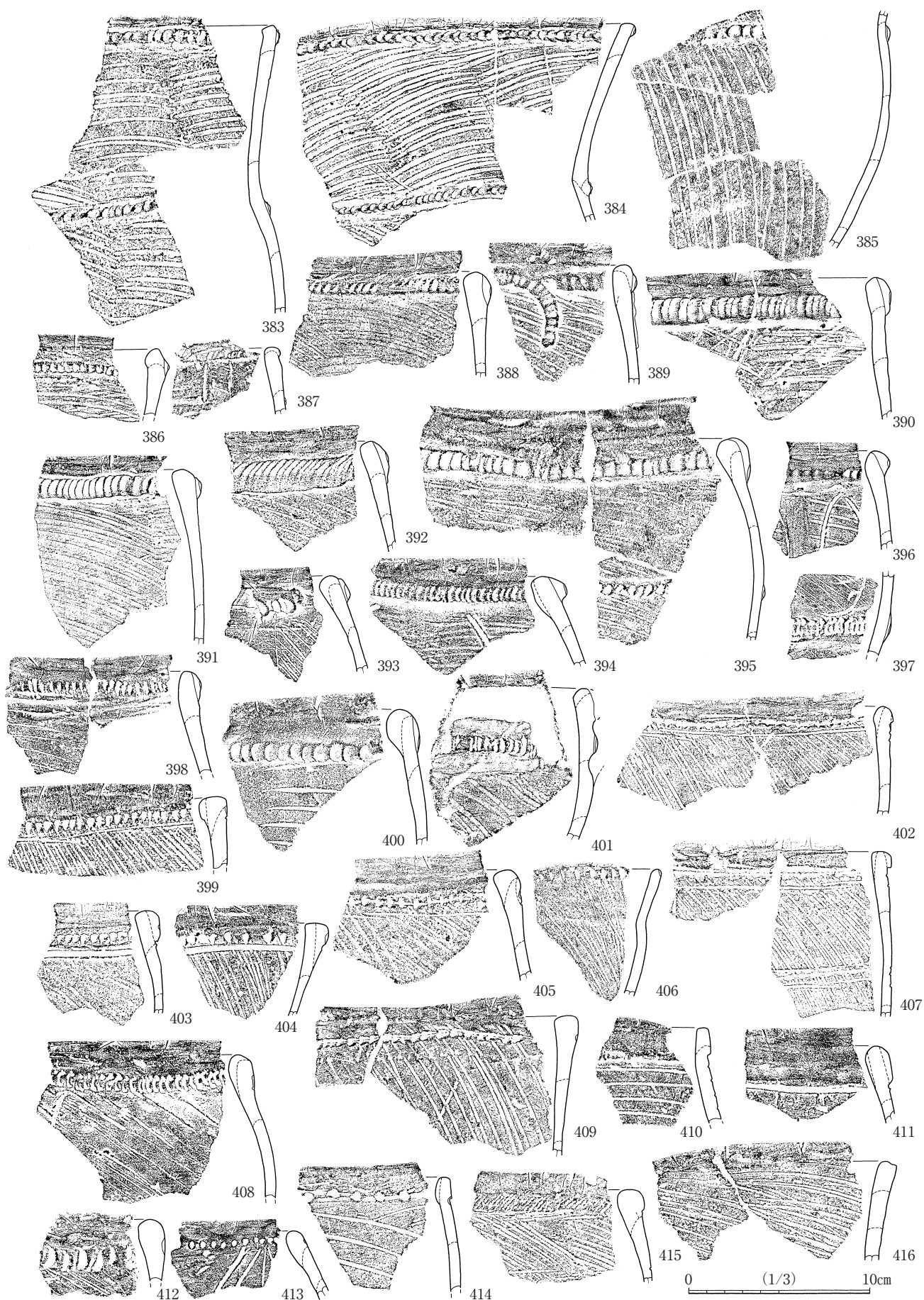
第266図 3次調査区グリッド出土土器 (10)



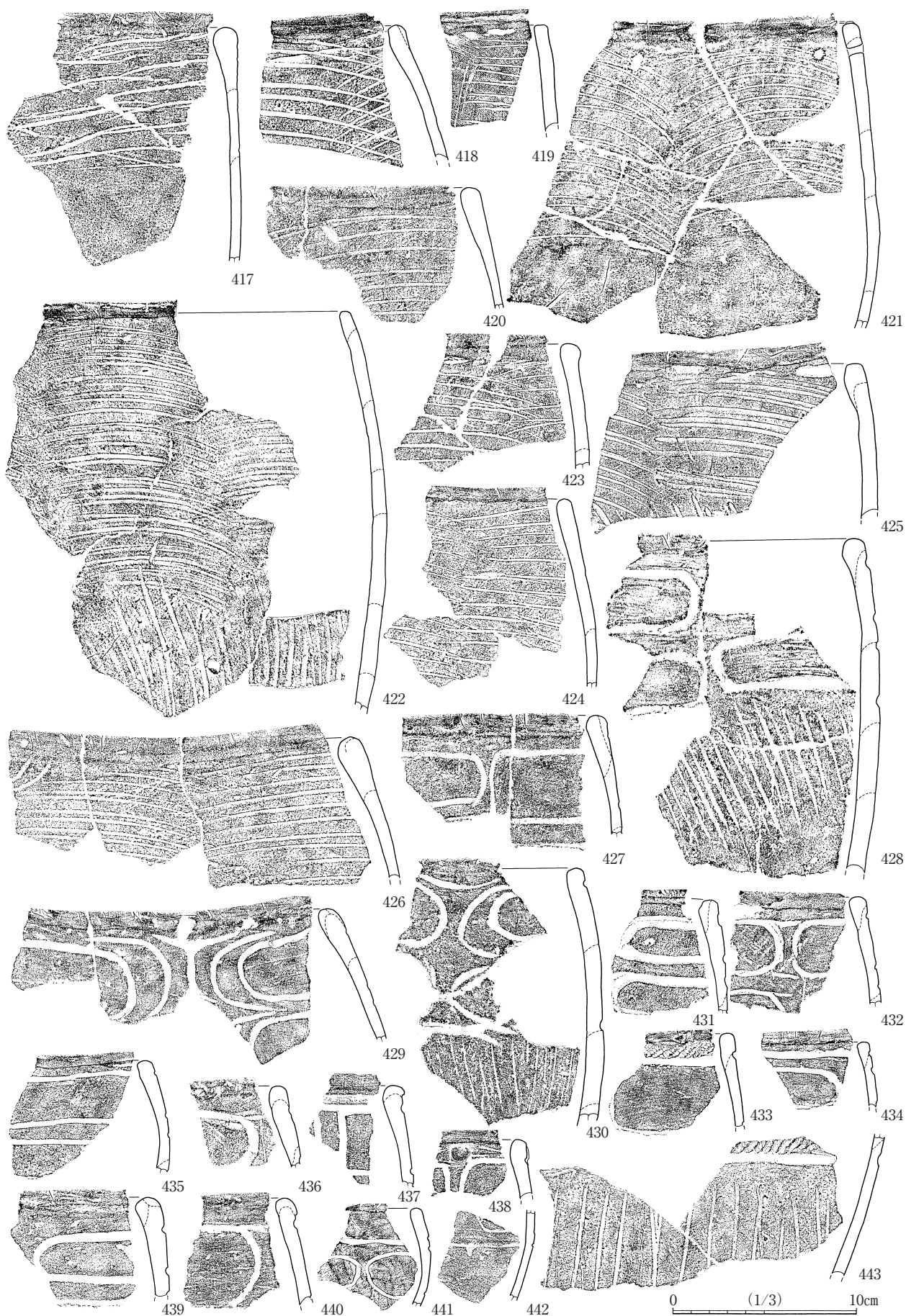
第267図 3次調査区グリッド出土土器 (11)



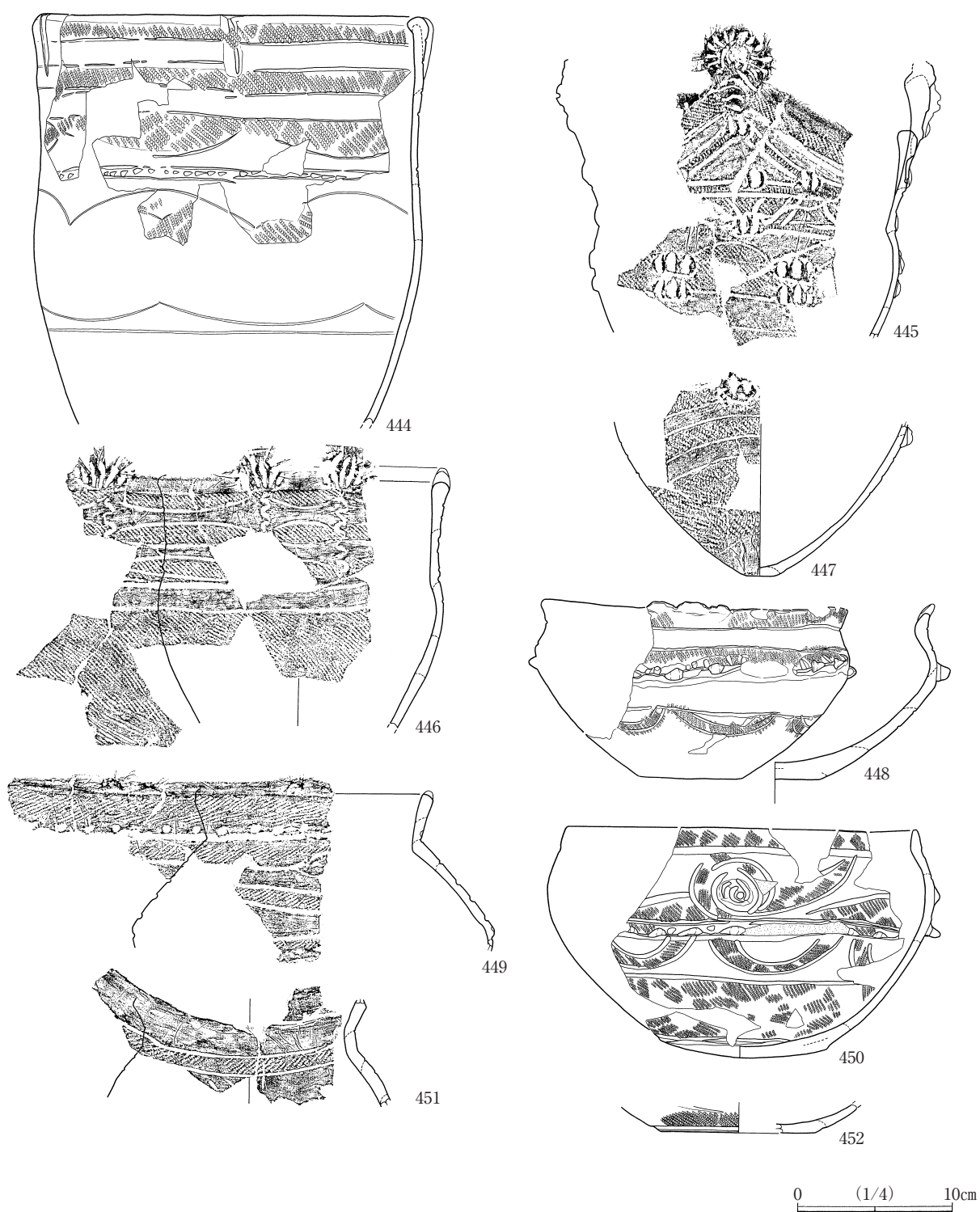
第268図 3次調査区グリッド出土土器 (12)



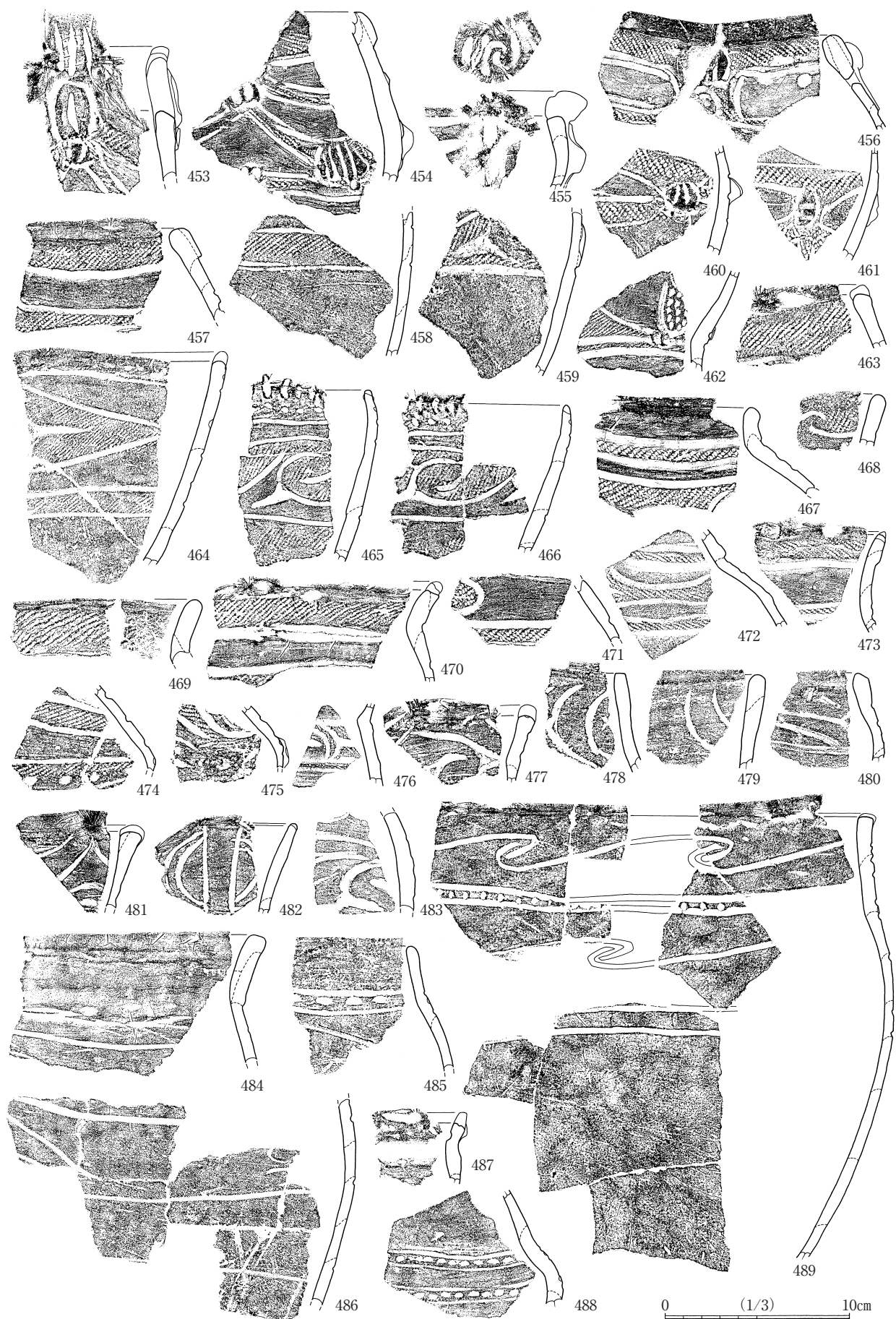
第269図 3次調査区グリッド出土土器 (13)



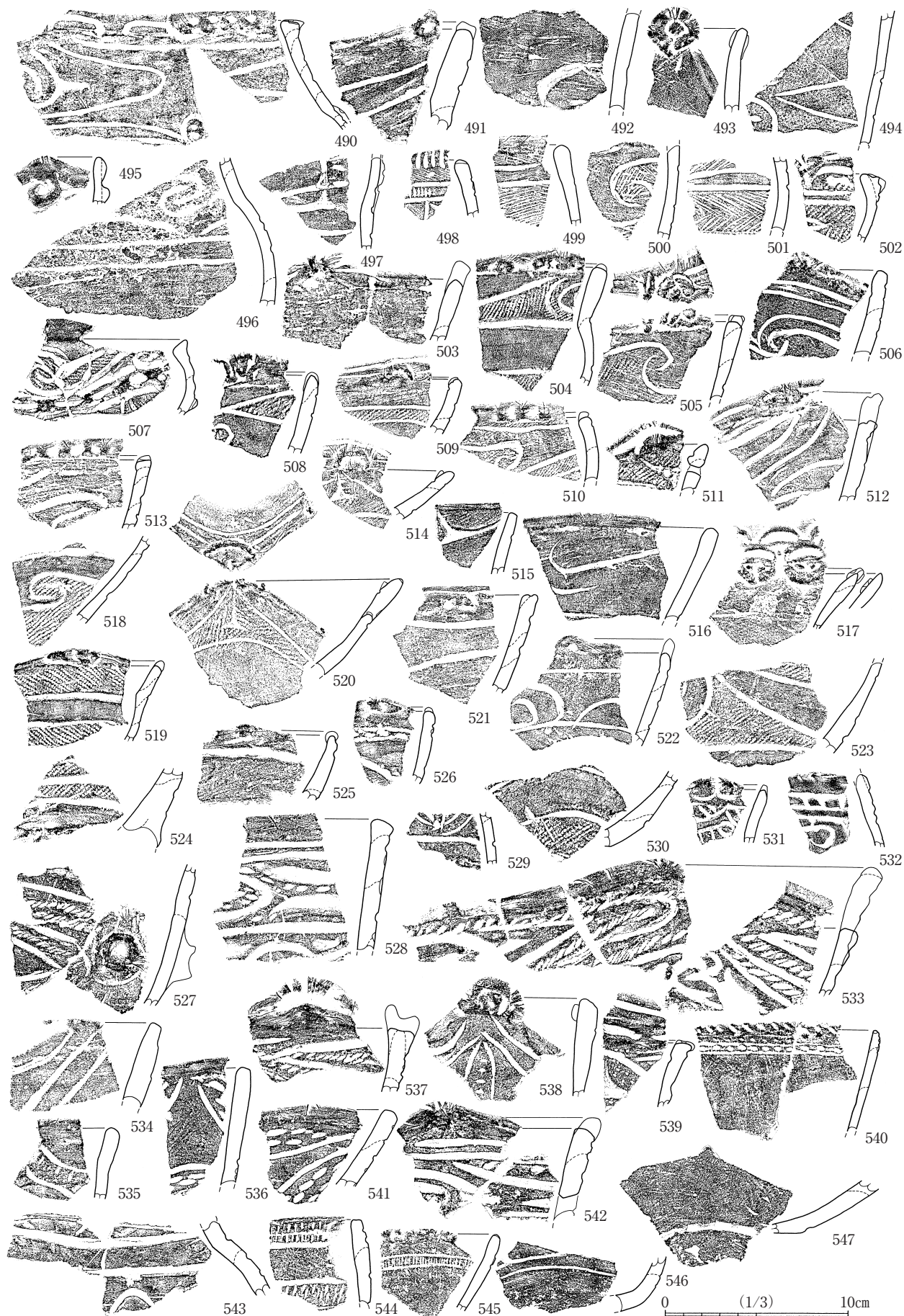
第270図 3次調査区グリッド出土土器 (14)



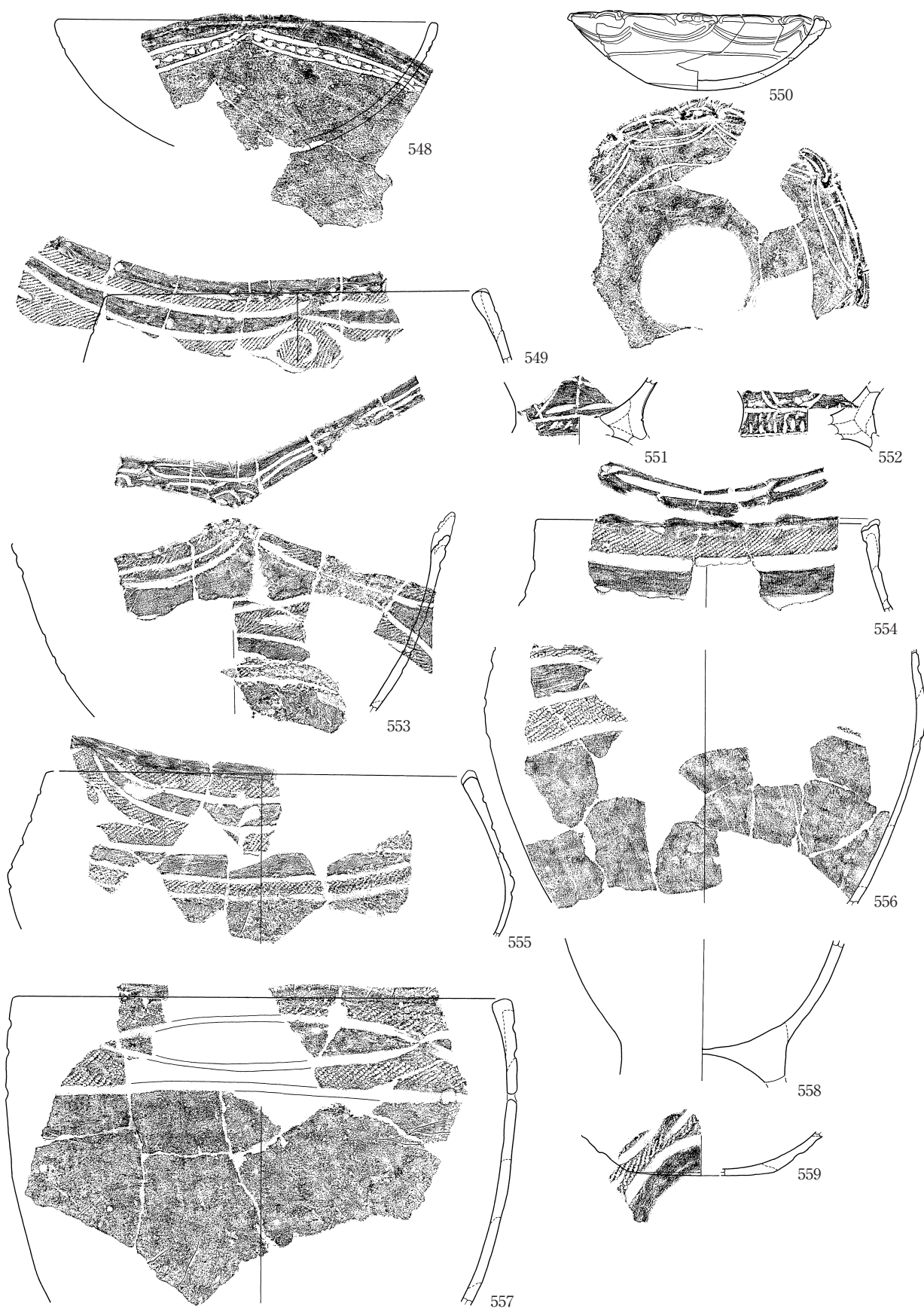
第271図 3次調査区グリッド出土土器 (15)



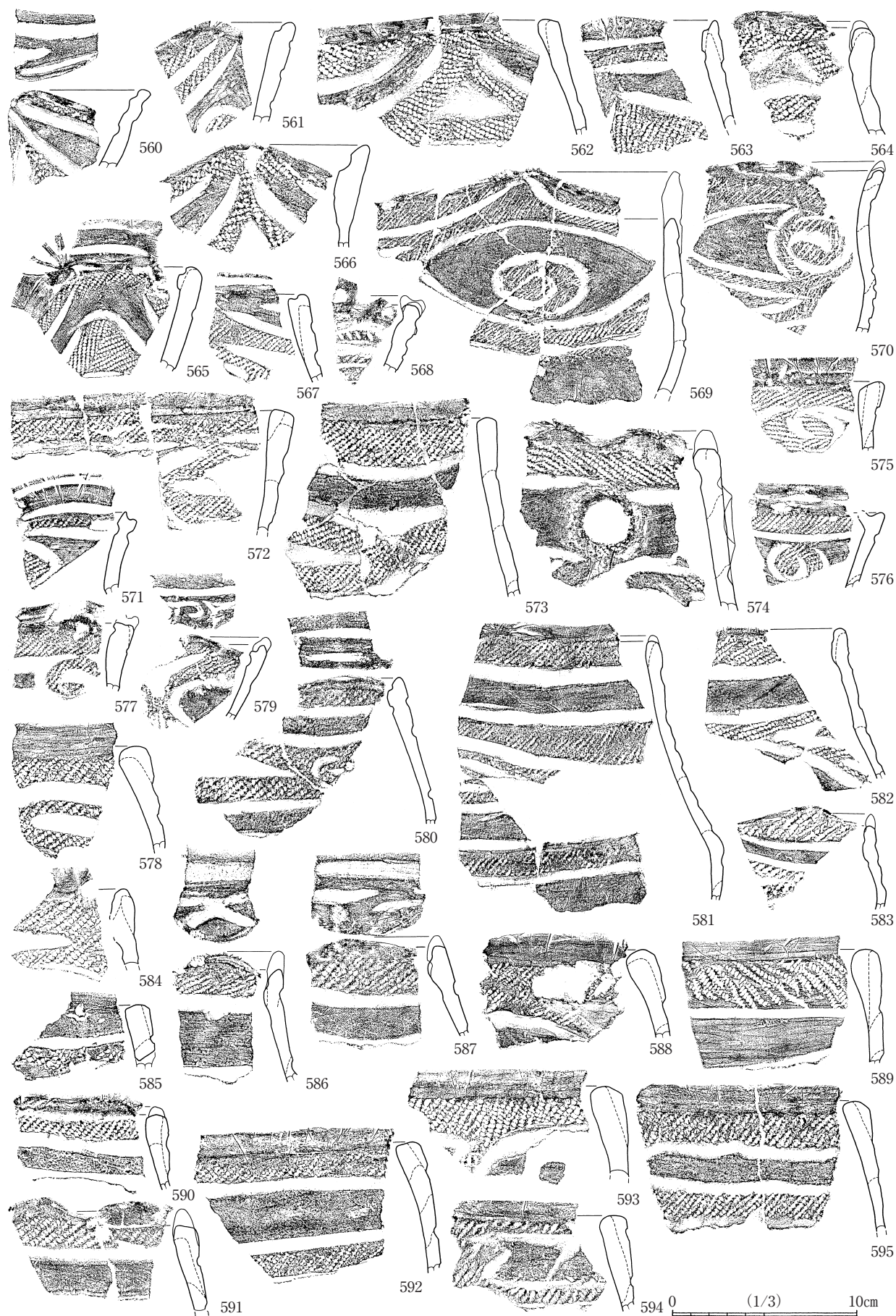
第272図 3次調査区グリッド出土土器 (16)



第273図 3次調査区グリッド出土土器 (17)



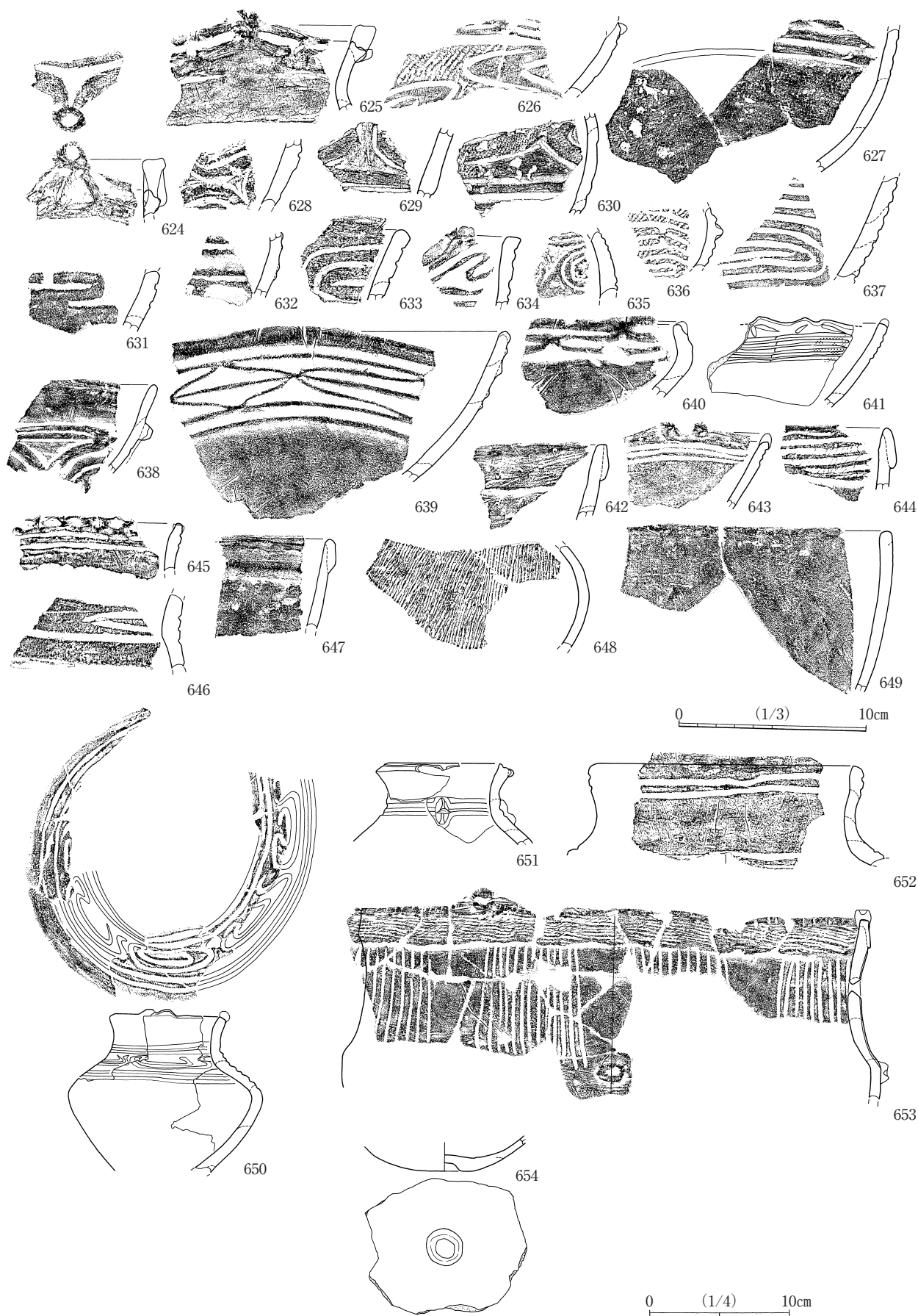
第274図 3次調査区グリッド出土土器 (18)



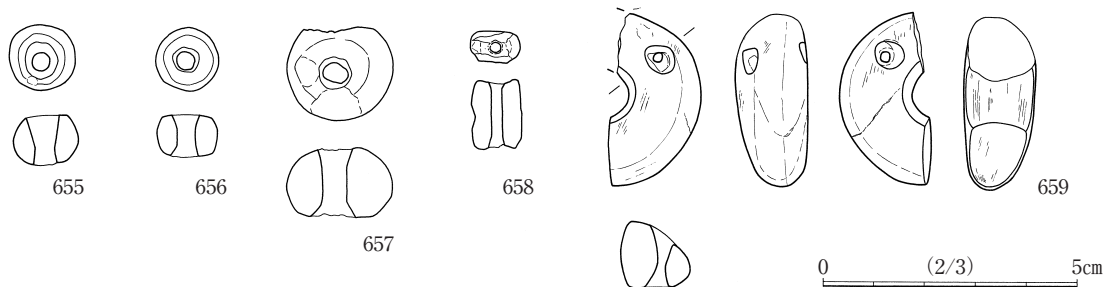
第275図 3次調査区グリッド出土土器 (19)



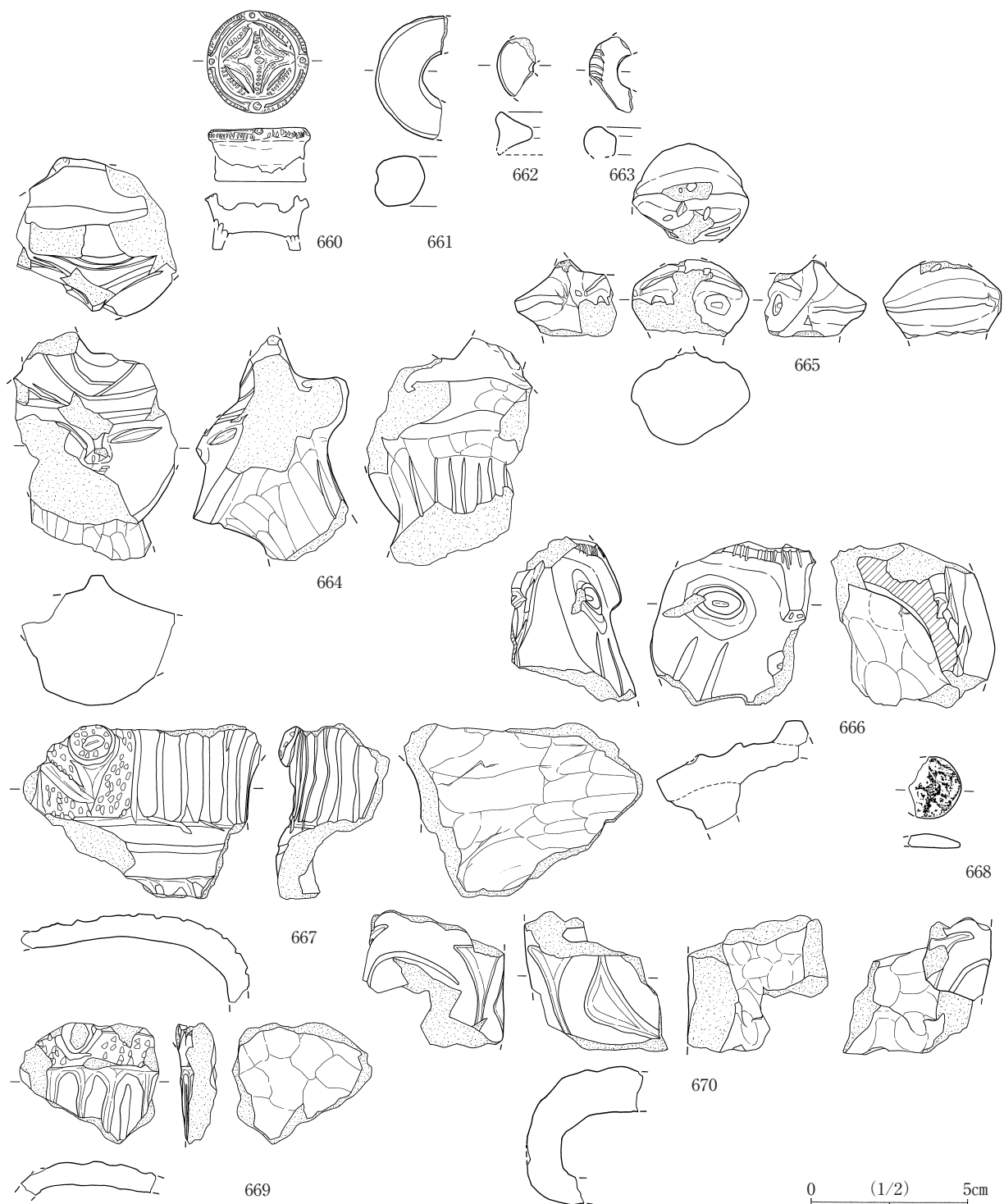
第276図 3次調査区グリッド出土土器 (20)



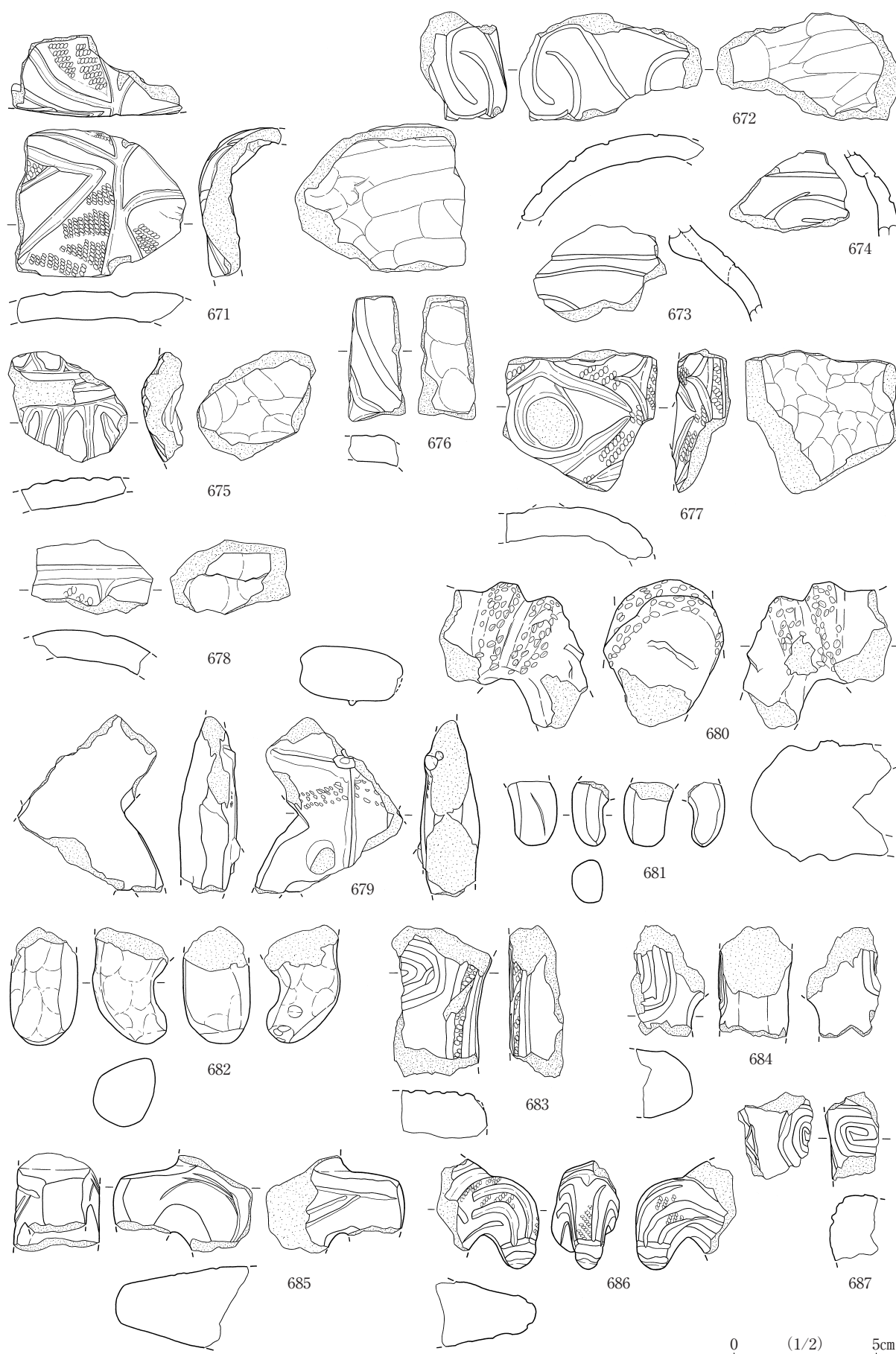
第277図 3次調査区グリッド出土土器 (21)



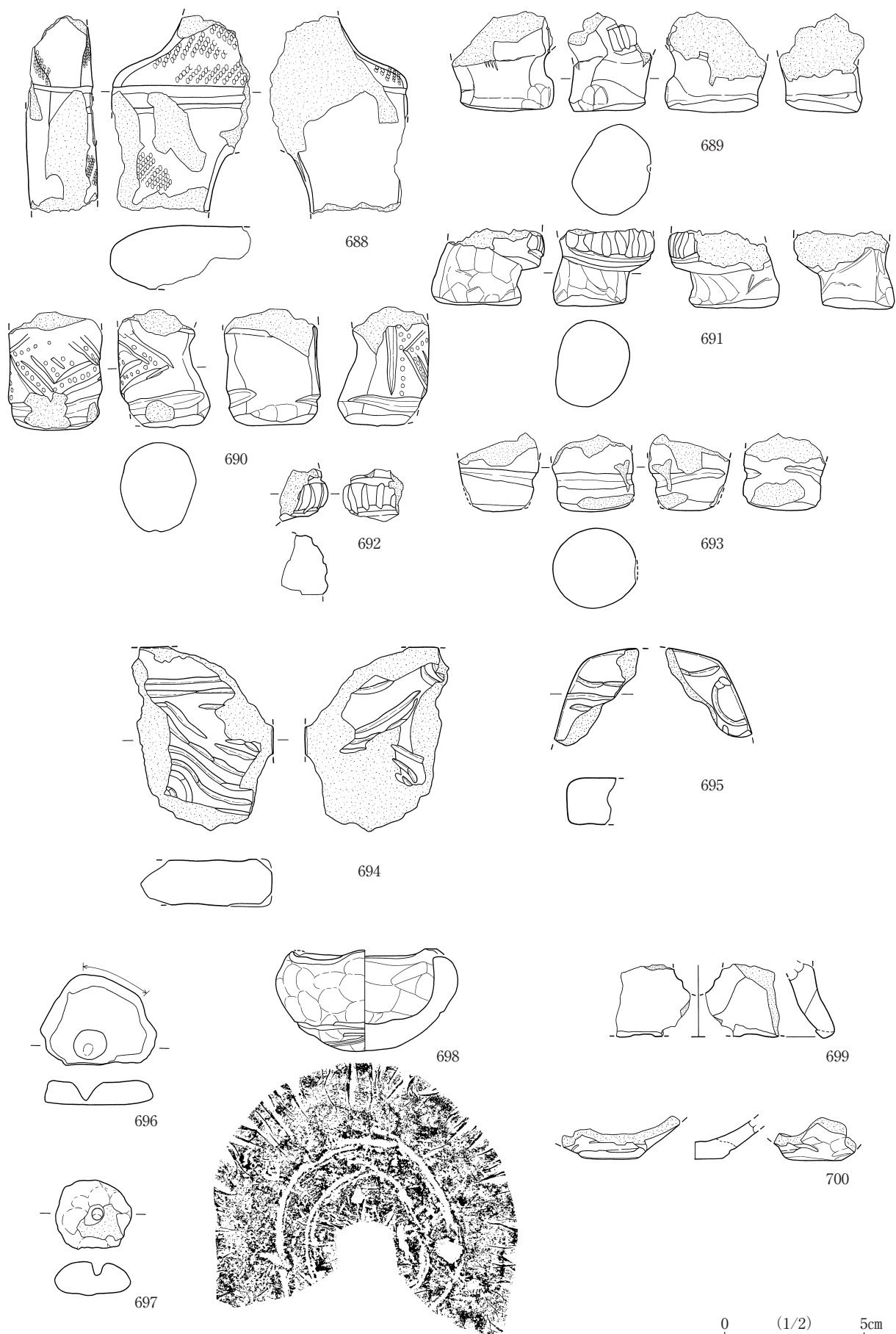
第278図 3次調査区グリッド出土石製玉類



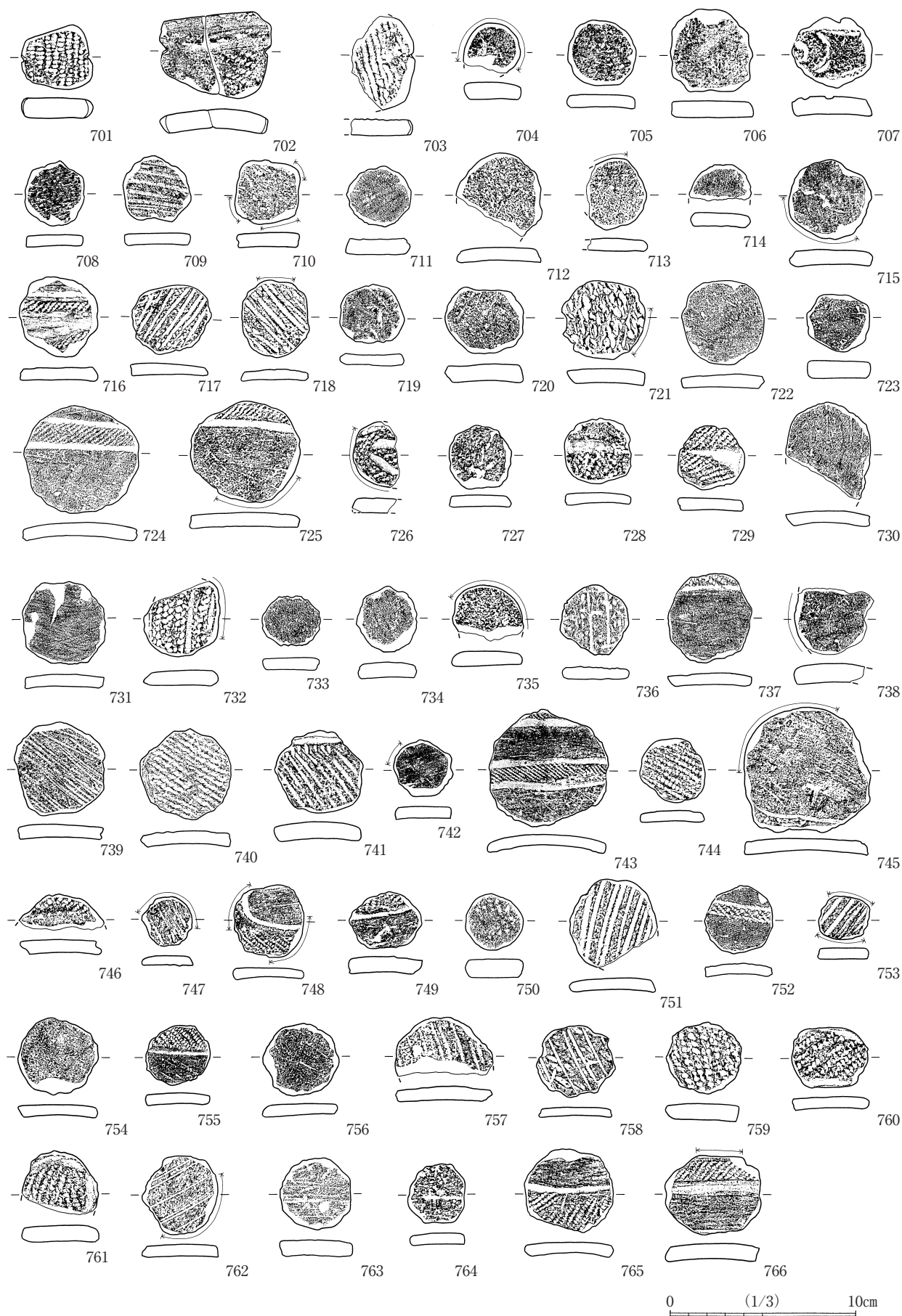
第279図 3次調査区グリッド出土土製品 (1)



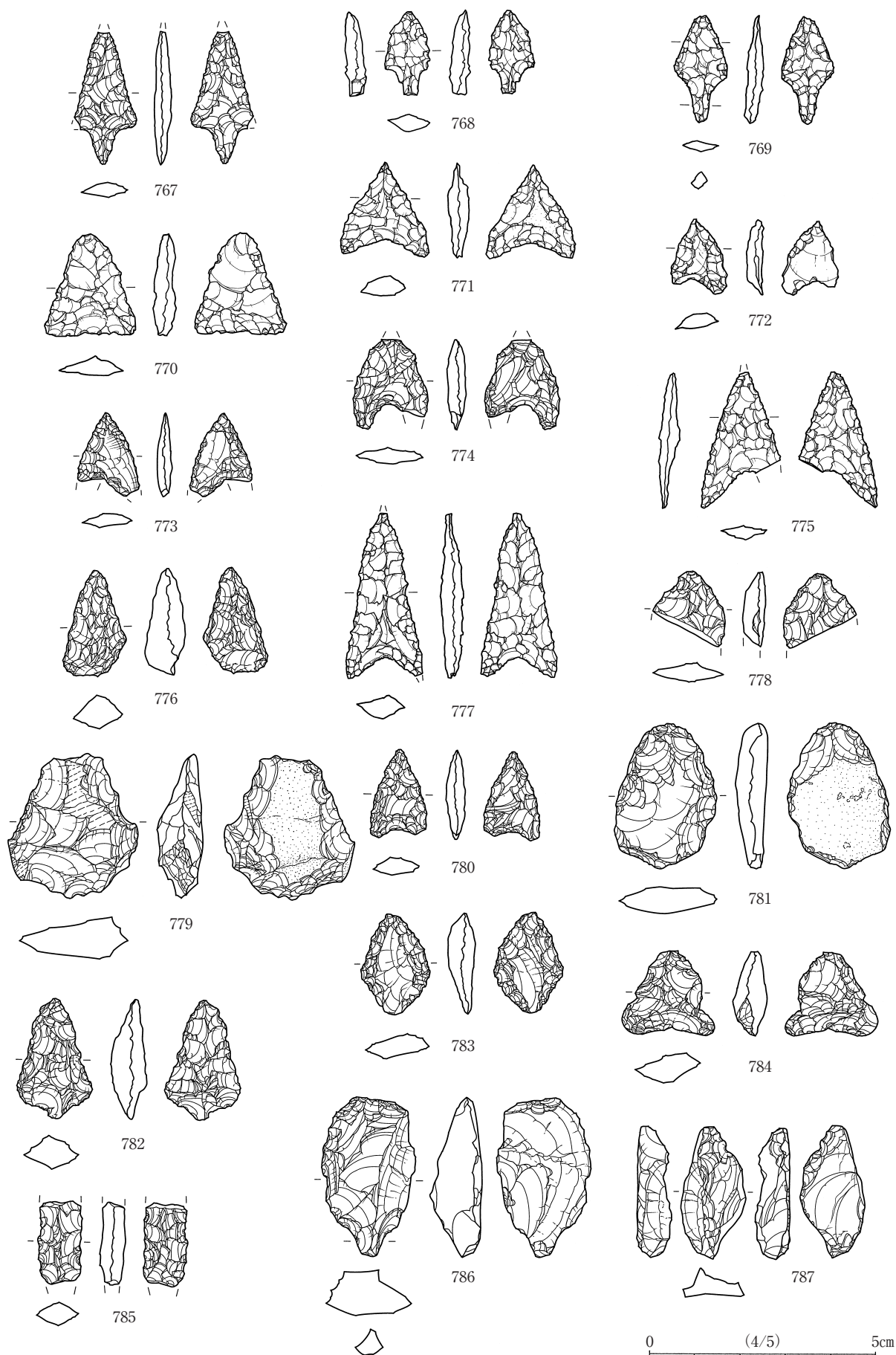
第280図 3次調査区グリッド出土土製品(2)



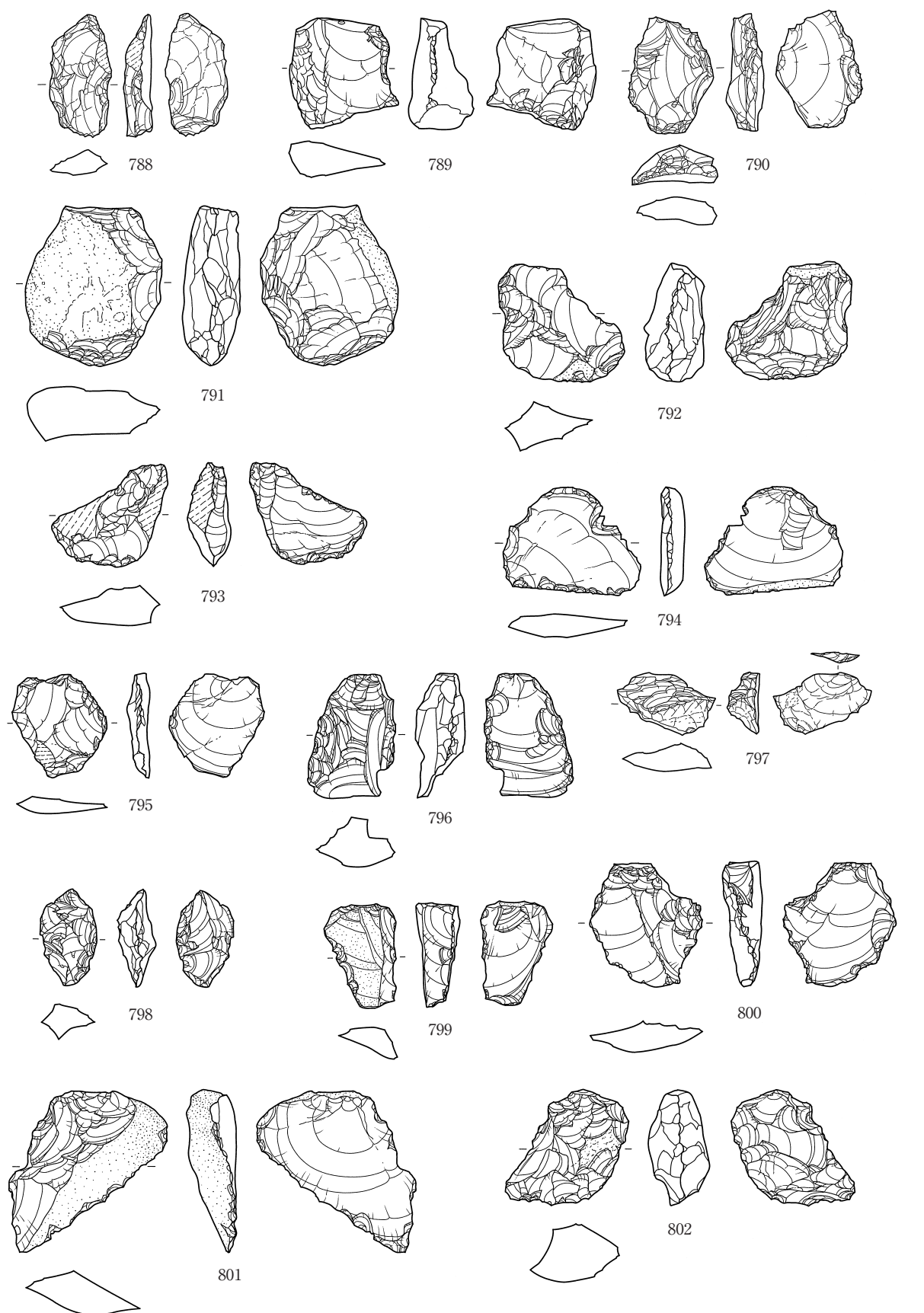
第281図 3次調査区グリッド出土土製品 (3)



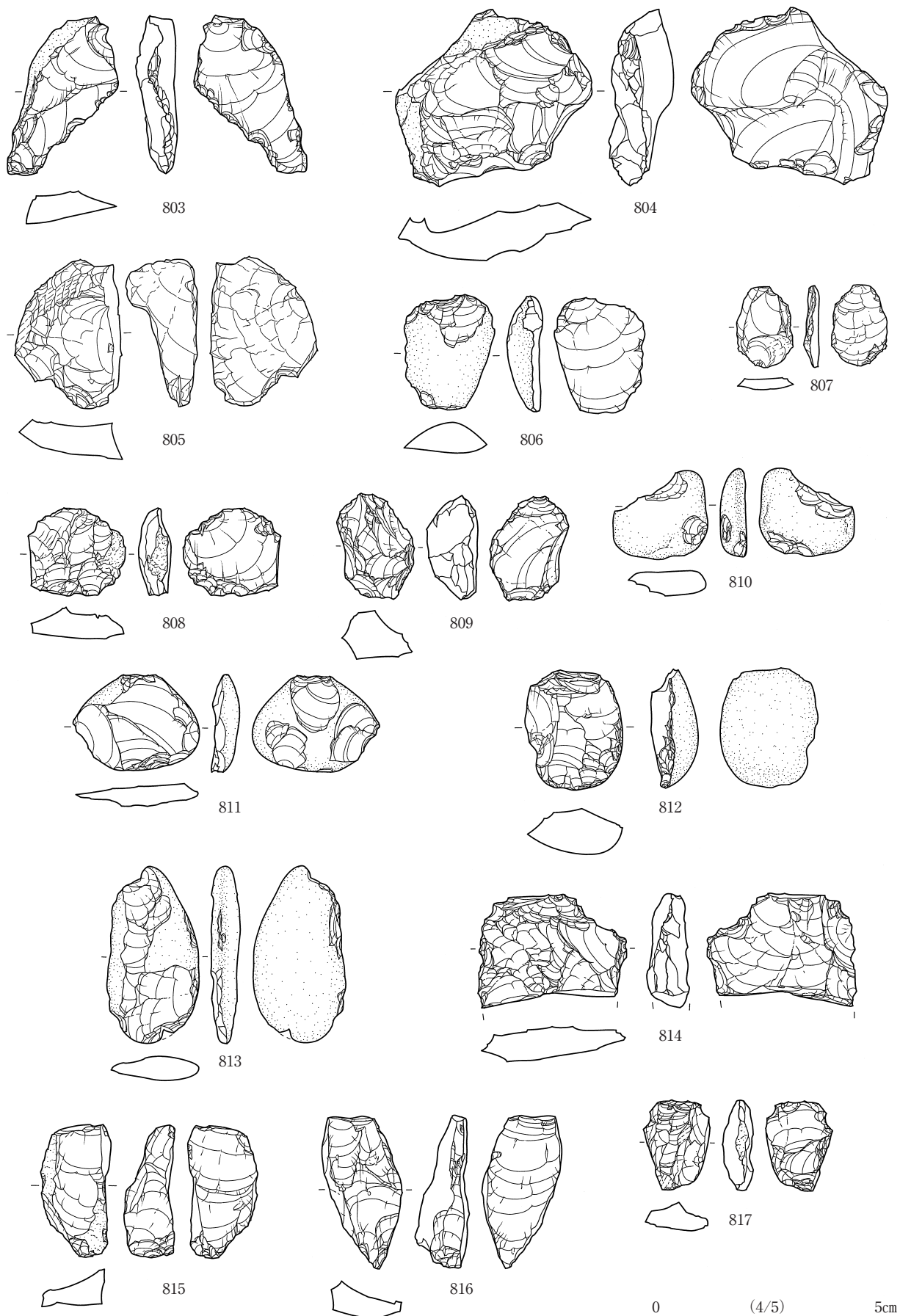
第282図 3次調査区グリッド出土土製品 (4)



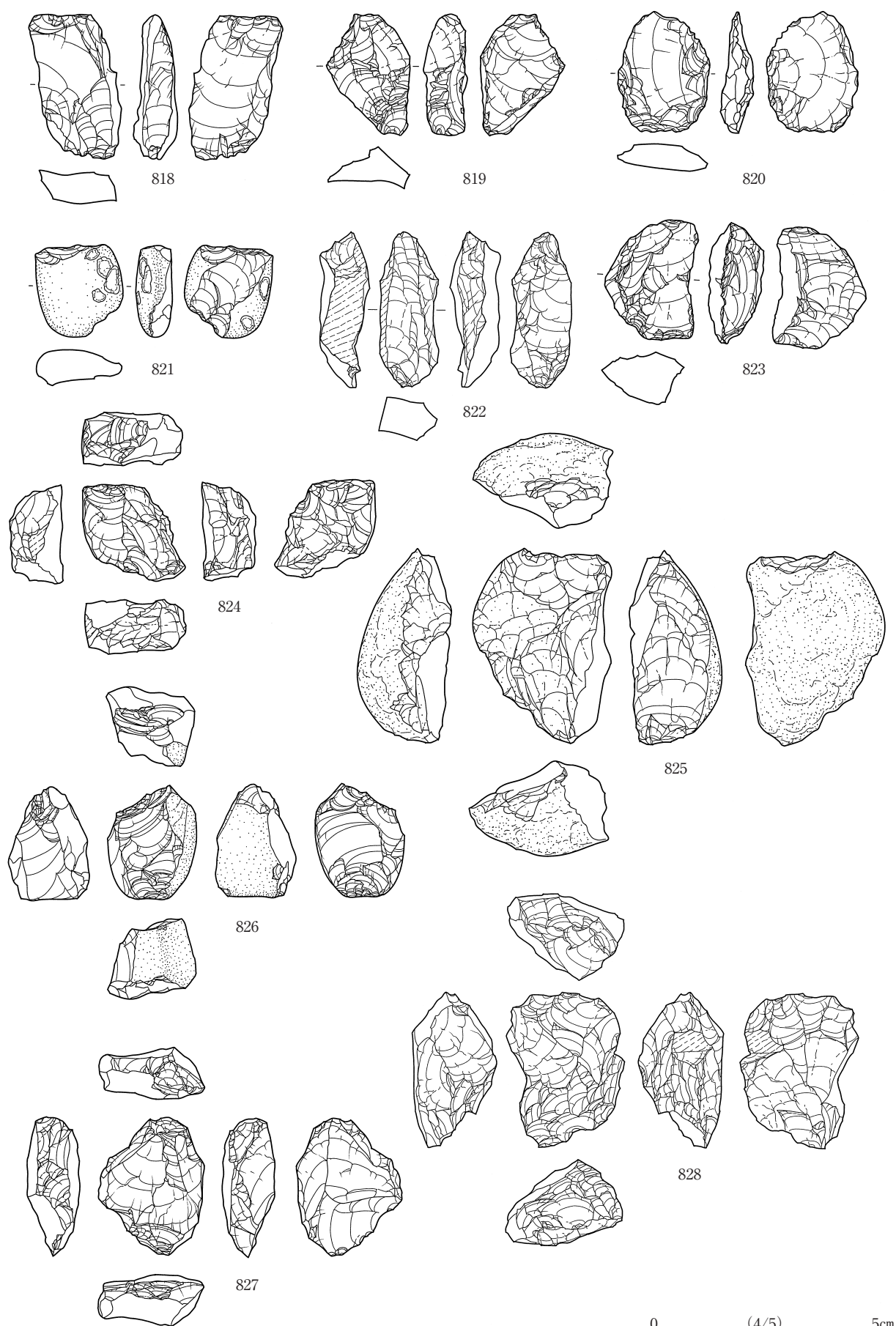
第283図 3次調査区グリッド出土石器 (1)



第284図 3次調査区グリッド出土石器 (2)



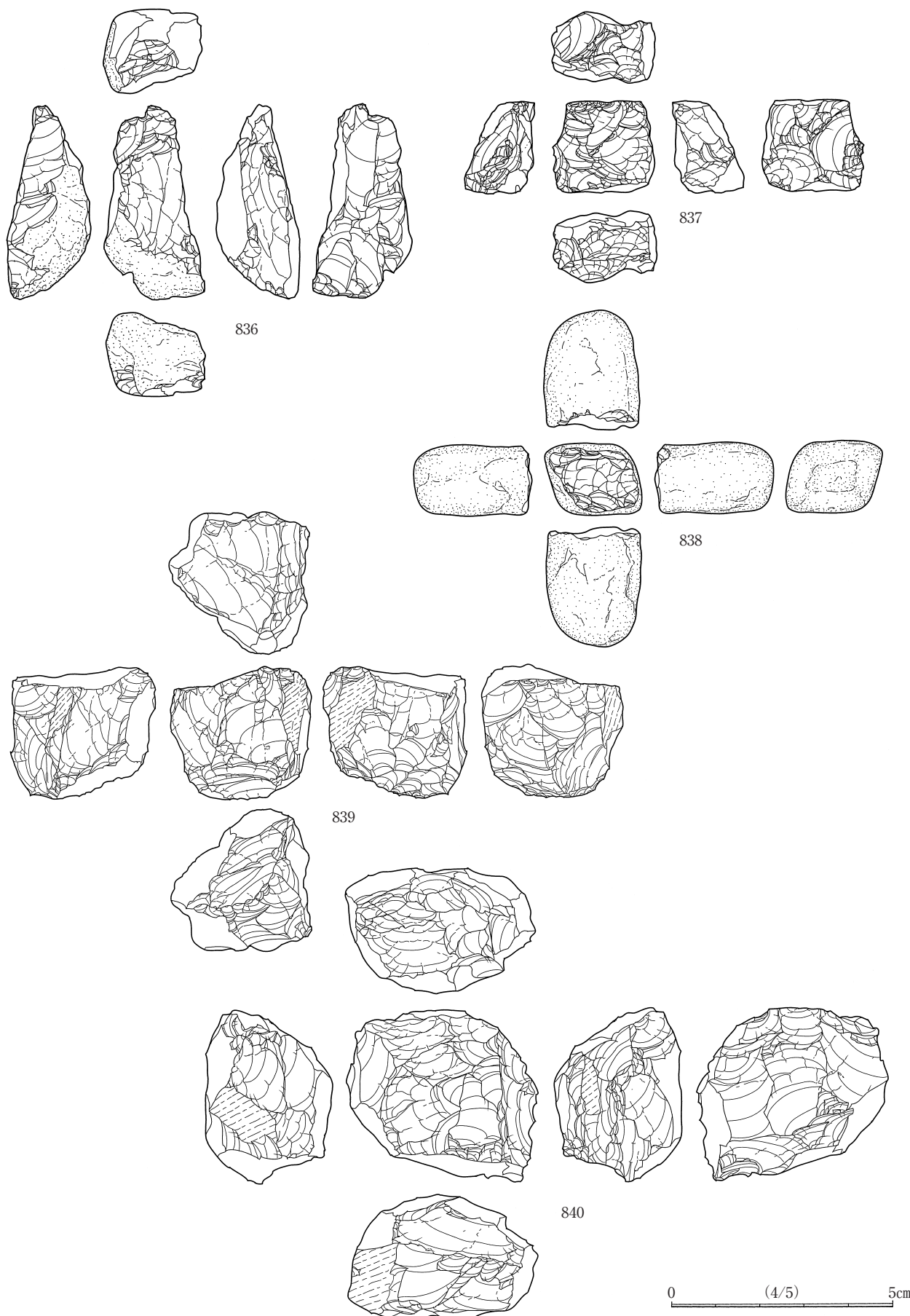
第285図 3次調査区グリッド出土石器 (3)



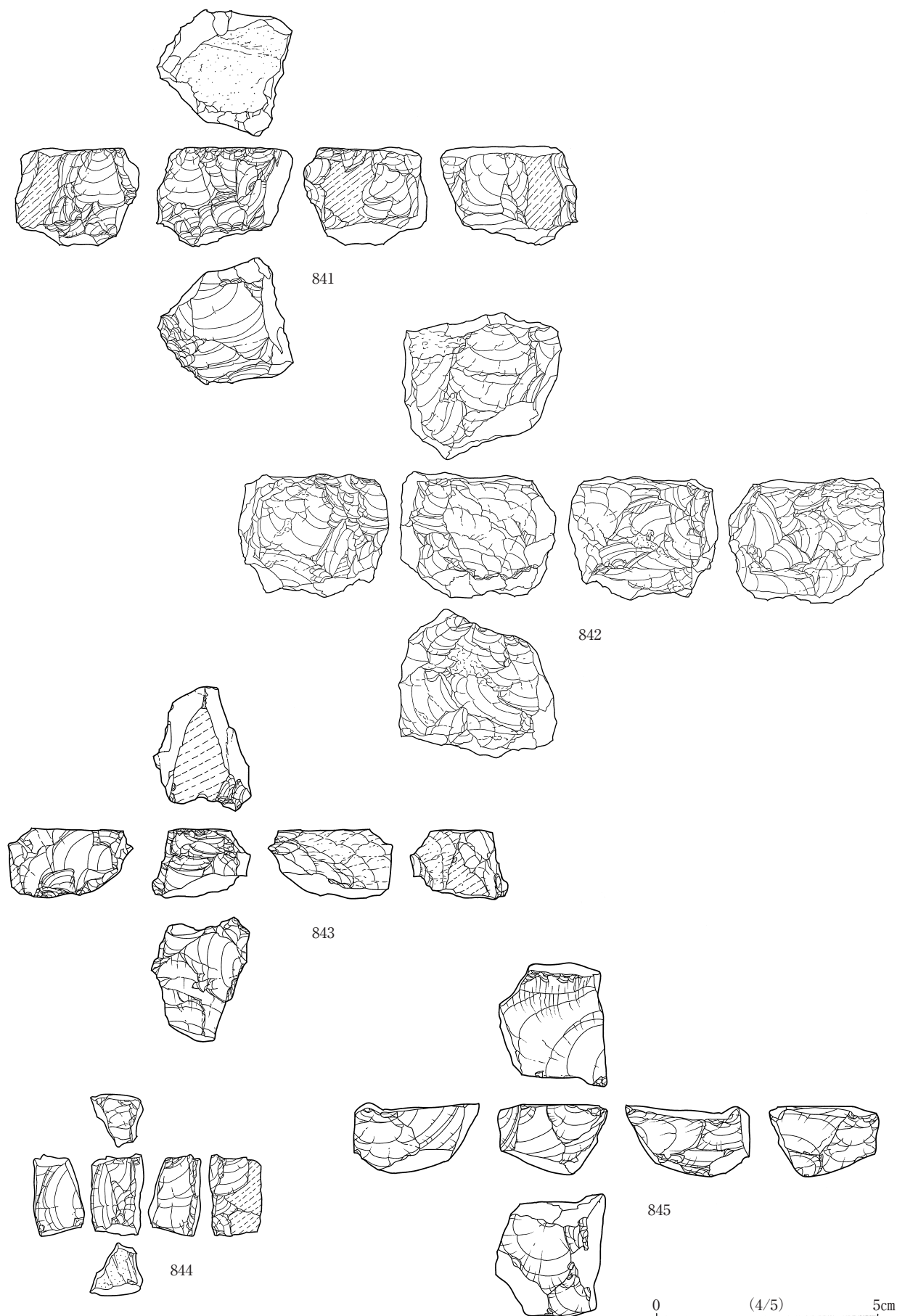
第286図 3次調査区グリッド出土石器 (4)



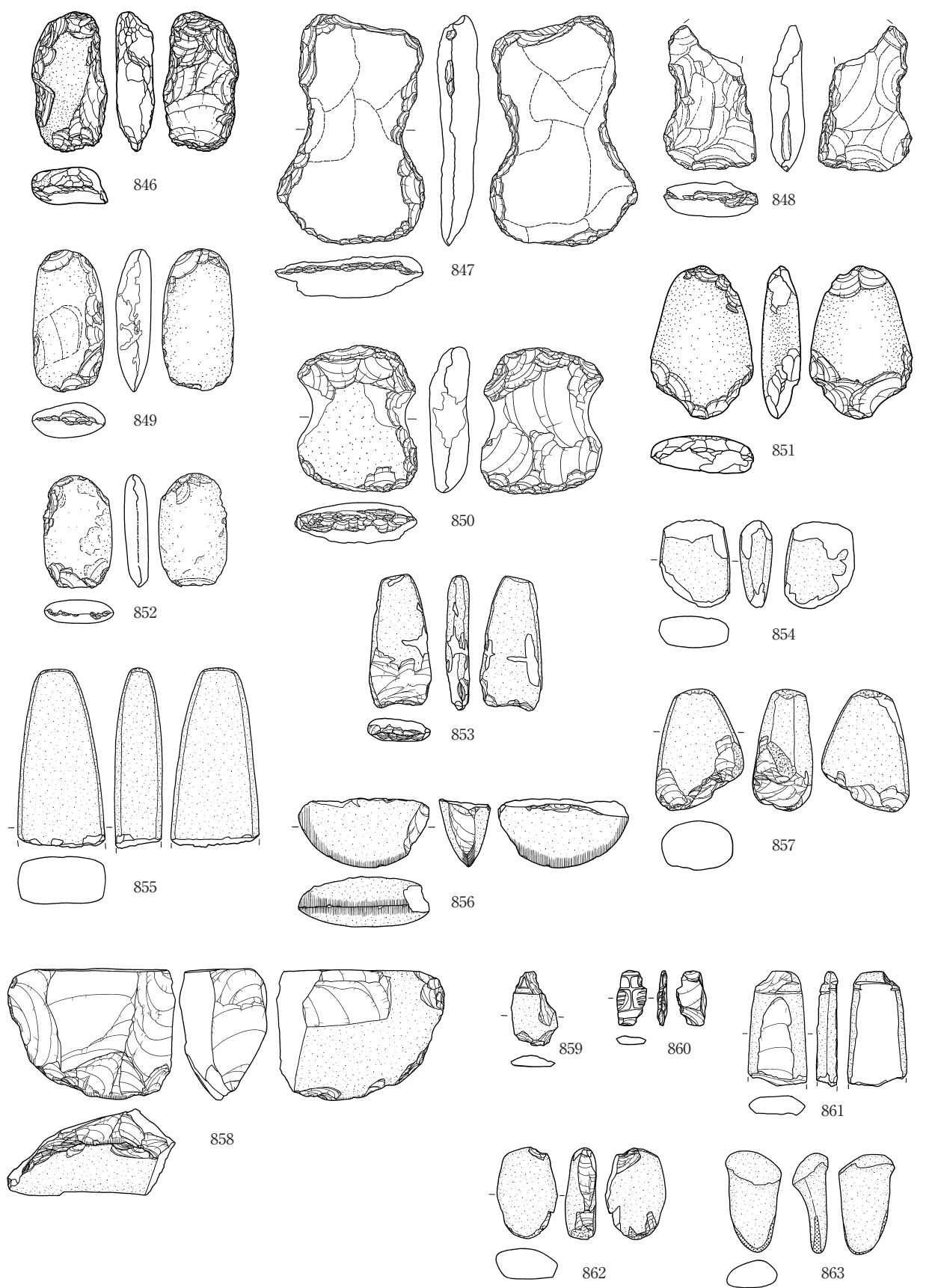
第287図 3次調査区グリッド出土石器 (5)



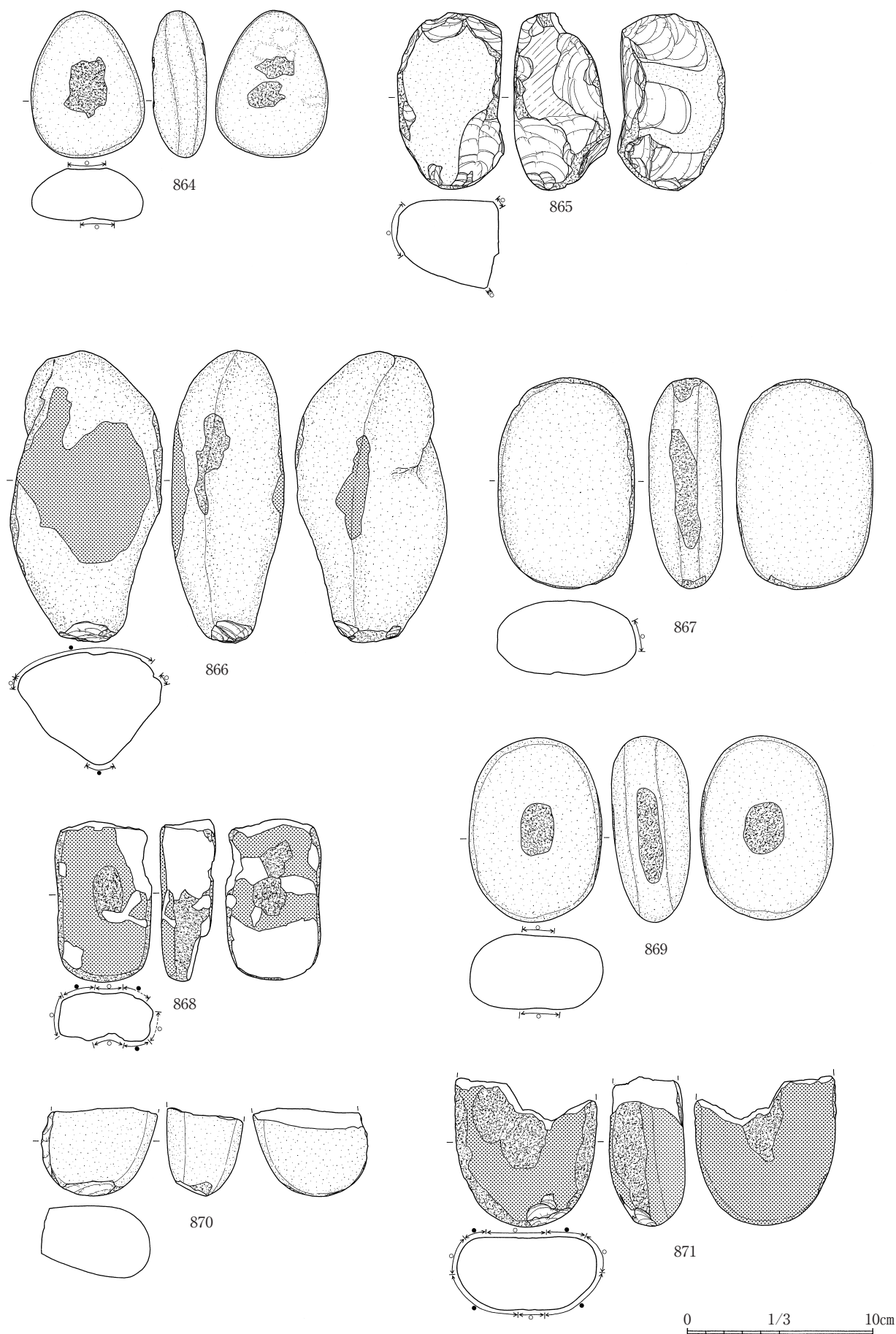
第288図 3次調査区グリッド出土石器 (6)



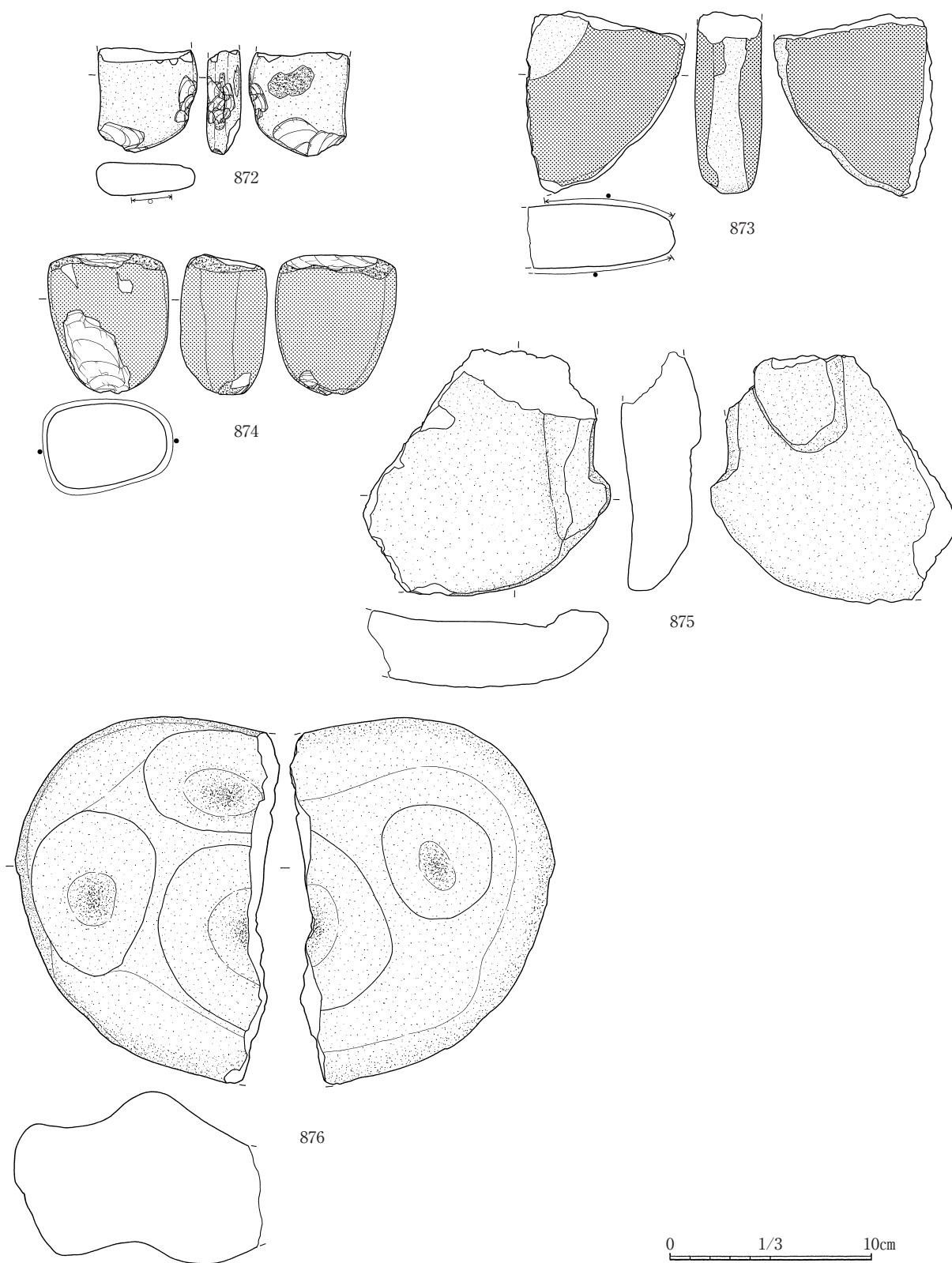
第289図 3次調査区グリッド出土石器(7)



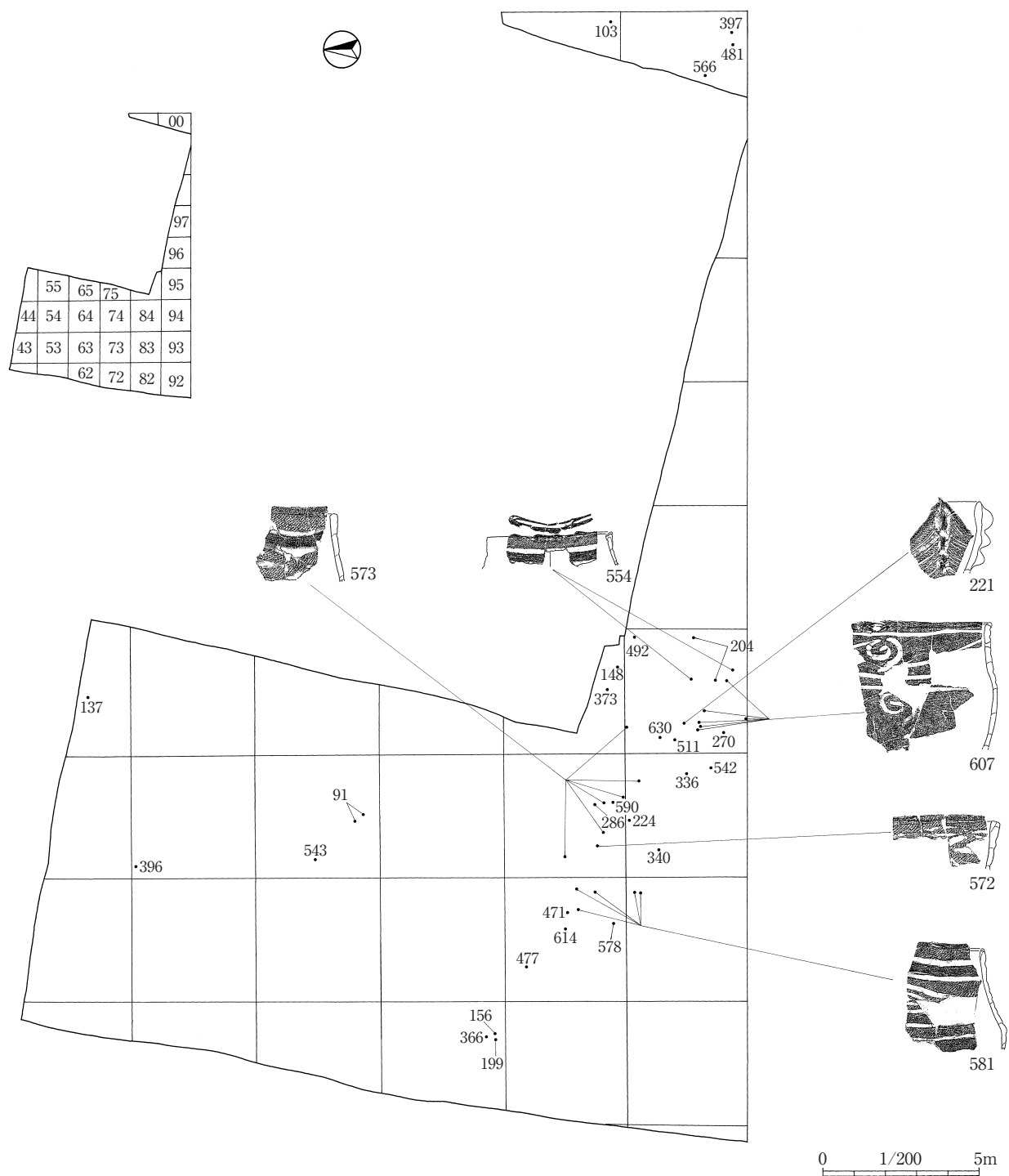
第290図 3次調査区グリッド出土石器 (8)



第291図 3次調査区グリッド出土石器 (9)



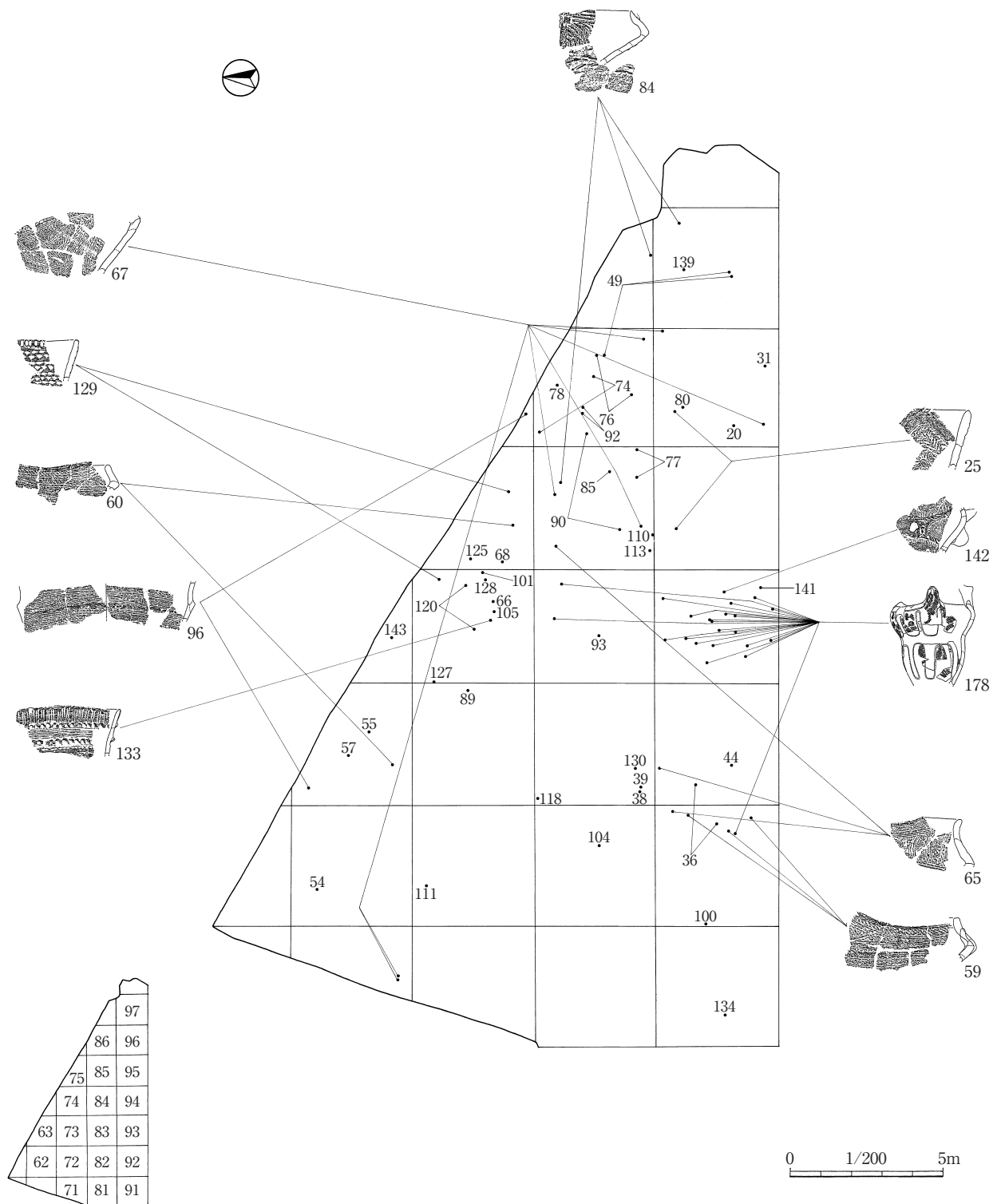
第292図 3次調査区グリッド出土石器 (10)



第293図 3次調査区土器出土状況（S1区）

遺物の主体を占めるのは、貝塚の中心的な時期に当たる後期前葉～後葉であるが、それ以外にも前期後葉、晩期中葉の遺物も多量に出土している。特に前期後葉の遺物は他の地点からはほとんど出土しておらず、注目に値する。石器は剥片石器が多く、石鏃の他楔形石器などもまとめて出土した。碎片類の採取が行われていないため不明な点が多いが、石鏃製作に関わる資料の可能性もある。

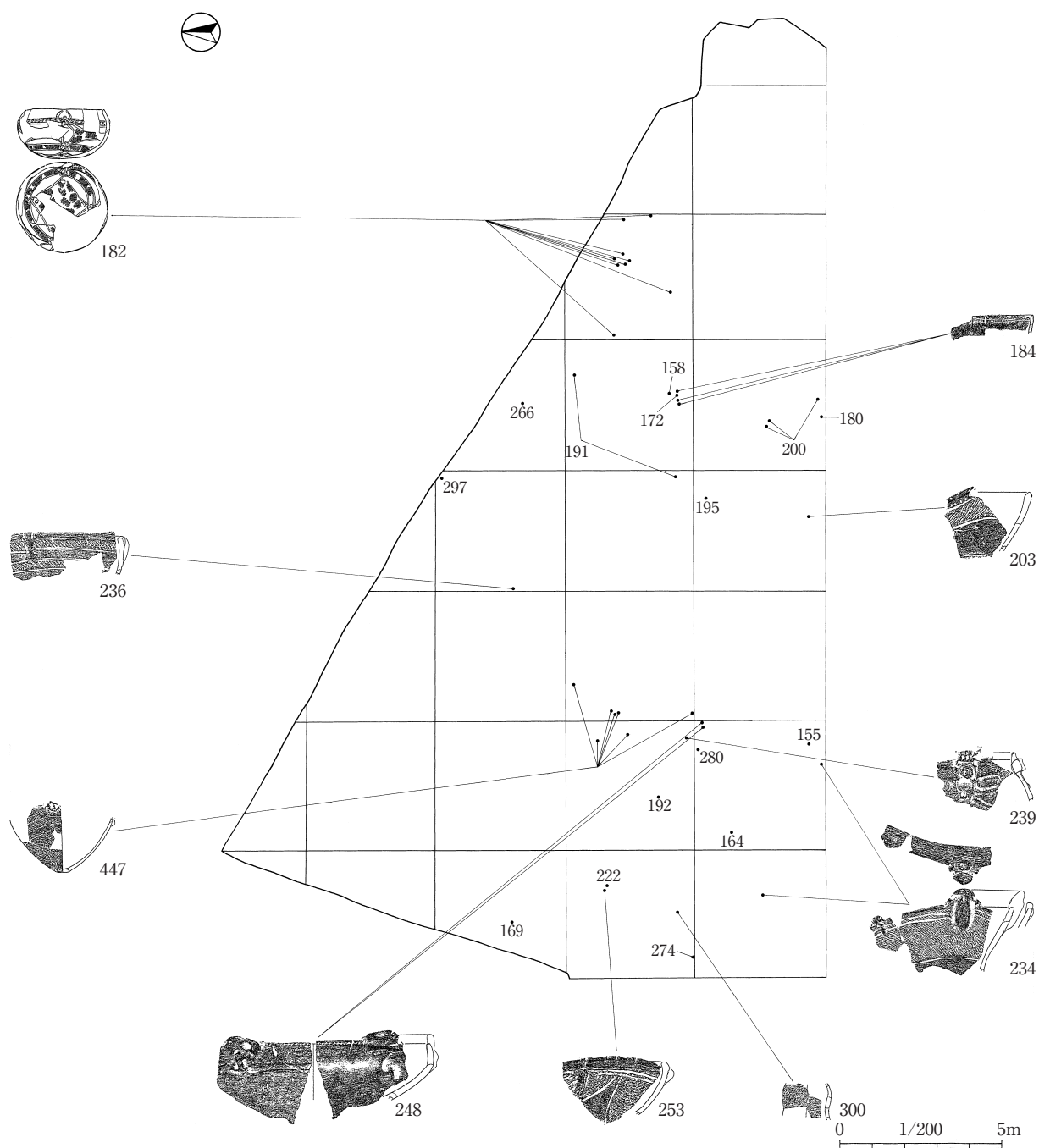
第256図はピット番号が注記されている遺物を示した。このピットとは中・近世の建物の柱穴と考えられるが、具体的な位置は記録されていないため不明である。流れ込みがほとんどであると思われる



第294図 3次調査区土器出土状況（S2区1）

るが、出土した事実を示す意味で独立した挿図を組んだ。2は後期後葉の粗製土器、3は晩期前葉の精製深鉢と考えられるが、他は小破片で時期不明なものが多い。

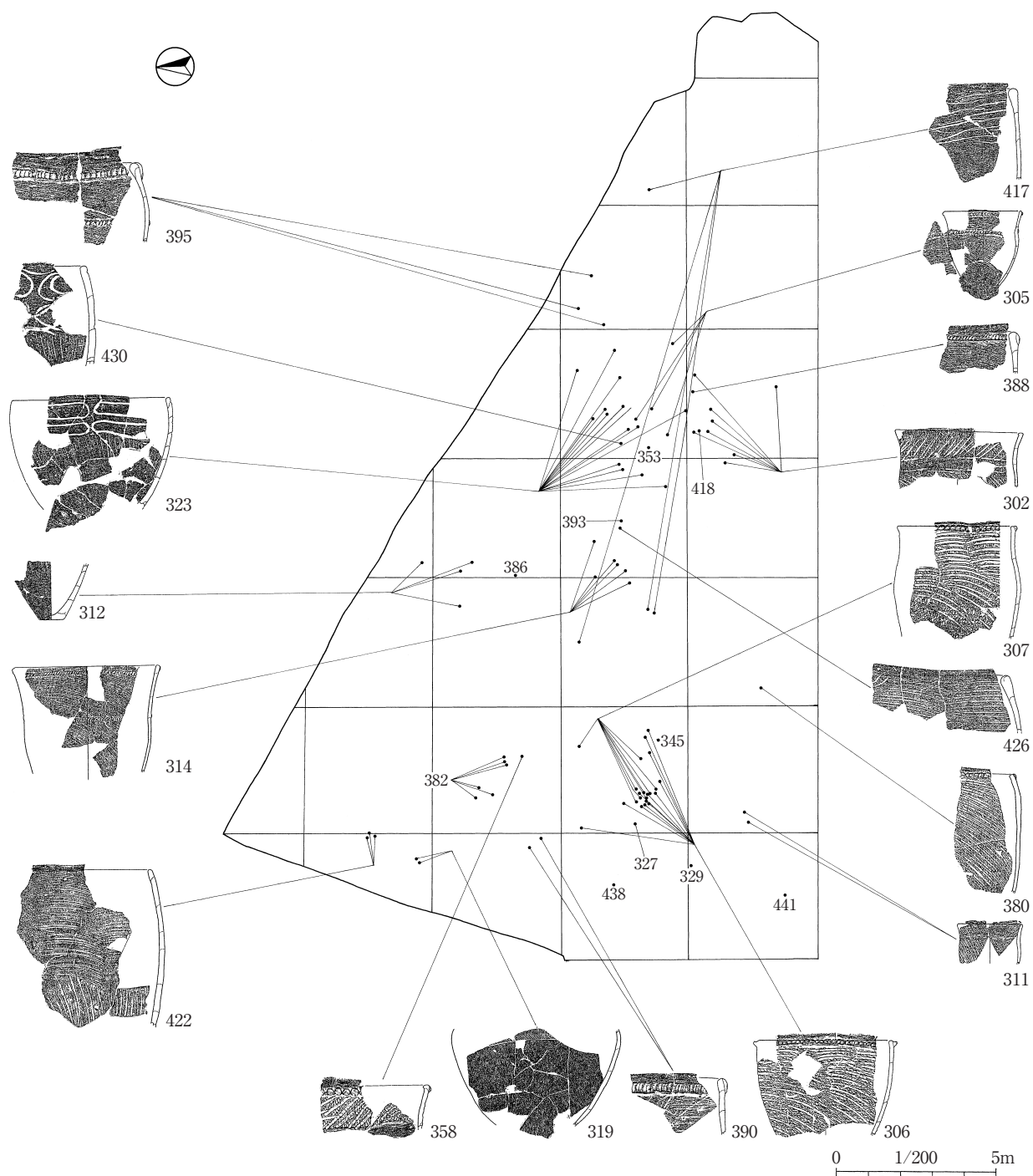
第257図～277図はグリッド出土土器である。グリッド出土遺物のうち一部は小破片に至るまで全てドットを記録して取り上げられていた。一方でかなり大形の破片でもグリッド一括扱いになっているものもあり、出土位置を示す情報としては問題が多い。土器以外の遺物も含め、とりあえずドットが



第295図 3次調査区土器出土状況（S2区2）

復元できるものを、第293～304図に示した。

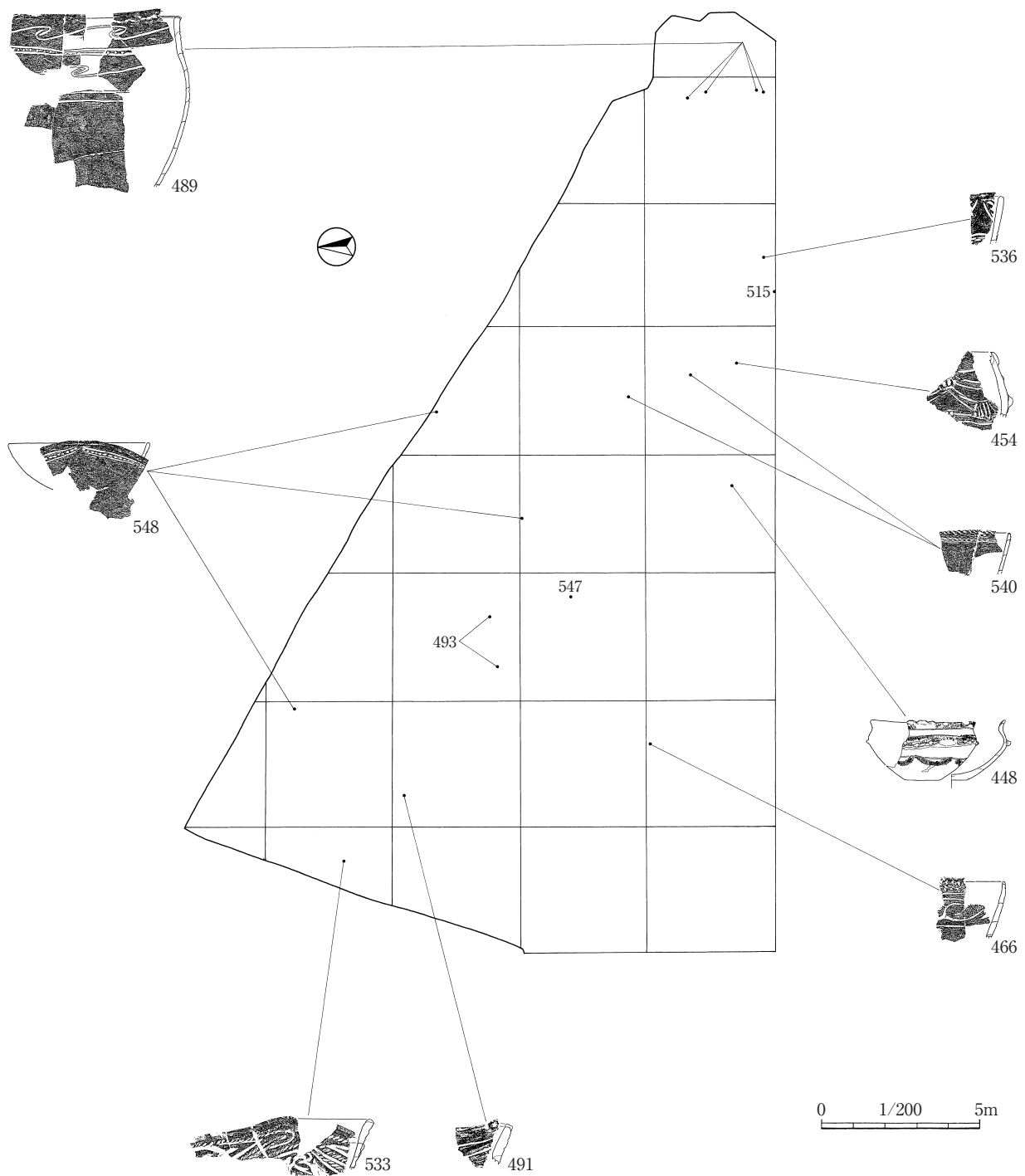
20～22は条痕文期の資料である。20は口唇部から頸部にかけて縦位の隆帯が貼り付けられる。23・24は関山式で、他に出土していない。23は片口である。25～136は前期後葉の竹管文系土器群である。胎土は雲母片や石英などを多量に含む、粒子の粗いものが多い。25～54・57・95は半截竹管による集合沈線もしくは爪形文を主体とするもの。諸磯a式及び浮島I式を主体とする。55・56・58～79・96は縄文地紋に、半截竹管によるモチーフを主体とするもの。モチーフは口縁部や頸部に横位の集合沈線を巡らし、間を弧状や波状の沈線で充填するものが多い。頸部の屈曲や口縁部の内傾が極端になってくる。80・81・84～87・89は同様の器形で沈線がキザミのある浮線文になるもの。82・83は



第296図 3次調査区土器出土状況（S2区3）

波状口縁の波頂部直下で、瘤が貼り付けられるもの。これらは諸磯b式である。88は後期堀之内式風であるが、胎土や焼成などがこの時期に類似するため、前期とみなした。91は集合沈線を多用するもの、93は浮線文を多用するもので、いずれも小さなボタン状の瘤が貼り付けられる。諸磯c式と考えられる。92・94・98は大形の底部で胎土や焼成などから、前期のものと考えられる。94は底部に沿って2条の浮線文が貼り付けられる。97・99～136は変形爪形文や貝殻文を主とするもので、口唇部にキザミや連続刺突をもつものも多い。浮島Ⅱ～興津式を主体とする。136は貝殻背面圧痕である。

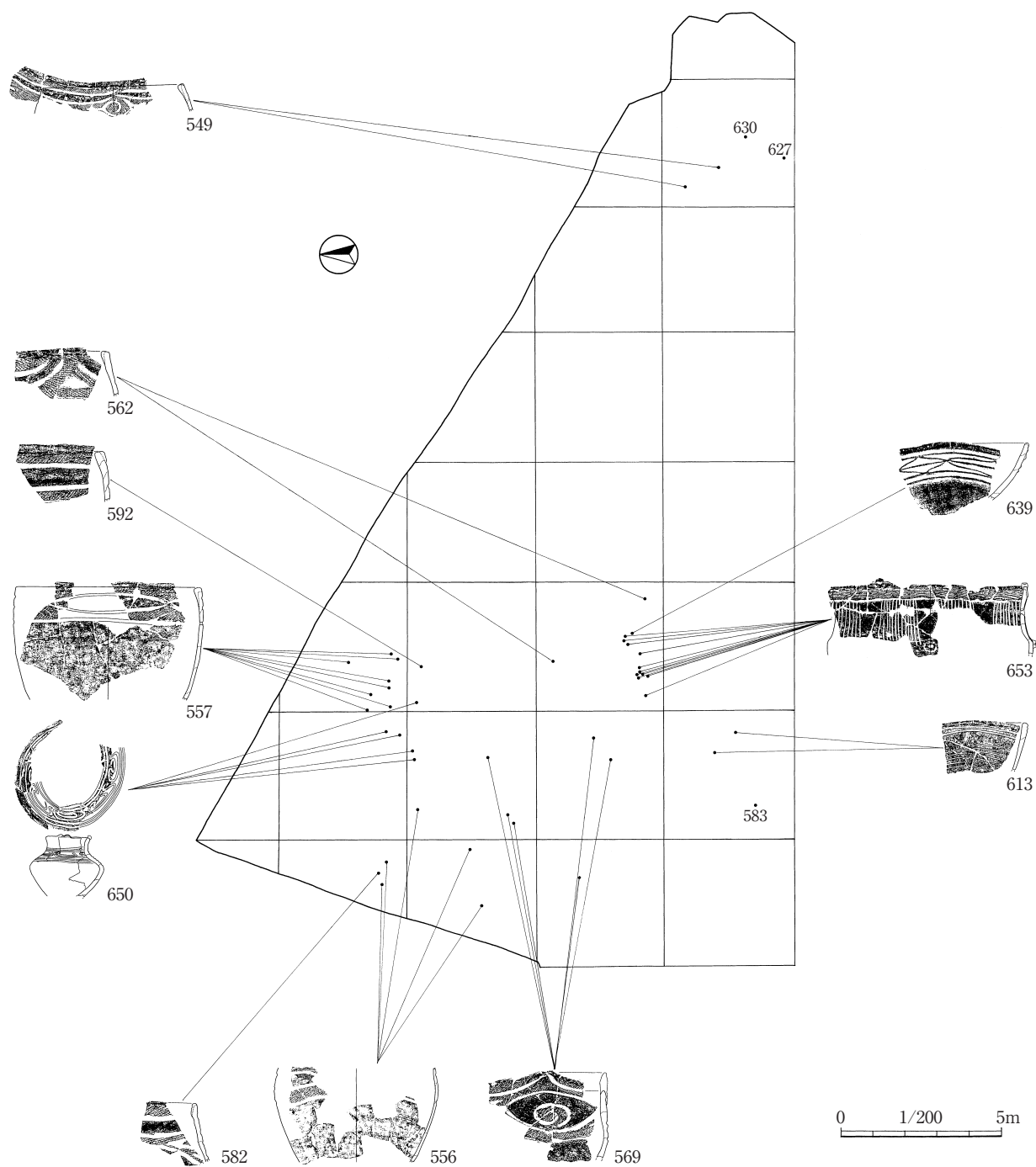
137～149・178は中期の資料である。137は口縁に沿って原体が圧痕されるもの、138は縦位の結節



第297図 3次調査区土器出土状況（S2区4）

縄文が施されるもので、中期初頭であろう。139・140は胎土に雲母片を多量に含み、波状沈線や貼り付け隆帯が配される。阿玉台式である。141・142は同一個体であるが、焼成がやや悪く赤褐色に発色するなど他の中期土器と全く異なる。キザミをもつ貼り付け隆帯が文様帯を区画し、連続刺突がそれに伴っている。搬入された勝坂式の可能性がある。143～149・178は加曽利E式である。143は隆帯による区画内に縄文が施文されるもので、加曽利EⅡ式と考えられる。他は加曽利EⅣ式である。

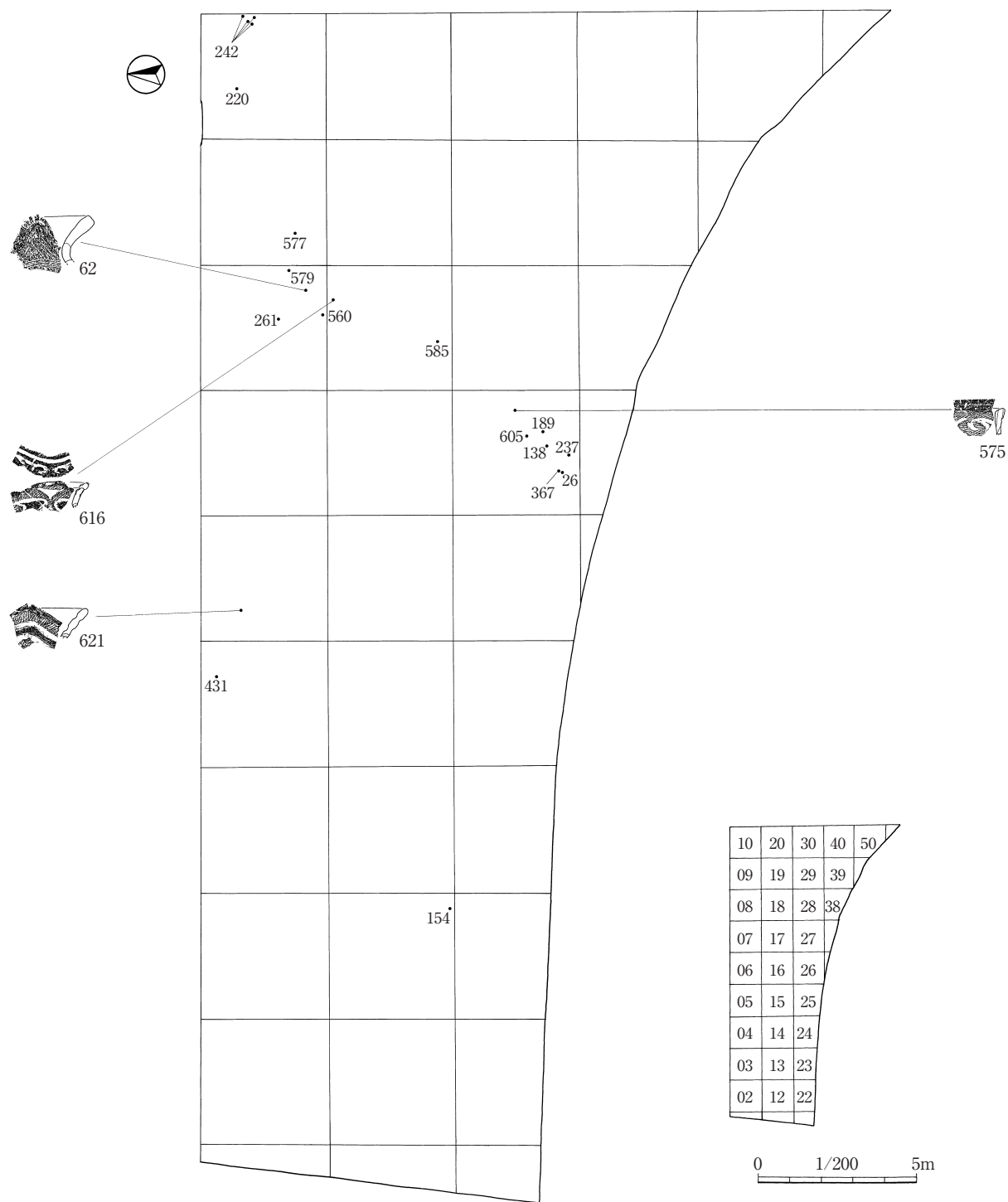
150～170・172～175・177・179は後期前葉の資料である。150～160は後期初頭の称名寺式に属するもので、159は口唇部と連結した縦位磨消縄文帯が特徴的である。161～170・172～175・177は堀之内



第298図 3次調査区土器出土状況（S2区5）

式である。173・177は壺形土器の口縁部、174は注口土器である。179は縄文のみであるが、口唇部形状などから堀之内2～加曽利B1式に相当すると考えられる。

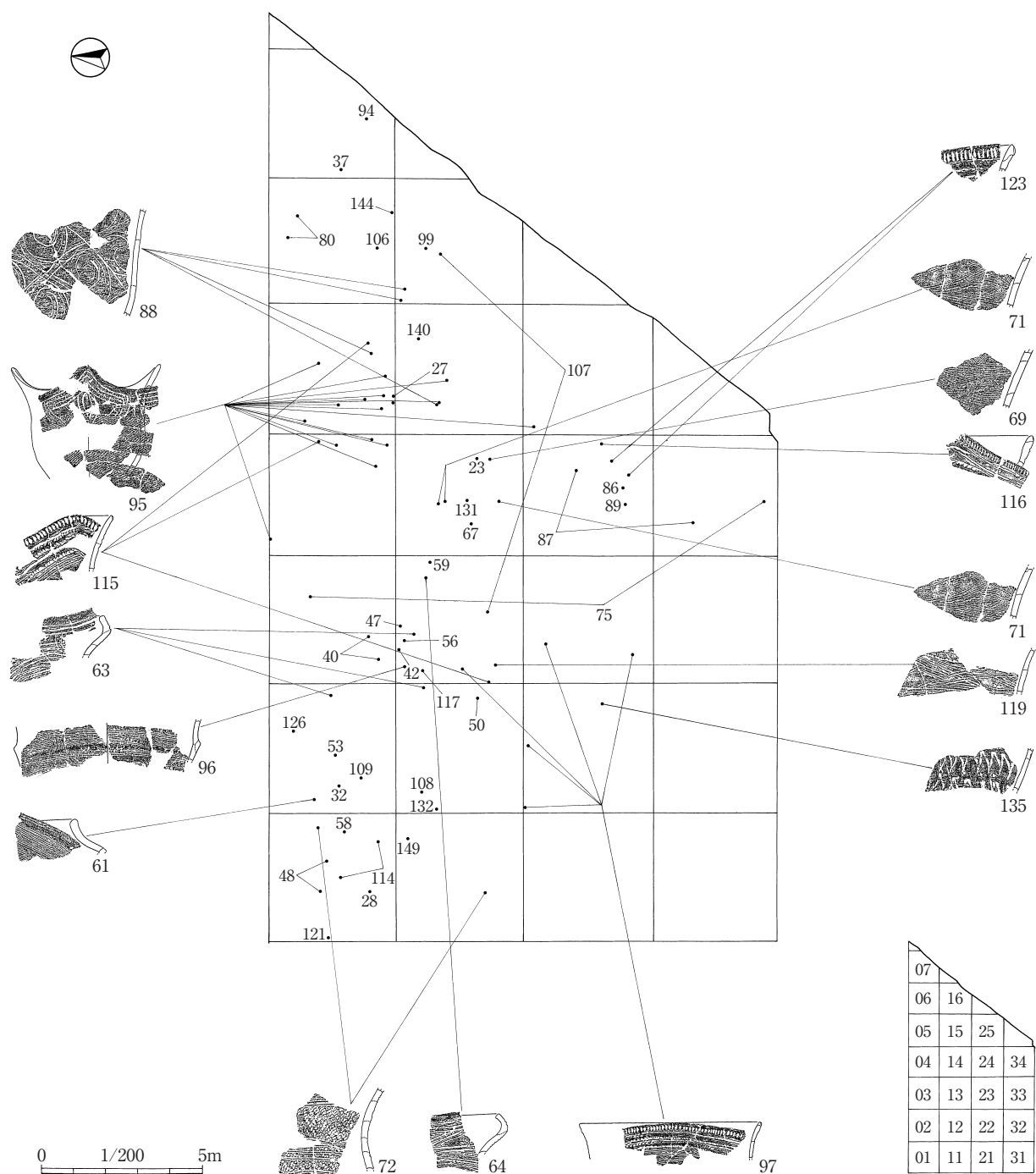
171・176・180～183・201～526・529～532は後期中葉～晩期前葉に属する。185は沈線に区画された連続刺突が巡る小形の浅鉢で、器面の磨耗が目立つが、赤彩がわずかに残存している。212と213は同一個体である。214は波状口縁直下に横位の隆帯が貼り付けられる。220は内面にボタン状の瘤が貼り付けられる。234は口縁部に沿って2条の沈線が巡り、楕円形をした板状の突起と細い縦長の小突起が交互に貼り付けられる。楕円形突起の内面側は円形の刺突が施され、周りを沈線が囲む。269～273は吊手土器である。302～443は粗製土器である。318・443は口縁部及び胴部の紐線文ないしは連



第299図 3次調査区土器出土状況（S3区）

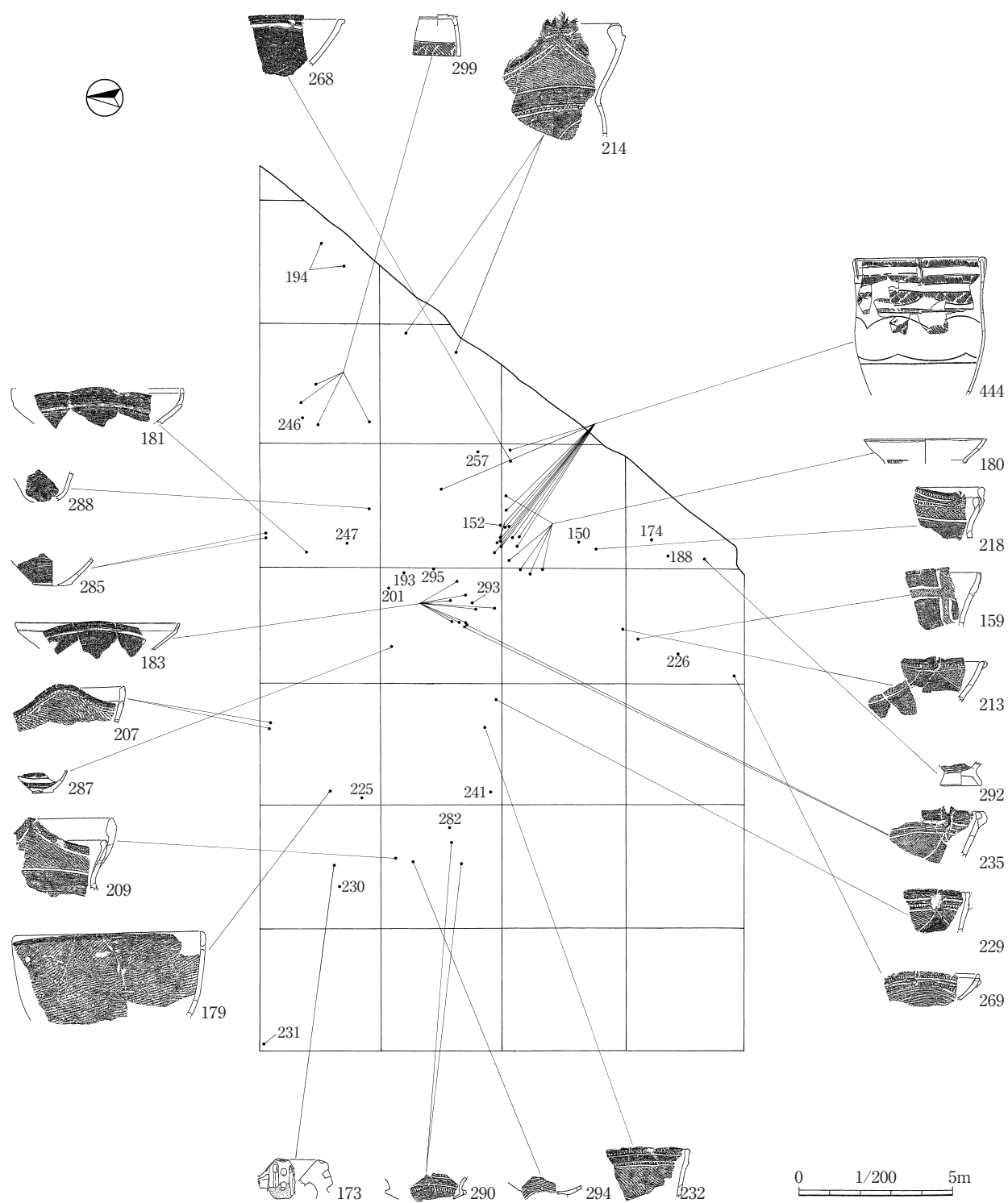
続刺突の代わりに縄文帯が配される。319は口縁部側の状況は不明であるが、幅狭な羽状沈線帯が巡る。449は474・475と同一で、頸部から胴部への斜行縄文帯と胴部屈曲部の縄文帯が交差する場所に、円環状瘤が貼り付けられる。489は接合しないが同一個体であるため推定復元した。2段の入り組み文が配される。520は浅鉢波頂部内側に隆起線が貼り付けられる。531・532は大洞 BC 式である。

527・528・533～653は晩期中葉～末にかけての資料である。527・533は同一個体で斜行充填刺突帯が交錯する場所に、円環状瘤が貼り付けられる。558は無文でケズリ調整が顕著である。晩期中葉と



第300図 3次調査区土器出土状況 (S4区1)

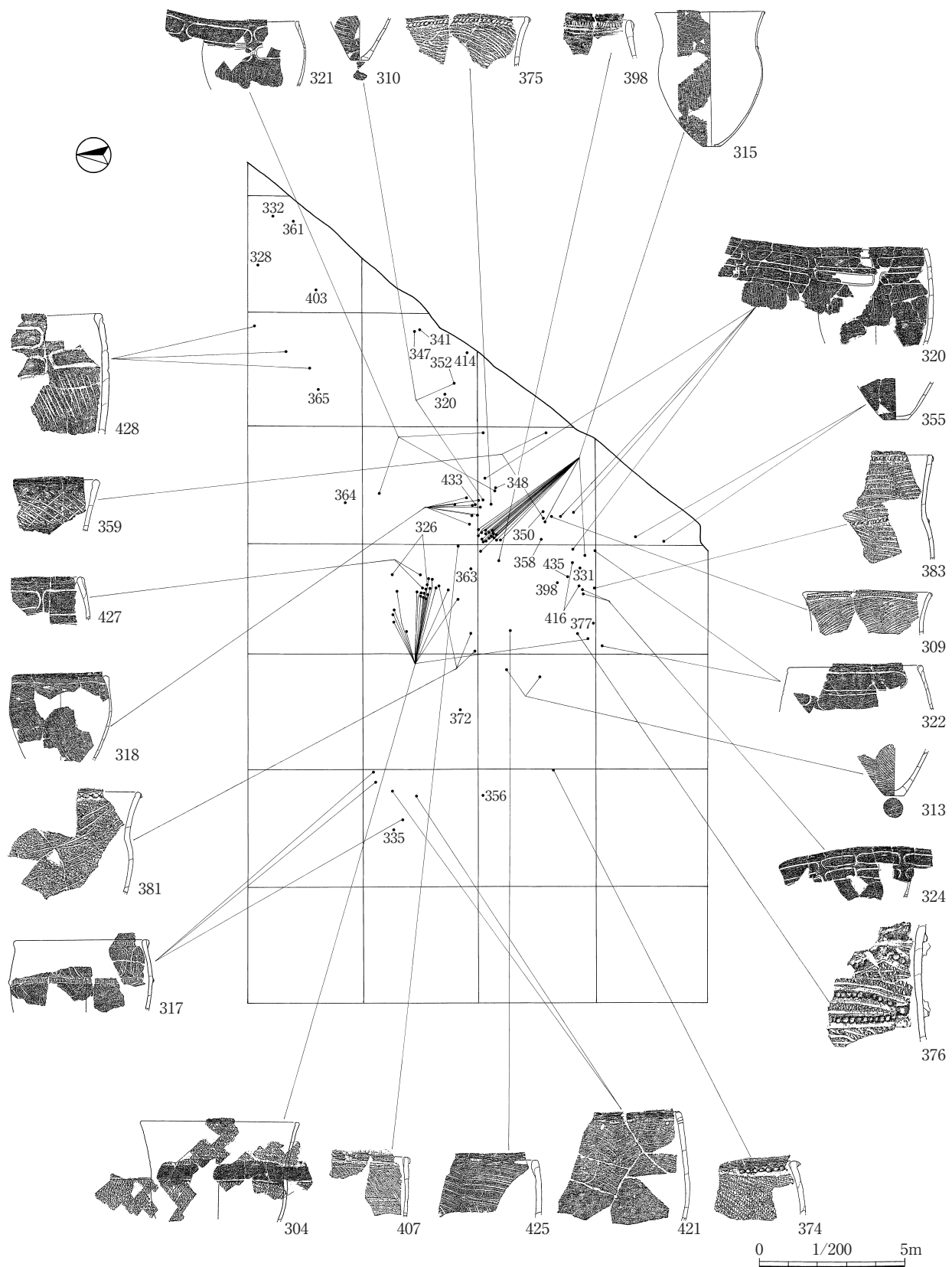
考えた。574は口縁部縄文帯の下側に円環状瘤を貼り付けるもの。607は「つ」の字文が2段にわたって配されるが、縄文が施されない。610は縦長の円環状瘤が貼り付けられる。瘤上にも縄文が施される。648は撚糸文が施される壺形土器の胴部である。650は壺形土器で、文様は大洞C2式的であるが、文様帯が頸部から胴部にかけての狭い範囲に区画されており、大洞A式的と言える。653は大形の深鉢で、口縁部に横位の撚糸文を施し、胴部の屈曲にかけて10本前後の集合沈線を垂下する。屈曲部には円環状瘤を貼り付ける。口唇上は平らに削りだし、キザミを巡らせ、円筒形の小突起を貼り付ける。この土器は639の浮線文の浅鉢と共伴して出土した。654は類例が全く分からないためここに掲



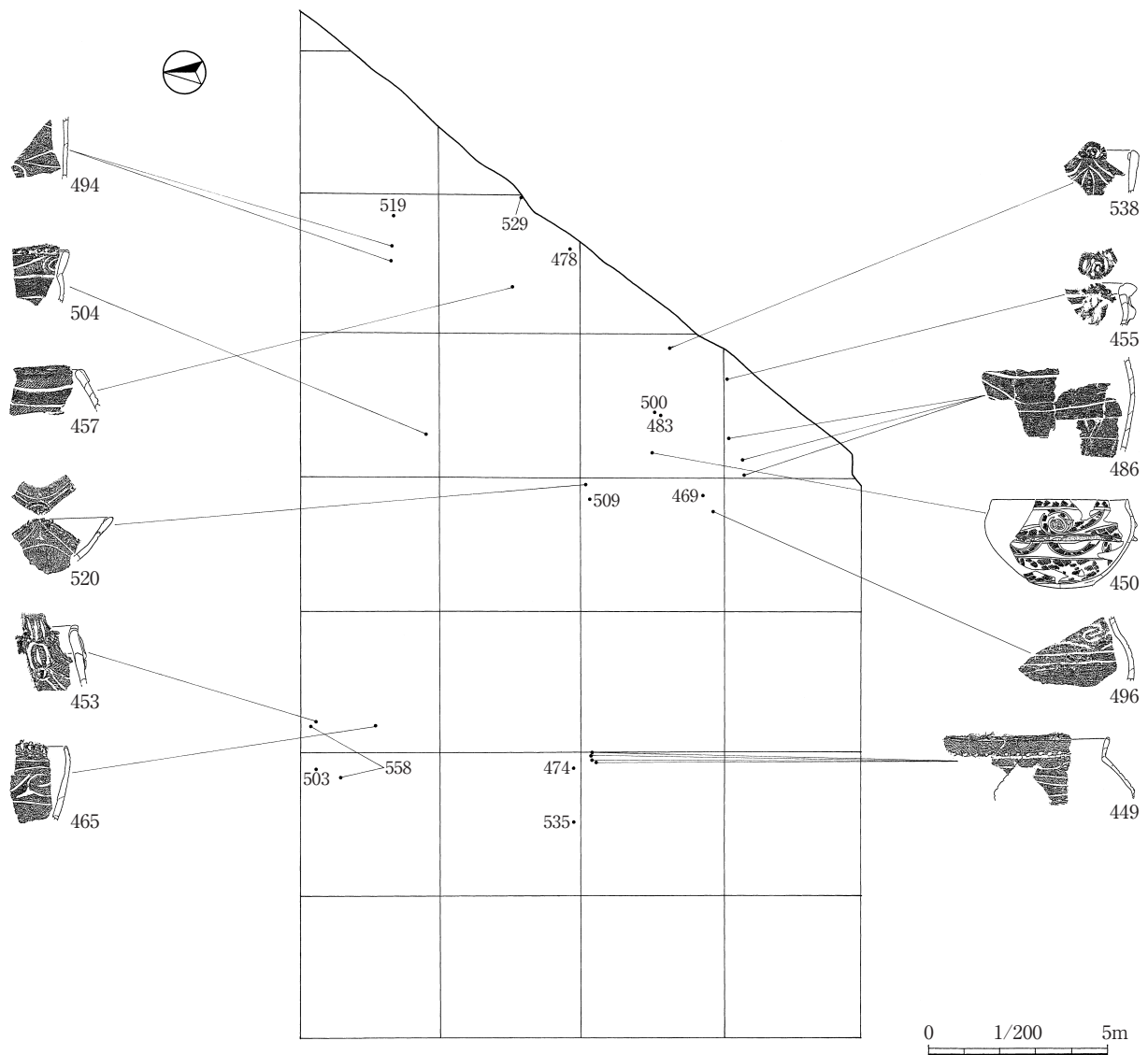
第301図 3次調査区土器出土状況 (S4区2)

載した。浅鉢底部風であるが、中央に直径約2.5cm、深さ約0.5cmのくぼみが見られる。これは焼成前につけられたものである。くぼみ周辺はほとんど磨滅しておらず、底部であったか疑わしい。胎土はやや砂粒が多く粗いが、晩期の焼成とも異なるように思われる。

第278図は石製玉類である。第278図655～658は滑石製の丸玉である。657は8.4gと大きい。659は滑石製の玦状耳飾である。肉厚で断面形状は蒲鉾形に近いことから、前期でも古手のものと考えられ



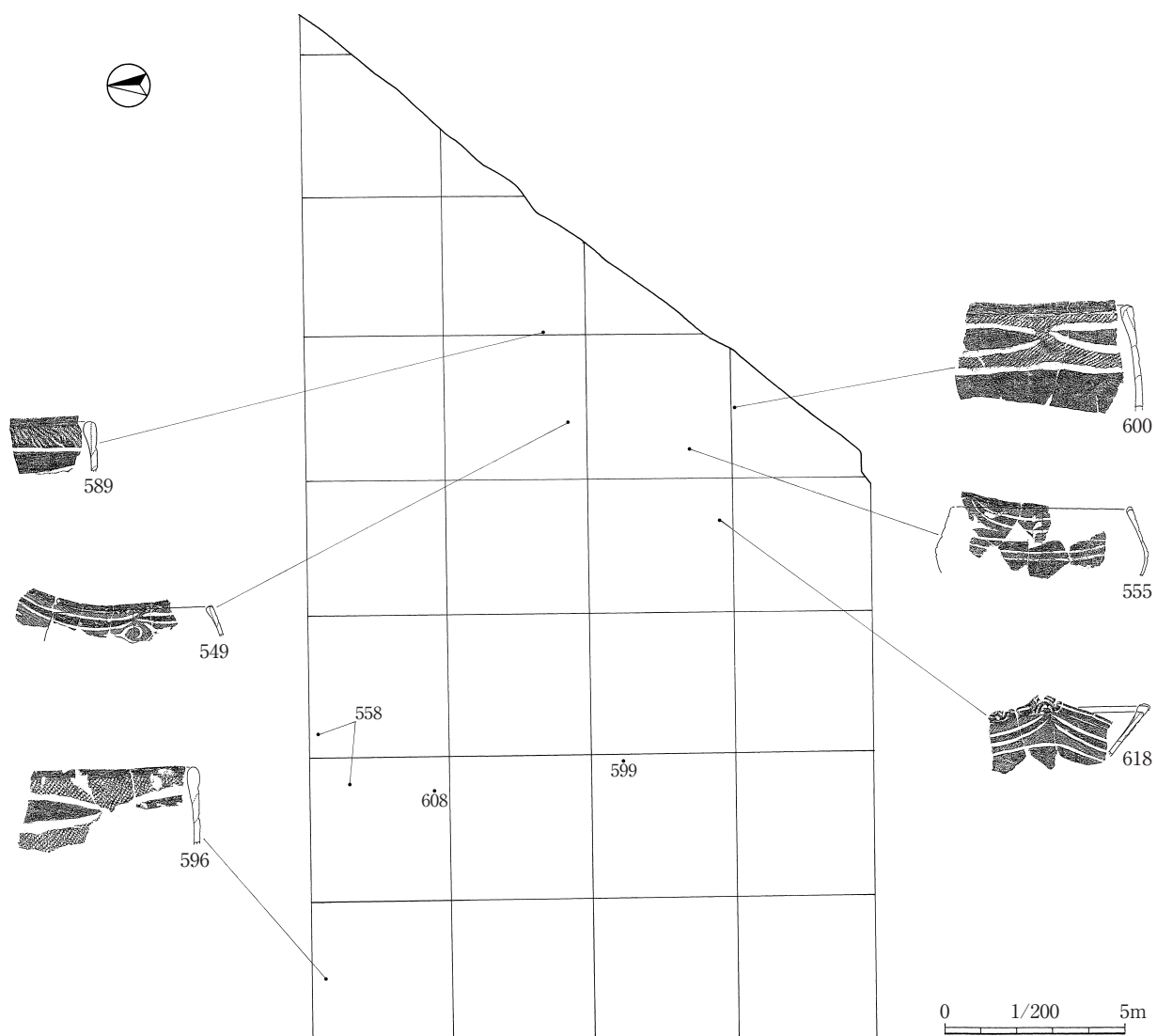
第302図 3次調査区土器出土状況 (S4区3)



第303図 3次調査区土器出土状況（S4区4）

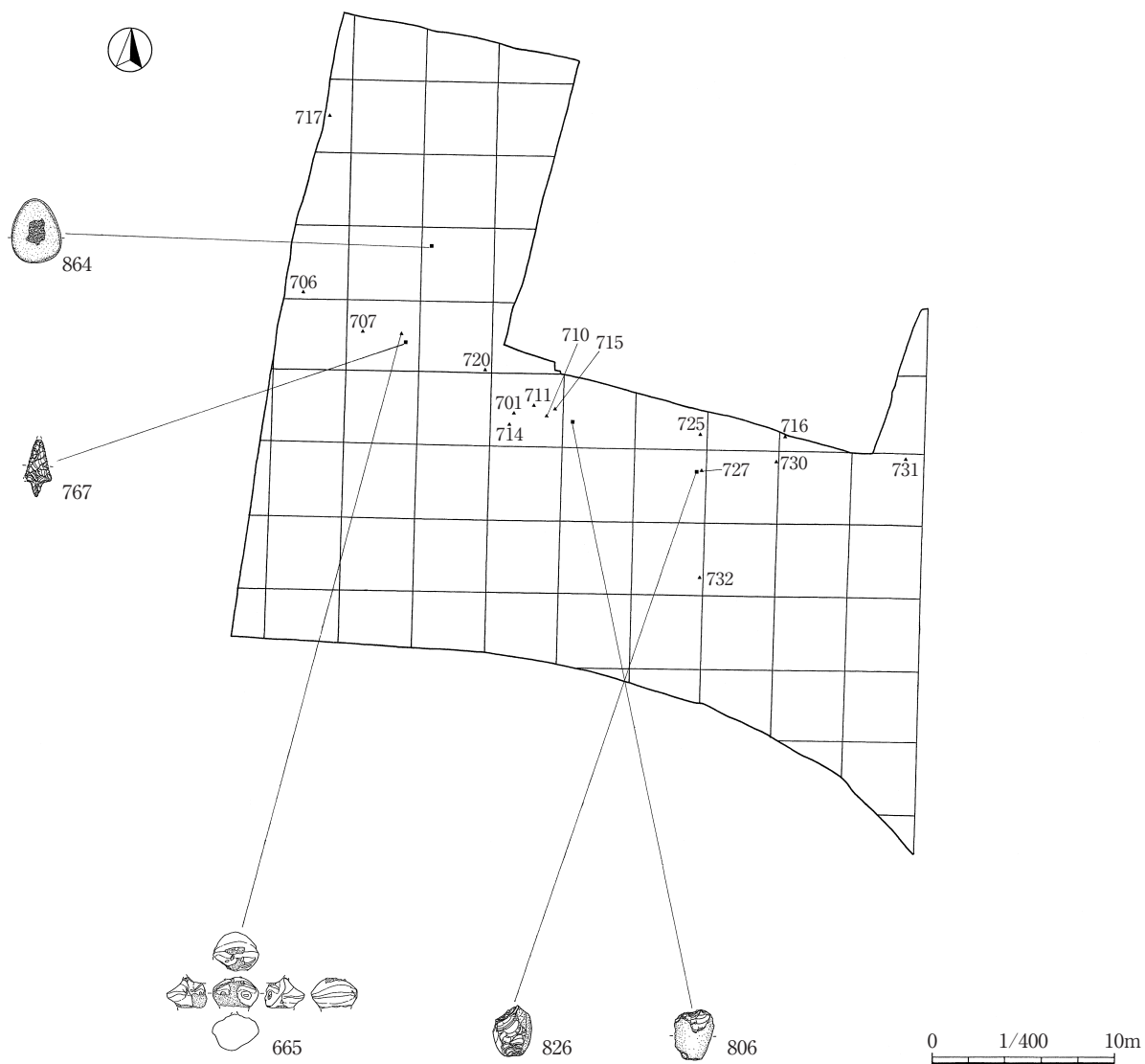
る。ほぼ半分を欠失しており、補修孔があげられる。

第279～282図は土製品である。660は繊細なつくりで、透かし彫り耳飾の模倣品であろう。664は土偶頭部～頸部。頭の角度や顔面の表現から、後期中葉の所産であろう。665は山形土偶の頭部。扁平な顔面に比べて大きく後頭部が張出す。666は晩期の中空土偶の頭部である。図中の斜線部分には粘土紐状の剥離面が観察される。667・669・675は同一個体で、I字文が施される中空の土偶である。670・671・676・677は同一個体であり、沈線で三叉文が描かれる中空の土偶である。672・673・674・700は同一個体の可能性が高く、沈線で入組文が描かれる中空の土偶である。もしくは袋状の容器の可能性も否定できない。679は山形土偶の頭部から胴部である。684・687・689・691・692は同一個体の可能性が高く、胴部に沈線による渦巻と脚部にI字文が施文される。694と695は土版で、同一個体であろう。697は一見ただの焼成粘土塊だが、第254図189と同様顔を意識した可能性もある。玩具か呪符であろうか。698は鉢形土器のミニチュアである。胴部下半に廻る沈線は雑に施す。口唇には3単位の波状突起をつくる。

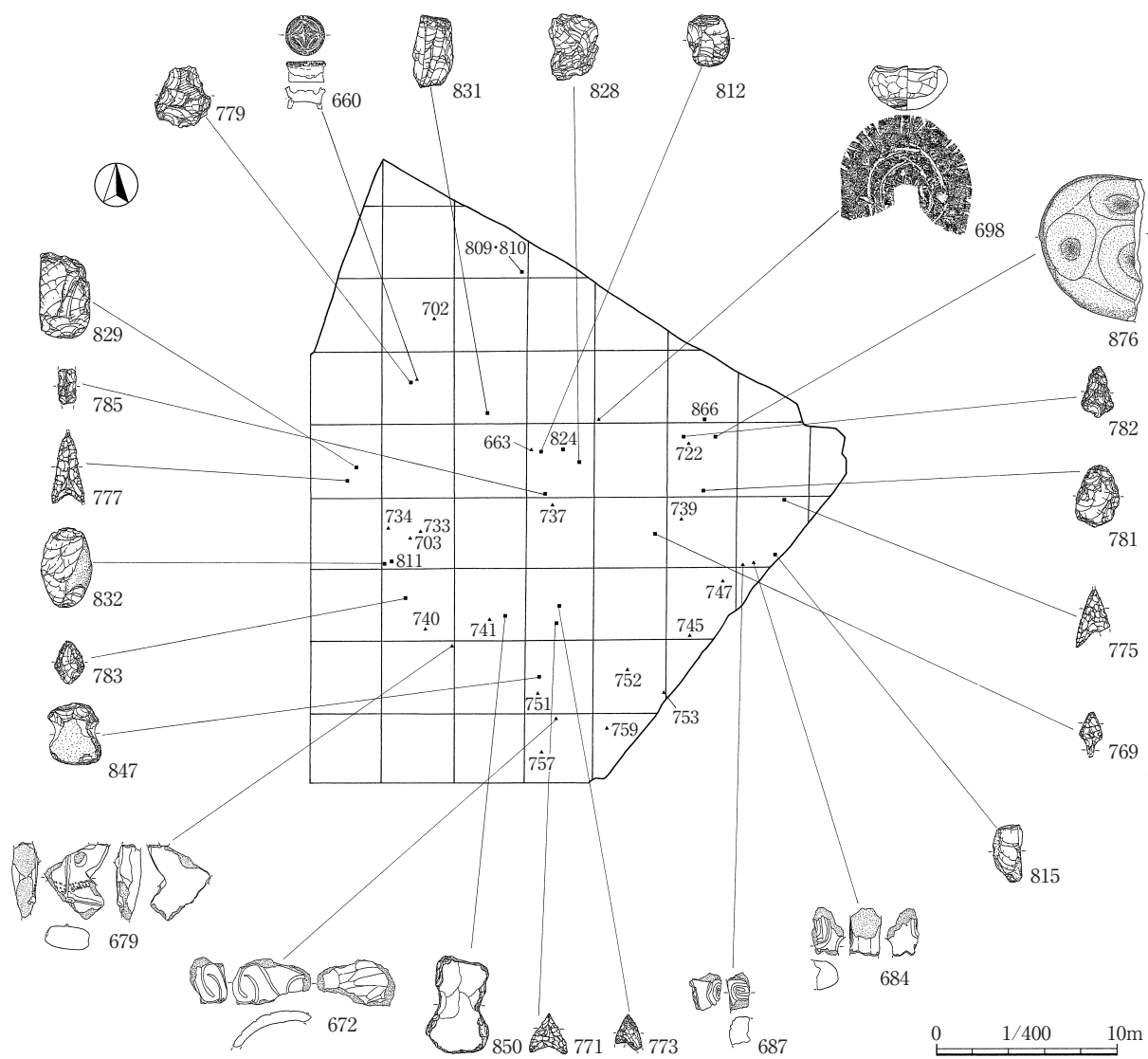


第304図 3次調査区土器出土状況（S4区5）

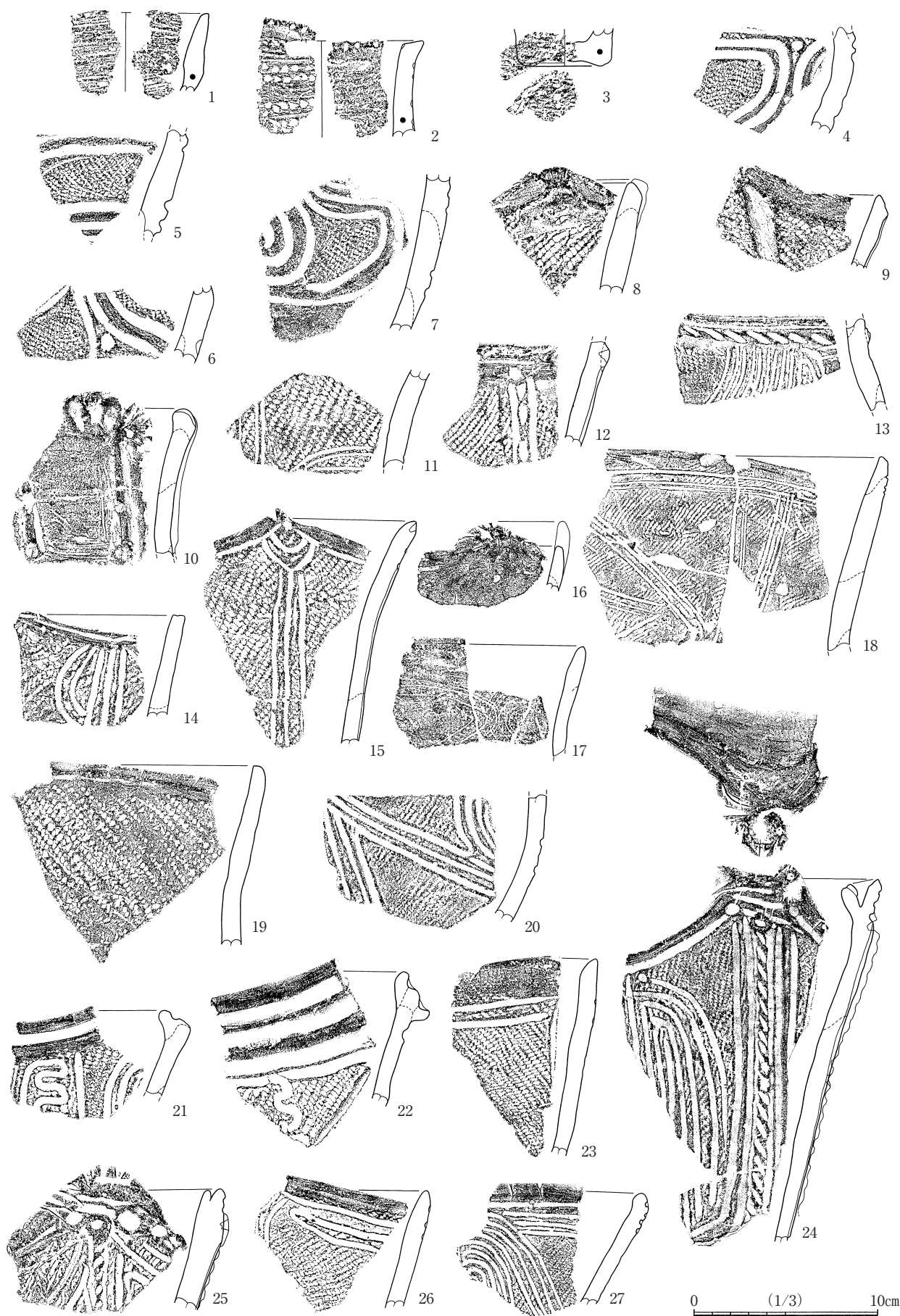
石器も遺構が存在しないにもかかわらず多数出土した。特に石鏃やその未成品と合わせて楔形石器がまとまって出土している。石鏃の製作に関わる資料の可能性が考えられる。785は石錐の破片であろう。846～853は打製石斧である。854～857は磨製石斧であるが、いずれも破損もしくは磨耗している。858は礫の縁辺を刃部としているもの。859～861は石剣の破片で、小破片であるが線刻が良く残る。863は鳥の嘴風の形状を呈しており、貝輪の製作具の可能性もある。875は脚付の石皿である。



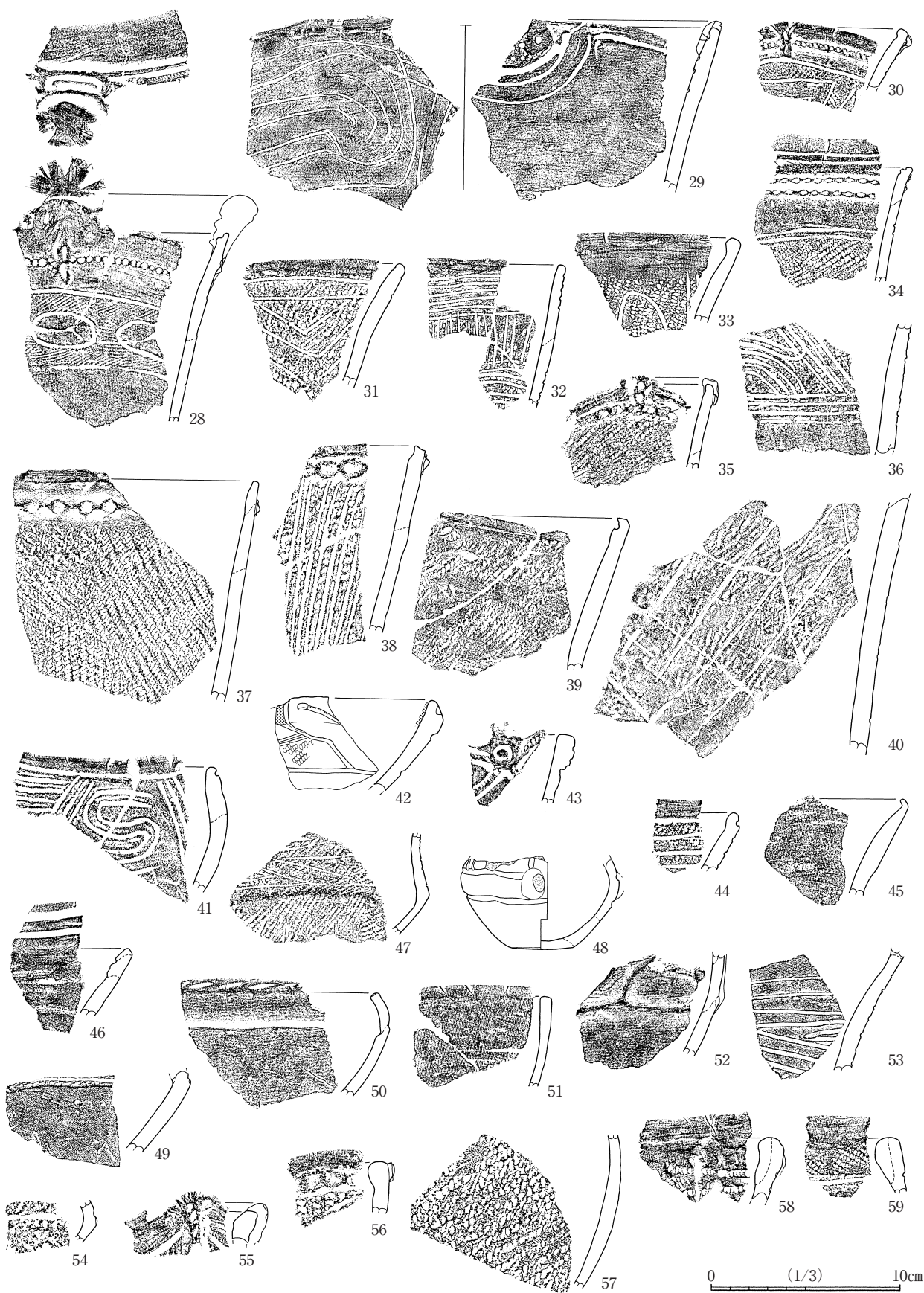
第305図 3次調査区石器・土製品出土状況 (S1・S3区)



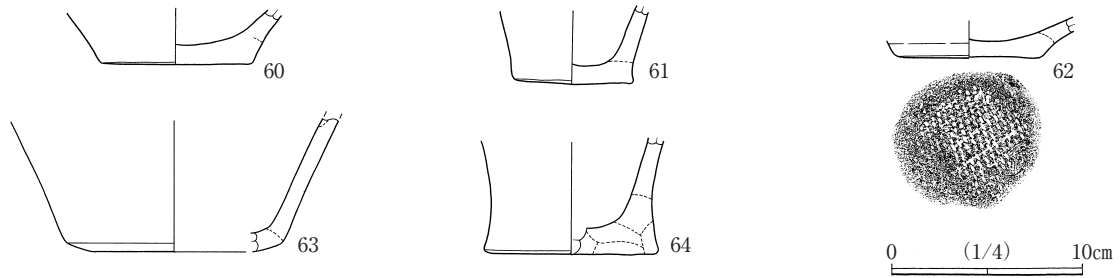
第306図 3次調査区石器・土製品出土状況 (S2・S4区)



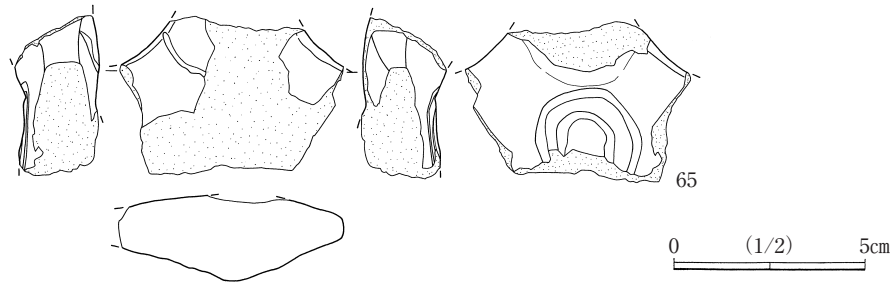
第307図 6次調査区グリッド出土土器 (1)



第308図 6次調査区グリッド出土土器 (2)



第309図 6次調査区グリッド出土土器 (3)



第310図 6次調査区グリッド出土土製品

3 第6次調査区 (第305～310図、図版95・96)

第6次調査区は65号住居跡が検出されたところであるが、調査前からすでに地点貝層が露出しており、また、調査区全体が竪穴住居跡覆土とっていい状態であった。そのため、ごく上層の遺物を除いて全て住居跡覆土出土として扱われている。ここで図示するのはそのごく上層の遺物で、出土層位の違いを示すため、あえてグリッド出土として扱った。

出土遺物は、65号住居跡と同じ堀之内1～2式が大多数を占める。同一個体と思われる遺物も出土している。1・2は条痕文土器、3は前期前葉の深鉢底部、4～9は加曽利E式である。10～16・19～27・41・42・44は堀之内1式である。42は沈線内部にわずかに赤彩が残存する。17・18・28～36・43・45～47は堀之内2式で、29は同一個体が65号住居跡から出土している。48は全容が不明であるが、胴部中央に最大径を持ち、横位沈線で区画される文様帯が上半分に展開することから、堀之内2式に属すると考えた。58・59は後期安行式の深鉢である。

土製品は1点のみである。65は堀之内式期の土偶の肩～胴部と考えられる。

実測できる石器は出土しなかった。



第311図 弥生時代～古代遺構配置

第3章 弥生時代～古代の遺構と出土遺物

第1節 竪穴住居跡

国分寺台地区には弥生時代から古墳時代にかけて、多くの遺跡が存在しており、質・量とも県内随一といって良い。しかし、埋蔵文化財の調査が造成途中で行われたこともあって、地区全体のムラの分布と広がりについては不明な点も多い。また、根田代、御林跡、長平台などの主要な遺跡は、市原低地に面した地区北西側に集中しており、西広貝塚の存在する南東部は、該期の遺跡が希薄な場所と考えられがちであった。しかし、1次調査で少なくとも3軒の竪穴住居跡が検出され、ムラの存在が明らかになった。その後の2次調査と7次調査で計17軒の竪穴住居跡が検出された。もちろん先に述べた遺跡群に比べ、遺構密度などは希薄といわざるを得ないが、この時期の地区の状況を知る上で、一つの資料を提示できると思われる。

36号住居跡（第312図、図版145・148・152）

2次調査区SS5-50・60グリッドに位置する。住居東側は調査区域外に延びるため、正確な規模と主軸方位は不明であるが、平面形態は小判形を呈し、規模は7.5×6.0m前後、主軸方位はN-44°-W程度と思われる。現地表面から床面までの深さは0.9m、遺構確認面から床面までの深さは0.45mを測る。床面には、壁周辺を中心に焼土と炭化材が分布する。柱穴は調査区内から1基のみ検出された。深さは0.5mを測る。床面北側には106×60cm・深さ4cmを測る炉跡が認められた。周溝は検出されなかった。

遺物は多くない。1・8は弥生甕形土器、2は壺形土器の口縁部である。3・7は土師器高杯、4・6は器台、5は手捏土器、9・10は甕である。4・6・7は赤彩が施される。調査時の所見では8の甕形土器が床面直上から出土したとされており（米田・小川 1981）、本来この住居跡に伴うものと考えられる。

37号住居跡（第313図、図版148）

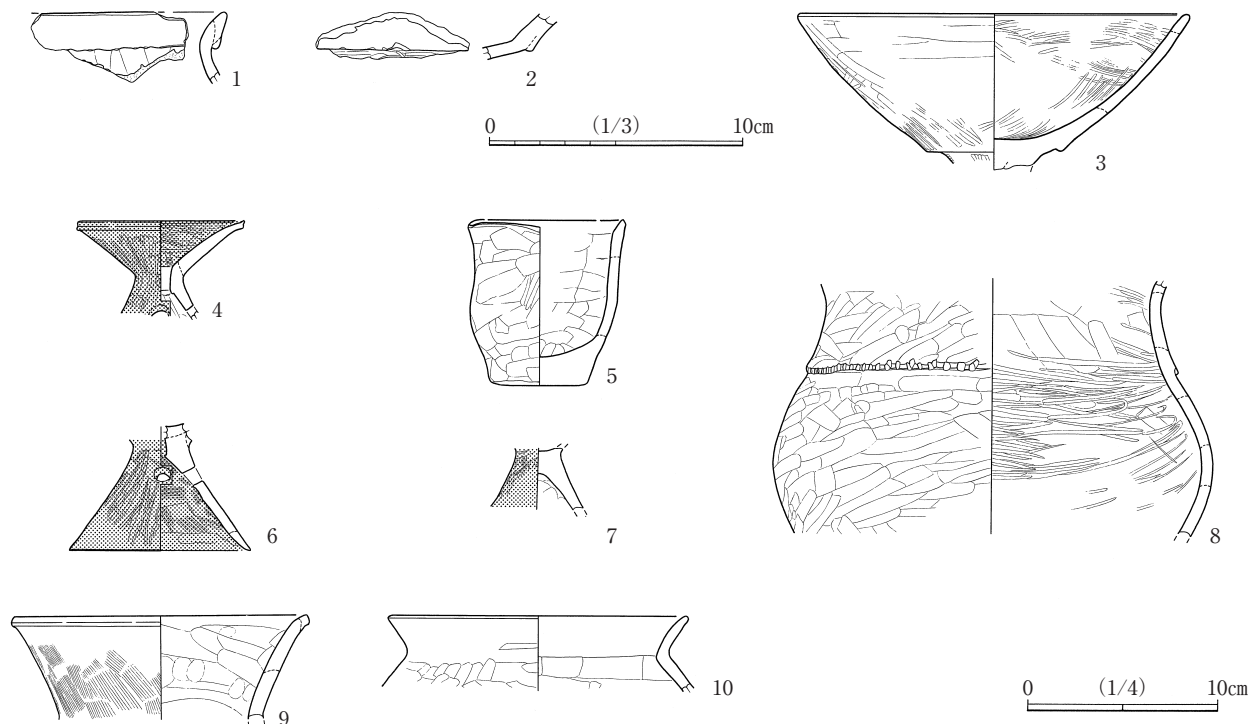
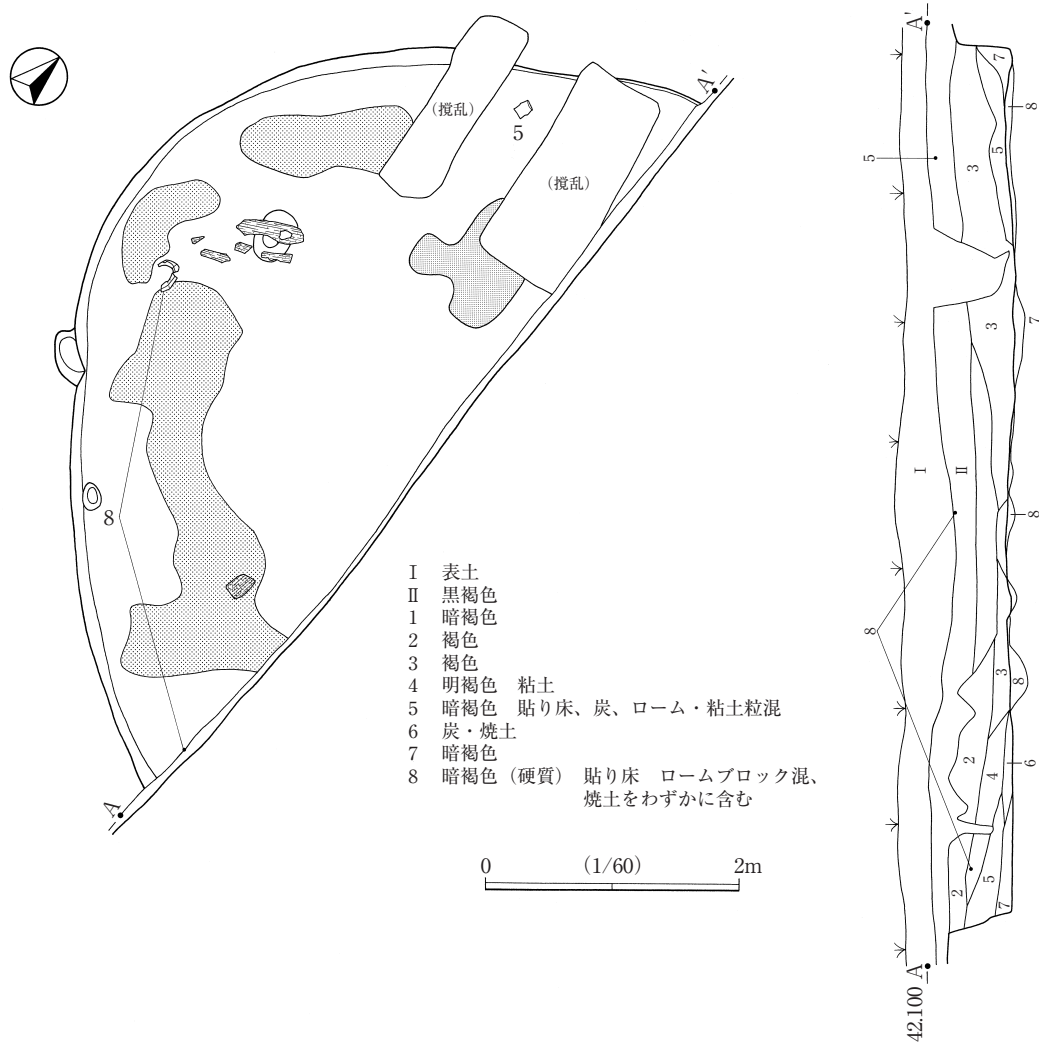
2次調査区SS5-09・10・19・20グリッドに位置する。住居東側は調査区域外に延びるため、正確な規模と主軸方位は不明であるが、平面形態は小判形を呈し、規模は4.1×3.9m前後、主軸方位はN-25°-W程度と思われる。現地表面から床面までの深さは0.57m、遺構確認面から床面までの深さは0.18mを測る。柱穴は不規則な配置を示し、深さは0.11～0.32mを測る。床面北側には0.52×0.42m・深さ0.05mを測る炉跡が認められた。

遺物は極めて少ない。図示が可能だったのは、小形の手捏土器（甕形）1点のみであった。

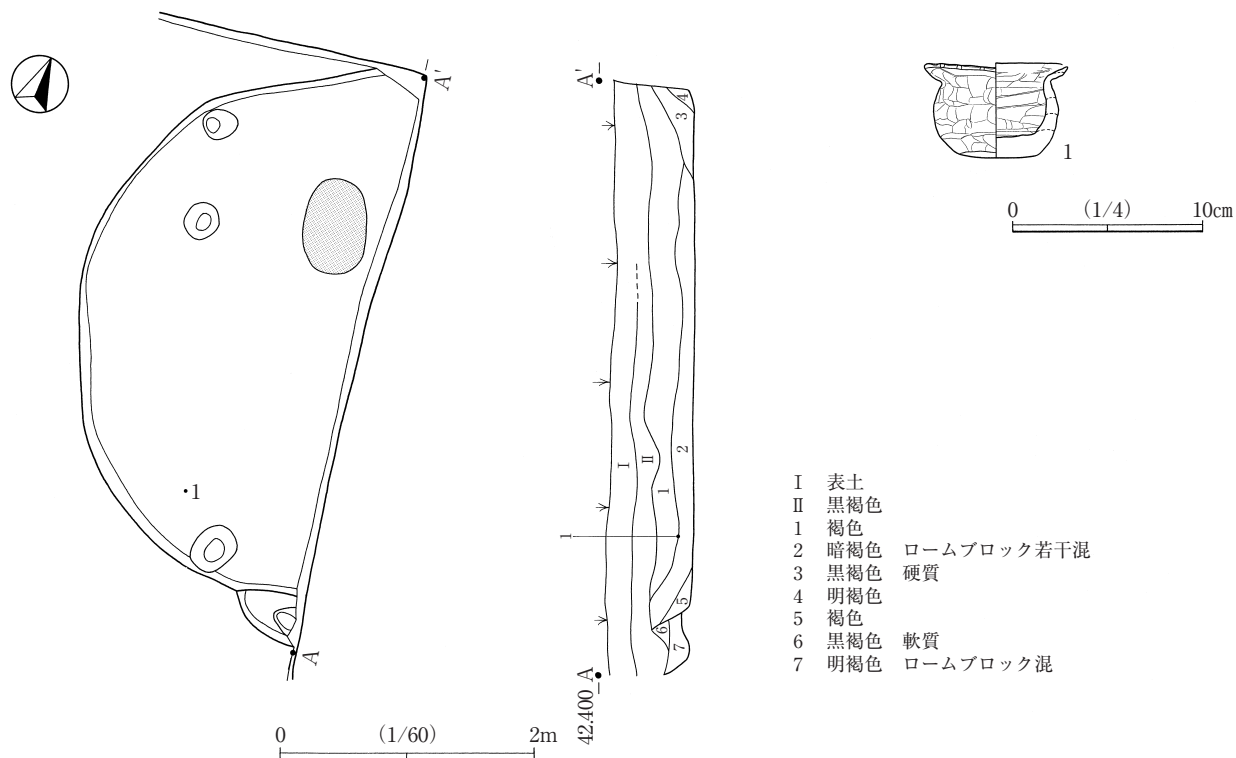
38号住居跡（第314図、図版145・148・152）

2次調査区SS5-27・28グリッドに位置する。平面形態は小判形を呈する。規模は3.9×3.71m、遺構確認面から床面までの深さは0.36mを測る。主軸方位はほぼ真北である。住居中央付近の床面直上には焼土が堆積する。入り口の梯子架け用と思われる柱穴を除き、柱穴は不規則な配置を示し、深さは0.14～0.29mを測る。床面北側には0.77×0.46m・深さ0.08mを測る炉跡が認められた。貯蔵穴は南東壁際に位置し、0.59×0.32m・深さ0.14mを測る。貯蔵穴内からは5の椀形土器が出土している。

1・2・5は椀形土器である。1は有段口縁で2列の刺突列が巡り、内面に赤彩が残る。2・5は



第312図 36号住居跡、出土遺物



第313図 37号住居跡、出土遺物

無段で結節文が施され、口唇上は平らに削ぎ落とされて絡条体圧痕が施される。3・4は壺形土器、6～8は甕形土器である。

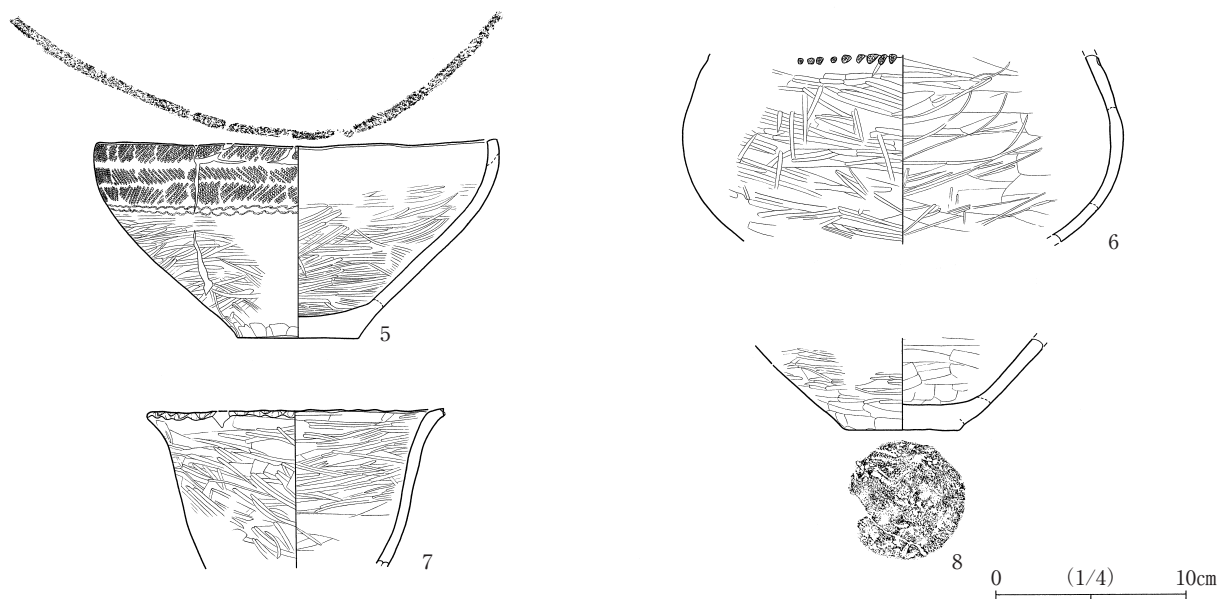
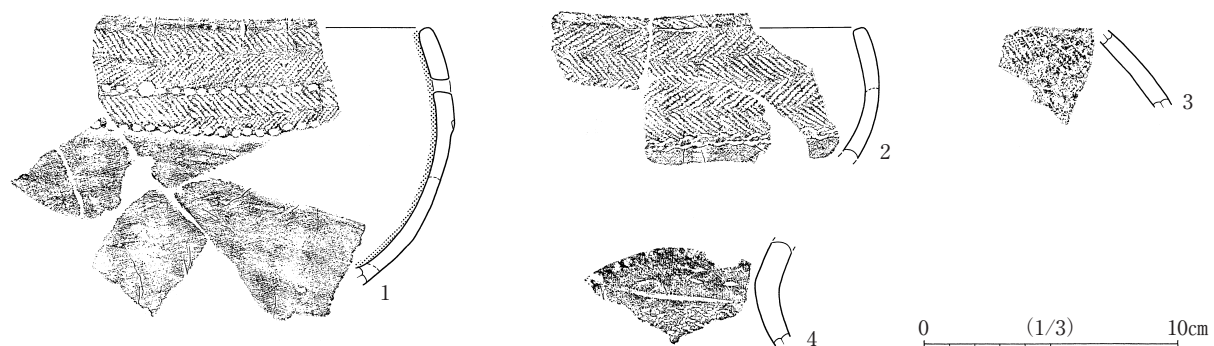
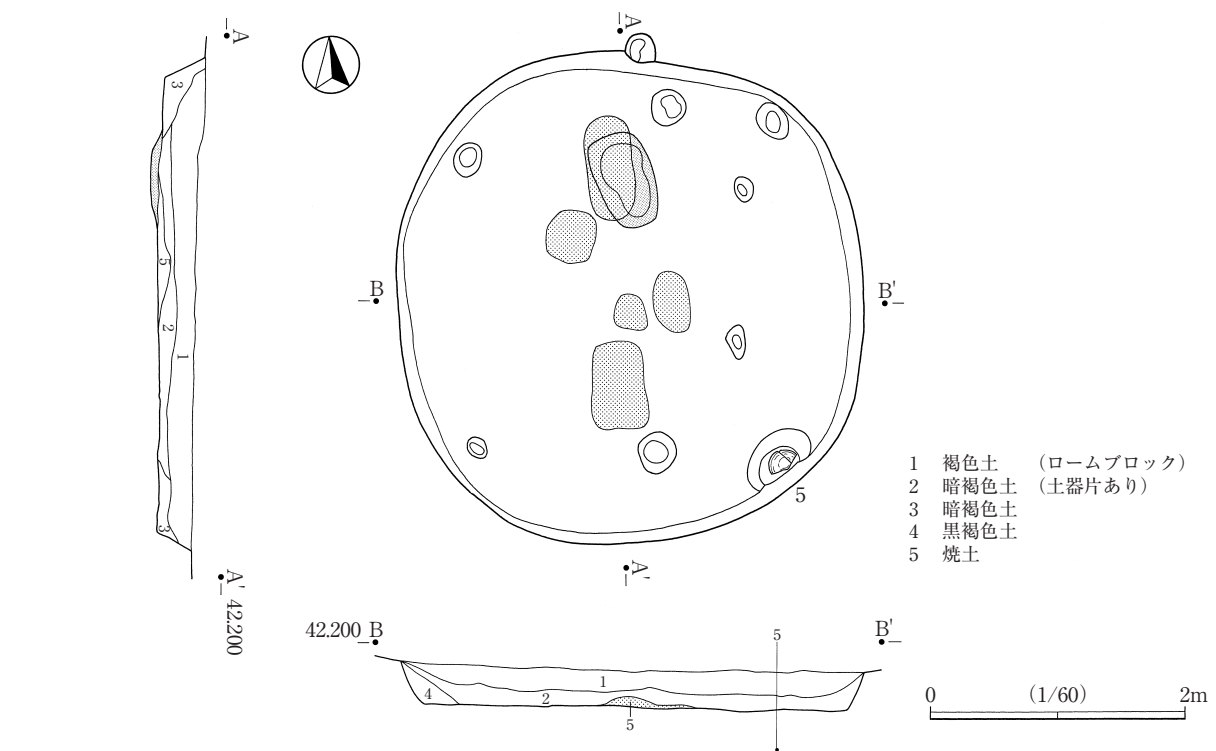
39号住居跡（第315・316図、図版145・148・149・152）

2次調査時にSS5-N03住居跡、7次調査時に501号住居跡として調査されたものである。7次南調査区南西寄りに位置し、平面形態は方形を呈する。規模は7.76×7.86m、遺構確認面から床面までの深さは0.37mを測る。主軸方位はN-39°-Wである。柱穴は平面楕円形を呈し、規模73～97cm×70cm・深さ73～106cmを測る主柱穴3基と、30×18cm・深さ15cmを測る出入り口ピットが検出された。周溝は北西コーナーにおいてのみ検出され、幅4～12cmを測る。南側コーナー寄りの主柱穴と北西コーナー以外の周溝は検出されなかったが、本来的には存在していた可能性が高いものと思われる。貯蔵穴は認められなかった。床面北側には60×48cm・深さ5.8cmを測る炉跡が認められた。

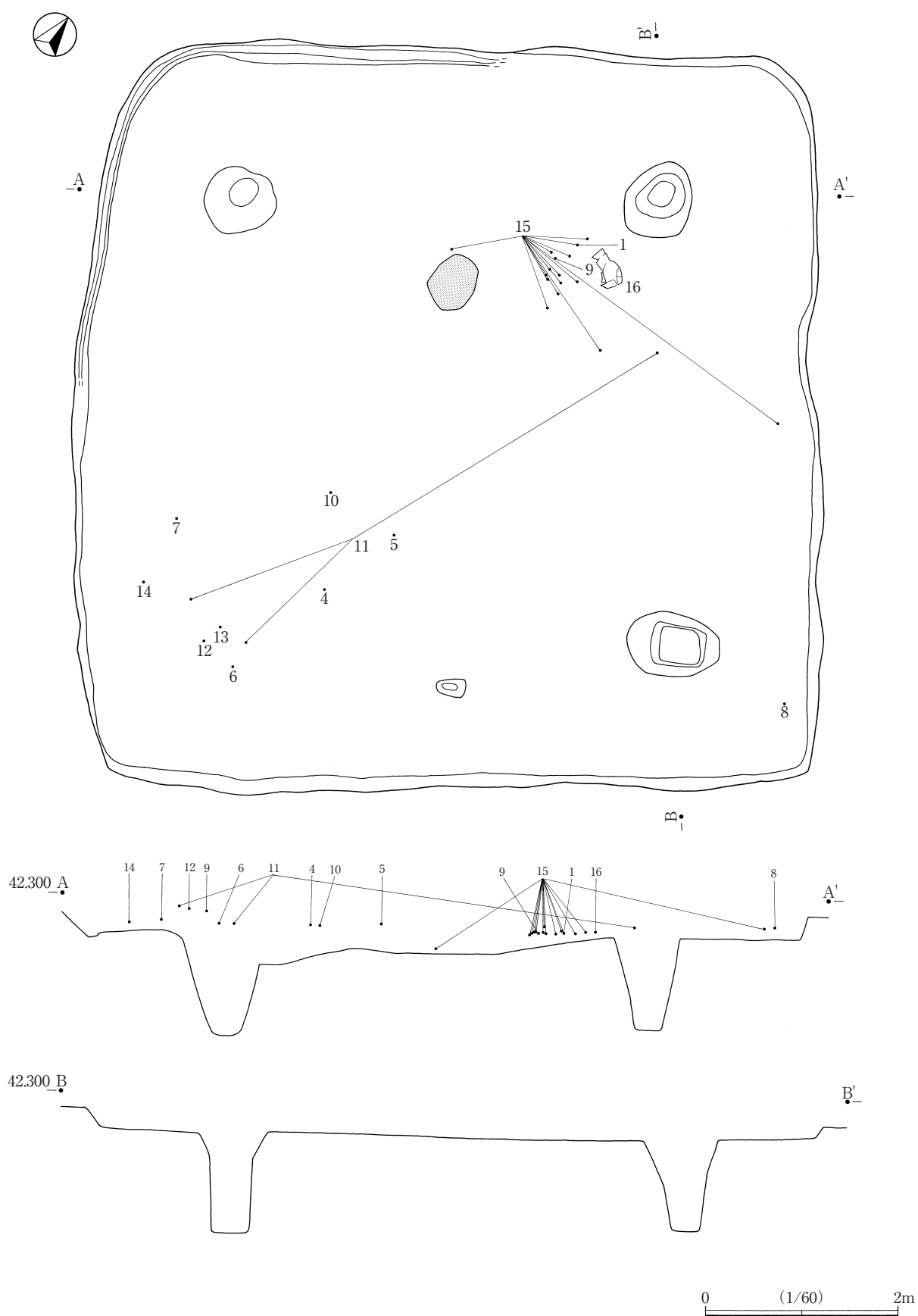
炉の周辺に大形の甕が残されていたが、他は住居跡南側から多く出土している。1は弥生甕形土器、2・3は壺形土器である。2は赤彩が施される。これらは混入であろう。4・9・12は土師器高杯、5は器台である。7・8は手捏土器である。10は小形甕、11・16は甕である。15は木目の粗いヘラ状工具による調整が頸部に残る。16は外面が熱により剥落している。

40号住居跡（第317図、図版145・149・152）

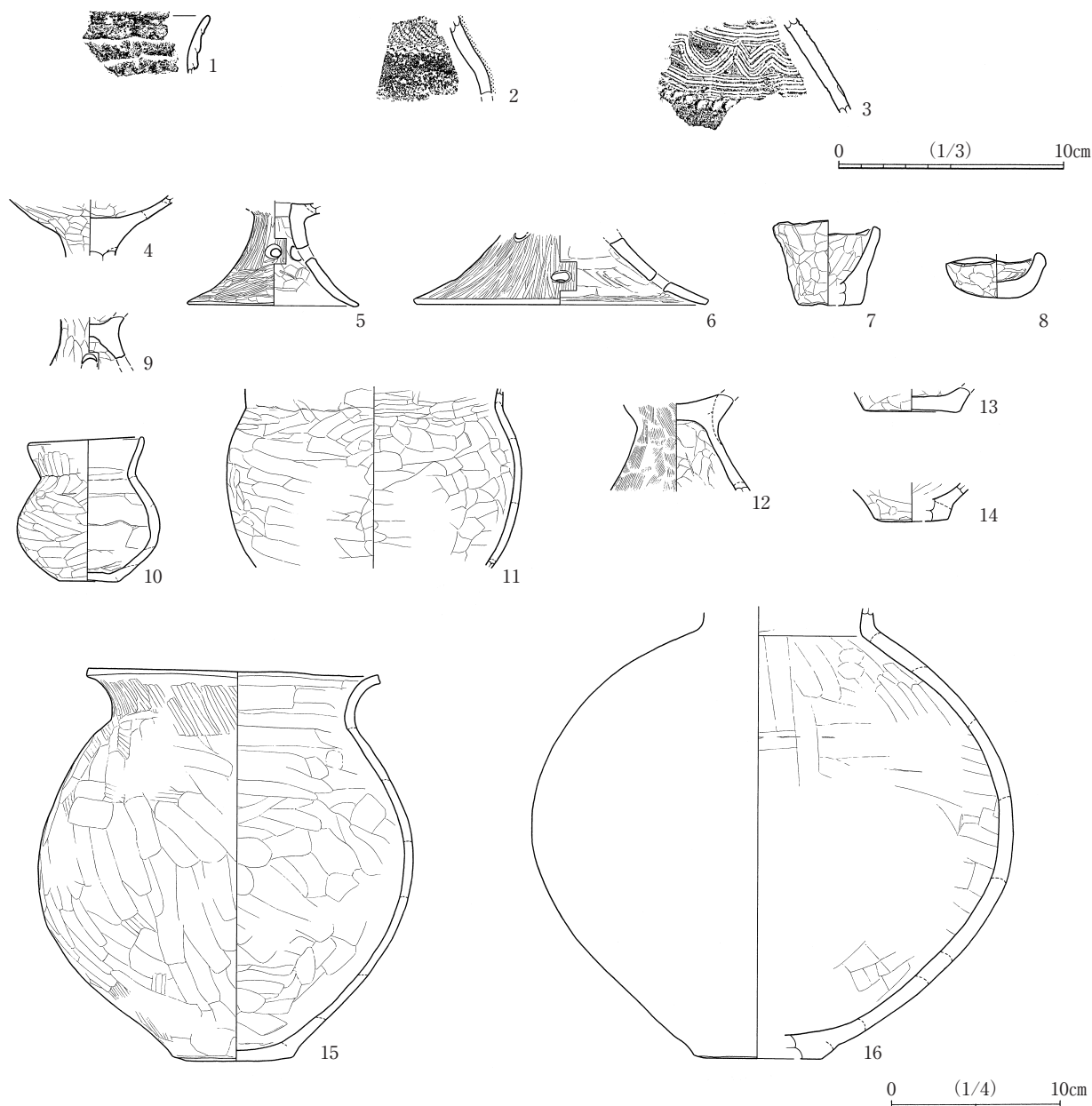
2次調査区SS5-100・10グリッドに位置する。住居北西角は削平され、東側は7次調査区において検出することができなかった。平面形態は方形を呈する。規模は4.8m四方形程度を測るものと思われる。現地表面から床面までの深さは0.52m、遺構確認面から床面までの深さは0.21mを測る。主軸方位はN-9°-Wである。柱穴は深さ0.42～0.45mを測る主柱穴2基と深さ0.12～0.15mを測る小柱穴2基が検出された。住居北寄りには0.74×0.42m・深さ0.05mを測る炉跡があり、火床部は強く



第314図 38号住居跡、出土遺物



第315図 39号住居跡



第316図 39号住居跡出土遺物

被熱する。周溝、貯蔵穴は検出されなかった。

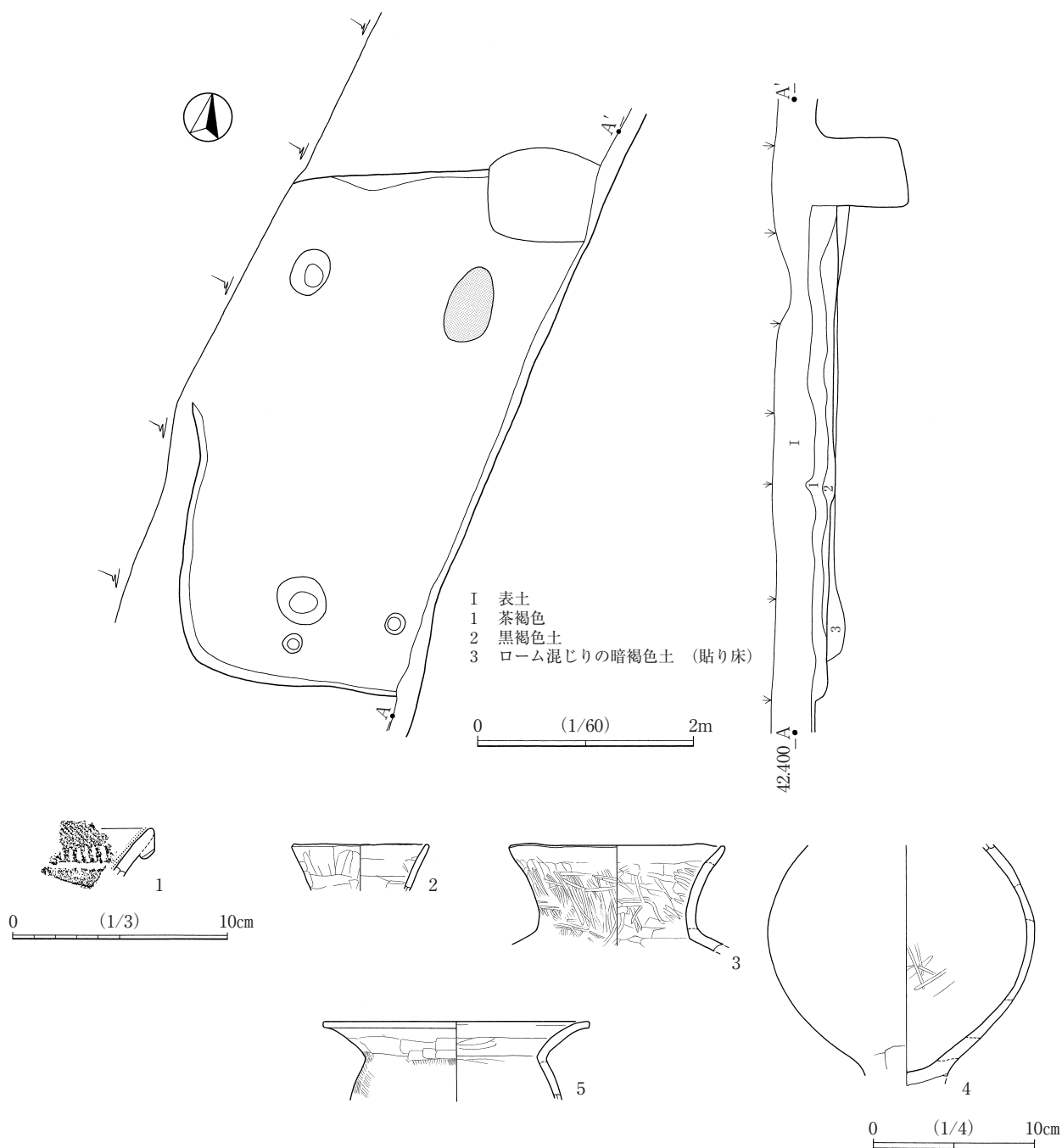
遺物は少なく、全て覆土一括である。1は弥生壺形土器で内面に赤彩が施される。混入であろう。

2・3・5は土師器甕である。4は台付甕であるが、外面は剥落が顕著である。

41号住居跡（第318図、図版145・149・152）

2次調査時にSS5-N07住居跡、7次調査時に601号住居跡として調査されたものである。7次北調査区南東に位置し、平面形態は隅丸方形を呈する。規模は4.25×4.0m、現地表面から床面までの深さは0.96m、遺構確認面から床面までの深さは0.24mを測る。主軸方位はN-33°-Wである。柱穴は住居西側から2基のみ検出され、深さは0.38mを測る。周溝、貯蔵穴、炉跡は認められなかった。

遺物は少ないが、床面直上出土が多く、遺構の時期を示していると考えられる。1・5・6は弥生甕形土器である。2・3は埴形土器である。いずれも有段で2は単斜縄文が施され、段下側には刺突列が巡る。3は縄文は施されないが、段下側には同じく刺突列が巡る。いずれも内・外面に赤彩が施



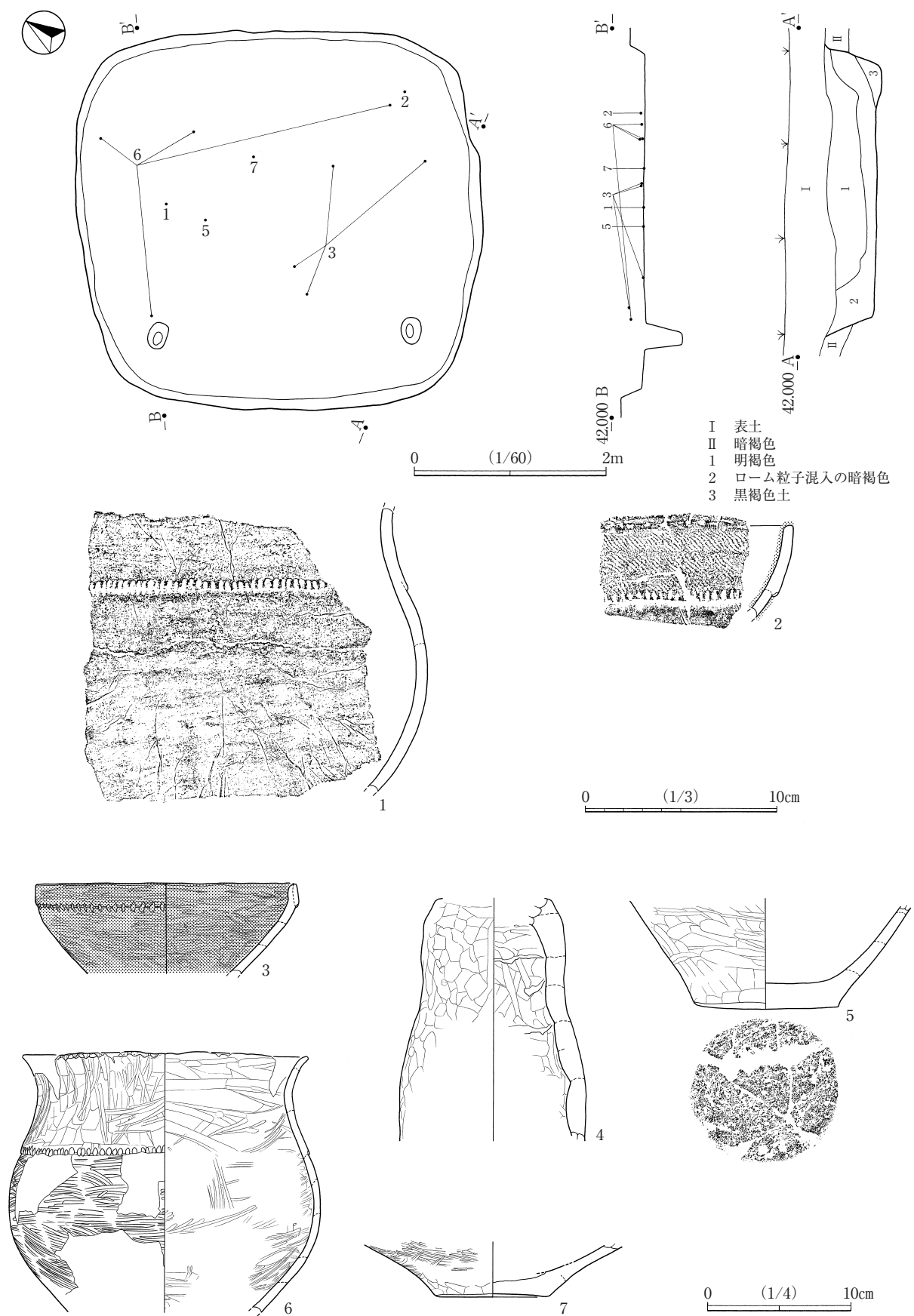
第317図 40号住居跡、出土遺物

される。4は炉器台、7は壺形土器の底部である。

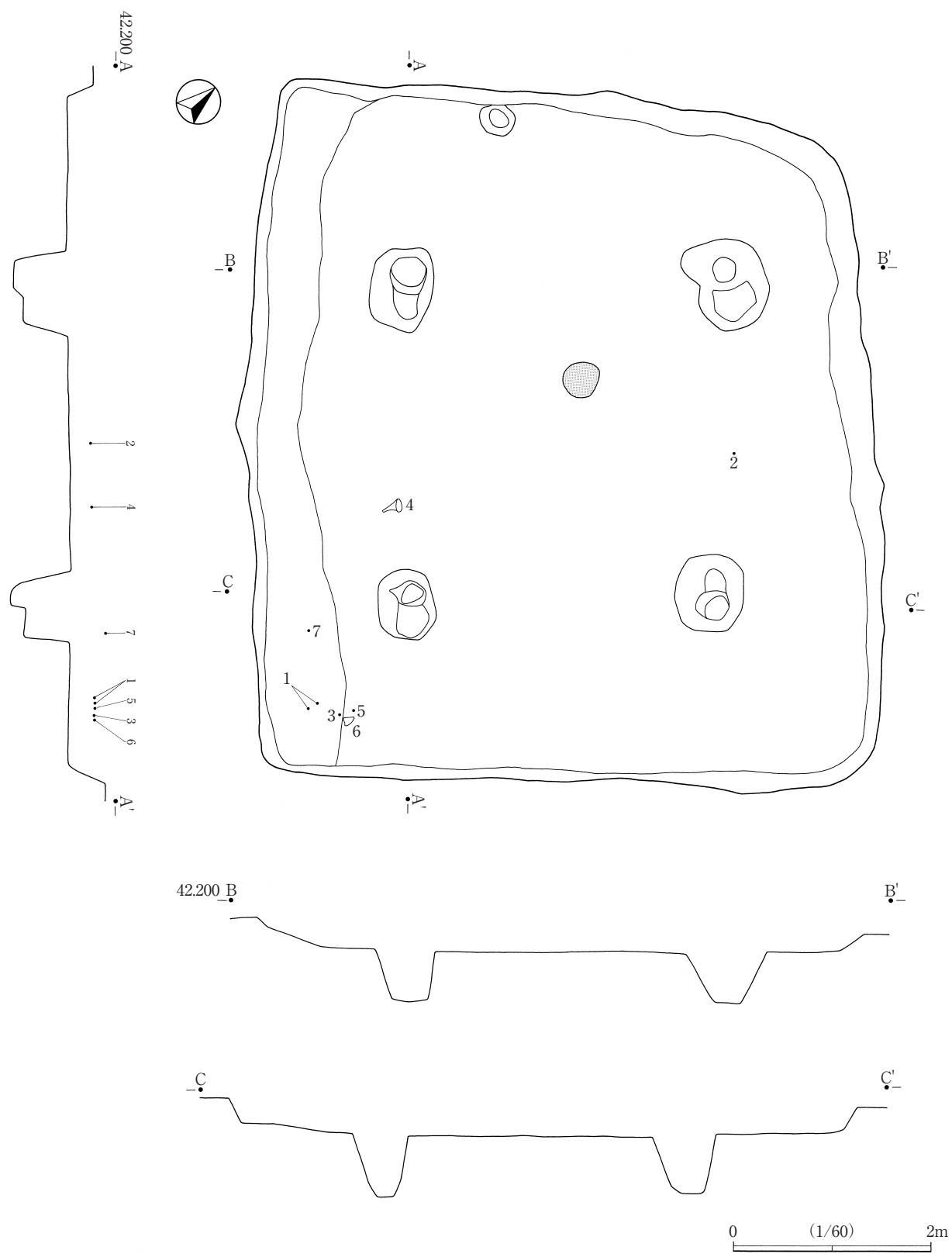
42号住居跡（第319・320図、図版145・149・152）

7次南調査区西寄りに位置する。平面形態は方形を呈する。規模は7.1×6.45m、遺構確認面から床面までの深さは0.3mを測る。主軸方位はN-50°-Wである。柱穴は楕円形を呈し、74～92×58～74cm・深さ53～59cmを測る主柱穴4基と、径30cm・深さ19cmを測る小柱穴1基が検出された。主柱穴はいずれも柱の抜き取り痕跡が認められた。南西側では壁側に向かって、床面が緩やかに高まる。周溝および貯蔵穴は認められなかった。床面中央北側には径36cmを測る炉跡が見られた。

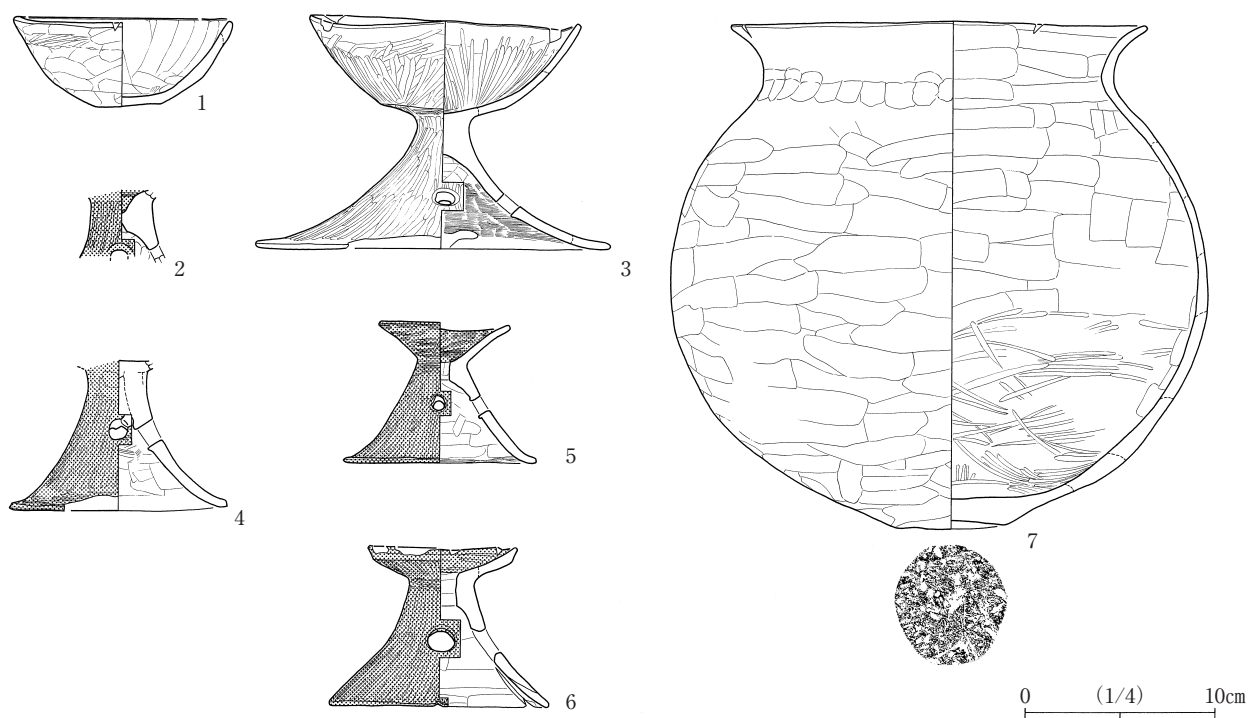
遺物は南側コーナーから多く出土したが、いずれも覆土上層である。1は土師器杯である。2～4



第318図 41号住居跡、出土遺物



第319図 42号住居跡



第320図 42号住居跡出土遺物

は高杯である。2・4は外面に赤彩が施される。5・6は器台で、いずれも赤彩が施される。7は大形の甕である。

43号住居跡（第321・322図、図版146・149・152）

7次南調査区南寄りに位置し、311号溝に切られる。平面形態は隅丸方形を呈する。規模は5.56×5.2m、遺構確認面から床面までの深さは0.37mを測る。主軸方位はN-50°-Wである。柱穴は径30cm程度・深さ68～83cmを測る主柱穴4基が検出された。周溝は幅4～10cm・深さ2～8cmを測り、全周する。貯蔵穴は南壁際に位置し、楕円形を呈する。規模は径68cm・深さ23cmを測る。床面北側には84×56cm・深さ4cmを測る炉跡が見られた。

遺物は炉の南側に集中していた。2は弥生甕形土器で、混入であろう。1・4～9は土師器甕、3は埴である。

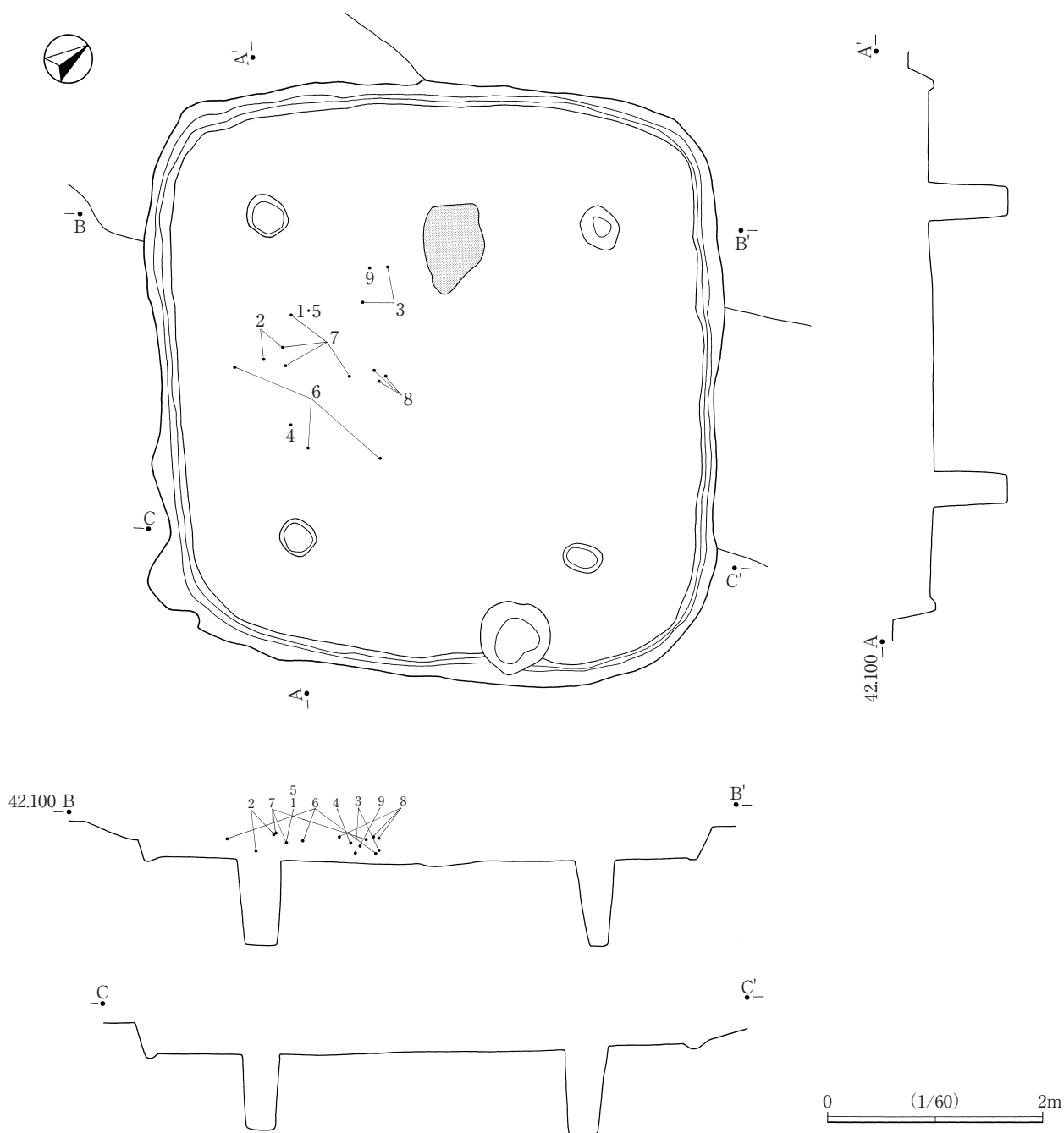
44号住居跡（第323図、図版146・149）

7次南調査区南隅に位置する。住居の南側および東側は調査区域外へ延びるため、規模は不明である。平面形態は隅丸方形を呈し、主軸方位はN-57°-W程度を測るものと思われる。遺構確認面から床面までの深さは0.26mを測る。柱穴、周溝および貯蔵穴は、調査区内からは認められなかった。床面には炉跡が見られたが、南側が調査区域外に延びるため、規模は不明である。

遺物は極めて少ない。1は弥生壺形土器と思われる底部、2は砥石である。

45号住居跡（第324図、図版146）

7次南調査区南西隅に位置する。住居の南側は調査区域外へ延びるため、規模および主軸方位は不明である。平面形態は楕円形ないし隅丸方形を呈するものと思われる。遺構確認面から床面までの深さは0.1mを測る。柱穴は不規則な配置を示し、径17～50cm・深さ15～35cmを測る。周溝および貯蔵穴は、調査区内からは検出されなかった。床面北側には径40cm・深さ1cmを測る炉跡が見られた。



第321図 43号住居跡

図示できる遺物は出土しなかった。

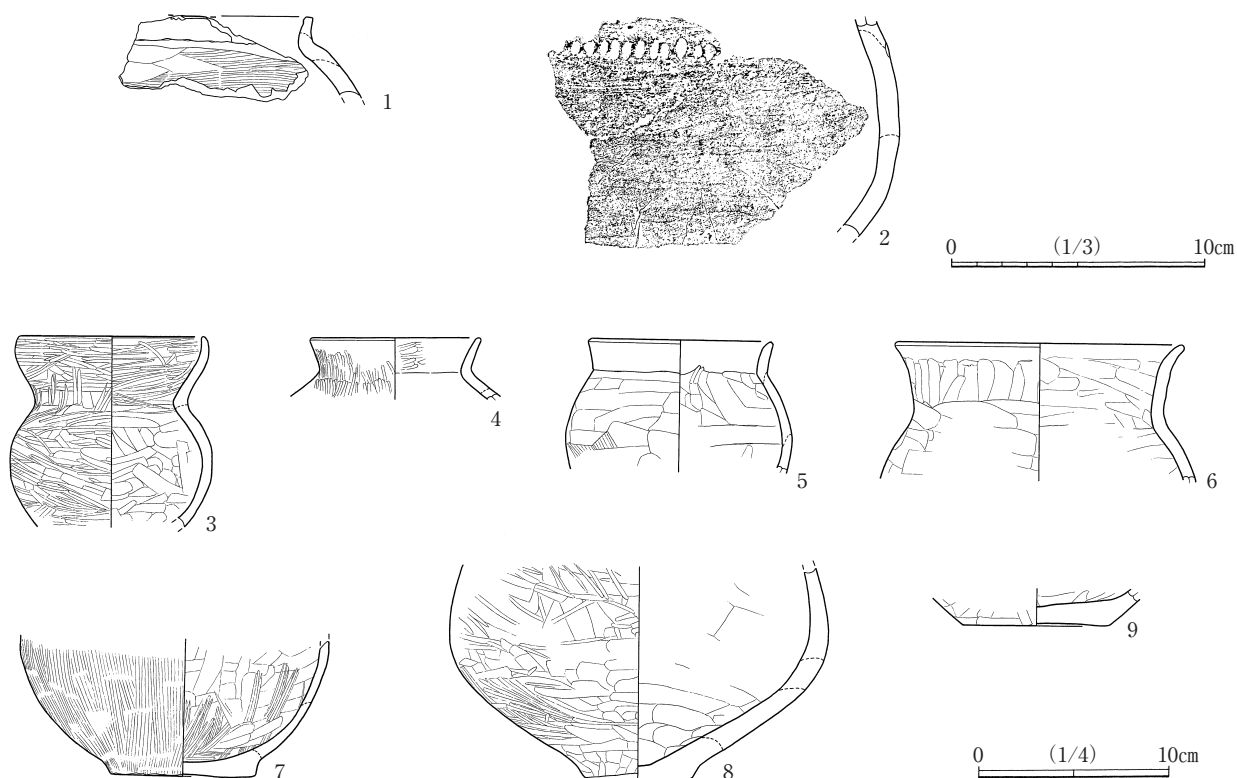
46号住居跡（第325図、図版150）

7次南調査区南隅に位置する。住居の南側は調査区域外へ延び、東側は壁を検出することが出来なかったため、規模は不明である。平面形態は隅丸方形を呈し、主軸方位はN-47°-W程度を測るものと思われる。遺構確認面から床面までの深さは0.15mを測る。柱穴、周溝、貯蔵穴、炉跡は、調査区内からは認められなかった。床面には炭化材が分布しており、火災住居である。

遺物は少ない。北部から弥生甕形土器が出土した。

47号住居跡（第326図、図版146・150・152）

7次南調査区東寄りに位置する。平面形態は隅丸方形を呈し、規模は5.16×4.98m、遺構確認面か



第322図 43号住居跡出土遺物

ら床面までの深さは0.35mを測る。主軸方位はN-63°-Wである。柱穴は径20~40cmを測る主柱穴(P1~P4)と径46cm・深さ24cmを測る出入り口ピット(P5)が検出されたほか、径20cm・深さ9~18cmを測り、不規則な配置を示す小柱穴3基が見られた。周溝は認められなかった。貯蔵穴は南側コーナーに位置し、平面形態は楕円形を呈する。規模は88×71cm・深さ14cmを測る。床面北西側には98×70cm・深さ9cmを測る炉跡が認められた。

おもな遺物は東側コーナーから出土した。1・8は弥生碗形土器で、いずれも有段で羽状縄文と口唇上に絡条体圧痕が施される。2・3・5・6は甕形土器である。4・6・7は壺形土器である。9は甕形土器と思われる底部である。

48号住居跡(第327・328図、図版146・150・152)

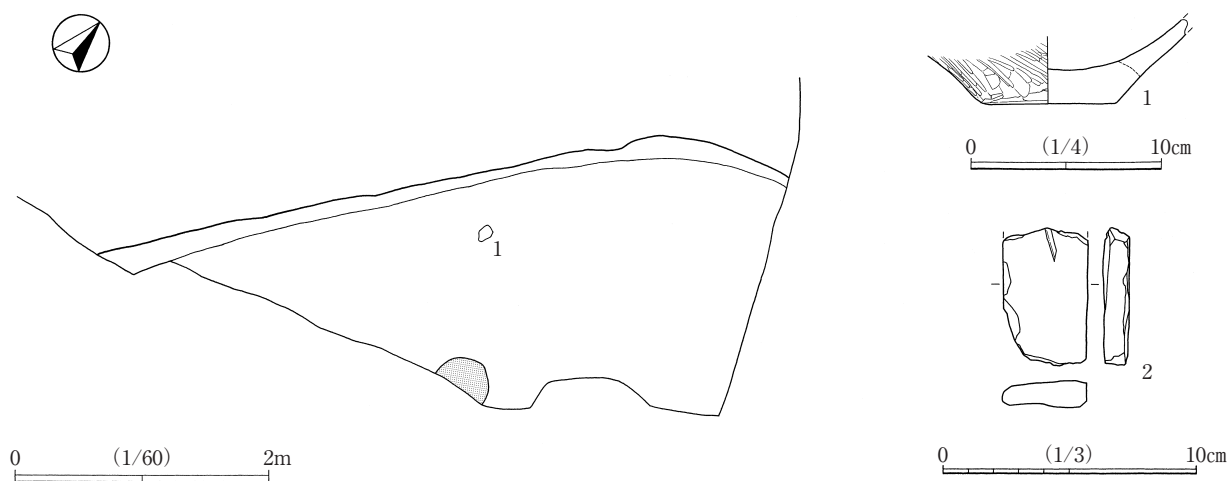
7次南調査区北東寄りに位置する。平面形態は小判形を呈する。規模は6.74×5.36m、遺構確認面から床面までの深さは0.48mを測る。主軸方位はN-21°-Wである。柱穴は深さ0.69~0.76mを測る主柱穴4基のみ認められた。周溝、貯蔵穴は認められなかった。床面北側には83×49cm・深さ6.7cmを測る炉跡が認められる。床面には炭化材が多量に分布しており、火災住居である。

出土遺物は多かった。1~4・12・13・15・17・20・21は弥生甕形土器である。5~9・14・16・18・19は壺形土器で、5・19は赤彩が施される。10・11は碗形土器である。

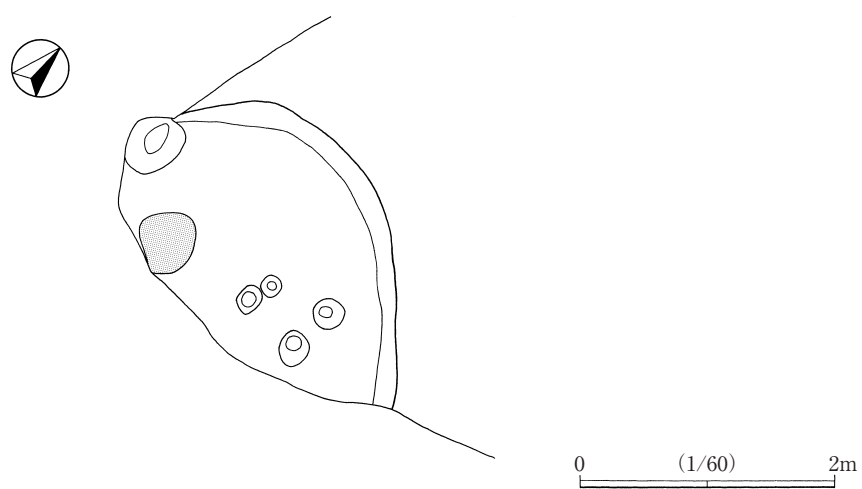
49号住居跡(第329図、図版146・147・150・152)

7次南調査区北寄りに位置する。平面形態は不整隅丸方形を呈する。規模は3.94×3.7m、遺構確認面から床面までの深さは0.14mを測る。主軸方位はN-34°-Wである。柱穴は主柱穴4基が認められ、径30cm程度・深さ27~35cmを測る。周溝、貯蔵穴、炉跡は認められなかった。

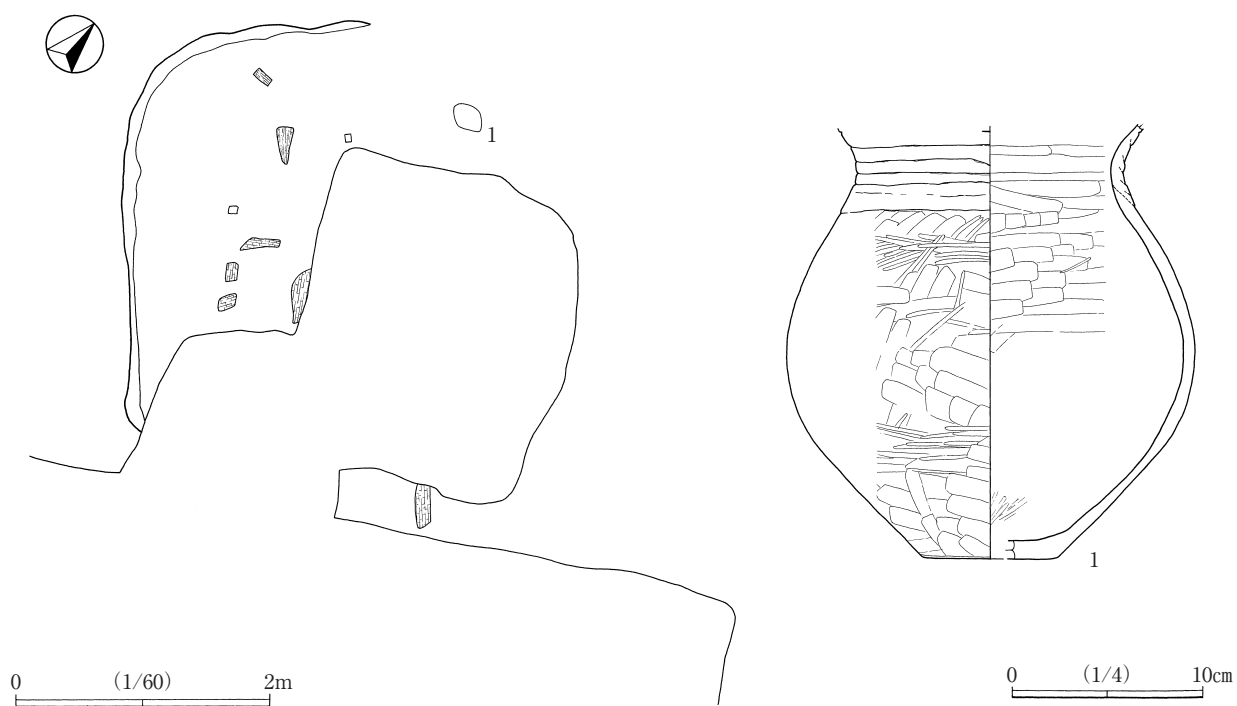
遺物は少なかった。1は弥生甕形土器、3・4は壺形土器である。2は土師器甕、5は台付甕、6



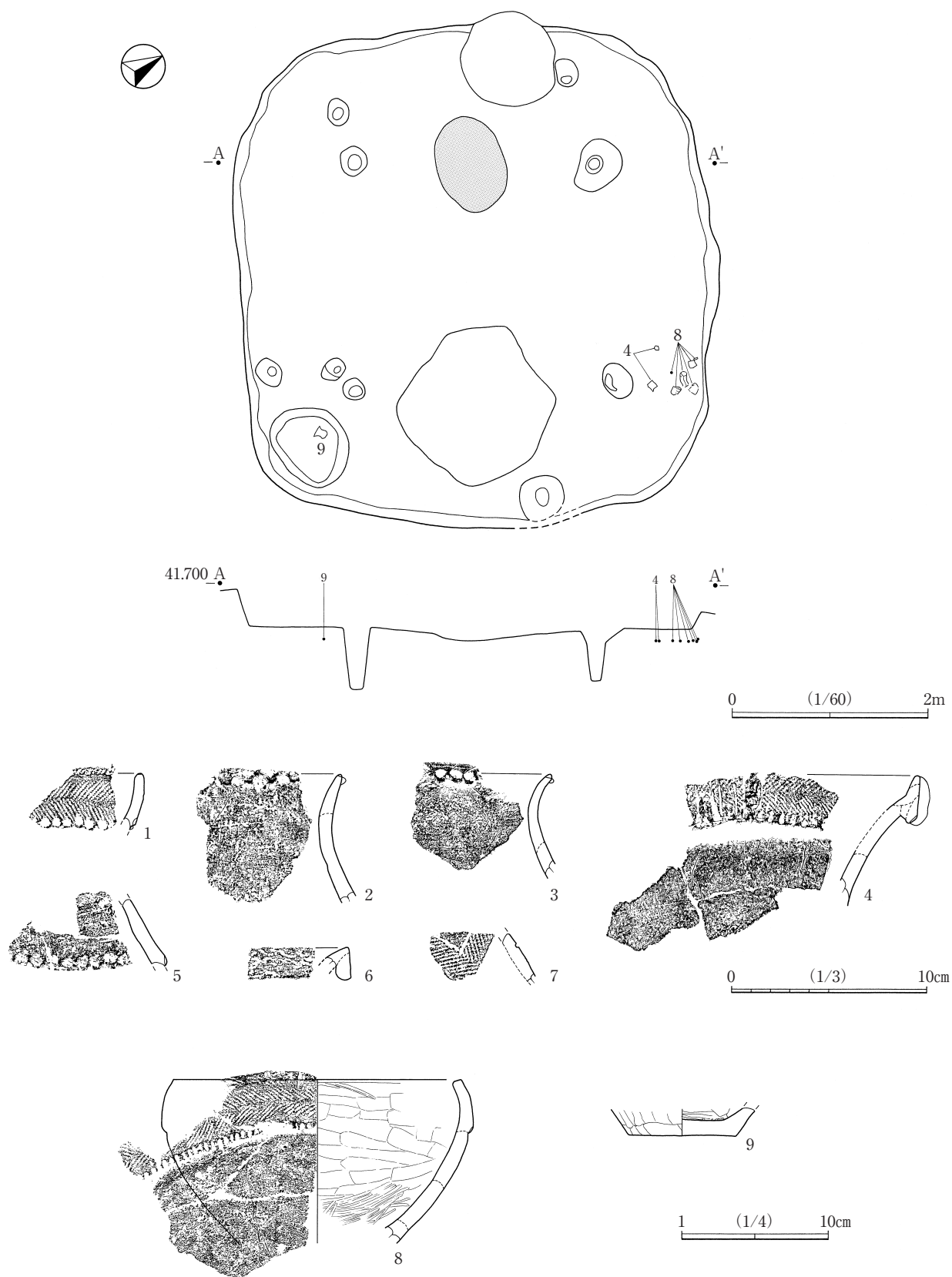
第323図 44号住居跡、出土遺物



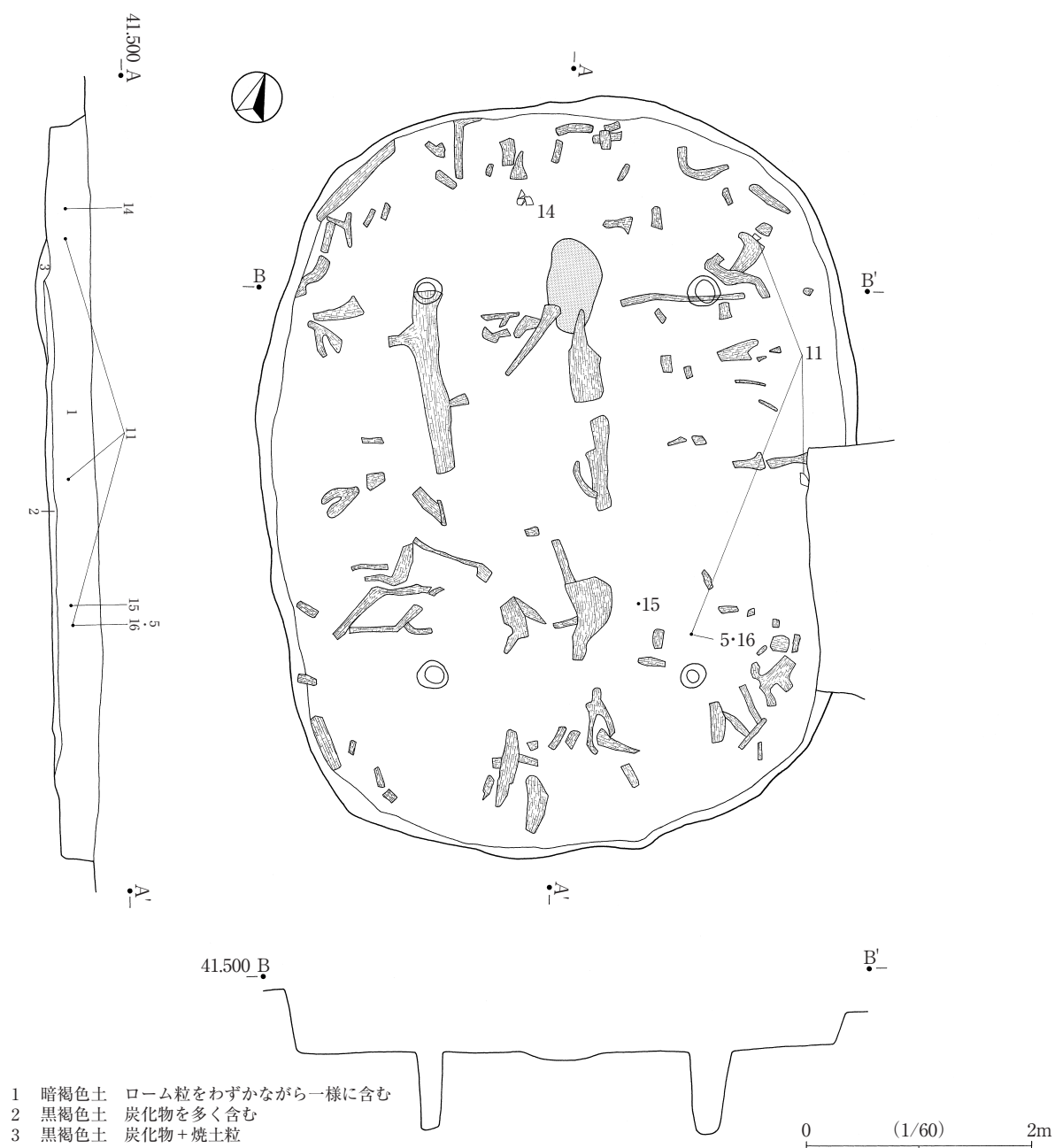
第324図 45号住居跡



第325図 46号住居跡、出土遺物



第326図 47号住居跡、出土遺物



第327図 48号住居跡

は小形甕である。

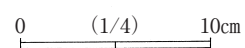
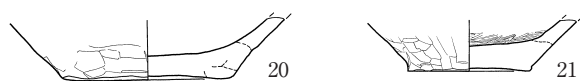
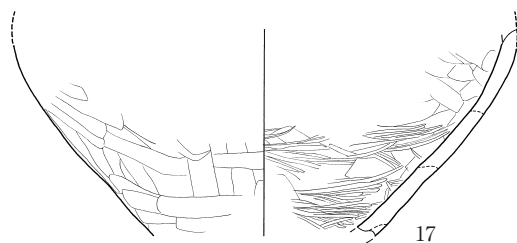
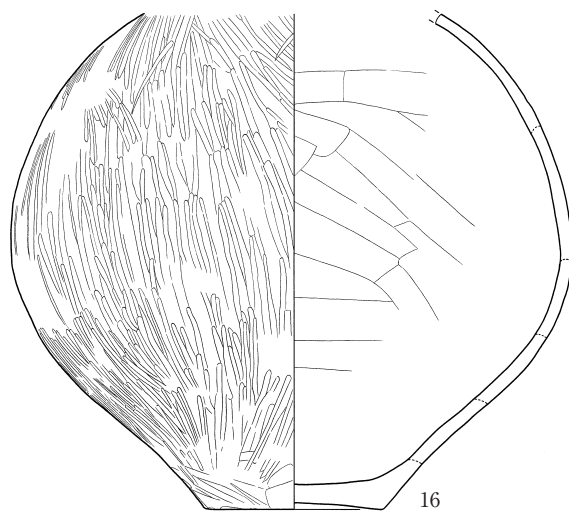
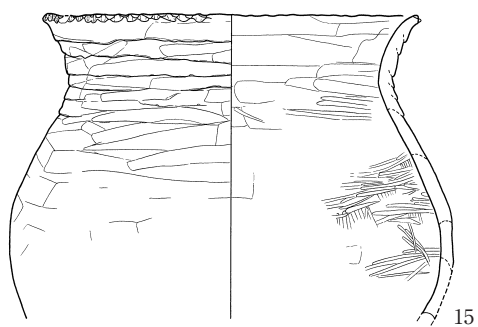
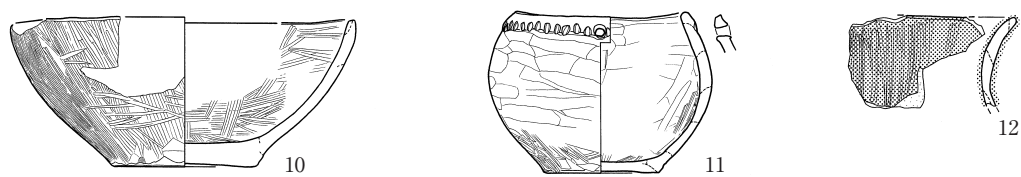
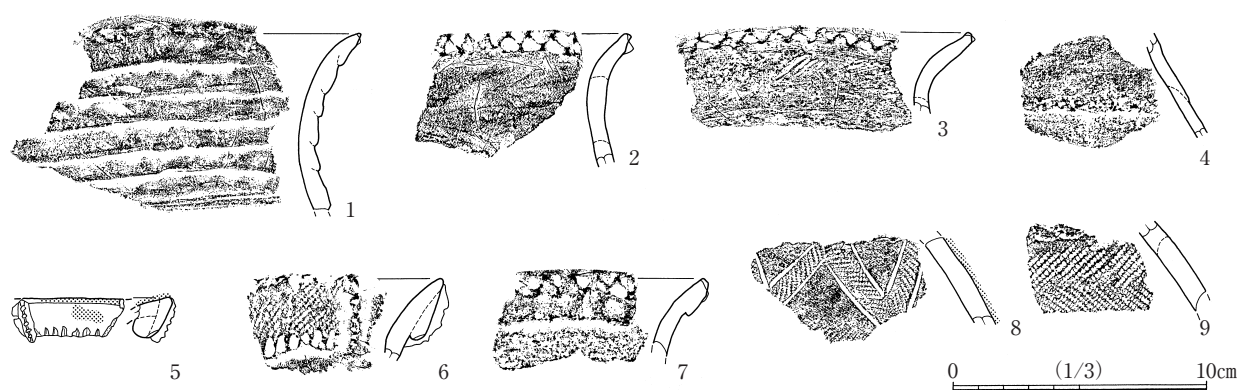
50号住居跡（第330図、図版147・150・152）

7次南調査区北隅に位置する。平面形態は隅丸方形を呈する。規模は $2.76 \times 2.5\text{m}$ 、遺構確認面から床面までの深さは 0.3m を測る。主軸方位は $N-64^{\circ}-W$ である。柱穴は不規則な配置を示し、径 20cm ・深さ $12 \sim 38.4\text{cm}$ を測る。周溝、貯蔵穴、炉跡は認められなかった。

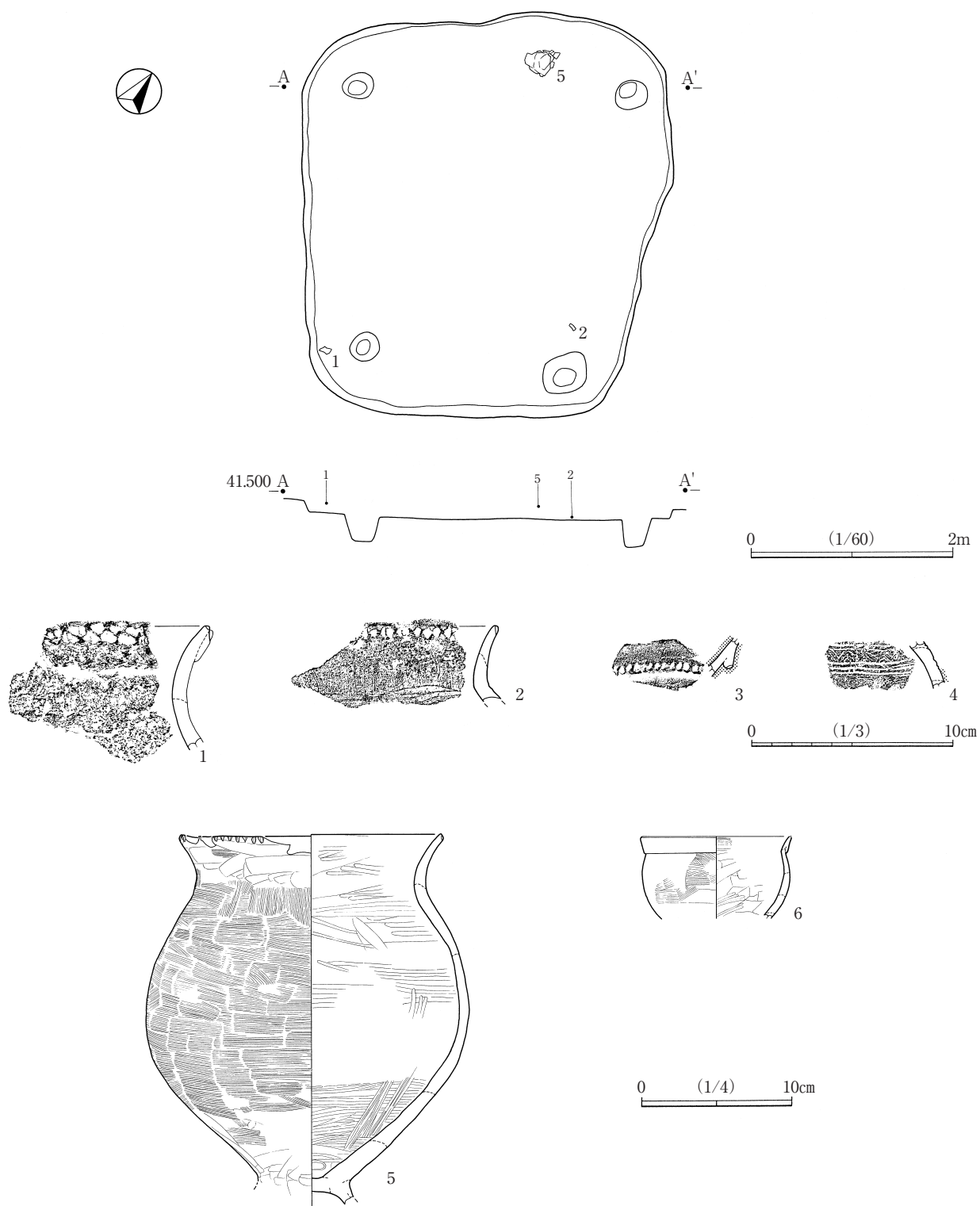
遺構は小規模であるが遺物が多い。1は性格不明であるが器台と思われる。赤彩が施される。2・3は土師器高杯である。4は椀、5・7は甕、6・8・9は壺である。

51号住居跡（第331図、図版147・152）

7次北調査区東寄りに位置する。平面形態は隅丸方形を呈する。規模は $3.66 \times 3.16\text{m}$ 、遺構確認面から床面までの深さは 0.04m を測る。主軸方位は $N-3^{\circ}-W$ である。柱穴は不規則な配置を示し、



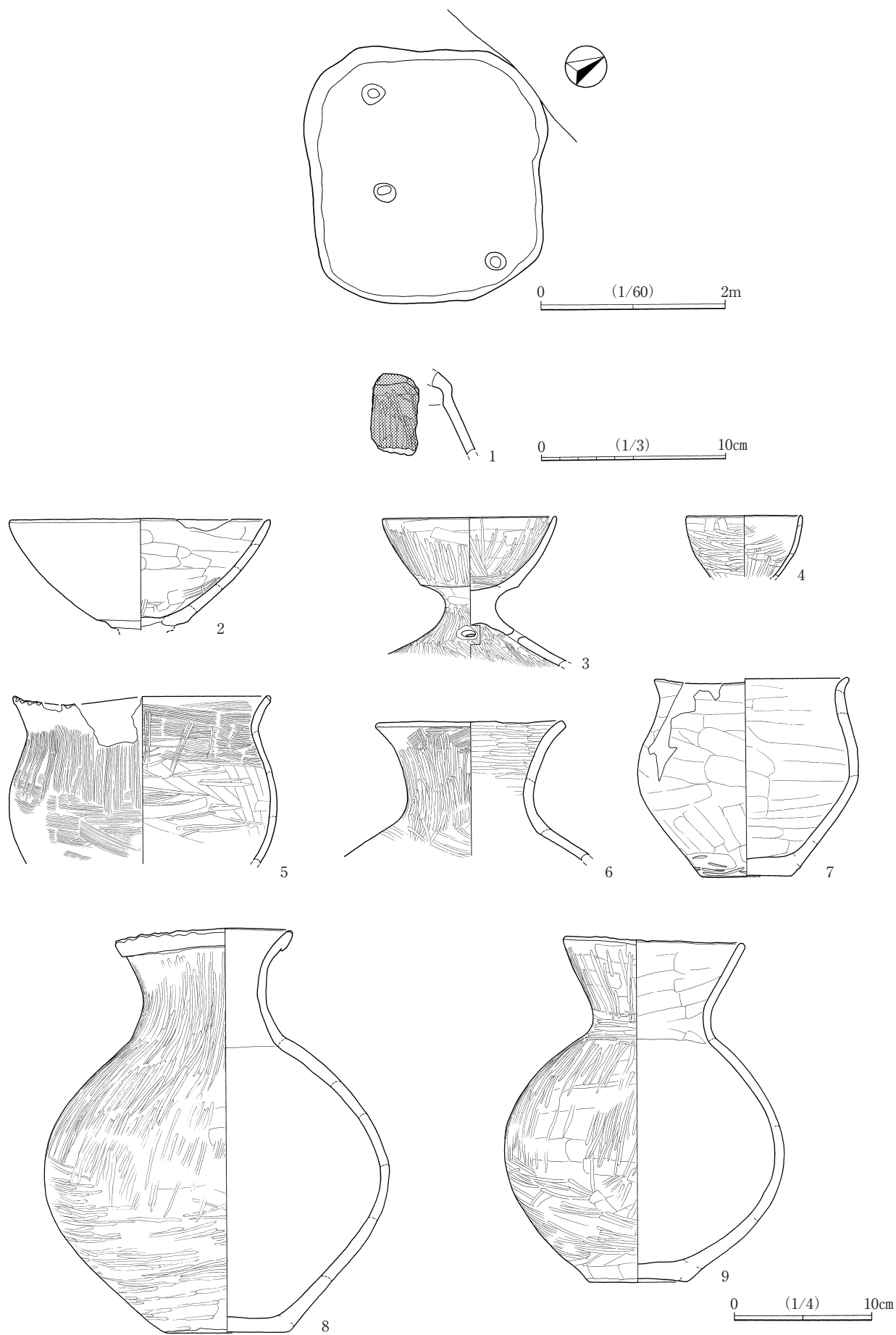
第328图 48号住居跡出土遺物



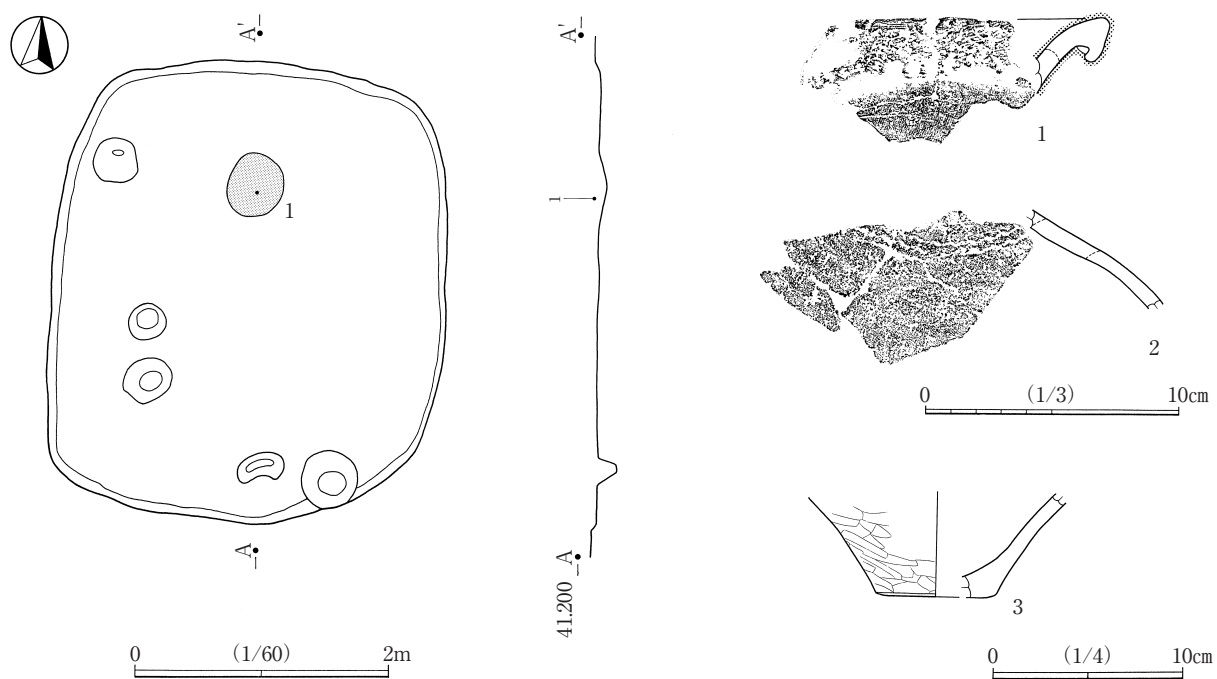
第329図 49号住居跡、出土遺物

径30～36cm・深さ15～46cmを測る。南側には平面長楕円形を呈し、規模38×20cm・深さ14cmを測る出入り口ピットも検出された。貯蔵穴は南側壁際の東寄りに位置し、径36cm・深さ16cmを測る。床面北側には径47cmを測る炉跡が見られた。

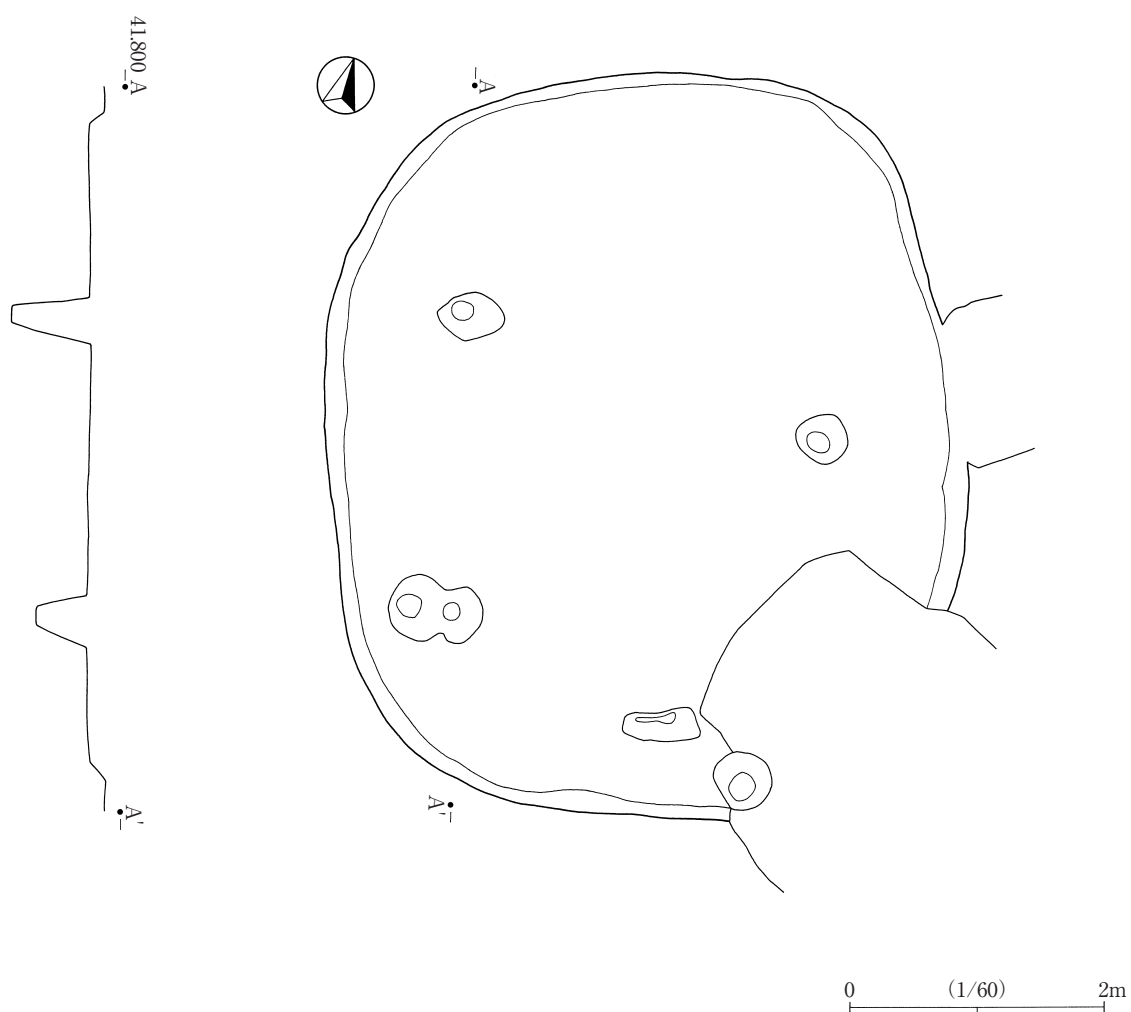
遺物は少ない。1・2は弥生壺形土器で1は赤彩が施される。3は甕形土器と考えられる底部である。



第330図 50号住居跡、出土遺物



第331図 51号住居跡、出土遺物



第332図 52号住居跡

52号住居跡（第332図、図版147）

7次北調査区東寄りに位置する。平面形態は小判形を呈する。規模は5.9×5.0m、遺構確認面から床面までの深さは0.16mを測る。主軸方位はN-14°-Wである。柱穴は不規則な配置を示し、径38～50cm・深さ41～62cmを測る。南側には平面長方形を呈し、59×28cm・深さ4cmを測る出入り口ピットも検出された。貯蔵穴は南側壁際の東寄りに位置し、径46cm・深さ14cmを測る。周溝、炉跡は認められなかった。

図示できる遺物は出土しなかった。

第2節 その他の遺構

1 方形周溝状遺構

1号方形周溝状遺構（第333図、図版147・150）

SS5-47・48・49・57・58・59・68・69グリッドに位置する。調査前には盛土は存在せず、表土除去後に周溝が確認された。北東から南西にかけて308号溝に切られる。また、南西コーナーは削平される。規模は一辺19.6mを測り、全周するものと思われる。埋葬施設は検出されなかった。

周溝北東部コーナー付近の覆土中から、須恵器甕が出土した。覆土中のかなり上部にあたり、この遺構に伴うものか不明である。

この遺構については、かつて山倉古墳群に連なる終末期方墳であるという指摘がなされたことがあり、「山倉7号墳」という名称も与えられていた（田中 2000）。2次調査の成果を基に、「（山倉）6号墳の北々西約100mの位置にあり、古墳群としての西限であることは周辺の西広貝塚の調査で確定したが南北・東への展開は不明で、尾根以外の台地上平坦面北半は群構成すら把握できなかった」としている^{（注1）}。その後の7次調査で新たな古墳は発見されず、水平分布上山倉古墳群との直接のつながりを確かめるには至らなかった。もちろん未調査のまま破壊されたSS5区南西側や、7次調査区と6号墳との間に古墳が存在した可能性は否定できない。いずれにしても現状では古墳群の全容を知るための情報が不足している。ここでは西広貝塚という遺跡内に存在する遺構としての位置づけを与える必要があると考えて、西広貝塚として独立した遺構番号を付すこととした。山倉古墳群との関係を否定する意図で行ったのではないことを明記しておく。

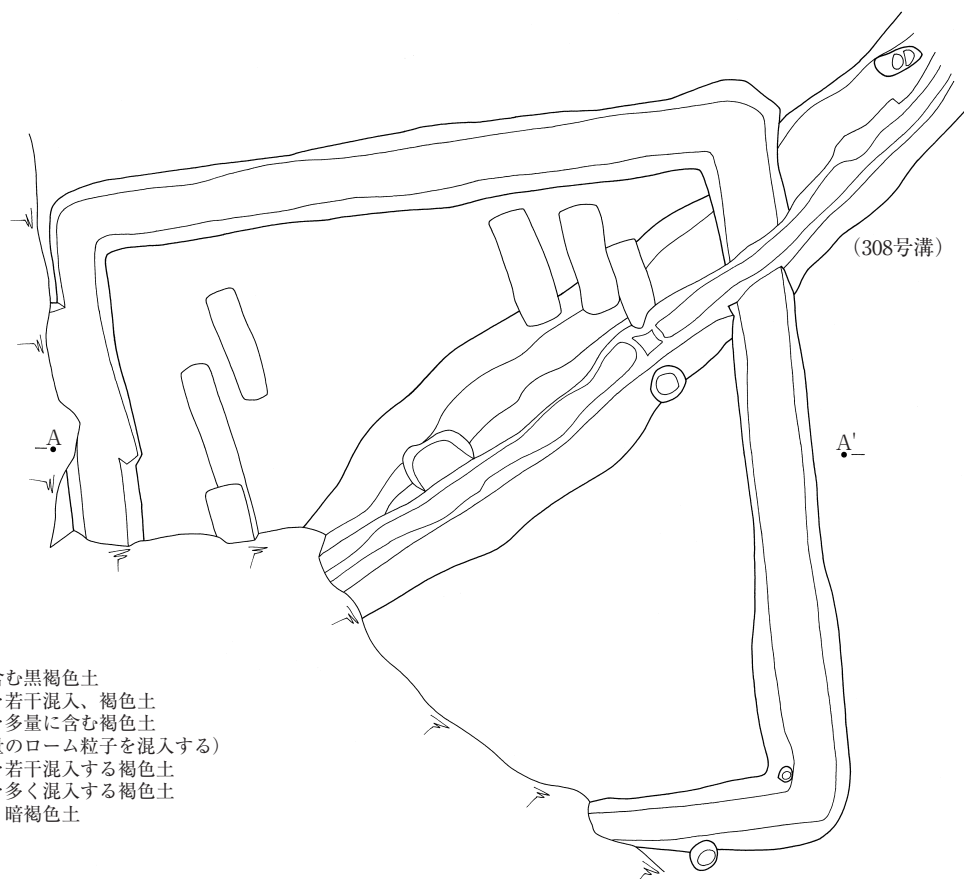
2 土坑

弥生時代以降の土坑は極めて少ない。また、遺物の出土もなかったため、帰属時期や性格など不明な点が多い。ここでは2基の土坑をこの時期のものとし、形状などから推測したもので、確定的なものではない。

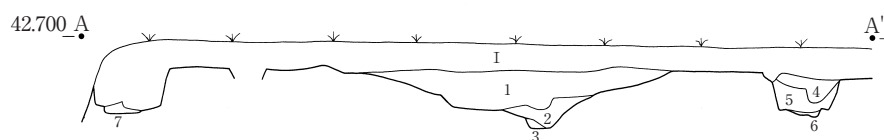
743号土坑（第334図）

7次調査区の4-20グリッドに位置する。平面形態は隅丸方形を呈する。規模は3.27×3.04m、遺構確認面から底面までの深さは0.20mを測る。壁は緩やかに立ち上がり、壁周辺には径26～54cm・深さ21～58cmを測る柱穴が5基検出された。土坑中央部には長方形の掘り込みが見られ、規模は1.90×0.60m・深さ0.19mを測る。性格は不明であるが、形状から考えて土坑墓の可能性が高い。

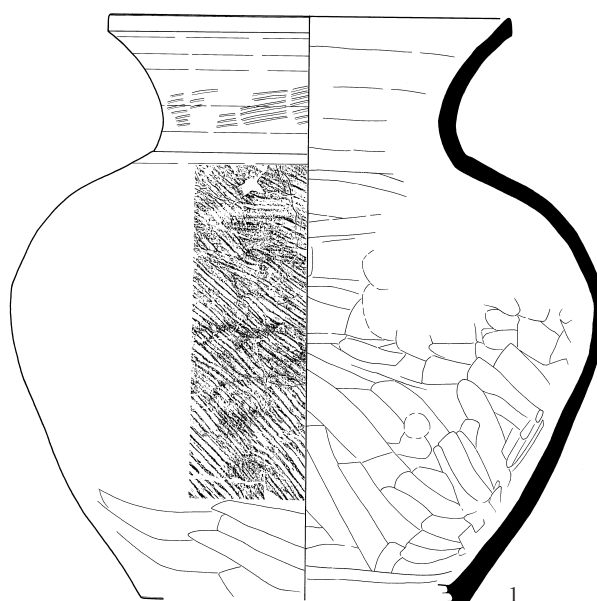
遺物は出土しなかった。



- I 表土
 1 ローム粒を含む黒褐色土
 2 ローム粒子を若干混入、褐色土
 3 ローム粒子を多量に含む褐色土
 4 黒色土（少量のローム粒子を混入する）
 5 ローム粒子を若干混入する褐色土
 6 ローム粒子を多く混入する褐色土
 7 ローム混じり暗褐色土



0 (1/100) 5m



0 (1/4) 10cm

第333図 1号方形周溝状遺構、出土遺物

744号土坑（第334図）

7次調査区の7-11・22グリッドに位置する。平面形態は隅丸台形とでもいうべき形を呈する。規模は西辺南北長4.50m、東辺南北長4.00m、東西長3.30m、遺構確認面から底面までの深さは0.60mを測る。壁はゆるやかに立ち上がり、底は2.40m四方の平坦面を形成する。遺物は出土せず、性格は不明。

SS5-35地点（第335図、図版150・151）

2次調査区のSS5では竪穴住居跡が6軒検出されているが、それとは別にSS5-35グリッドから遺物の集中出土が見られた。調査の状況は、「3点の器台形土器が出土しこれに伴う形で器台・小形土器などが検出され、これらを伴う遺構等の存在が予想されたが確認することができなかった」（米田 1981）と概報に記されている。このグリッドをSS5-35地点とし、出土遺物を一括資料として扱う。

第335図1は高坏、2は小形の器台である。3・4は小形甕、6～8は炉器台である。

第3節 グリッド出土遺物

グリッドから出土した遺物は、遺構と同じく弥生時代後期から古墳時代前期の土器が多数を占める。とは言うものの、縄文時代の遺物に比べると遙かに少なく、遺存状況も芳しいものではない。多くは包含層中に散在した状況であったが、一部やや集中して出土した地点も見られた。今回報告するのは、縄文時代の遺物と同じく4・5・7次の貝層出土を除いた分を対象とする。

SS5区出土遺物（第336図、図版151）

SS5-35以外のグリッドから出土した遺物をここで扱う。1は弥生壺形土器で内面に赤彩が施される。2・3は高杯である。4は小形の壺形土器と思われる底部で、外面に赤彩が施される。5は小形の土師器甕である。6～9は土師器甕である。10～13はロクロ土師器で、10は鉢、11・12は杯、13は高台付杯である。

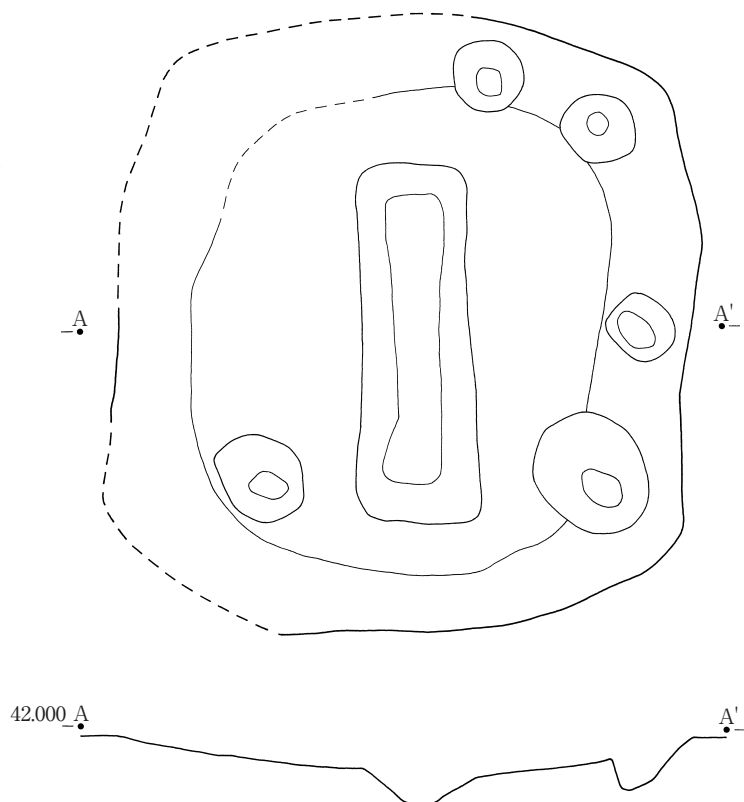
3次調査区出土遺物（第337図、図版151）

3次調査区S2-85グリッドを中心とする一帯からも、弥生土器や土師器がまとまって出土しており、何らかの遺構の存在も想定してみたが、遺物の時期にばらつきが見られることや、祭祀遺構などのような特殊な遺物が見られないことから、通常のグリッド出土として扱う。1～20はS2-85グリッドを中心とする一帯から出土したものである。1は椀、2～5は高坏、6・7・10は弥生甕形土器、8・9・11は土師器甕である。19は弥生壺形土器の底部で、赤彩が施される。20は弥生土器もしくは土師器の甕底部と考えられる。21～27はS2-85グリッド周辺以外のグリッドから出土したものである。21・22は弥生壺形土器、23は椀で、壁が穿孔される。24～26は高杯で、25・26は赤彩が施される。27は支脚と考えられる土製品である。

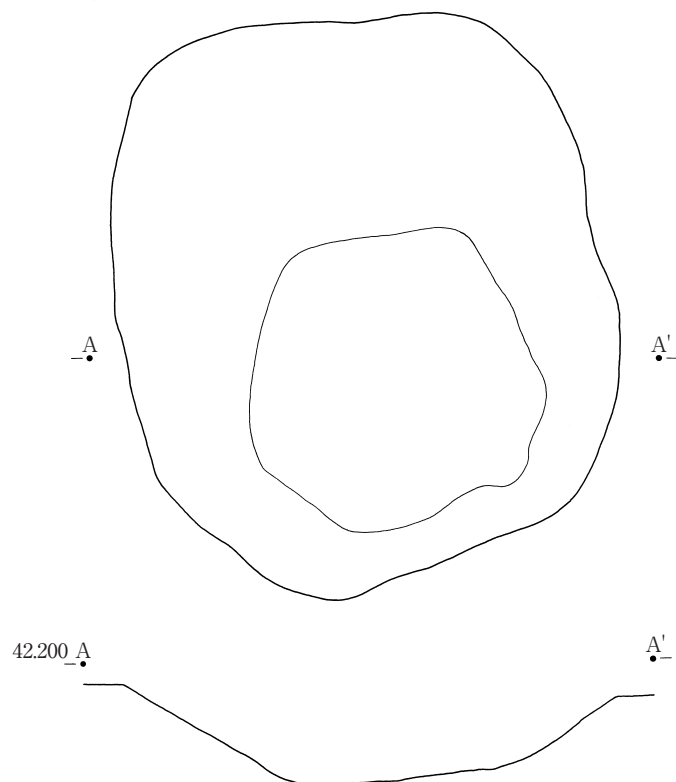
その他の調査区出土遺物（第338図、図版151）

その他の調査区から出土した遺物は極めて少ない。1～3はSN561（西側）から出土した弥生土器で、1は甕形土器、2・3は壺形土器である。2には網目状捺糸文が施される。4・5はSS1区から出土した土師器で、4は壺、5は椀である。6・7はSN561（西側）から出土した土師器甕の底部である。

743号土坑

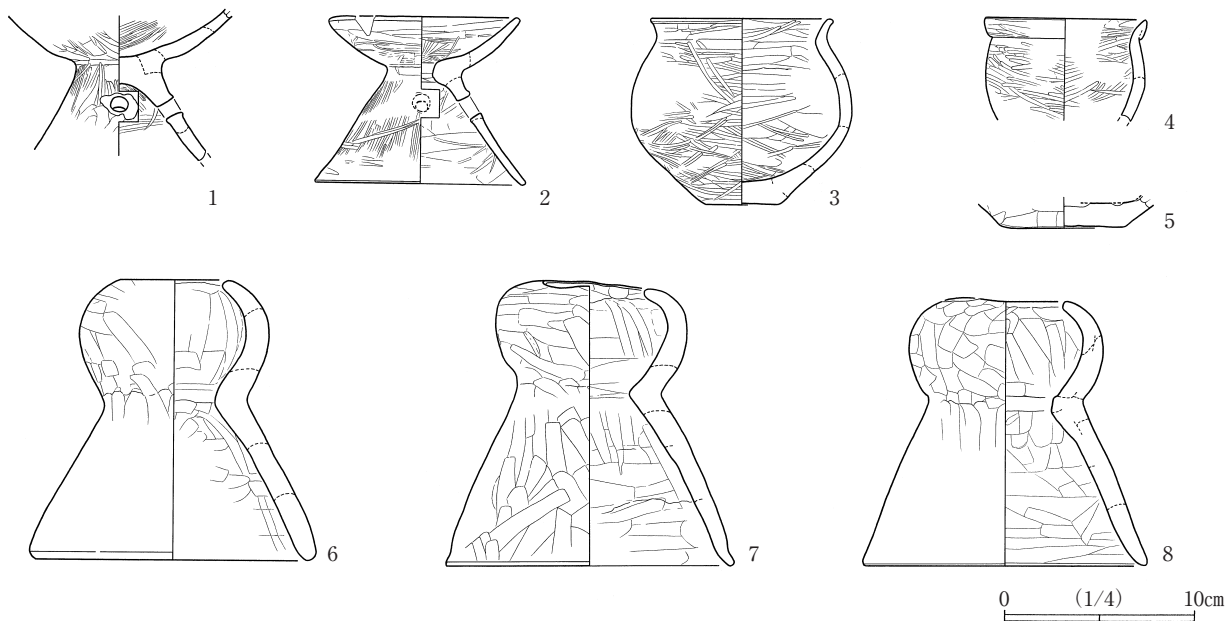


744号土坑

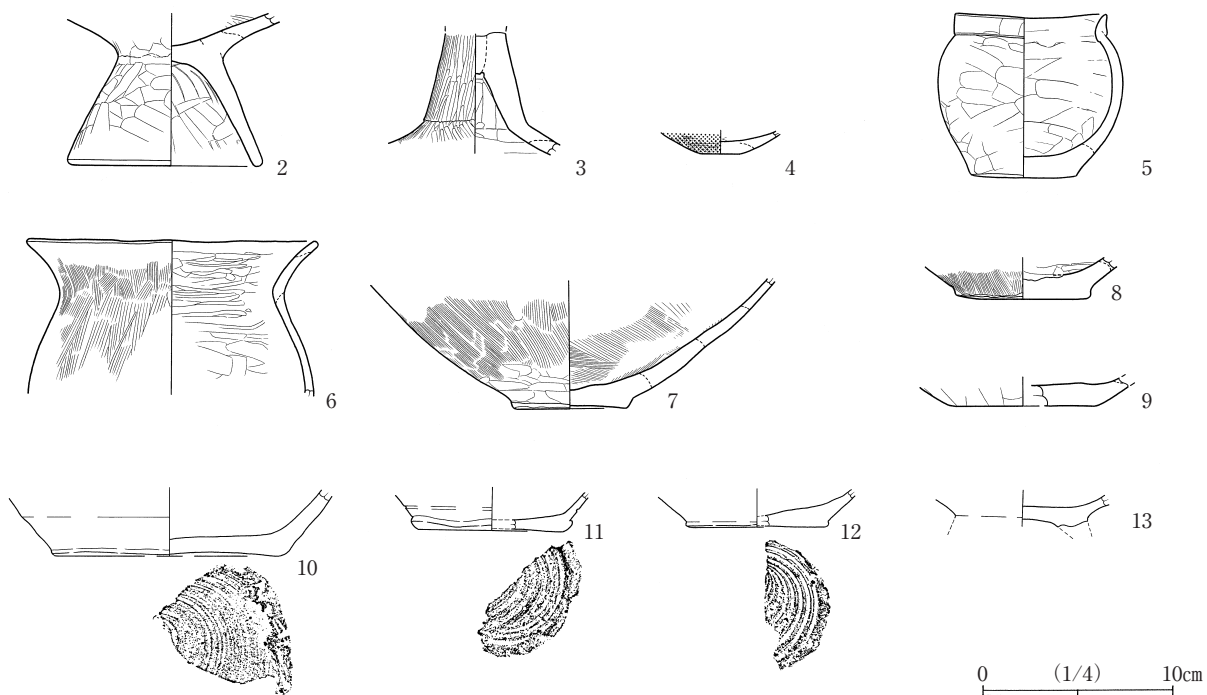


0 (1/40) 1m

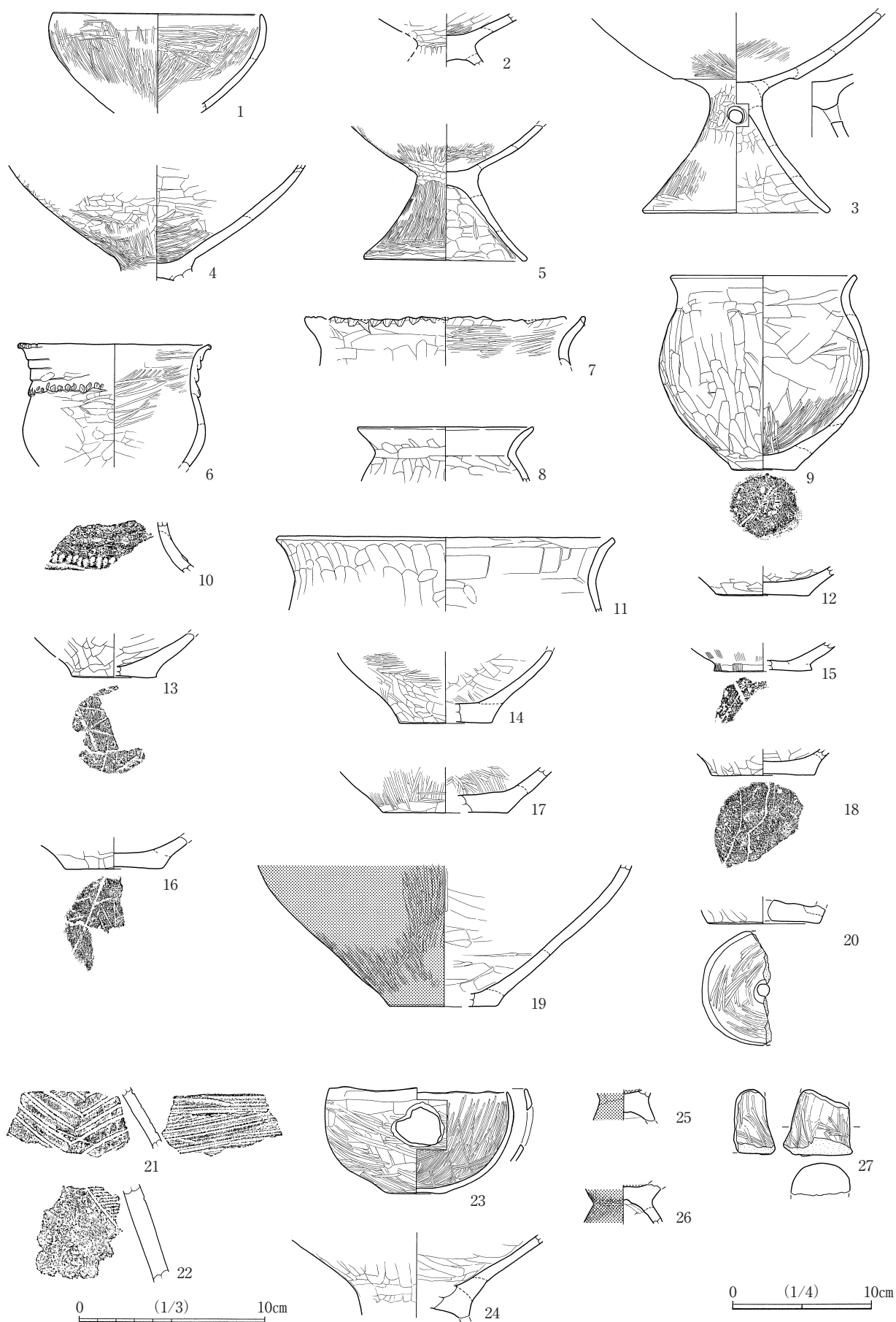
第334図 弥生時代～古代土坑



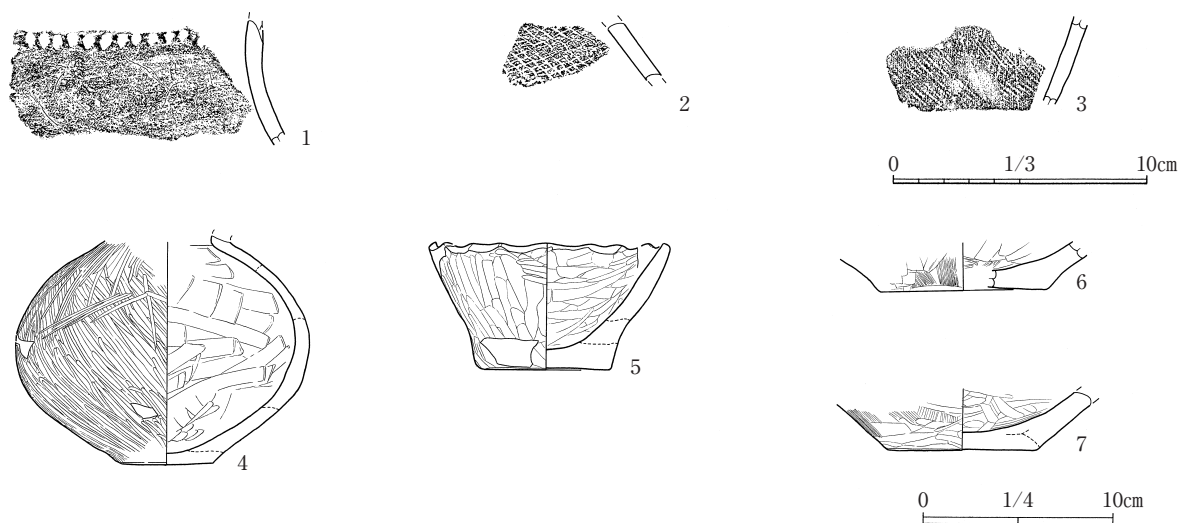
第335図 SS5-35地点出土遺物



第336図 SS5区グリッド出土弥生土器・土師器



第337図 3次調査区グリッド出土弥生土器・土師器



第338図 SS1区、SN561（西側）出土弥生土器・土師器

土製品（第339図、図版153）

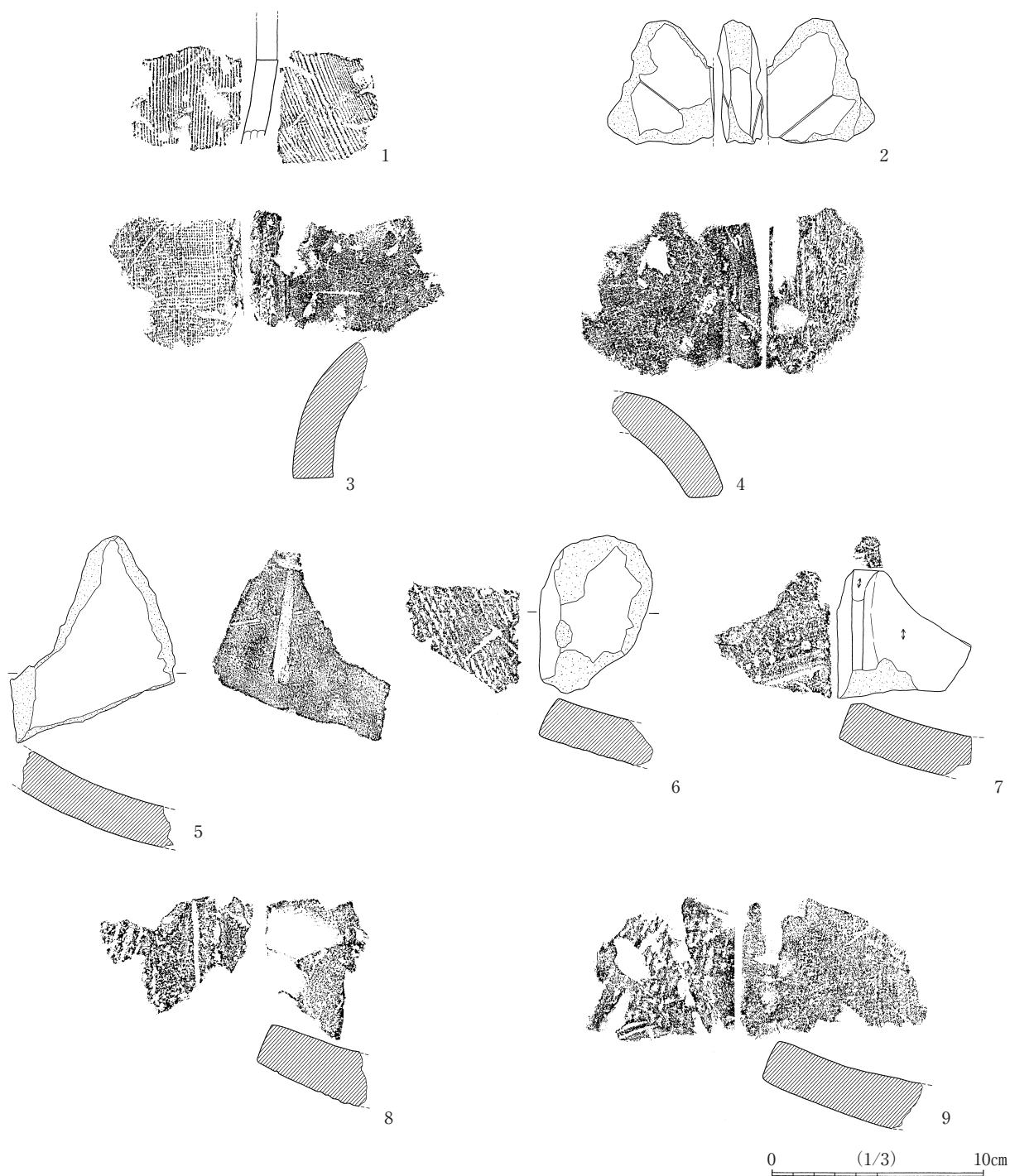
土製品は極めて少なく、遺存度も悪かった。

1・2は埴輪片で、1は円筒埴輪、2は翳形埴輪である。1は3次調査区、2は2次調査区のSS5区から出土している。先述したとおり西広貝塚の南側には著名な山倉1号墳が位置しており、翳形埴輪が4個体以上出土している（小橋他 2004）。胎土や焼成などもほぼ同じであり、山倉1号墳の埴輪を生産した埼玉県鴻巣市生出塚遺跡産である可能性が強い。SS5区は距離も近接しており、山倉1号墳にあったものが持ち込まれたと考えられる。1の円筒埴輪は山倉1号墳のものとは異なるもので、推測になるが西広貝塚北西部に存在した持塚古墳群に由来する可能性が考えられる。

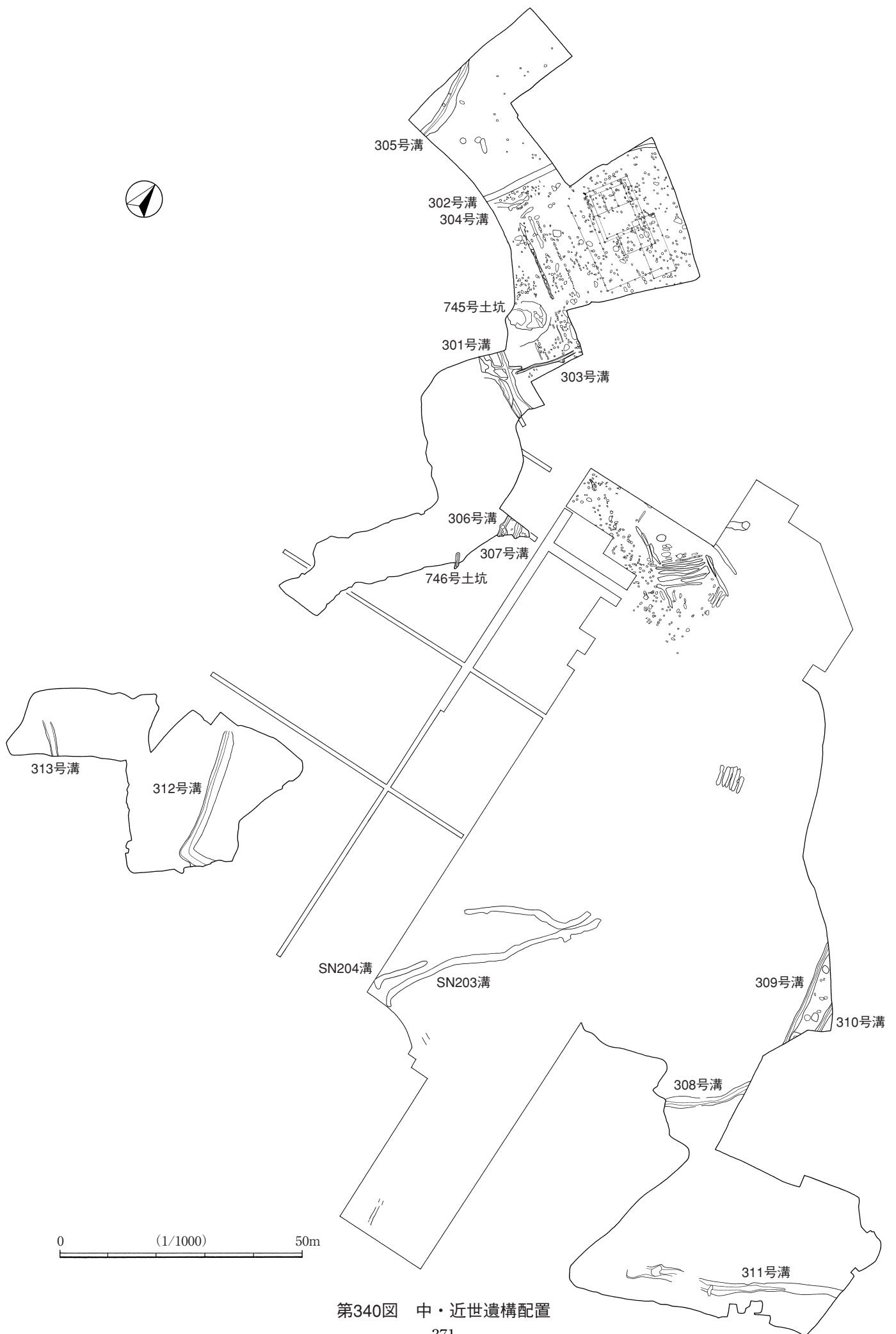
3～9は布目瓦片で、3・4は丸瓦、5～9は平瓦である。いずれも3次調査区出土である。7は研磨痕が観察され、砥石として転用されたと思われる。

注

- 1 この項の引用文、遺跡名称、事実記載等は、田中 2000を参考にした。内容については刊行年（2000年）の10年以上前に執筆されたと記されているため、第7次調査の内容は反映されていないと判断した。



第339図 3次調査区出土古墳時代～古代製品



第340図 中・近世遺構配置

第4章 中・近世の遺構と遺物

第1節 3次調査区の中世遺構群

ここで述べる調査区は縄文時代貝塚の西側に突出した地区で、周知の遺跡「西広城跡」^(注1)の範囲内に位置する。かつて郷土史家により土塁の存在が指摘されたこともあるが^(注2)、区画整理以前の航空写真や地形図を見る限り、そのような痕跡は認められなかった。現在、この遺跡が城館跡である根拠は全くない。しかし今回の調査区については、遺物が検出されたことから、中世において何らかの土地利用がなされた一帯であることは確実となった。

調査の結果、台地縁辺の古道跡に面し、長方形区画溝に囲われたピット群が検出された（第341図）。しかし残念ながら、これら新しい遺構群は精密な調査を実施し得ず、どの遺構が中世に属するか検証する手だては皆無である。したがって、中世遺構群への位置づけは、遺構平面図観察のみによる推測にすぎないことをあらかじめ明記しておく。

301号溝

谷沿いの傾斜変換面を走る溝状遺構で、調査段階の道路下層から検出された近世道路遺構である。しかし他の遺構群が、本遺構に規制されながら展開したと言えそうなので、本遺構が戦国期まで遡る可能性は高いと思われる。

302号溝

調査区を東西に分ける直線的な区画溝で、調査区外でクランクし、調査区北東隅でも検出されている。現在の地筆に直接合致する遺構であるため、近世区画溝と思われる。

303号溝

302号溝に比べ脆弱であるが、区画エリアはほぼ同一で、これに先行するものと思われる。ピット群・畝状遺構を完全に囲繞するようなので、後述する建物遺構に伴うものと推測する。区画範囲は東西約33m、南北約45m（推定）、面積約1,485mを測る。

304号溝

302号溝の東側に平行するように位置する。長さ約7m、幅約1mを測る。畝状遺構に近接し、これに伴う可能性もあるが、性格は不明。

305号溝

調査区西端に位置する溝で、谷頭に直交するように南北に延びる。他の溝と違って幅も不均等であることや、この遺構と302号溝との間に目立った遺構がないことから、一連の遺構群とは直接関係ないものと思われる。

畝状遺構

ピット群・小溝群から成るが、302・303号溝の直角方向に直線的に並走するため、畑耕作に伴う遺構群と推測する。302号溝の区画内で完結するうえ、建物空間と重複しないため、建物前庭に作られた屋敷内菜園の可能性がある。

ピット群

必ずしも配列を明らかにできる状況ではないが、畝状遺構に平行する大きなまとまりとして捉えられ、簡単な上屋が存在した可能性が高い。仮に2棟の建物を復元したが、さらに数度の建て替えを想



第341図 3次調査区中近世遺構配置

定しうる。建物規模・棟方位など、実際の詳細と異なる可能性を残すが、復元例と大差ないものと考えている。

1 号建物跡

ピット間隔は不規則であるが、梁行12.6m、桁行5.1m規模にまとまるので、建物と判断した。土間を中心にするものと思われるが、身舎内に梁行方向に走るピット列があることから、北側半分に床板を張っていた可能性がある。

2 号建物跡

確実性に欠けるが、ピットのまとまりから配列を推測した。床板・土間併存と思われる。当初は梁行9.3m、桁行7.4mの身舎に東・西・南面の廂を付ける規模で、東側の曲屋部（土間）は増築によるものと推測した。この際、母屋部も北側に拡張し、廂を追加したのではないかとと思われる。

注

- 1 千葉県教育委員会編 1997『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ―旧上総・安房国地域―』
- 2 この事実は、市原市教育委員会の田中清美氏に御教示いただいた。詳細については氏も不明とのことであった。

第2節 その他の遺構

3次調査区以外では溝状遺構が数条検出された程度である。遺物も遺構出土のものはなく、ほとんどグリッド出土であった。なお、弥生時代～古代の遺物と同じく、4・5・7次の貝層・グリッド出土遺物は次回報告とする。

1 土坑

縄文時代～古代には属さないと思われる土坑が2基検出された。ただし、遺物の出土はなく積極的に中・近世とみなす根拠はない。形状や近隣の遺構群などから類推したものである。

745号土坑（第342図）

3次調査区南側のS4-52・53・62・63・64・72・73グリッドから検出されたもので、南西向きの斜面に対し東西3m、南北2.5mの楕円形の土坑を掘り、さらに南西側に東西2.3m、南北2mの隅丸方形の土坑を掘り込んだものである。坑底は平坦で、段状の掘り込みや柱穴状の土坑もみられる。地下式壙や粘土採掘坑の可能性も指摘されたが、有力な手がかりは見つからなかった。出土遺物はない。

746号土坑（第342図）

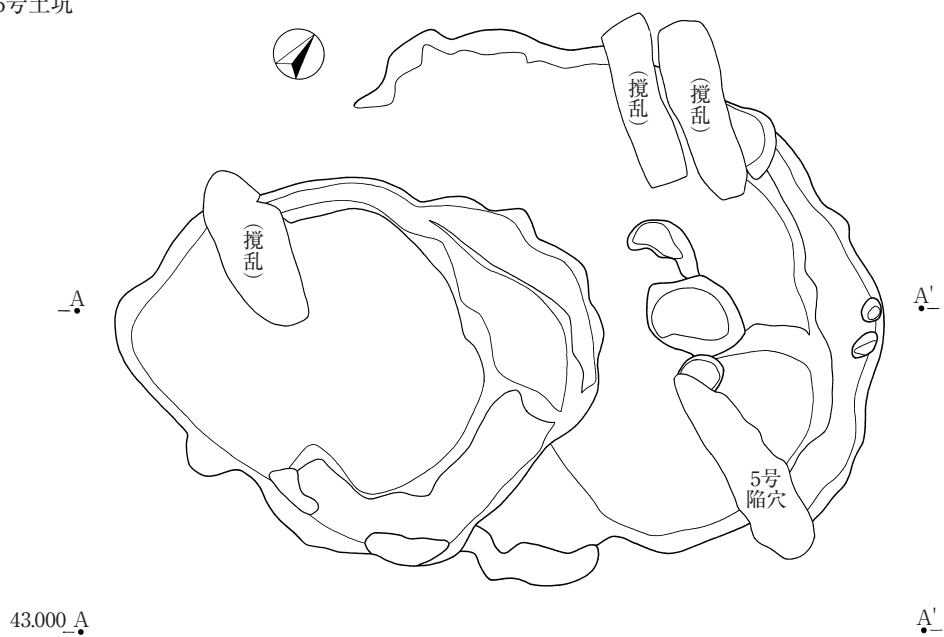
4次調査区のS6-87グリッドから検出された溝状の土坑である。長さは3.5m、幅は最大0.5m、深さは0.2m程度と浅い。形状から畝の可能性が考えられるが、断定できない。出土遺物はない。

2 溝状遺構

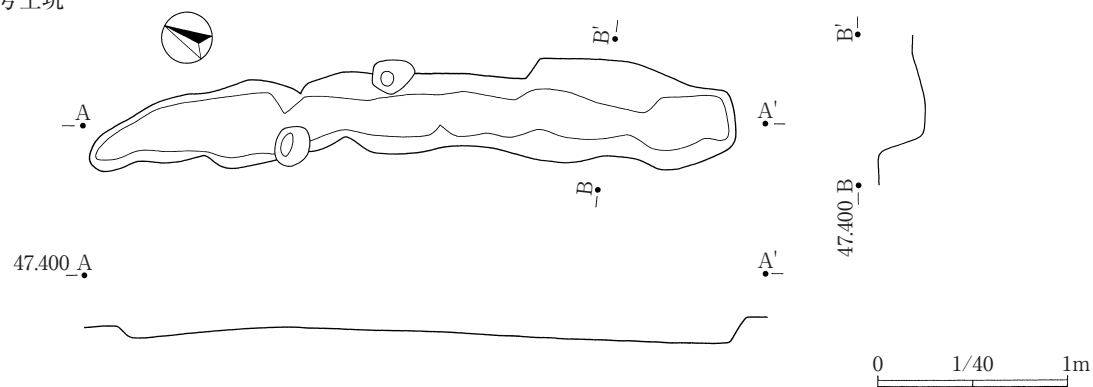
306・307号溝（第343図）

4次調査区の最も1次調査区に近接したS6-58・59グリッドから検出された溝で、2条が平行するように位置する。調査範囲はわずかであるが、西側斜面に沿って構築されていると考えられる。北側には3次調査区の301号溝が位置しており、同一遺構の可能性もある。この遺構の北東部に位置する1次調査区の3A・4Aグリッドからは、中・近世のものとされるピット群及び畝状遺構が検出されている。平面図を見る限り3次調査区の遺構群と極めて類似しているが、具体的な性格は不明。第343図は、これら1次調査区の遺構群も3次調査区と同じ性格のものであると仮定して、306・307号

745号土坑



746号土坑



第342図 中・近世土坑

溝との位置関係を示したものである。

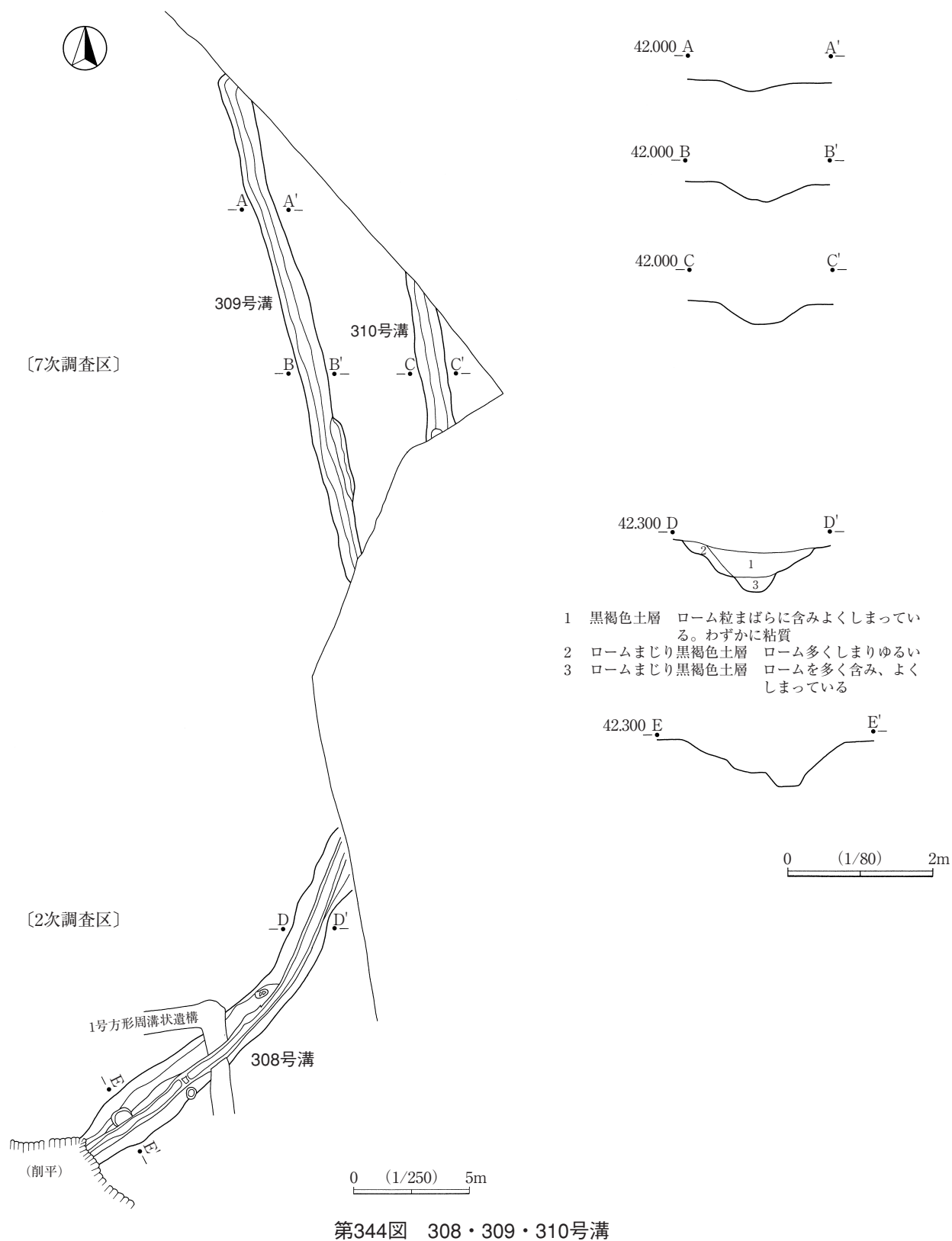
この遺構に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。

308号溝（第344図）

2次調査区のSS5-20・30・39・48・58グリッドで検出されたもので、調査区北東部から南西部にかけて、長さ17.5m、幅1.5～2.5mを測る。1号方形周溝状遺構を切っている。7次調査区の309号溝もしくは310号溝と同一である可能性がある。



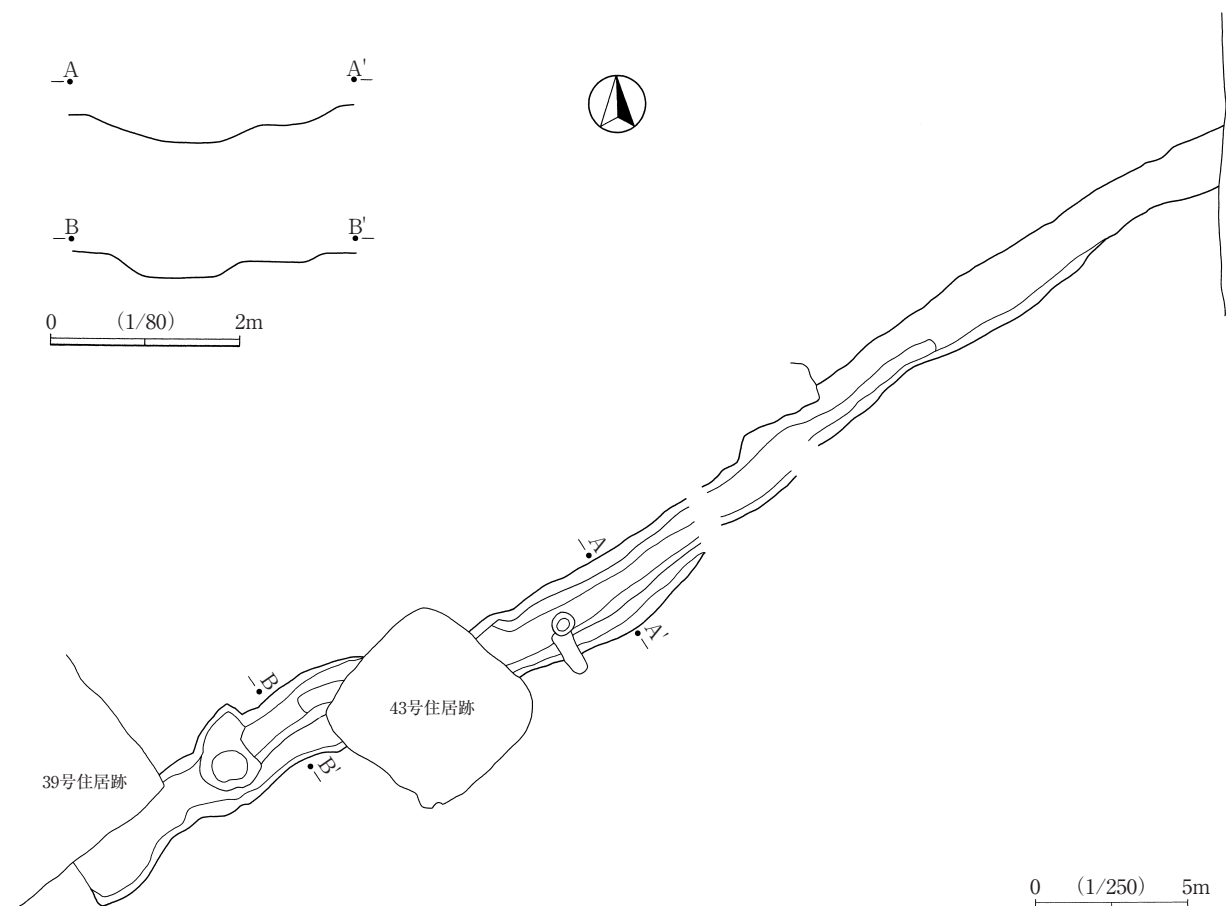
第343図 306・307号溝及びB3区・B4区ピット群



この遺構に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。

309・310号溝（第344図）

7次調査区 3-04・09・13・14・17・18・19・22・23・24、6-03・08グリッドにかけて検出されたもので、東端部を南北に延びる。2条が平行するように構築される。長さは309号が21.5m、310号



第345図 311号溝

が6.2m、幅はいずれも1mで、双方の溝の間隔は4m程度である。間にいくつかの土坑が検出されたが、溝に伴うものか不明。いずれも308号溝とつながる可能性がある。

7次調査区の溝は、調査段階で遺構番号など付けられておらず、遺物が出土したかどうか不明である。

311号溝（第345図）

7次調査区南東部で検出されたもので、調査区を東西に貫く長さ約45m、幅2.5mの溝である。43号住居跡を切り、39号住居跡の場所まで続いている。

遺物は出土したか否かも含め不明。

312号溝（第346図）

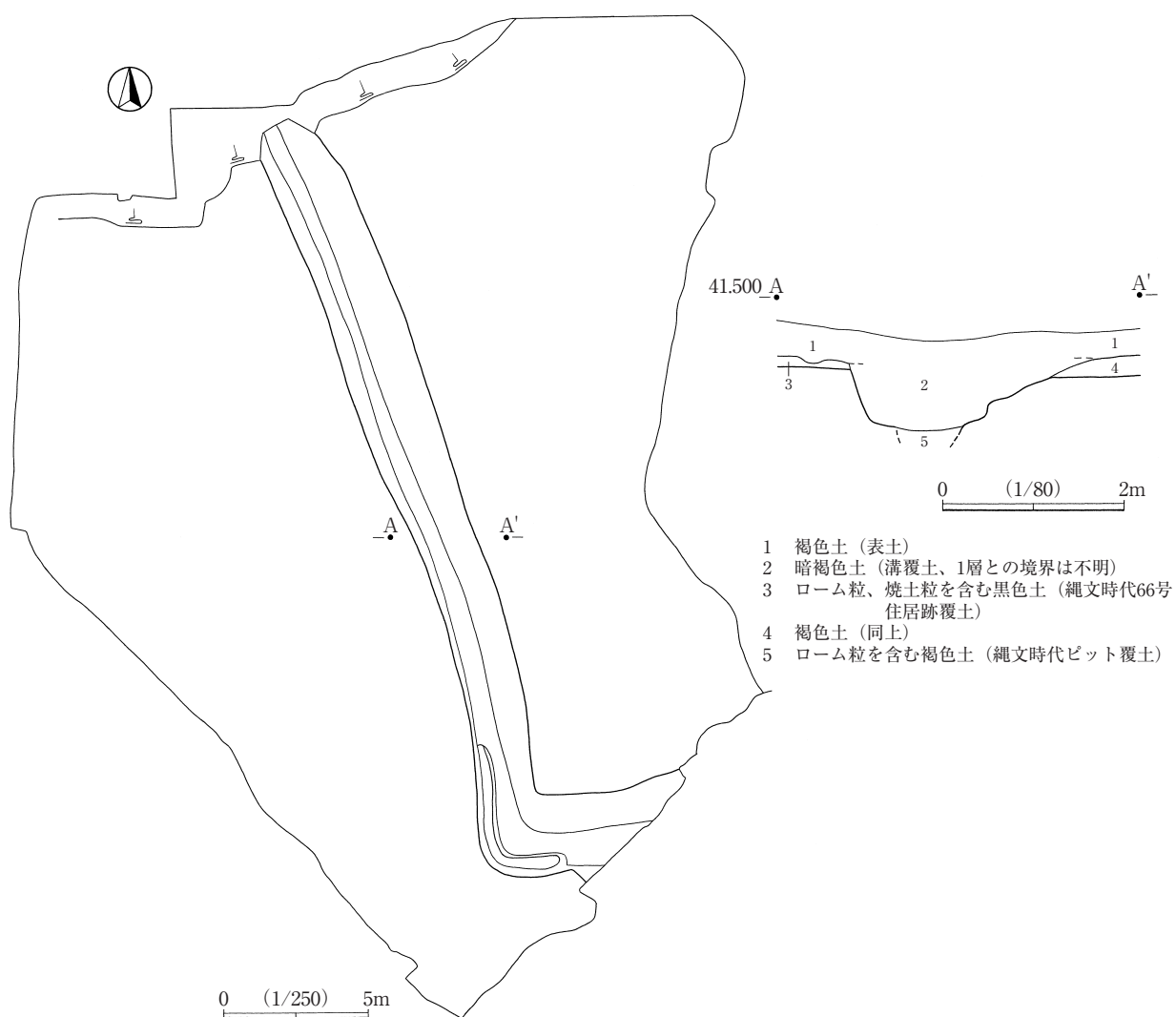
2次のSS1区を南北に貫く溝で、SS1-76グリッドで東へ90°曲がっている。長さ約32m、幅2mを測る。

遺物は流れ込んだ縄文土器がほとんどである。

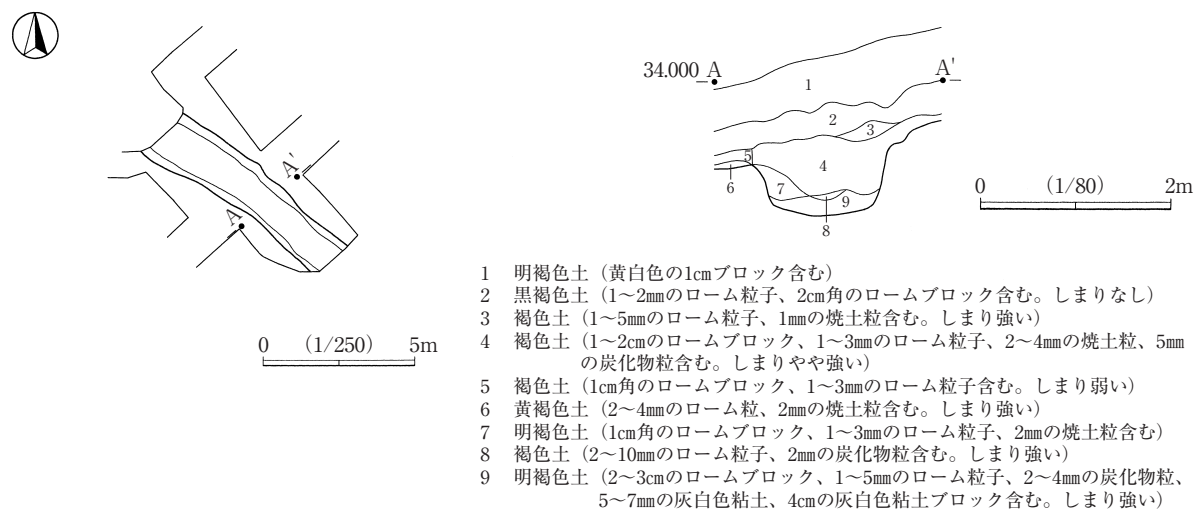
313号溝（第347図）

5次調査区の西端付近を斜面に沿うように位置する。長さ約7m、幅約1.5mを測る。

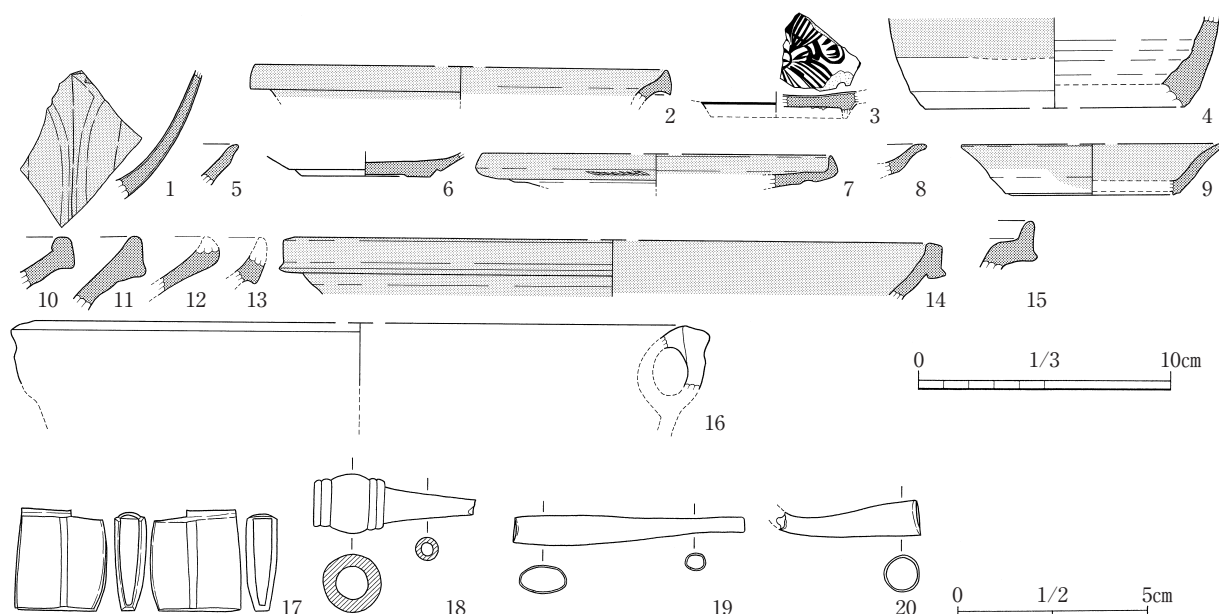
ここも遺物は流れ込んだ縄文土器がほとんどである。



第346図 312号溝



第347図 313号溝



第348図 中・近世遺物

第3節 中・近世遺物

中世から近代に至る陶磁器は、今回報告対象分地区から総数333点出土しているが、グリット採集なので、帰属遺構は不明である。便宜的に瀬戸・美濃大窯第4段階並行期以前の遺物を中世とした。中世遺物は総数31点である。

遺物は量的に、平安末から鎌倉中期の「1群」と、戦国から明治期の「2群」に分けられる（第349図）。

1群はわずか4点と少ないが、組成上、明らかに2群と異なり、200年近くの断絶がある。常滑・渥美産陶器、白磁水注、龍泉窯系青磁連弁文碗が1点ずつで、日常品2点（常滑甕1・青磁碗1）、特殊用途品2点（渥美壺1・白磁水注1）である。

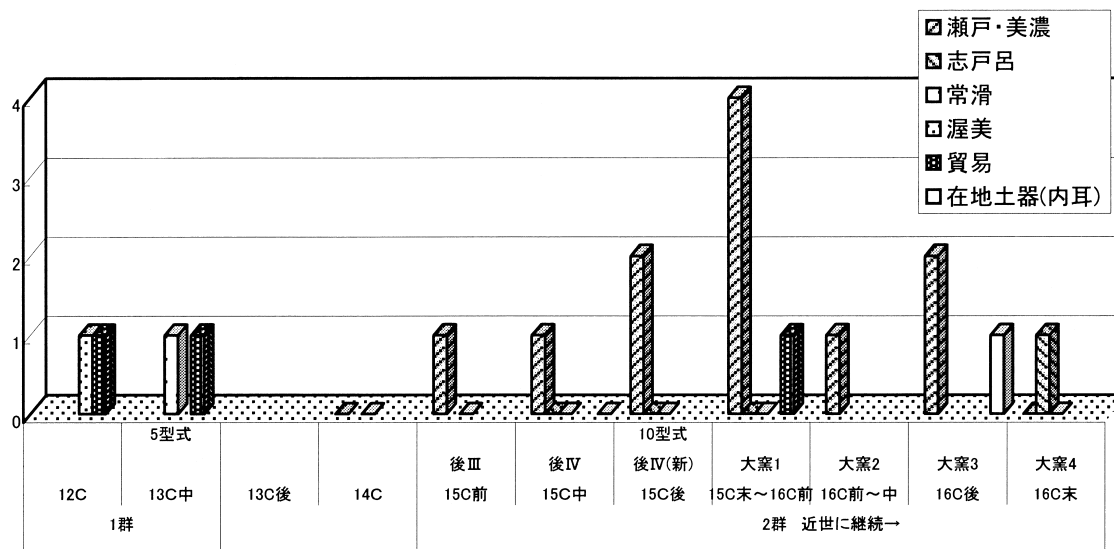
これに対し2群は、戦国期から近世に直接継続されるものである。瀬戸・美濃製品、特に播鉢が多く、常滑産片口鉢は認められないので、消費行為自体が大窯期に本格化したことの裏づけとなる。組成は日用品に絞られ、生活遺構が近接するものと思われる。奢侈品は認められないので、消費者の階層は村落内の一般農民まで含めて考えなければならない。

近世遺物は実測図を掲載し得なかったが、内容は表4を参照されたい。古瀬戸後Ⅲ期から近代まで断絶がない（第350図）。これらの消費に関連する遺構群は、中世から近世まで基本的なスタイルを変えず、さほどの距離を移動せずに継続したのであろう。

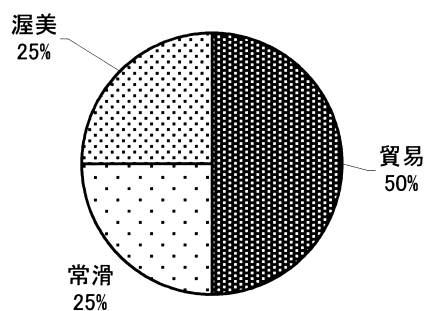
遺物量としては、瀬戸・美濃後Ⅲ期から19世紀末までの約500年間に、5回のピークが認められる。この波は陶磁器類の交換周期に合致するものと思われるが、戦国期・近世を通じて100年期であることが興味深い。

瀬戸・美濃登窯期になると、遺物量は一気に倍増する（ピーク3）。志野皿、灰釉皿（輪ハゲ皿）など瀬戸・美濃産陶器を中心にするが、18世紀（ピーク3）になると、くらわんか手の肥前磁器が一括搬入されている。磁器類の出土数が顕著なのは肥前Ⅳ期のみなので、消費遺跡の終焉まで使用され続けたものと思われる。肥前Ⅴ期以降（ピーク5）に並行する型式の遺物量は暫減していき、明治期をもって遺物搬入は終了している。

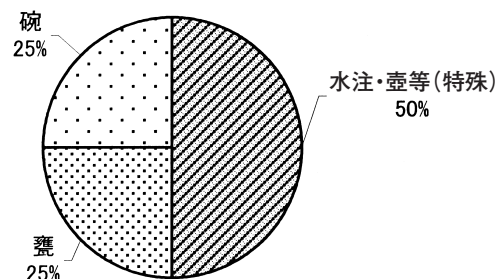
グラフ1 中世陶磁器類の時期別出土量(総数17点)



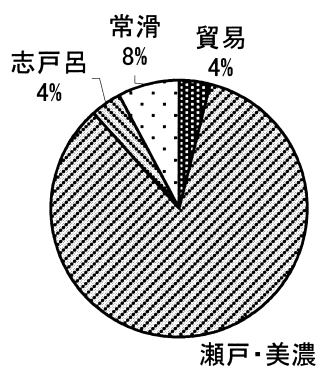
中世陶磁器類1群 産地組成(破片数、総量4点)



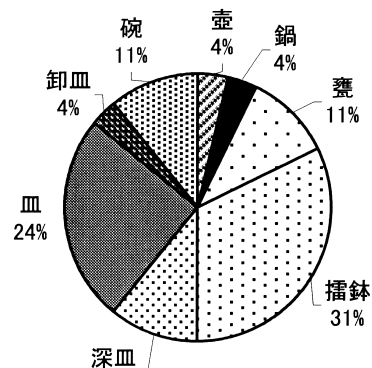
中世1群 器種別組成表(破片数、4点)



中世2群 産地組成(破片数、総量27点)

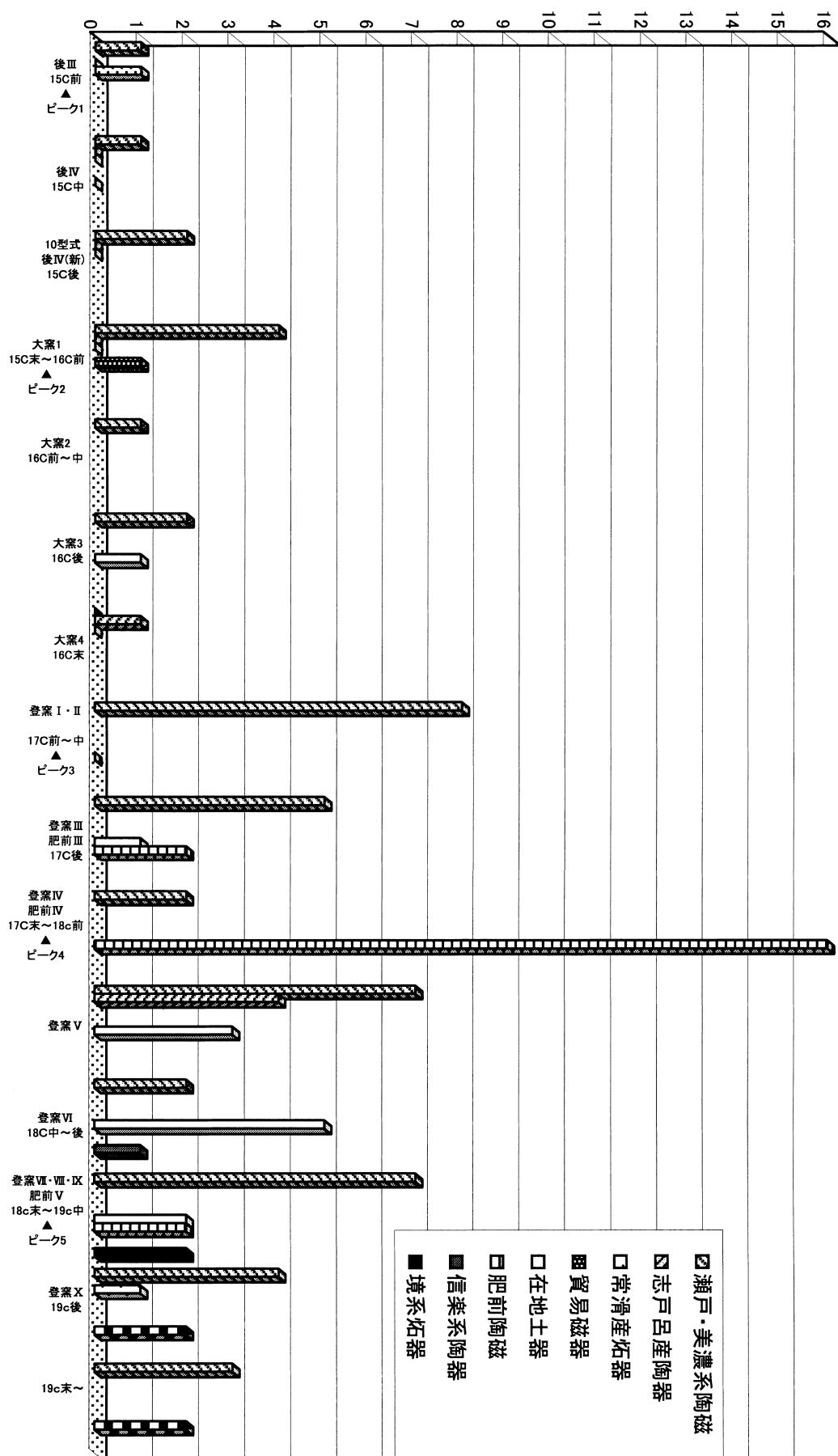


中世陶磁器類器種別組成表(破片数、31点)



第349図 中世陶磁器類の時期別出土量

グラフ2 戦国期以降陶磁器類の時期別出土量(総数95点)



第5章 まとめ

第1節 縄文時代の遺構とその特徴

1 遺構出土遺物について

今回の報告は第2～7次調査の遺構を対象としたものであるが、西広貝塚全体を考察するには、当然第1次調査の成果もふまえる必要がある。当時例が少なかった大形馬蹄形貝塚の調査ということで、出土資料は様々な場において広く紹介され、多種多様な検討が加えられた。しかし、すでに調査から30年以上、報告書刊行からも28年経ち、その間全国各地において多くの遺跡が調査され、資料は飛躍的に増大した。その結果として、1次調査の資料が顧みられる機会が少なくなっているのも事実である。今回遺構のほぼ全体を報告するのを機に、改めて出土遺物とその変遷を概観してみたいと思う。

第351～362図は、竪穴住居跡を中心とした主要な遺構出土遺物をまとめたものである。分かりやすくするために、時期順になるように配置した。ただし、Ⅰ～Ⅴ期の時期区分は慣用的な六期区分に従ったものであるが、遺構の動態とは合致しておらず不都合な点が多い^(注1)。4次・5次・7次調査区の貝層出土資料の成果が公表された段階で、新たに設定し直す必要があろう。また、これらの図はいわゆる編年を提示することを意図したものではない。遺構という人為的にくくられた空間から出土した、遺物のまとまりを提示することを目的としたものである。従ってある程度時間幅が存在するものやむなしと考える。なお、SN561晩期遺物包含地点（西側）など、晩期中葉以降の資料についても重要なものが多く、当然呈示すべきであるが、1次調査の資料がほとんど検証できないこと、300号溝など次回報告予定の資料が多数あることから、今回は見送ることとした。

実測図の縮尺は、今回報告分は復元土器1／8（大型品1／12、小型品1／6）、破片土器・石剣1／6、土偶・特殊土器1／4であるが、1次調査の遺物は縮尺不明のものが多いため、報告書の図をそのまま1／2に縮小した。また、原則として報告書に出土遺構の記載があり、かつ現物の所在が確認できたもののみ掲載した。

Ⅰ期（第351図）

5・13・55・63号の各住居跡、SN560・SN597・714・717号土坑などが該当する。中期末から後期初頭に位置づけられる。5・13号住居跡出土の土器は埋甕および炉として使用されたものがほとんどである。55・63号住居跡から出土した資料は小片がほとんどであり、加えて中期末と後期初頭が混在した状況を示していて、時期の確定は難しい。

Ⅱa期（第351図）

3・24・61・62号の各住居跡が該当する。堀之内1式古段階に位置づけられる。良好な資料は少なく、61号住居跡の深鉢2点が最もまとまったものであろう。称名寺式の系統に位置づけられる沈線によるモチーフを特徴とするが、この系統はⅡb期以降ほとんど見られなくなる。1次調査では堀之内1式古段階の標識的な資料とされた深鉢が出土しているが（市立市川考古博物館 1982）、遺構ではなくグリッド出土であるのが惜まれる。

Ⅱb期（第351～354図）

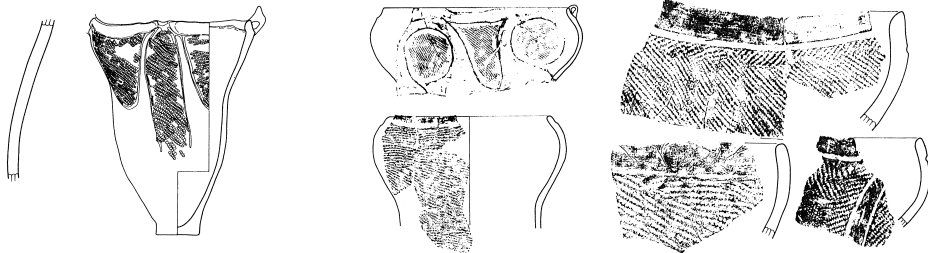
西広貝塚遺構群の最初の盛期に当たる。1・2・7・16・23・28・53・56・57・59号の各住居跡、

I期

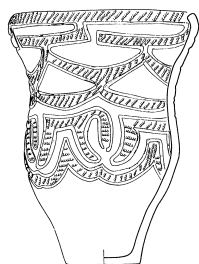
5号住居跡



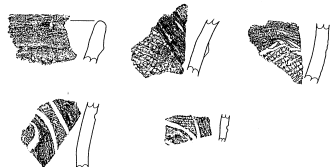
13号住居跡



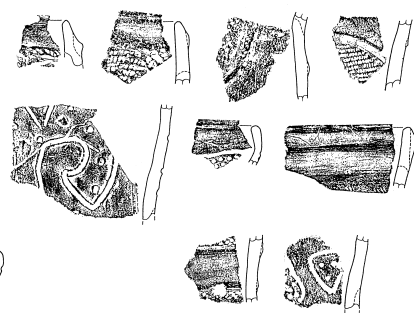
SN597土坑



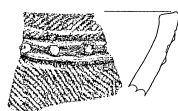
55号住居跡



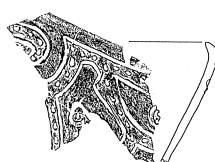
63号住居跡



717号土坑

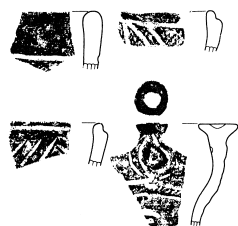


714号土坑

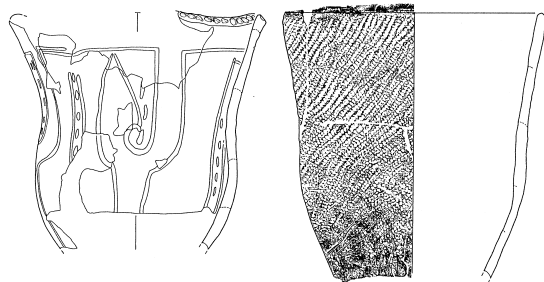


IIa期

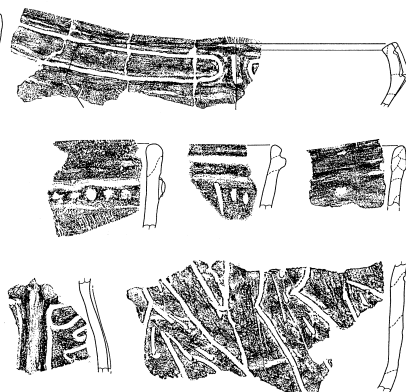
3号住居跡



61号住居跡



62号住居跡

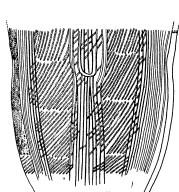


24号住居跡

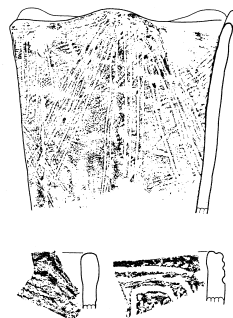


IIb期

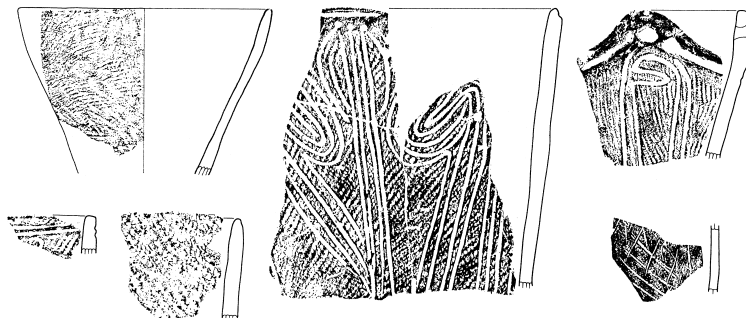
1号住居跡



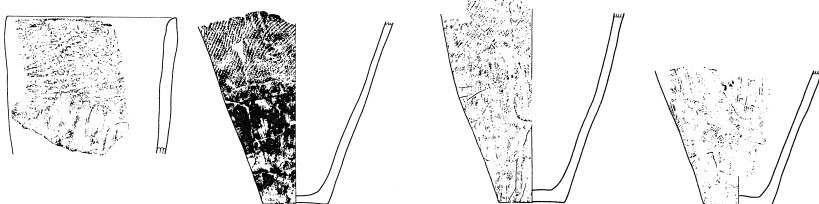
2号住居跡



7号住居跡

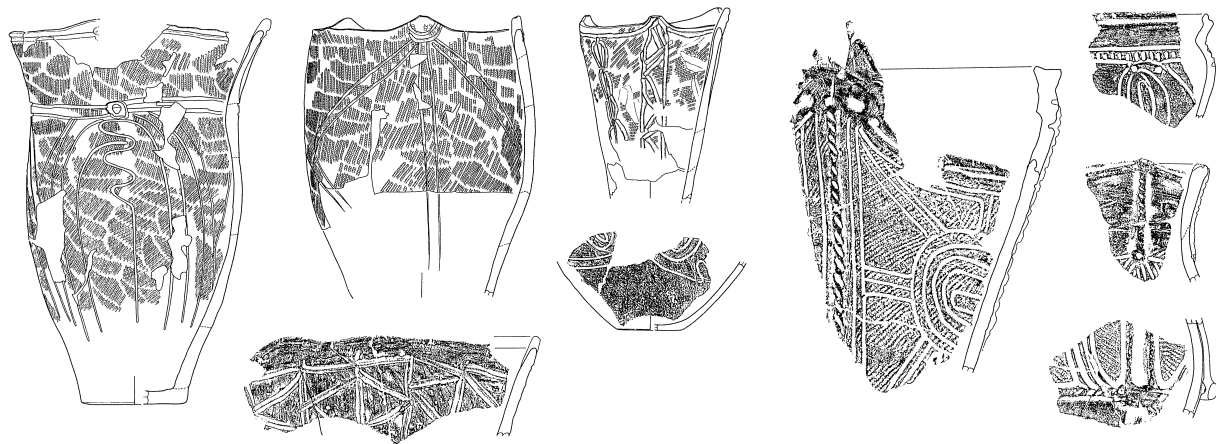


16号住居跡

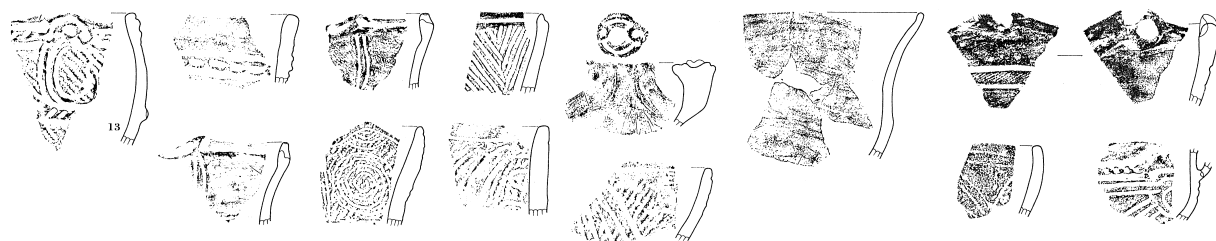


第351図 遺構出土主要遺物 (1)

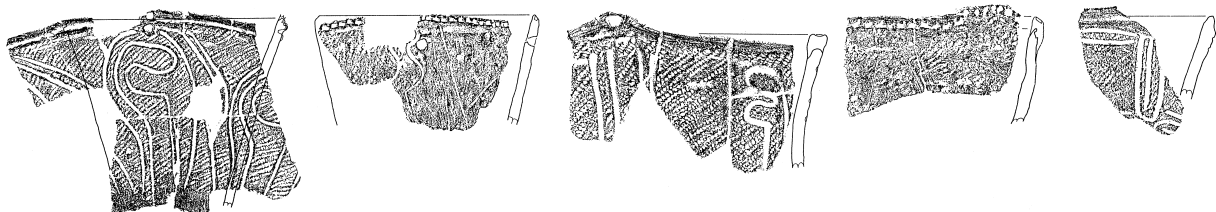
Ⅱb期
23号住居跡



28号住居跡



54号住居跡

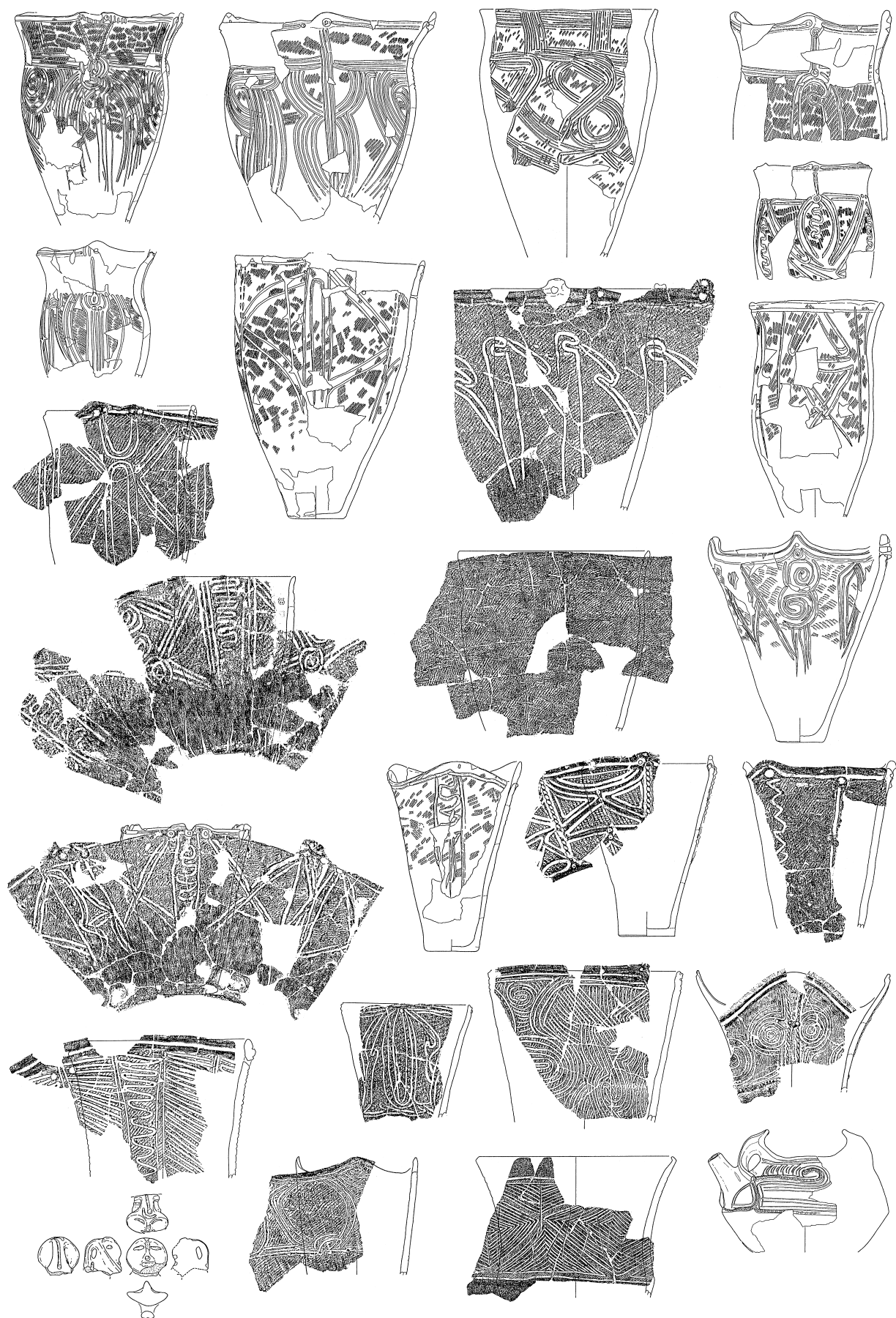


56号住居跡



第352図 遺構出土主要遺物 (2)

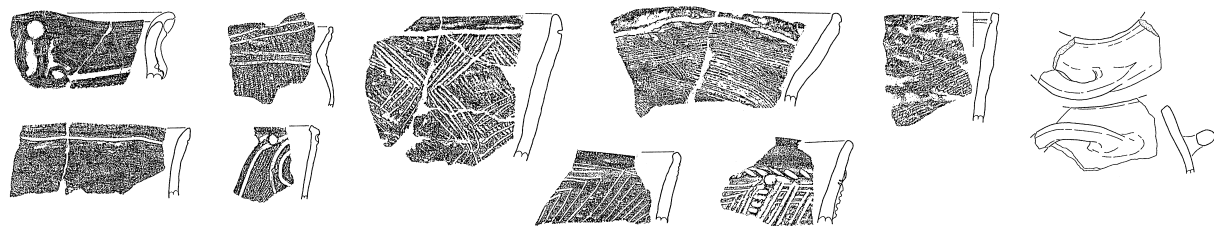
Ⅱb期
57号住居跡・720号土坑



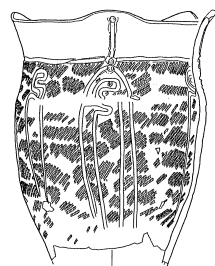
第353図 遺構出土主要遺物 (3)

Ⅱb期

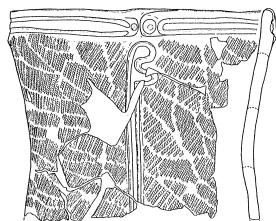
59号住居跡



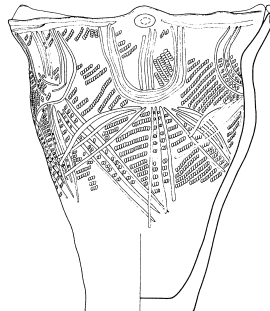
73号人骨土器棺



74号人骨土器棺



SN621土坑



SN600



703号



718号土坑

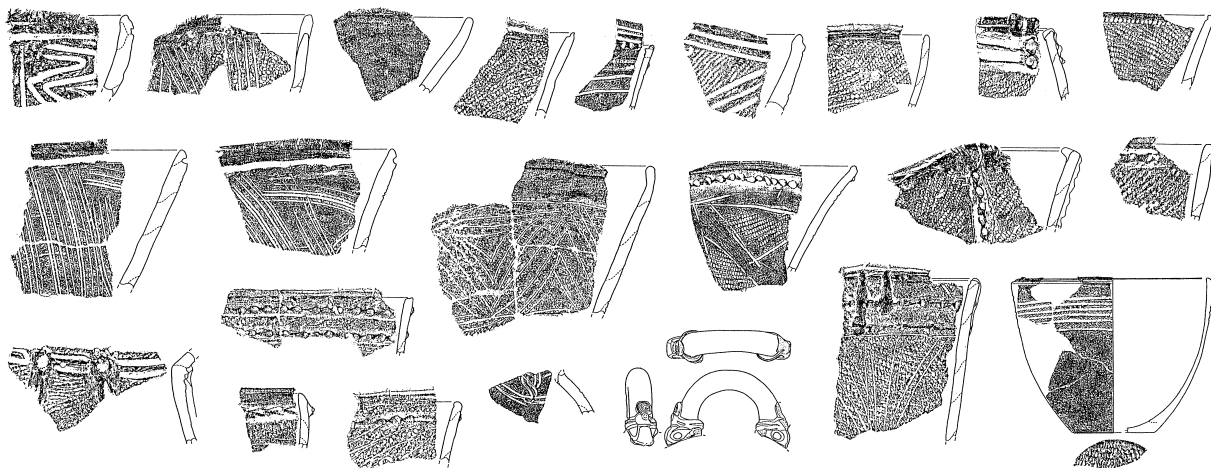


SN571土坑

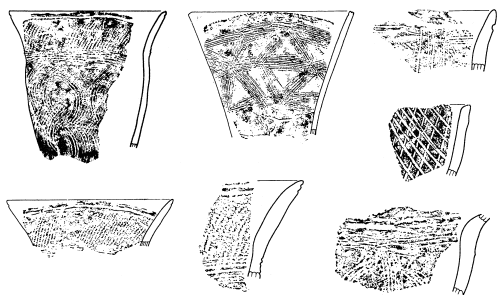


Ⅱc期

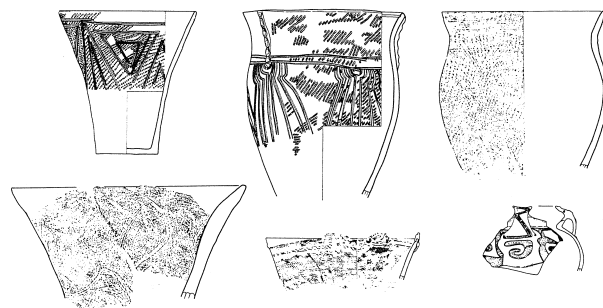
64号住居跡



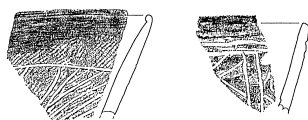
20号住居跡



22号住居跡



SS5-42貝層



第354図 遺構出土主要遺物 (4)

SN559・SN571・SN591・SN600・703・707・718号の各土坑、73・74号の各人骨埋納土器などが該当する。堀之内1式の中～新段階に位置づけられる。1号住居跡は2号住居跡直上に構築されており、調査時の所見から時間差はあまりないと判断されている。1号住居跡の深鉢は埋甕、2号住居跡の復元深鉢は床面直上出土である。16号住居跡の土器はいずれも埋甕である。28号住居跡は建て替えが2回行われているが、炉の位置が固定されるなどの理由から連続して作られたと判断されている。炉跡からはかなり大きな破片が出土しているらしいが、特定できない。56・57号住居跡とも覆土の貝層に堀之内2式が多量に混入している。全体としては加納実氏の分類によるD群・E群を主体とし、F群が加わる構成であるとみなされる^(注2)。なお、65号住居跡もこの時期に属すると考えられるが、本文中で述べたとおり記録類に問題が多く、出土位置など信頼性に欠ける点が多いため、除外した。

Ⅱ c 期 (第354図)

20・22・64号の各住居跡、SS5-42貝層などが該当する。堀之内2式に位置づけられる。20号住居跡の土器は炉跡付近に集中して出土した。22号住居跡出土の頸部がくびれる縄文施文深鉢は、炉の補強材として使われた可能性が指摘されている。64号住居跡は、床面直上のものは少なく覆土中からの出土が多い。図示した加曽利B1式は、覆土中に堆積した貝層に由来するものである。

Ⅲ a 期 (第355図)

18・21号の各住居跡が該当する。加曽利B1式に位置づけられる。1次調査の資料がほとんどで、数も少ない。4・5次調査の貝層からはまとまった資料が出土している。

Ⅲ b 期 (第355図)

6・25・35号の各住居跡が該当する。加曽利B2式に位置づけられる。25号住居跡は26号住居跡に切られており、加曽利B2式とB3式とを峻別する事例として採り上げられたこともあった(大塚1983)。その際使われた土器が羽状沈線の施された浅鉢で、炉に接して床面直上から出土している。加曽利B2式でも新しい様相を呈していると指摘されている(同上)。

Ⅲ c 期 (第355～357図)

26・54・58号の各住居跡、SN570・713号の各土坑、SS5-24貝層などが該当する。また、SS1区はこの時期から遺物の増加が観察され、遺構群の構築が本格化したと推測される。加曽利B3式に位置づけられる。ここからⅣc期までが第2の盛期に当たる。26号住居跡は先述したとおり25号住居跡を切っている。出土遺物は加曽利B2式が多数と記されているが、掲載されているのは加曽利B3式が多い。あるいはB2式の遺物は25号住居跡からの混入と判断し、意図的に除外しているかもしれない。54・58号住居跡の遺物は、曾谷式と判断されそうなものも含んでいる。SS5-24貝層は堀之内2式も出土しているが、器種構成などからこの時期と判断した。SS1区のN217号土坑は大形住居跡の柱穴と考えられる土坑で、SS1区遺構群の最初期の段階に位置づけられる。ここから出土した瓢型土器は、径に対して器高が高く、胴部くびれの直下に最大径をもつなど、この形状の土器では古風な様相を呈している。瘤が貼り付けられた東北系とみられる壺形土器は帰属に迷うところがあったが、沈線のモチーフなどからこの段階と考えた。

Ⅳ a 期 (第357～359図)

60号住居跡、SN027土坑群、SN502・SN629・N210・N212・701・716・729号の各土坑などが該当する。曾谷式に位置づけられる。60号住居跡は機械的に設定した範囲で遺物を拾い上げたもので、こ

Ⅲa期

18号住居跡

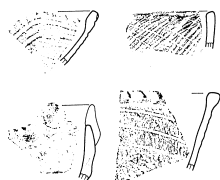


21号住居跡

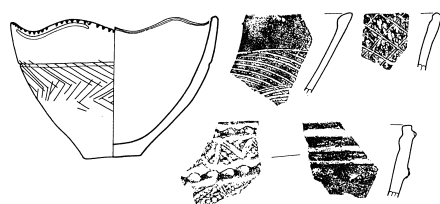


Ⅲb期

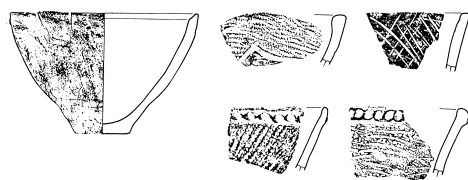
6号住居跡



25号住居跡

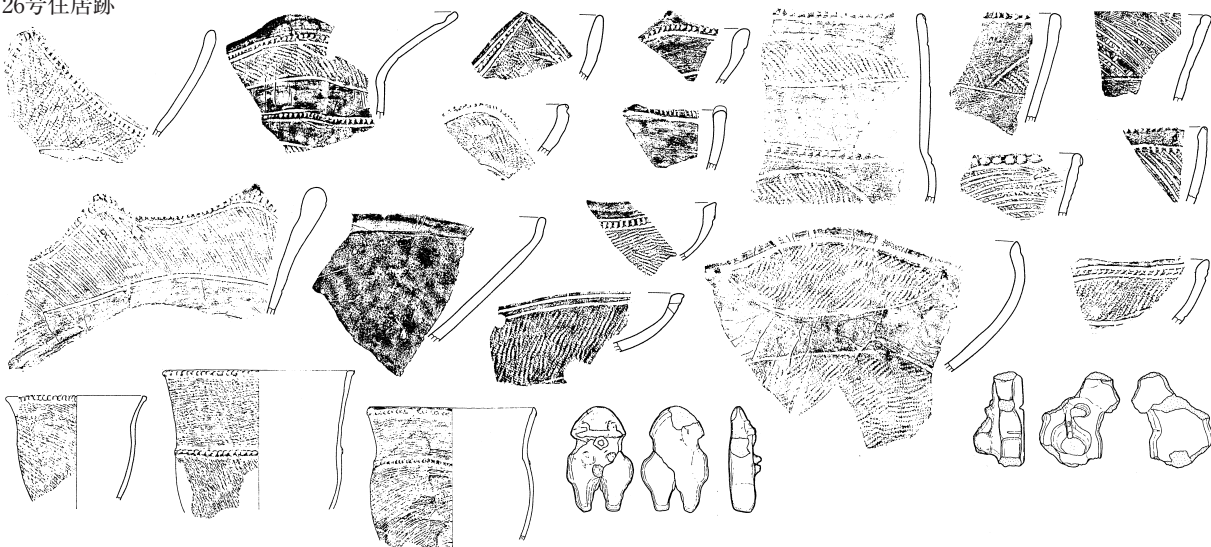


35号住居跡

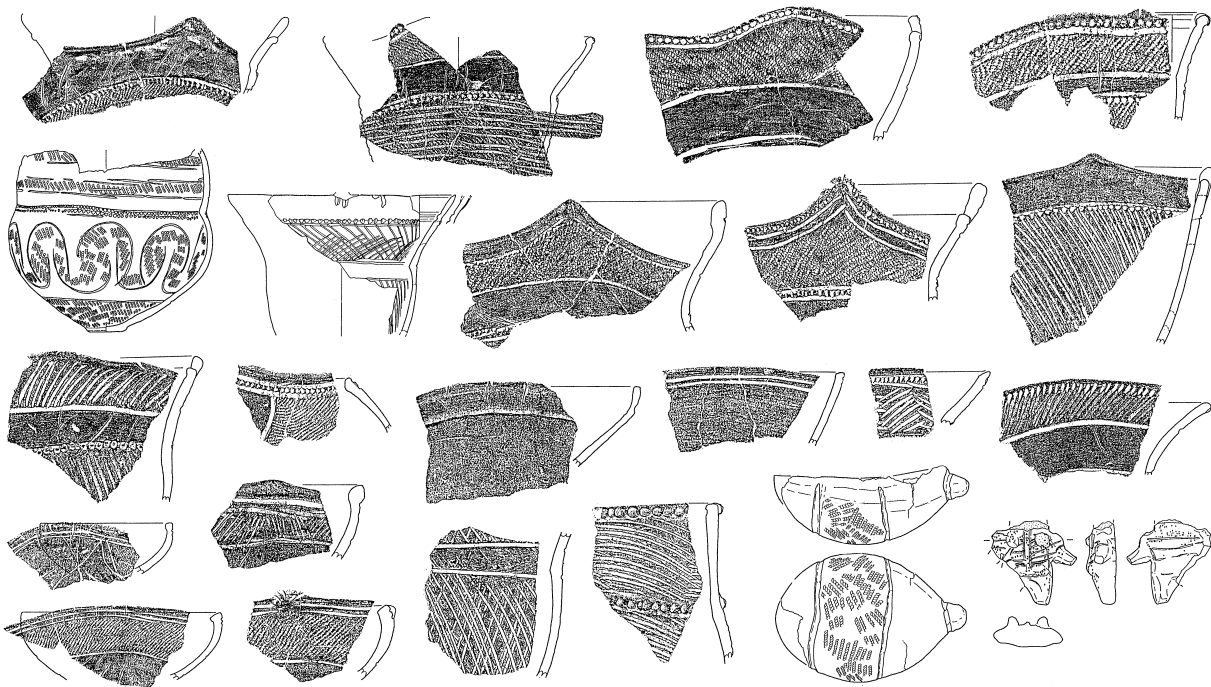


Ⅲc期

26号住居跡



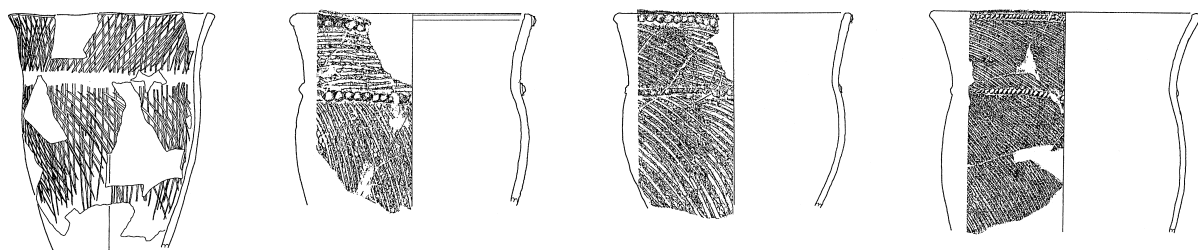
54号住居跡(1)



第355図 遺構出土主要遺物 (5)

Ⅲc期

54号住居跡(2)



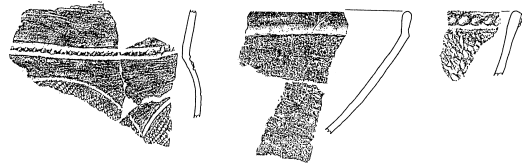
58号住居跡



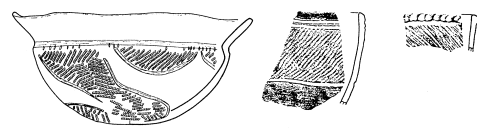
第356図 遺構出土主要遺物 (6)

Ⅲc期

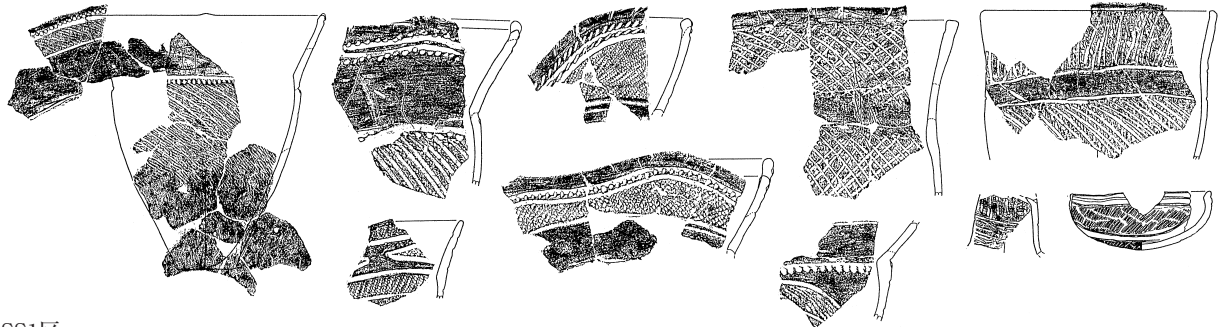
713号土坑



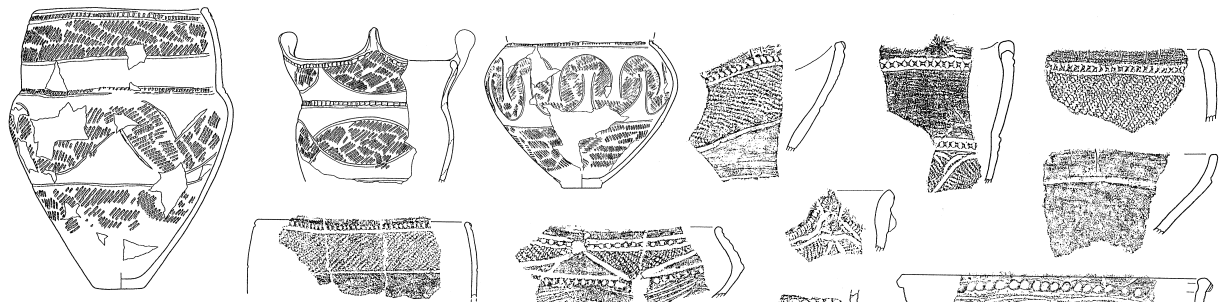
SN570土坑



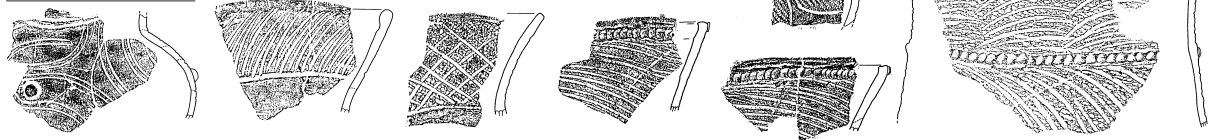
SS5-24貝層



SS1区

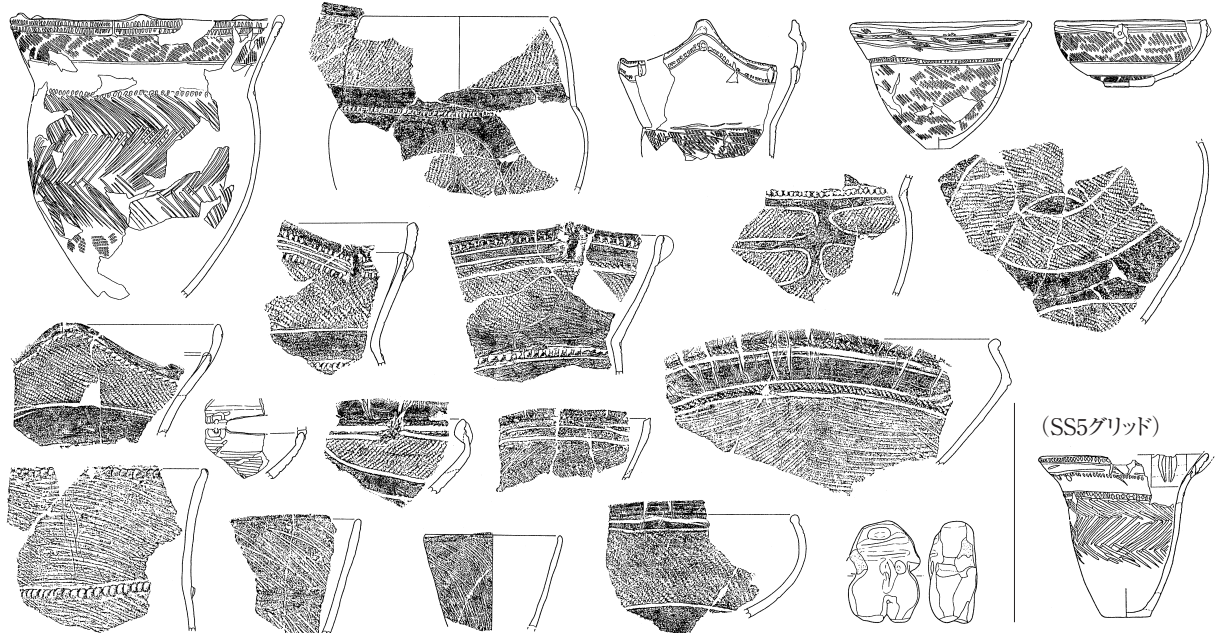


(N217土坑)



IVa期

60号住居跡



第357図 遺構出土主要遺物 (7)

IVa期

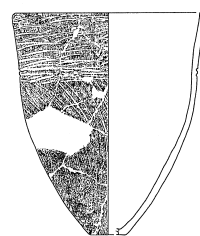
SN027土坑群



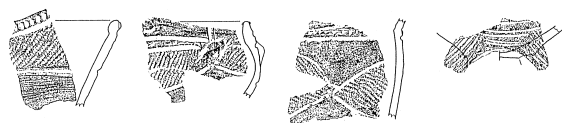
SN502土坑



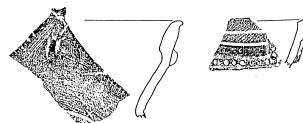
N212号土坑



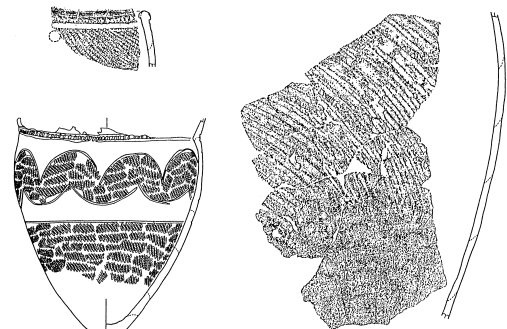
701号土坑



716号土坑



729号土坑

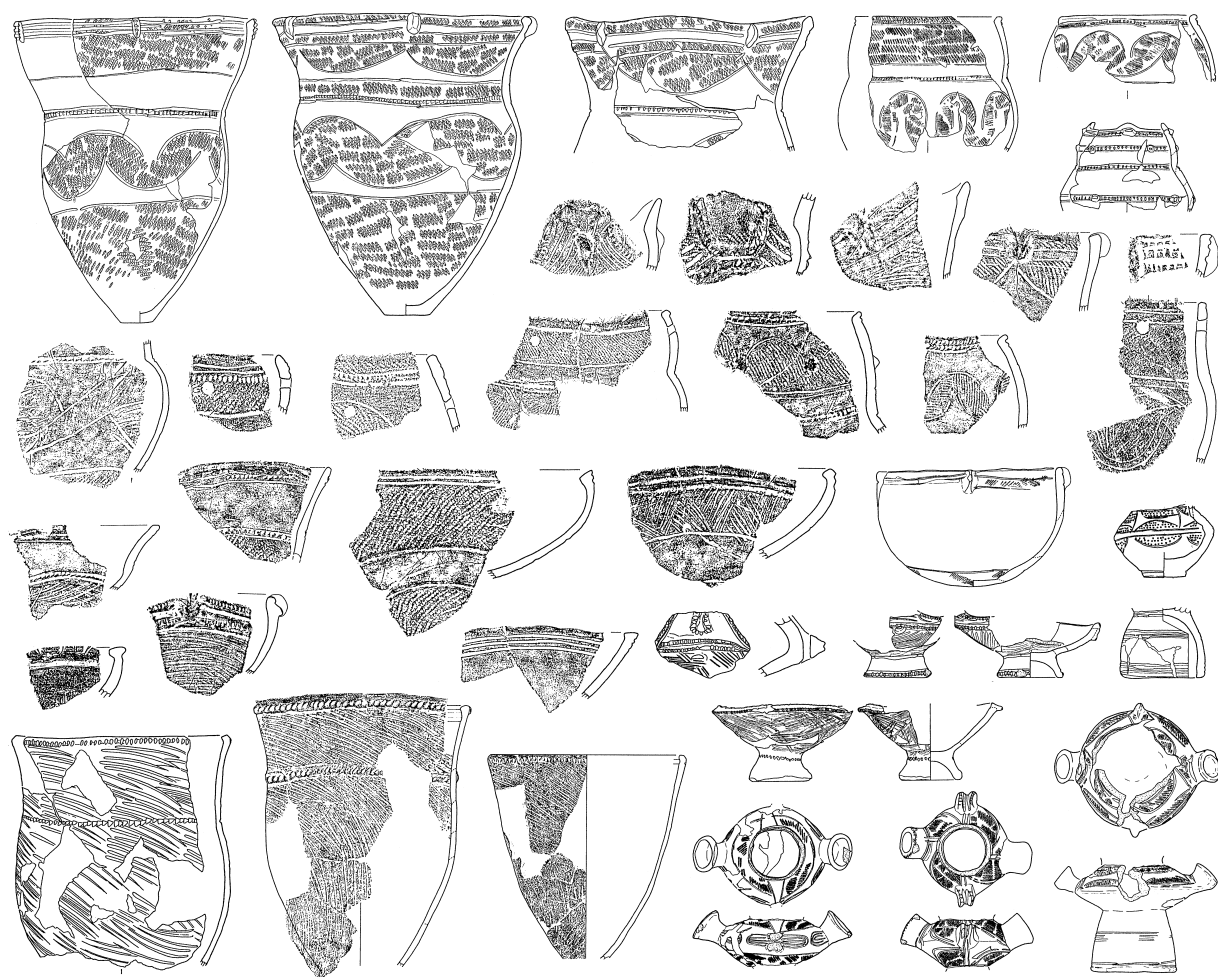


N210号土坑



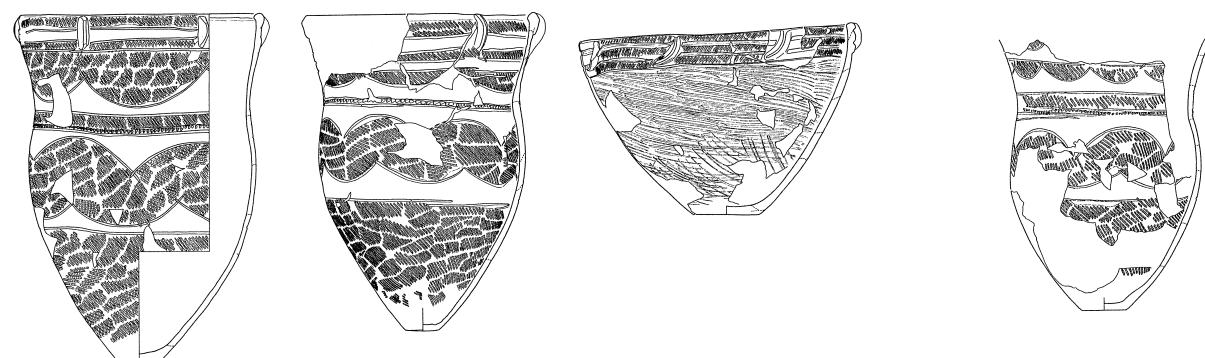
第358图 遺構出土主要遺物 (8)

IVa期
SS1区

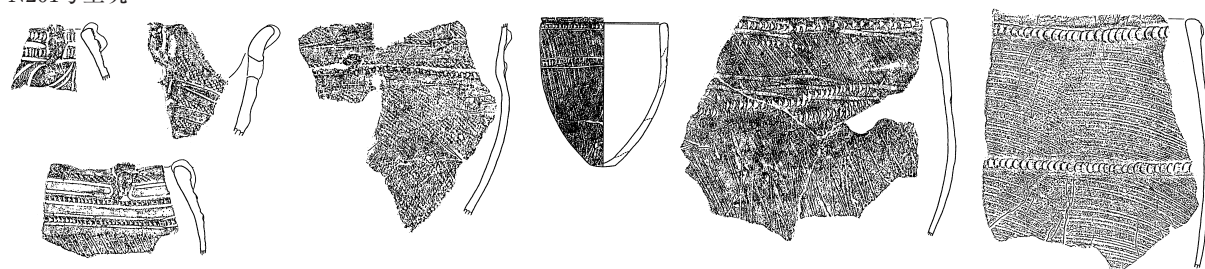


IVb期
N211号土坑

(SS1区)



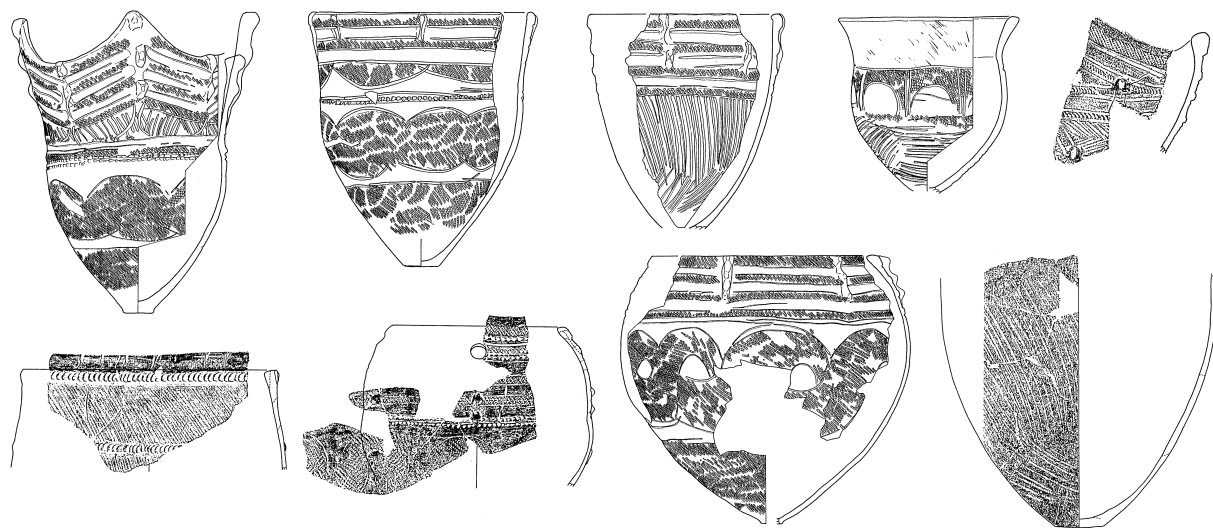
IVc期
N201号土坑



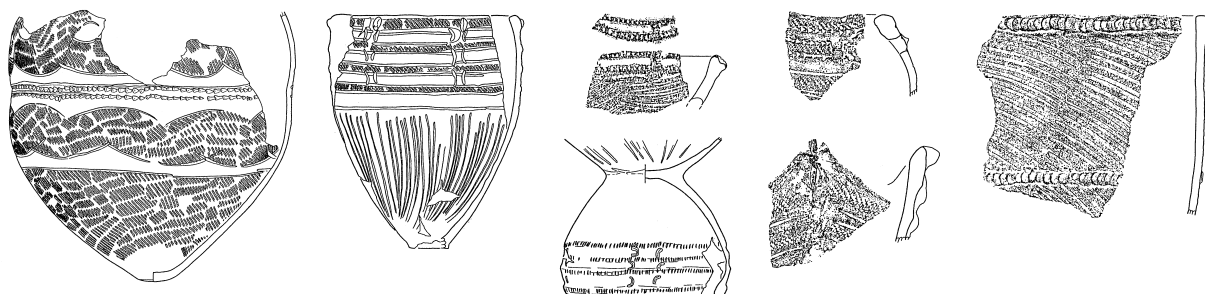
第359图 遺構出土主要遺物 (9)

IVc期

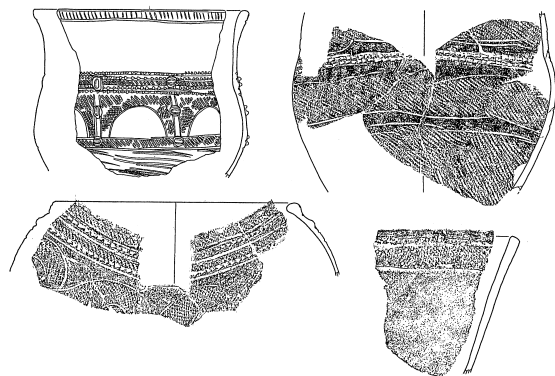
N204号土坑



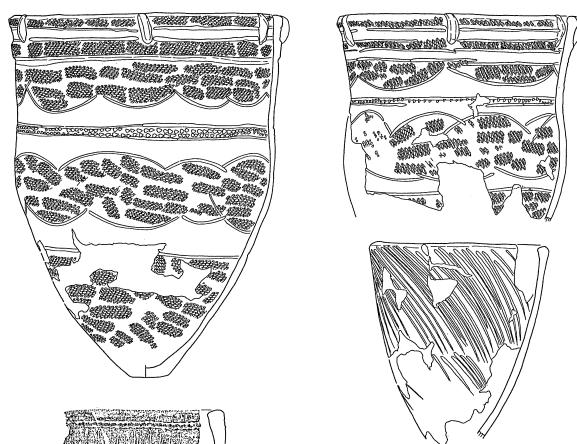
N206号土坑



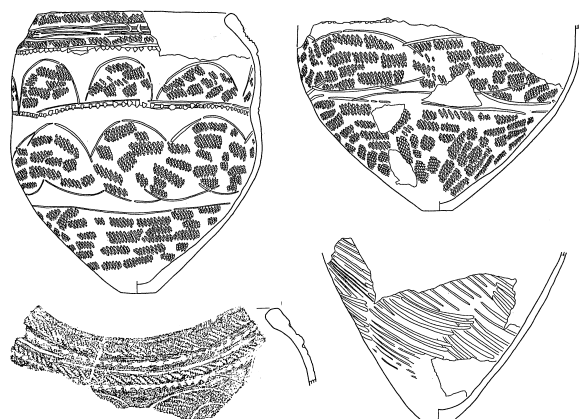
N208号土坑



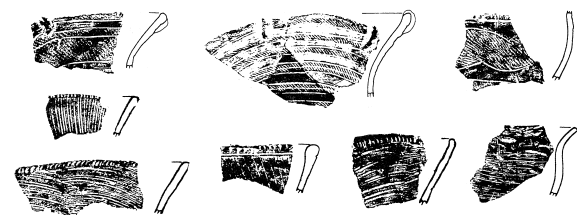
N213号土坑



N215号土坑

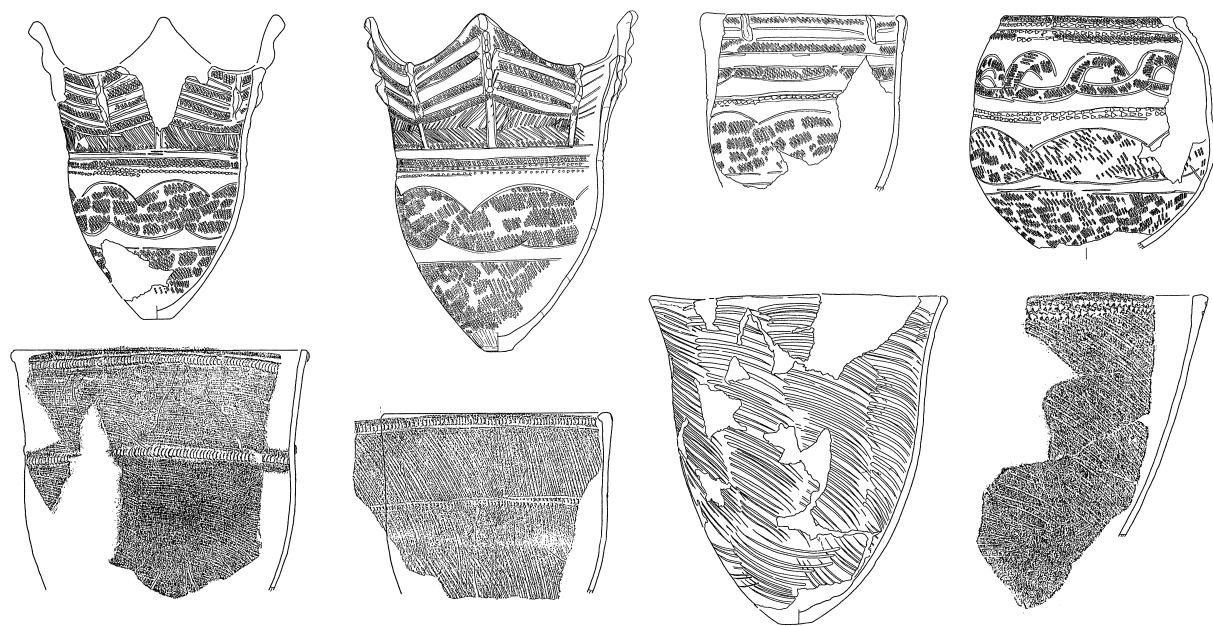


SN557土坑

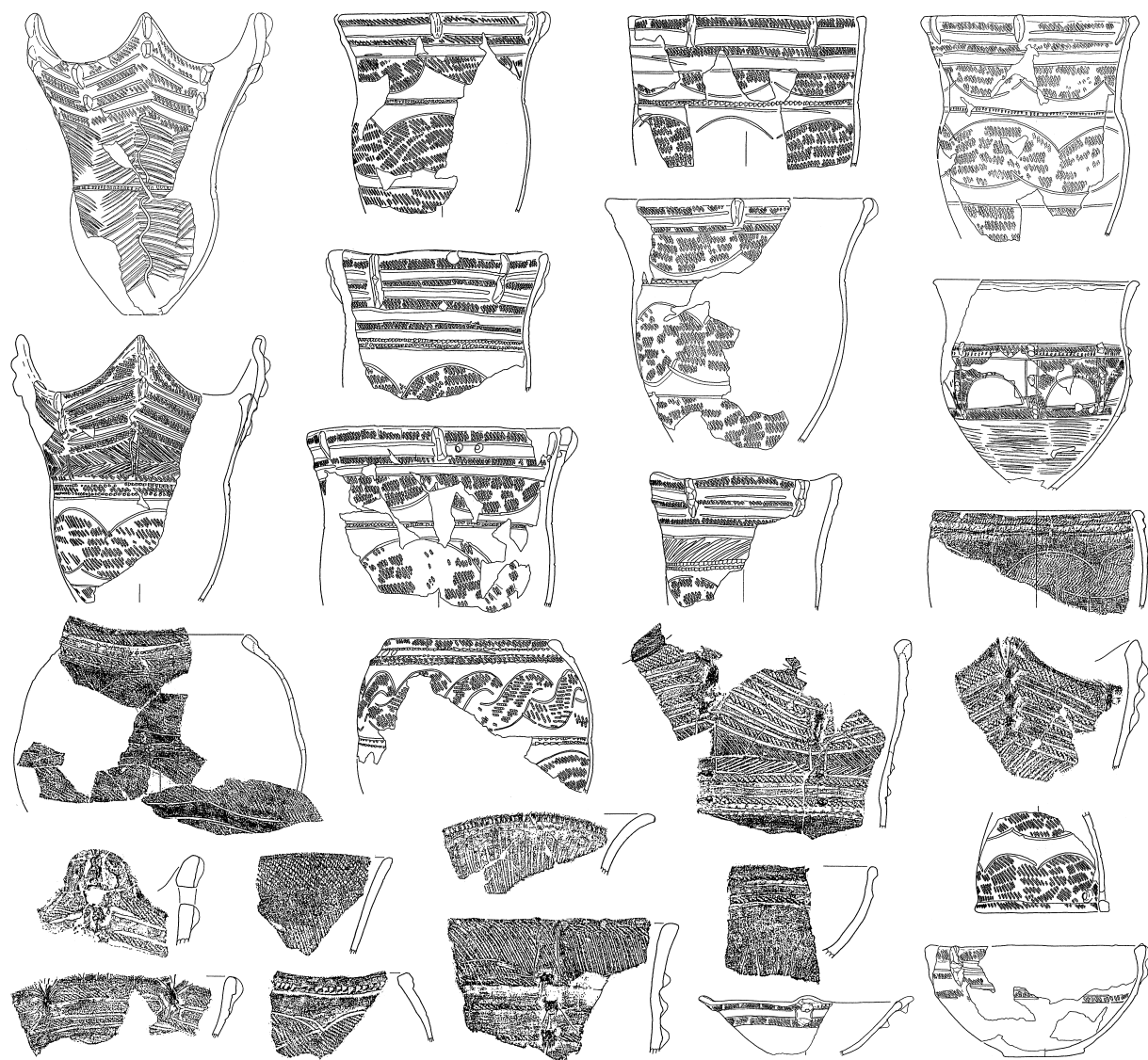


第360图 遺構出土主要遺物 (10)

IVc期
N214号土坑

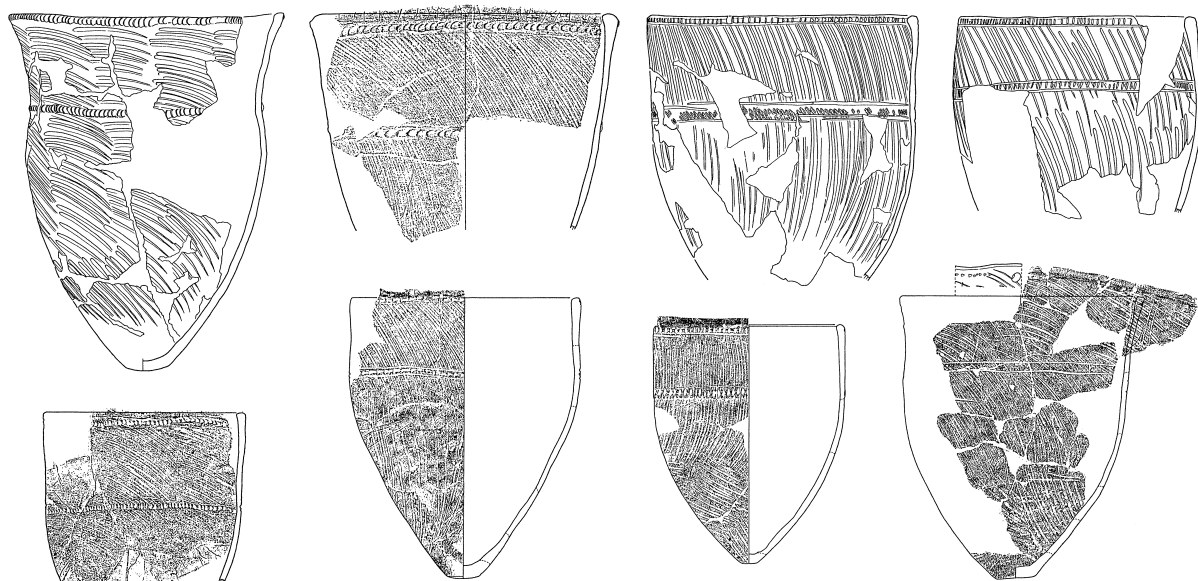


SS1区(1)

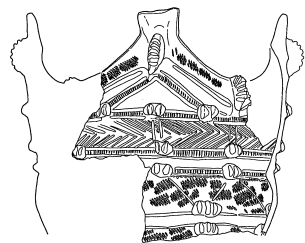


第361图 遺構出土主要遺物 (11)

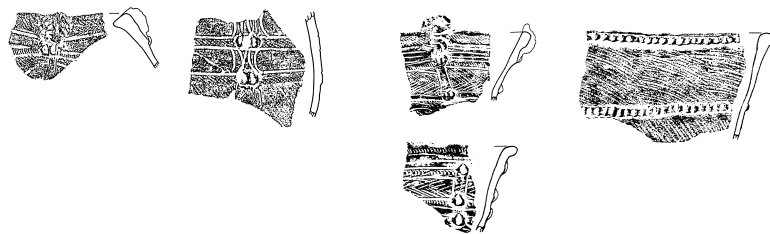
IVc期
SS1区(2)



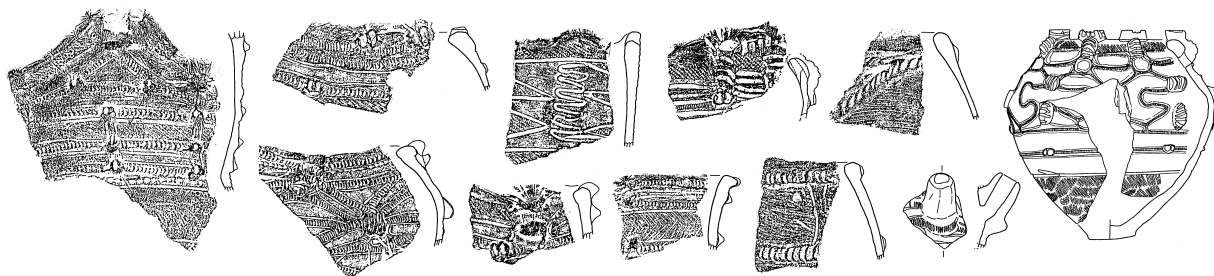
IVd期
N205号土坑



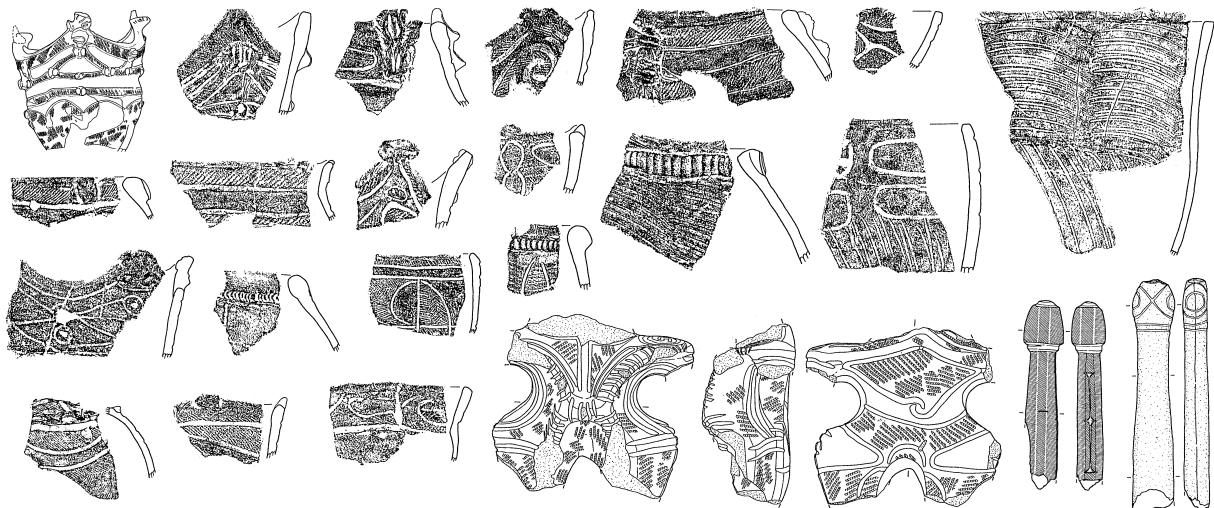
SN558土坑



SS1区



V期
SS1区



第362图 遺構出土主要遺物 (12)

ここではやや離れているが関連が強いと考えられる遺物も併せて掲載した。2次調査の概報で曾谷式の一括資料として広く紹介されている^(注3)。SN027土坑群は当初竪穴住居跡と考えられていたもので、土坑内およびその周辺から多数の遺物が出土している。ただし、遺物の時期は加曽利B2式から安行1式まで幅広く、本来の時期を判断するには難しい部分がある。台付浅鉢は、土坑内から倒立した状態で出土した。これらの資料も曾谷式の一括として紹介されたことがある^(注4)。N212号土坑はⅢc期のSS1区N217号土坑を切っている。粗製と精製の深鉢が出土しているが、時期差が認められる。N210号土坑は大形住居跡を切っているとされているが、出土した粗製深鉢の位置付けは判断が分かれよう。729号土坑の精製深鉢は口縁部が欠損しているが、胴部形状や文様などからここに置いた。SS1区出土土器のうち最初に掲げたものは床面直上から出土しており、大形住居跡の中心的な時期を示すと判断されている。安行1式的な文様をもつ深鉢は、安行1式古段階とみなす考え方もあるが(大塚 1986)^(注5)、器形や胴部下半の文様などは曾谷式の特徴を示している。

Ⅳb期(第359図)

N211号土坑が該当する。これは、この土坑が大形住居跡の貼り床に覆われていたという調査時の所見から設定した時期で、安行1式でも古風な様相を呈している。ただし共伴する土器にはⅣc期に相当するものもあり、なお慎重に検討する必要がある。浅鉢の口縁部は曾谷式を想起させる。この段階に属すると考えられるSS1区出土資料を掲載しておいた。

Ⅳc期(第359～362図)

N201・N204・N206・N208・N213・N214・N215・SN557号の各土坑、およびSS1区が該当する。安行1式でも新段階に位置づけられる。N204号土坑の資料はすでに広く知られているところである。斉一性が非常に強い。

Ⅳd期(第362図)

SN558・N205号土坑が該当する。安行2式に位置づけられる。SN558土坑の粗製土器は外傾するように図化されているが、実際には内傾する。

Ⅴ期(第362図)

SS1区の遺構群の掉尾を飾る段階として設定したもので、晩期前葉の安行3a・3b式に位置づけられる。土偶や石剣は一括で出土したもので、祭祀的な行為を想定させる。遺物の量は激減し、活動が一旦終息したことを物語る。

以上を簡単にまとめると、遺構群の出現度にはいくつかのピークがあり、特に堀之内1式新段階(Ⅱb期)と安行1式期(Ⅳc期)が顕著である。そこに至る前段階においては、資料が少ないものの多様な要素が出現するのが認められるが、ピークに向かって急速に斉一化していくのが観察される。特にⅣc期においては同じもののコピーかと思われるほど顕著である。各ピークの前段階に当たるⅠ～Ⅱa期およびⅢc～Ⅳb期、いわゆる加曽利EⅣ～堀之内1式古段階と、加曽利B3～曾谷式の様相については、これまでも多くの研究者が検討課題としてきたところであるが、今回の西広貝塚の事例のような遺構出土の状況を検討することによって、詳細な状況が明らかになると思われる。そこに見られる多様な要素は、時期差だけで説明できるものではなく、出自を含めた系統差として認識する観点も必要であろう。と同時に、それらの斉一化を促した社会的背景を検討することも要請されよう。

2 竪穴住居跡の様相

集落遺跡の報告書をみても、出土遺物に比べ竪穴住居跡の分析事例に接することが少ない。その理由として、形態や構造の型式分類が遺物に比べ困難なことや、数百軒単位の大集落の場合、とても時間的な余裕がとれないことなどが挙げられよう。また、後期中葉以降は切り合い関係が複雑なものや、プランが不明瞭なものが多いこともその一因である。幸い西広貝塚は遺跡の面積に比して竪穴住居跡は少なく、手頃な分析対象といえる。また、前節で述べたとおり第1次調査の成果を顧みる必要がある。ここでは時期別に竪穴住居跡の変遷を俯瞰し、その特徴をまとめたいと思う。時期は前項で設定した区分である。縮尺は全て1/120である。1次調査検出遺構は報告書では全て磁北となっているが、座標北に修正している。

I 期 (第363図)

竪穴住居跡は4軒であるが、大きく2種類に分類できる。5・13・63号の各住居跡は直径4～5m程度の小規模なもので、壁からやや離れた場所に5～6本の柱穴が存在し、炉は住居中央よりやや片側に寄っている。63号住居跡は西側斜面に位置するが、出入り口は斜面下側であると考えられ、炉は中央より入り口側に作られたことになる。55号住居跡は直径7m前後とやや大きくなり、出入り口施設が作られるなど、他の住居跡とは構造に違いが見られる。

II a 期 (第363図)

この時期も2種類に分類できる。24・61・62号の各住居跡は直径5m前後と小さく、壁に沿って小さな壁柱穴が巡る。61号住居跡からは、出入り口施設と考えられるピット群が検出されている。炉跡は中央よりやや入り口側に構築される。3号住居跡は直径7.5mと大きく、柱穴も住居中央寄りに作られる。炉も検出されず、出入り口施設も明らかではない。

II b 期 (第363～364図)

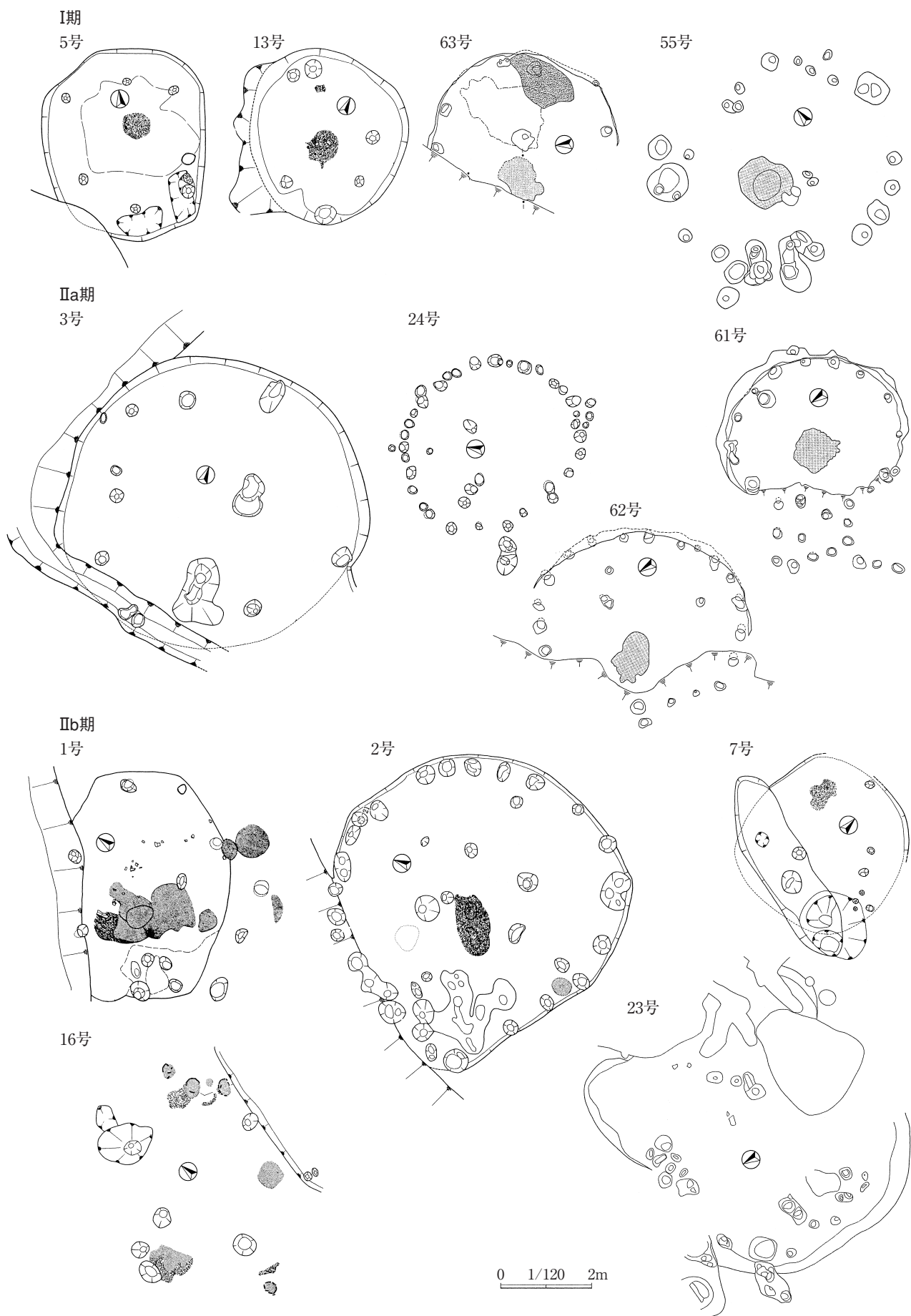
遺構の数が多く調査区も分散しているため分かりにくい面があるが、明らかに2種類に分類できる。柱穴が壁沿いに規則正しく巡り、出入り口施設をもつものと、柱穴が不規則で出入り口施設をもたないものである。前者は2・28・56・57・59号で、65号もここに含まれる可能性が高い。このうち59号のみが直径4mとやや小振りであるが、他は5.5～7.5mの規模となる。56・57号の出入り口施設は特に大規模で、いわゆる柄鏡型を呈する。後者は1・7・16・23・53号で、プランが不明確で規模が分からないものが多い。炉の位置も、前者は住居中央よりやや出入り口側でしっかりと作られているのに対し、後者は位置に規則性がなく、しっかりとしていないものが多い。

II c 期 (第364図)

20号住居跡は炉跡しか検出されていないため省略した。図示した2軒は形状が大きく異なる。22号住居跡は直径4m程度と小さく、柱穴の配置も不規則である。出入り口施設らしきピットも存在するが、その形状も不明確である。それに対し64号住居跡は1/3程度しか残存していないものの、推定直径は10m以上と大きく、柱穴も壁に沿って規則正しく配される。

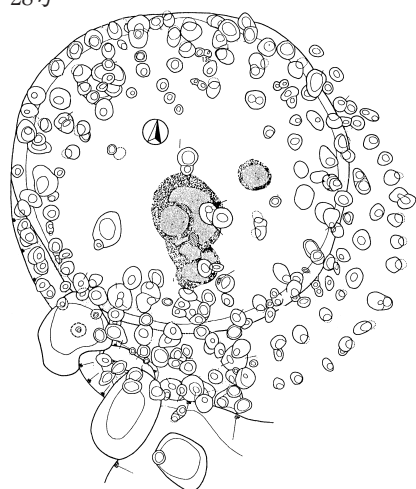
III a 期 (第365図)

この時期も2軒のみである。21号住居跡は直径8m前後とやや大きく、壁に沿って柱穴が巡る。炉は住居中央よりやや片側に寄り、出入り口施設は認識できない。18号住居跡は少なくとも半分は類似するプランをもつと推測されるが、遺存状況が悪く全体像は不明である。

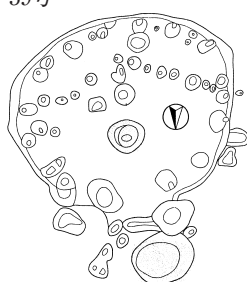


第363図 豎穴住居跡一覽 (1)

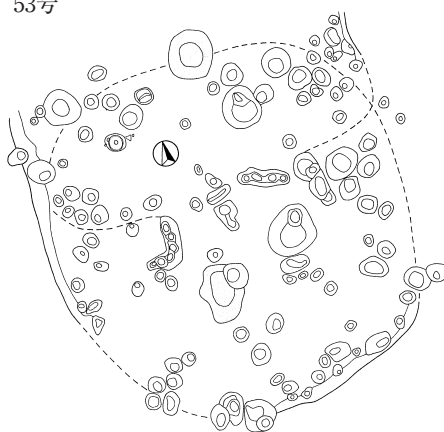
Ⅱb期
28号



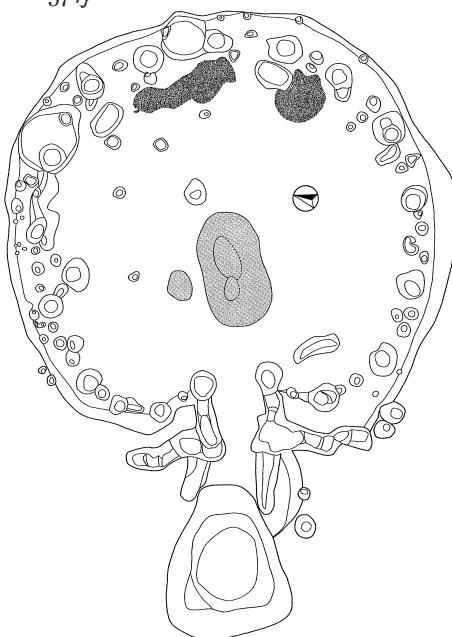
59号



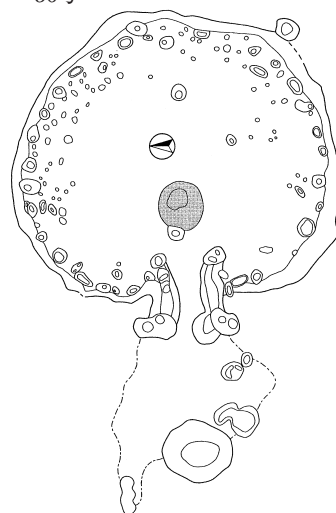
53号



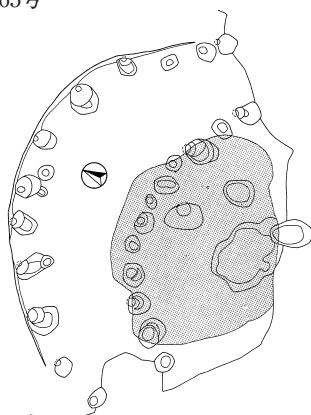
57号



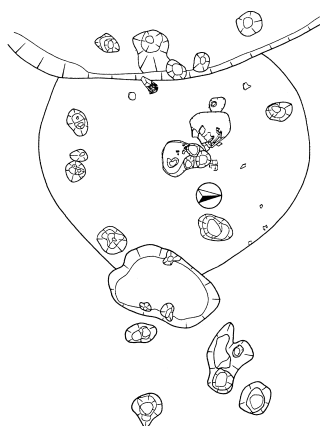
56号



65号



Ⅱc期
22号



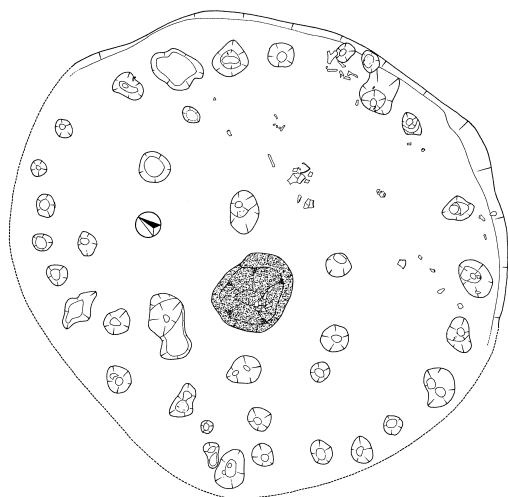
64号



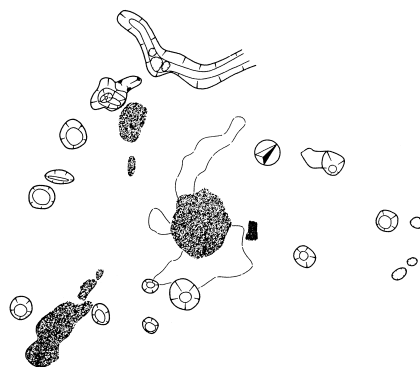
0 1/120 2m

第364図 竪穴住居跡一覧 (2)

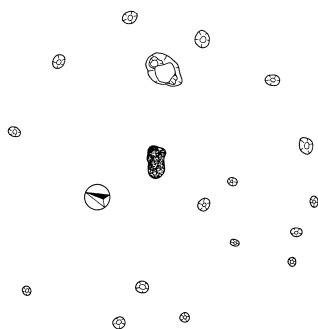
Ⅲa期
21号



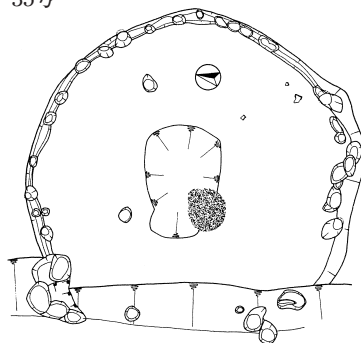
18号



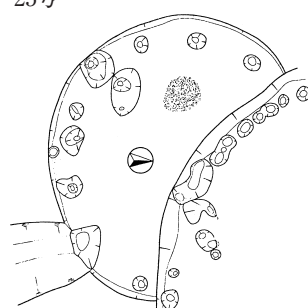
Ⅲb期
6号



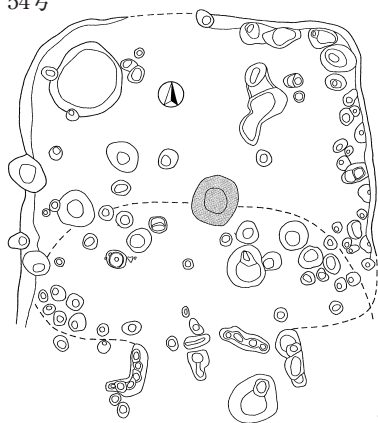
35号



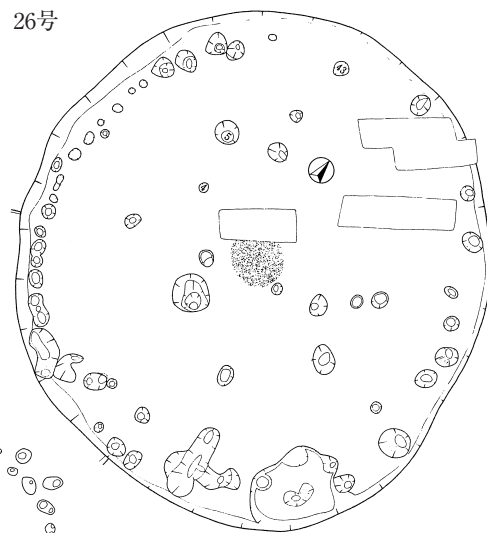
25号



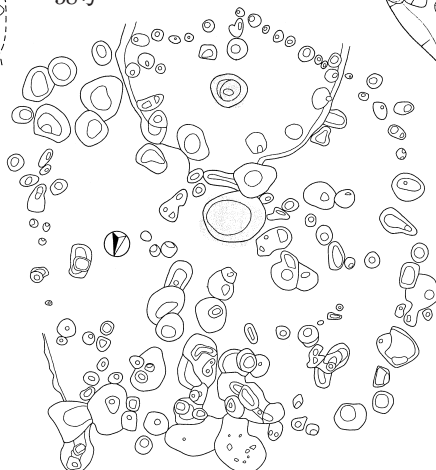
Ⅲc期
54号



26号



58号



0 1/120 2m

第365図 竪穴住居跡一覧 (3)

Ⅲ b 期（第365図）

3軒検出されるが、いずれも直径5.5m前後の整った円形を呈し、壁に沿って柱穴が巡り、炉が住居中央よりやや寄った位置に作られる。柱穴の数や規模がそれぞれ微妙に異なるほか、35号住居跡では柱穴に重なるように周溝も作られる。

Ⅲ c 期（第365図）

いずれの住居跡も壁に沿って柱穴が巡り、炉跡が住居ほぼ中央から検出されている点は共通するが、26号住居跡ではプランがほぼ円形なのに対し、58号ではやや角が形成されるのが認められ、53号では隅丸方形というべき形状である。出入り口施設は、56・58号ではそれらしいピット群が観察されるだけであるが、54号では明らかに張り出し部をもつ出入り口施設が作られるようになる。やや不規則であるが、支柱穴と思われるピットも検出されている。規模は、54号が一辺5.5m、26号が直径8.6mである。

Ⅳ a 期以降（第366～367図）

これ以降はそれまでとは規模や形状が大きく異なるようになり、様相が極めて捉えにくい。プランが明瞭であるのは、SS1区から検出されたD字型を呈する大形の66A・B・C号住居跡と、半分しか検出されていない67A・B号住居跡である。いずれも規則正しい支柱穴と壁柱穴が特徴的で、66A・B・C号からは出入り口施設が検出されている。調査の所見では縮小されていたことが明らかになっているが、第1節で呈示した遺物の時期（Ⅲc、Ⅳa、Ⅳc）に対応しているかは不明である。なお、炉跡と思われる遺構や焼土は多数検出されているが、中央部に位置するものが最も新しい66A号住居跡のものである以外は、帰属は不明である。SN027土坑群は竪穴住居跡ではないと判断されたものであるが、それに類する性格を持つ可能性があるとして掲載した。とはいうもののピットの配置、炉跡もしくは焼土などの検出状況は雑然としている。今回報告する60号住居跡は、調査時に竪穴住居跡の可能性が濃厚とみなされているが、プランを見る限りSN027土坑群同様、規格性が希薄な点で共通している。いずれもⅣa期（曾谷式期）であるが、この時期の特質であるのか不明である。時期は離れるが、晩期中葉と考えられるE4区晩期遺物包含地点から検出された竪穴状の遺構も掲載した。直径10m以上とかなり大きく、壁に沿って柱穴状のピットが巡る。柱穴といっても66号住居跡の支柱穴よりはるかに大きい。炉跡はかなり寄った位置に複数構築される。床面はほとんど硬化していなかったという。

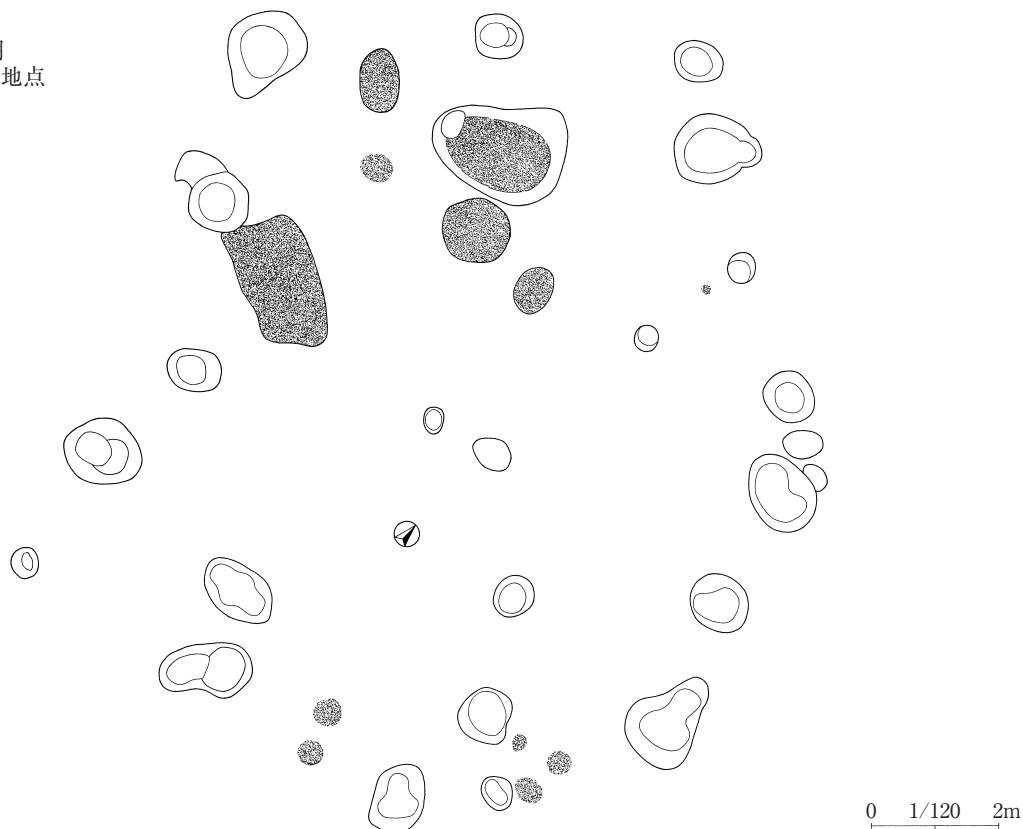
以上を簡単にまとめると、Ⅰ～Ⅱc期にかけては、構造の異なる2種類の住居跡が併存している状況が認識できる。少なくとも出土遺物などに大きな違いは見られず、遺物からその理由を探るのは難しい。建物の用途の違い、居住者の性格（階層もしくは出自）の違いなど、様々な理由が考えられようが、今後の検討課題である。Ⅲb期において形状の上からは単一化されたように見えるが、やがてⅢc期から再び分化の兆しが見える。この形態の違いに関しては、円形プランは在地の系統を継ぐものであるのに対し、隅丸方形プランは東京湾西岸の系統に影響を受けているとする説が提示されているが^(注6)、数が少ないためなお検討の余地がある。ただし柱穴や炉の配置など、住居の構造に関わる要素に関しては大きな変化は無いと認められる。Ⅳa期に至って規模の点において著しい分化を遂げる。SS1区のような大形住居については、規模の特異性に目が奪われがちであるが、D字型という平面形態はともかく、構造はそれまでの竪穴住居跡の系譜を継承していることに留意すべきで、60号

Ⅳ期以降
66～68号



第366図 竪穴住居跡一覧 (4)

Ⅳ期以降
E4区晚期
遺物包含地点



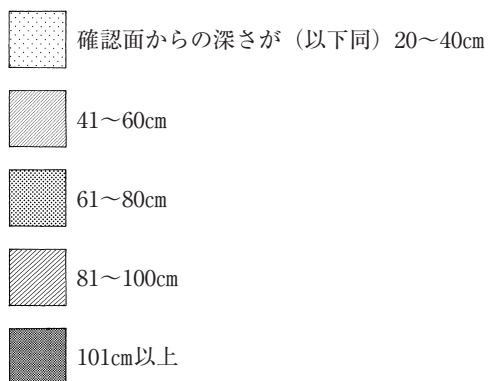
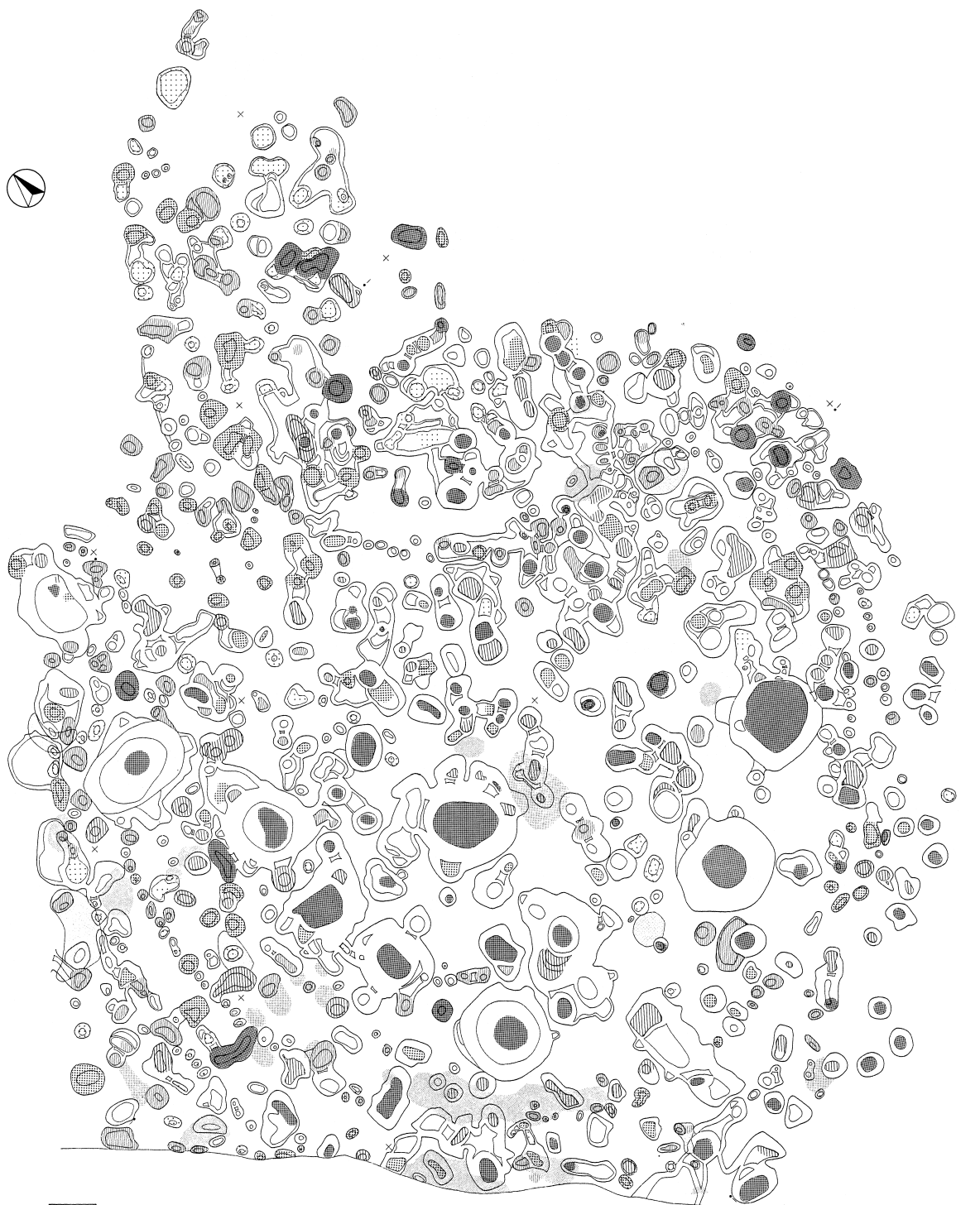
第367図 竪穴住居跡一覧 (5)

住居跡や SN027土坑群（これは住居跡とみなされていないが）と比べるとそれは明らかである。E4区晚期遺物包含地点で検出された遺構は、形態上はそれまでの竪穴住居跡と同じ系譜上に位置するとみなすことが可能であるが、柱穴の規模などをみると建物自体が極めて大形化したことを示している。どのような上屋構造であったのか、遺構の性格を含め検討課題である。

3 大形住居跡について

縄文後期に出現するこうした大形住居については、これまで用途に関する様々な考察が行われている。66号住居跡に関しても、構造や用途についてある程度の道筋を示すことを意図したが、実際には度重なる建て替えにより、それぞれの時期に帰属する柱穴や炉跡を決定するのが極めて困難な状況となっている。出土遺物も平面分布はともかく、垂直分布が不明なものが多く、どの遺物がどの段階か判断に迷うものが多い。そこでここでは作業の中途段階とでもいうべき柱穴の深度図を示し、傾向について概観するにとどめたい。

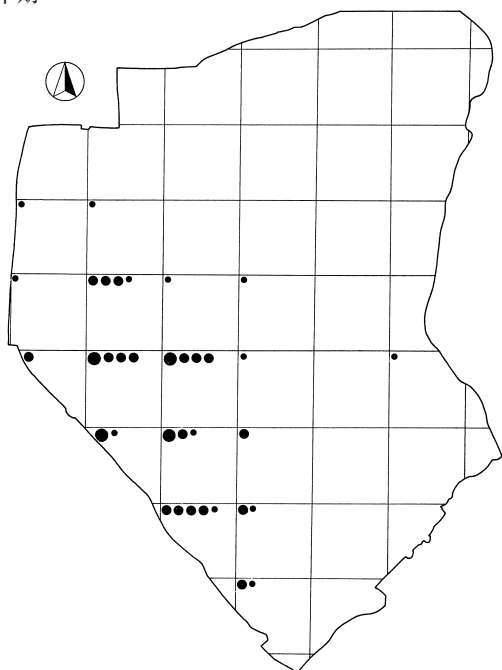
第368図は66～68号住居跡から検出された土坑、ピットの深度を示したものである。3重に巡る柱穴列のさらに中央部に、径50cm、深さ1m前後の土坑が規則正しく円形に配置される。いずれの土坑も2基以上がつながったような形状を呈している。これらは最も新しい66A号住居跡の支柱穴と理解される。2基ずつ検出されていることから、66A号住居跡も建て替えが行われた可能性が強い。若干外側にあるN200番台の土坑に接するように、やはり同じような規模の土坑が観察される。これは中間の66B号住居跡の支柱穴とみなされる。さらに外側の66B号住居跡の壁柱穴に沿うように、同じ規模の土坑が検出されている。これは最も大きい66C号住居跡の支柱穴であろう。壁柱穴も



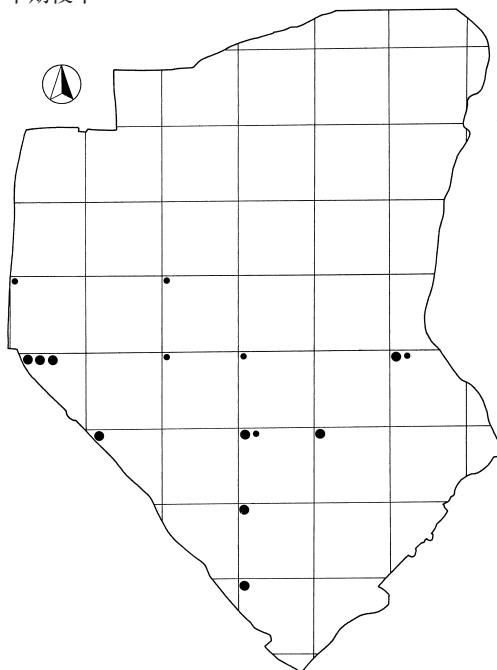
0 1/120 2m

第368図 SS1区土坑・ピット深度

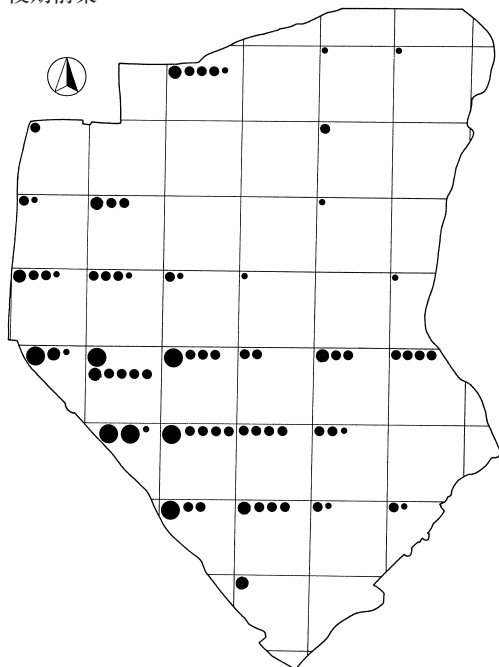
早期



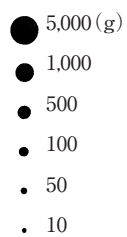
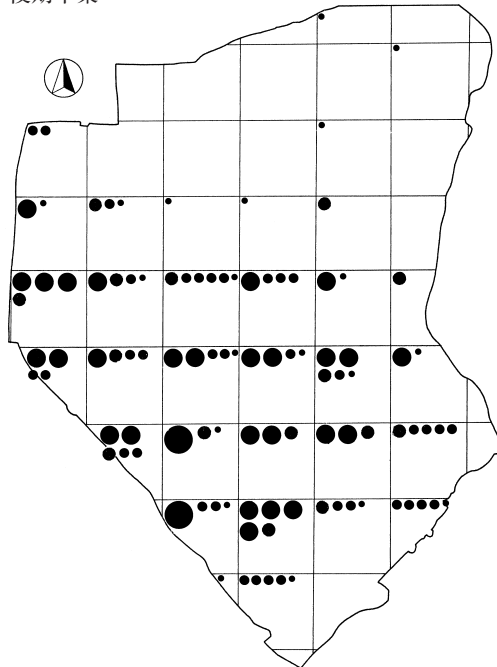
中期後半



後期前葉

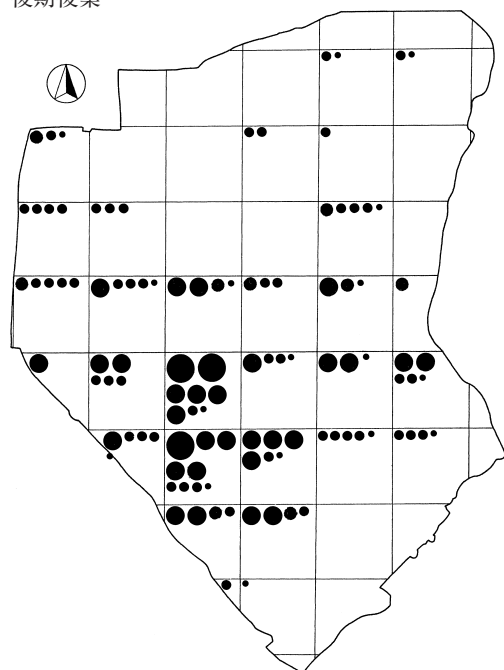


後期中葉

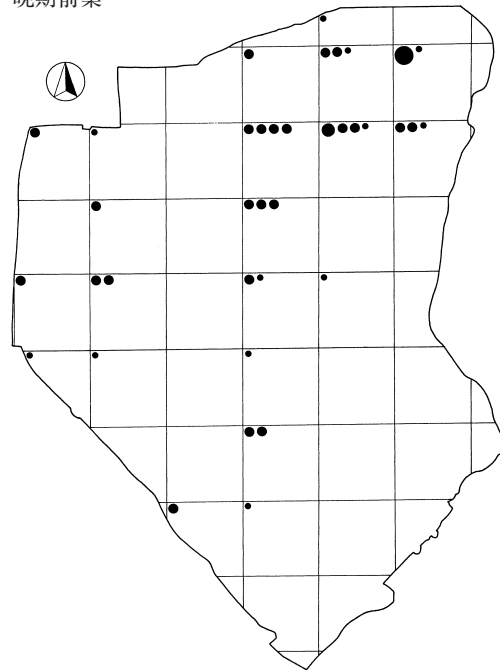


第369図 SS1区時期別土器重量分布 (1)

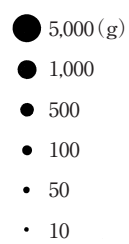
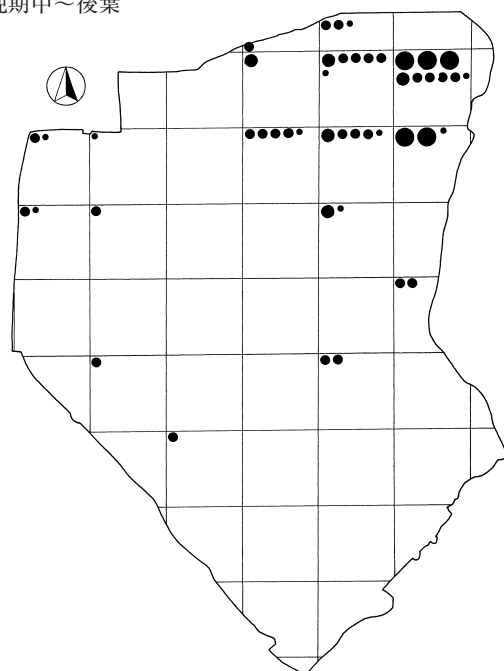
後期後葉



晩期前葉

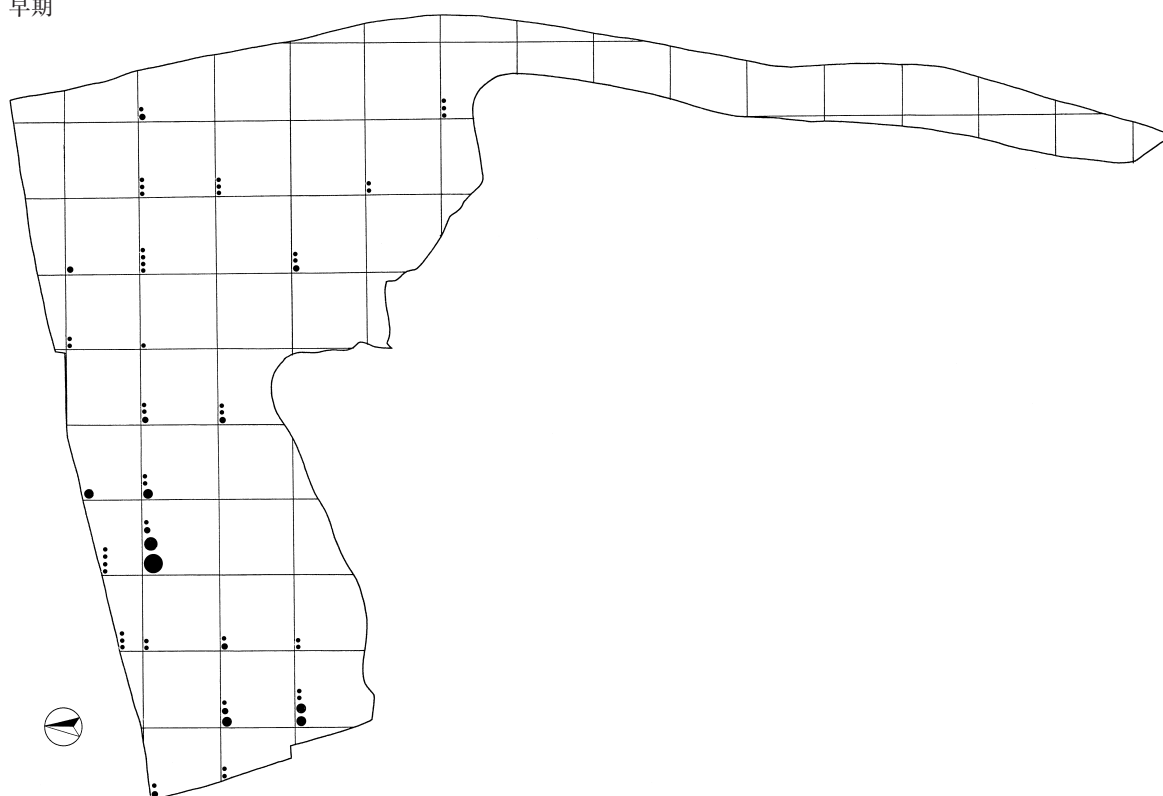


晩期中～後葉

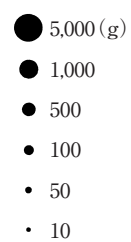
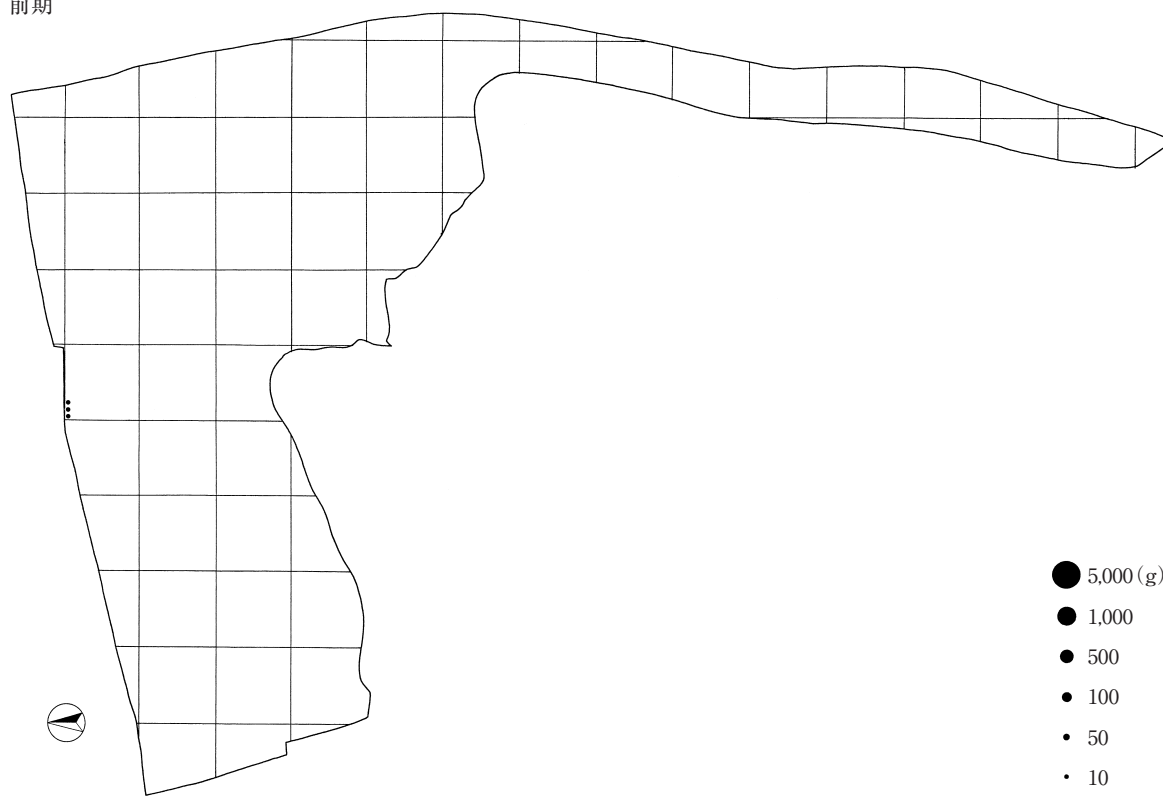


第370図 SS1区時期別土器重量分布 (2)

早期

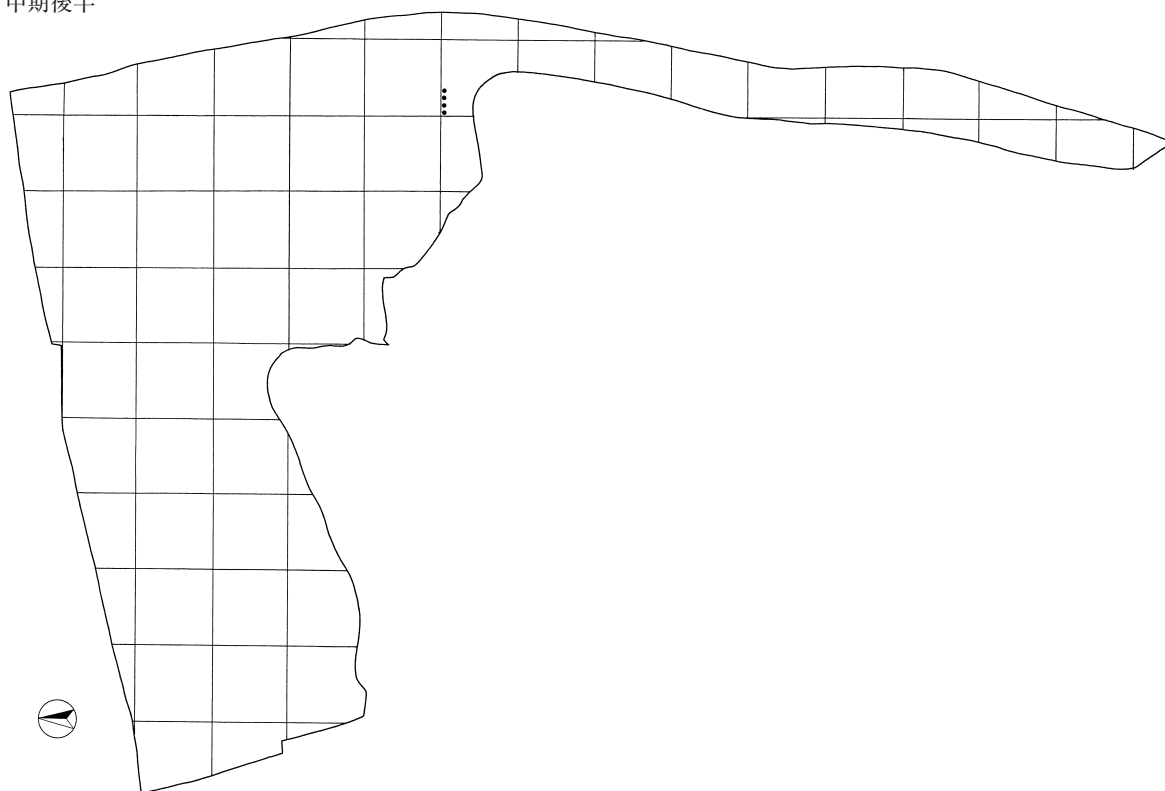


前期



第371図 SS5区時期別土器重量分布 (1)

中期後半

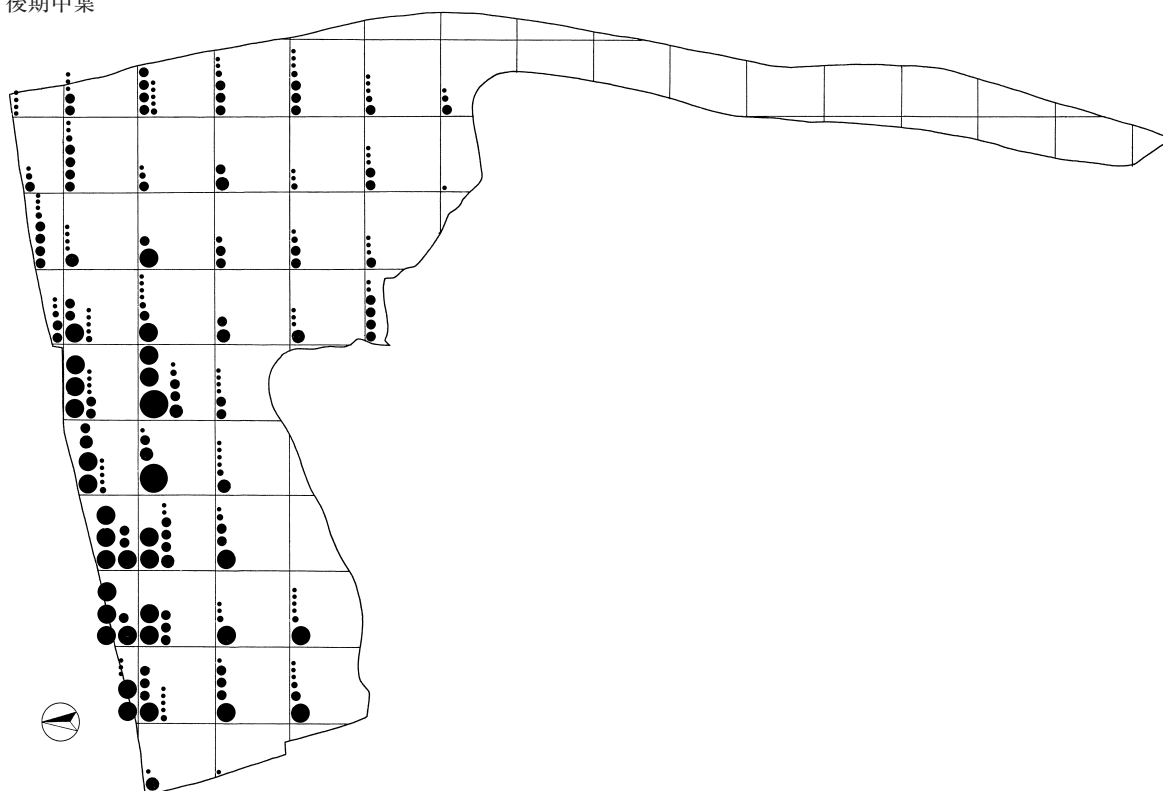


後期前葉

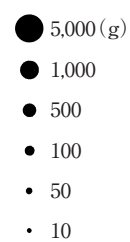
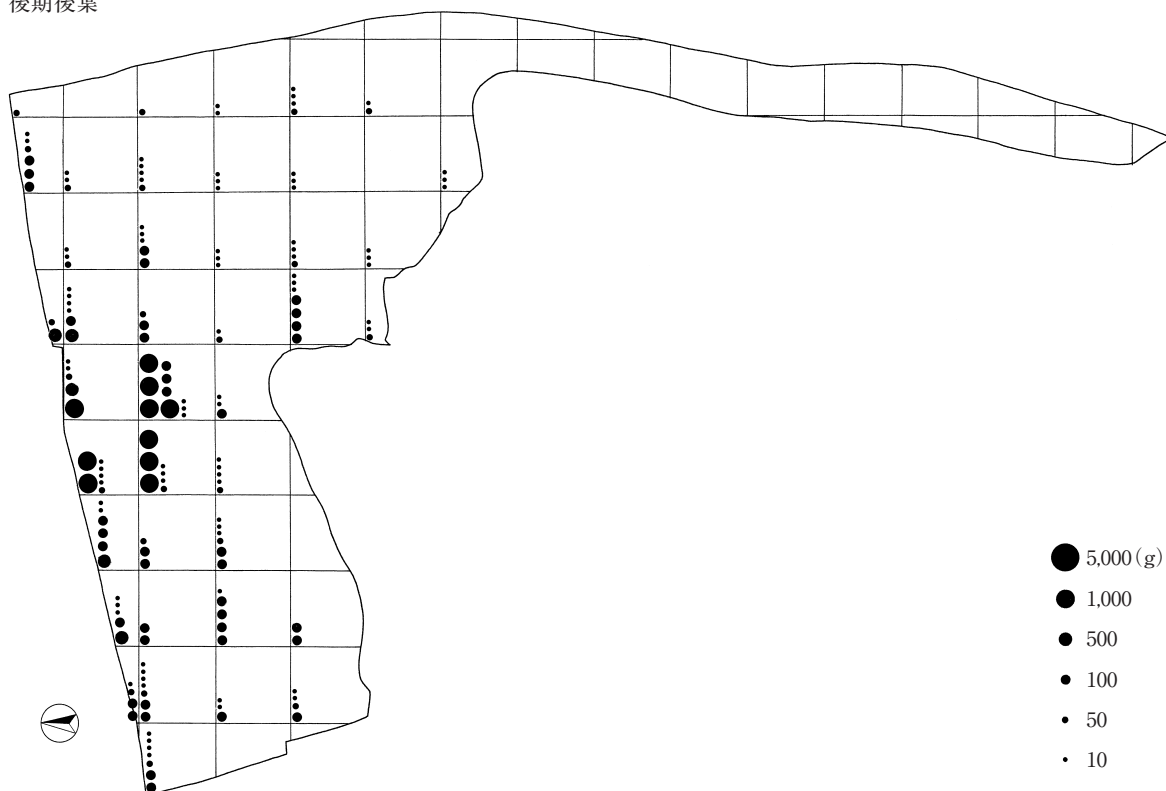


第372図 SS5区時期別土器重量分布 (2)

後期中葉

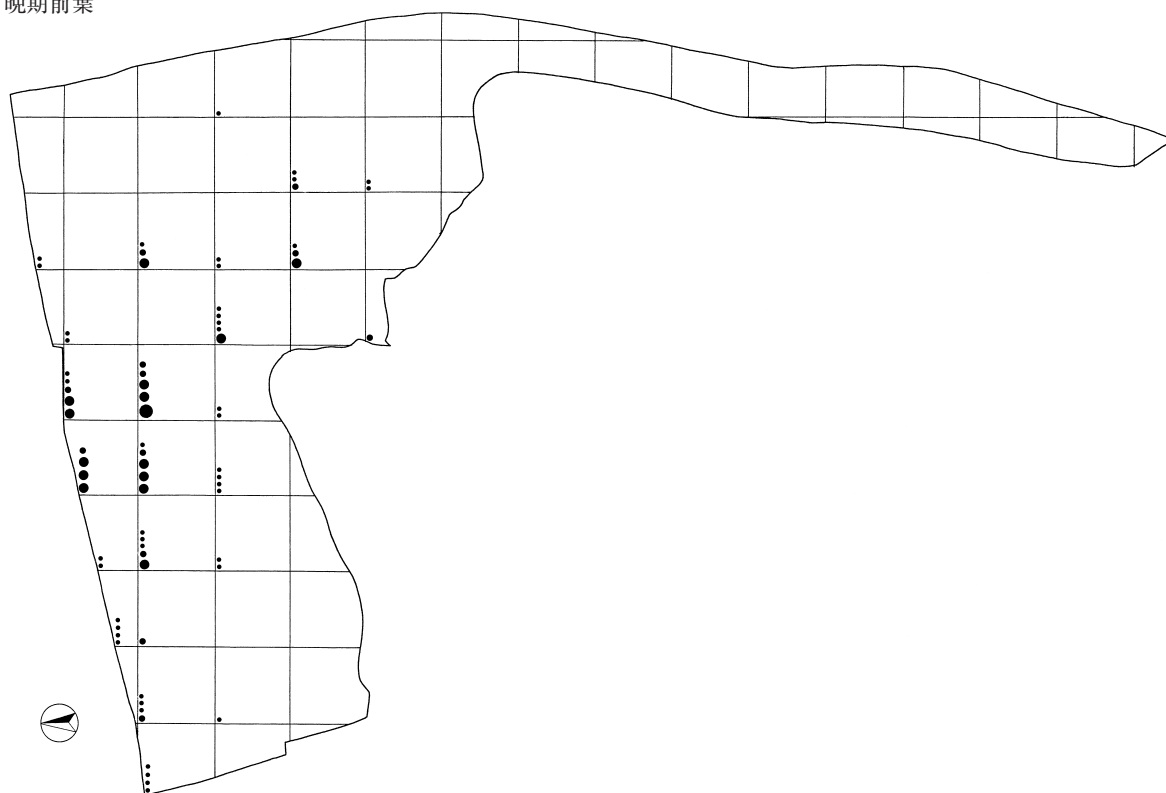


後期後葉

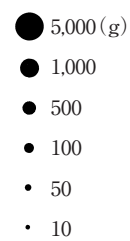
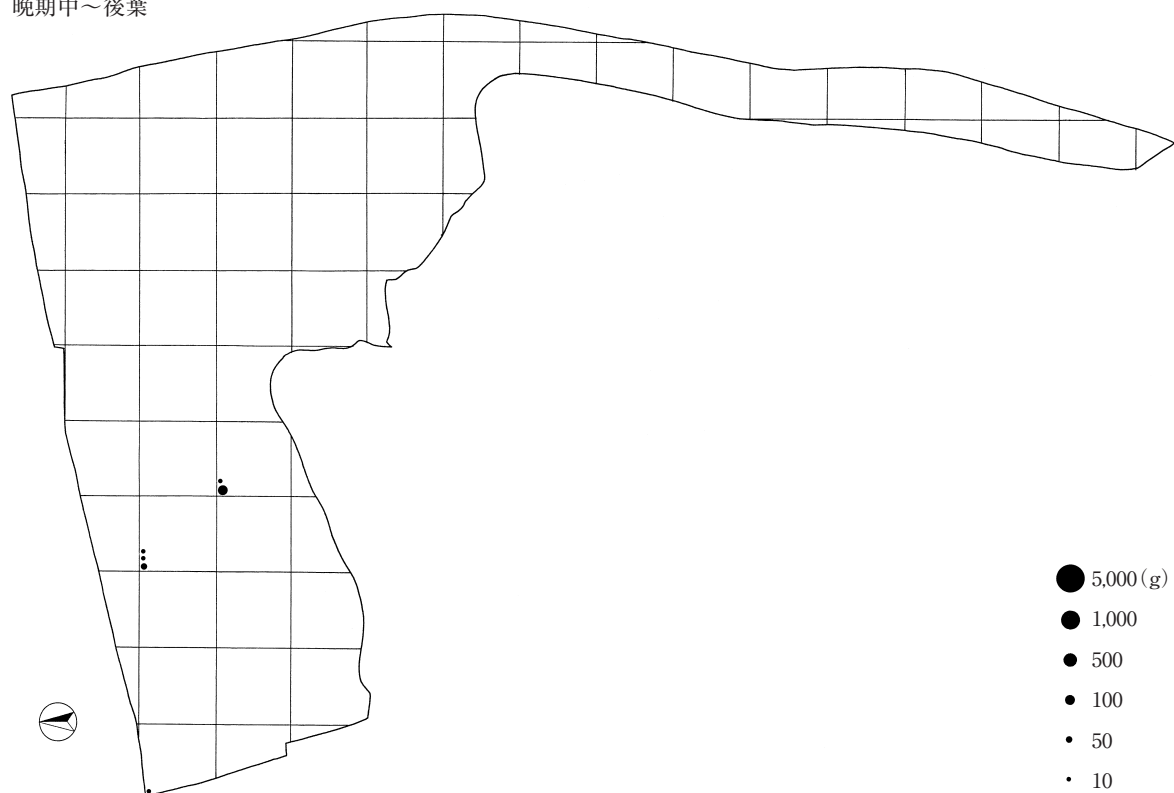


第373図 SS5区時期別土器重量分布 (3)

晩期前葉

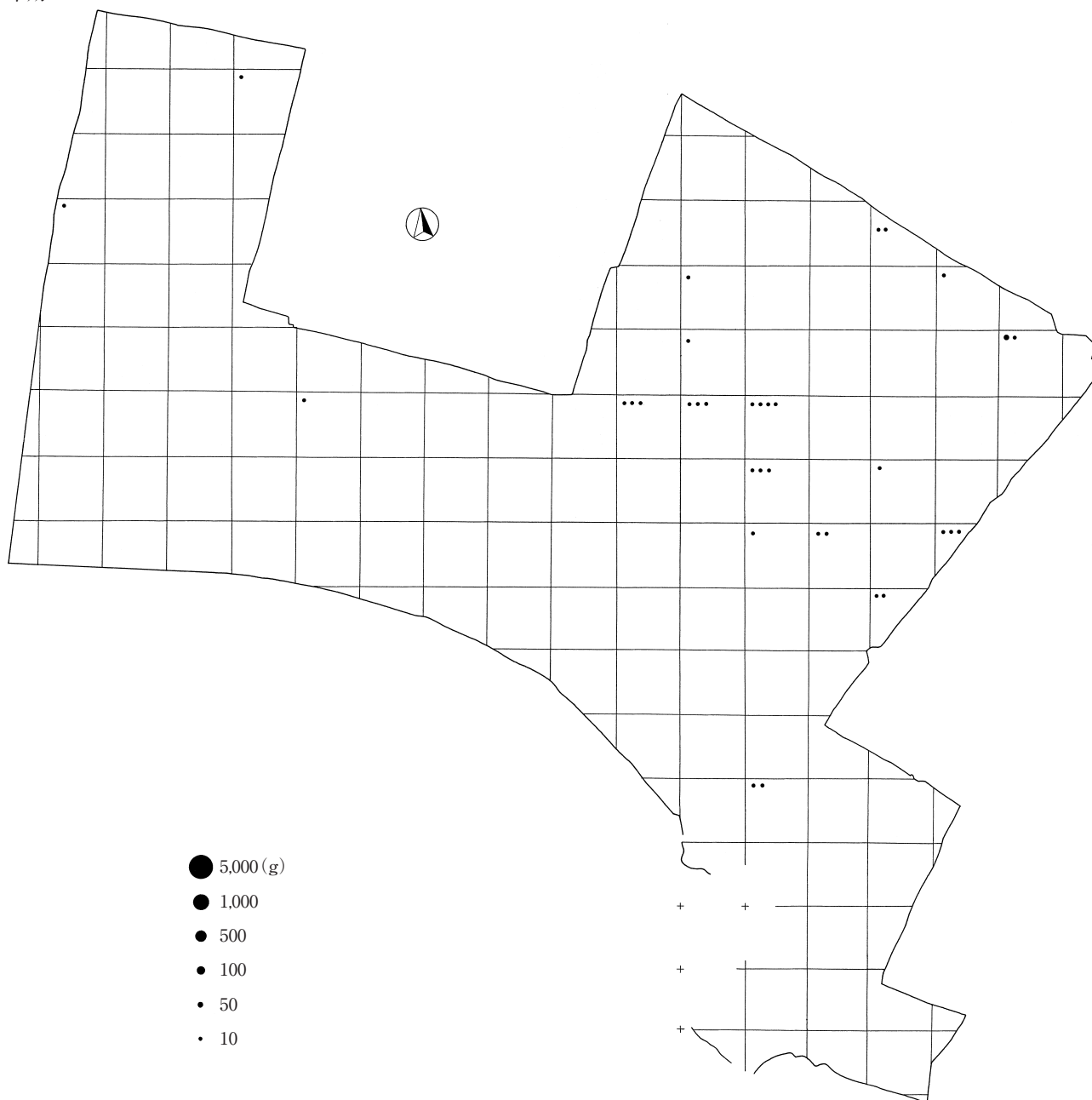


晩期中～後葉



第374図 SS5区時期別土器重量分布 (4)

早期

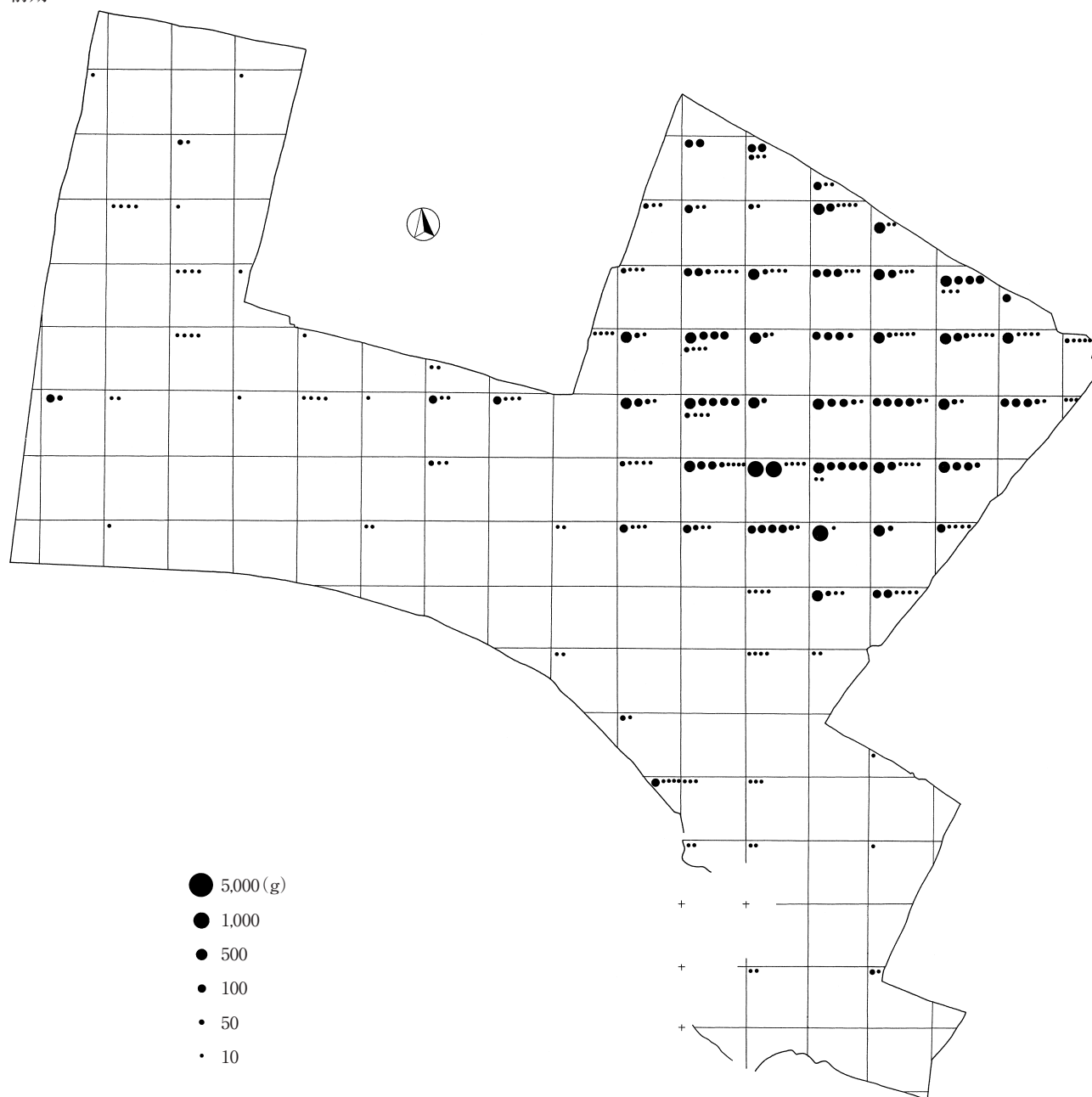


第375図 3次調査区時期別土器重量分布(1)

数基の小ピットと1基のやや大きなピットとが組になって規則的に配され、強度計算がなされていたことが推測される。平面形態は「D」字型であるが壁が直線になる部分に出入り口施設が作られる。これは建て替え後も共用されたようである。炉は最も新しい66A号住居跡のものしか検出されていないが、住居内には焼土があちこちに散布しているのが観察される。ただしそれが炉の痕跡なのか、別な行為の所産によるものか明らかではない。

出土遺物をみると、異形台付土器と鈎手土器が非常に多いのが目を引く。多数出土した破片で同一個体と思われるものはほとんどなく、多くの個体がこの場で破棄されたと推測される。また、熱を受けた土器も存在し、第143図71・第150図187・第156図294などのように一部発泡化するほど顕著なものもある。石器をみると磨石類が極めて多く、特に敲打痕があるものが目立った。また、石棒・石剣

前期



第376図 3次調査区時期別土器重量分布(2)

類の破片も多数出土しているが、それらにも敲打が加えられたものが多い。もちろんこうした火を使う行為や、礫石器による敲打といった行為は通常の竪穴住居跡でも行われたであろうから、こうした個々の状況をもってすぐに特殊な祭祀などを想定するわけにはいかないが、一つの建物空間でこうしたやや特異な行為の痕跡が併せて認識されるのは、注目すべきであろう。想像力に任せた推論は避けるべきであるが、現場での事実の認識と、その集積・分析によって、遺構・遺物の背後にある人々の営みが復元できると考える。

4 グリッド出土土器の分布と変遷

グリッドから出土した土器について、重量分布を通して時期ごとの傾向をまとめてみたい。なお、ここでのいう時期は、中期前半は五領ヶ台式・阿玉台式・勝坂式、中期後半は加曽利E式、後期前葉

中期前半



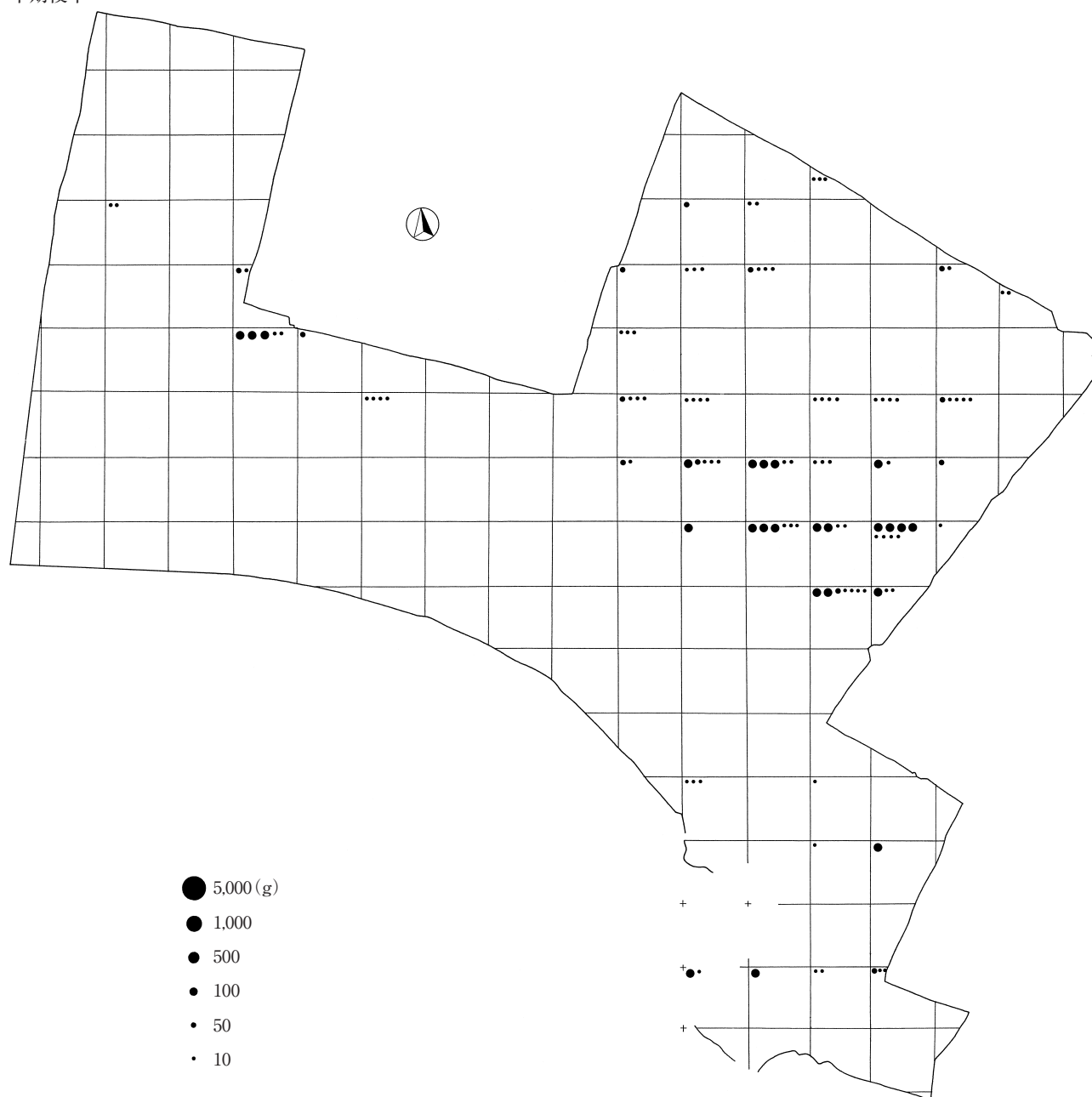
第377図 3次調査区時期別土器重量分布 (3)

は称名寺式・堀之内式、後期中葉は加曾利B式、後期後葉は曾谷式・後期安行式、晩期前葉は安行3a～3b式・姥山Ⅱ式、晩期中葉は安行3c～3d式・前浦式（前浦直前式）、晩期後葉は千網式・荒海式を概ね示す。出土遺物の項で述べたとおり、この区分は必ずしも遺跡の動態とは合致しておらず、見直す必要があろう。

SS1区（第369～370図）

SS1区は大形住居跡が大部分を占めるため、第2章中で説明する方が良かったかもしれないが、編集の都合上ここにおいた。まず早期であるが、南西部にやや密な出土域が認められる。遺存状況が悪いながらも炉穴が検出されており、それに関わる遺物と考えられる。その後前期から中期前半までは、全く出土がみられない。中期後半は西広貝塚で竪穴住居跡の構築が開始される時期であるが、

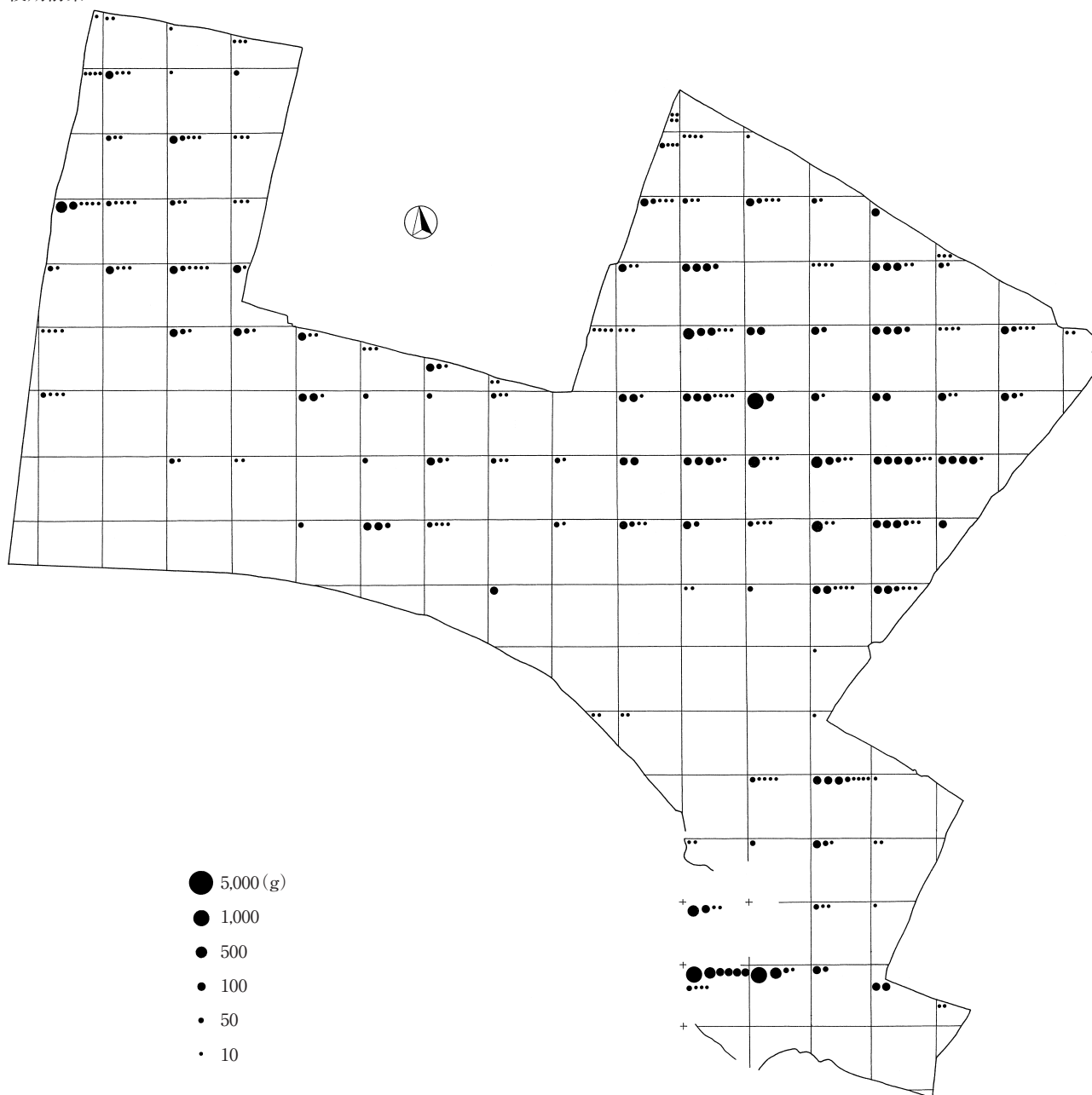
中期後半



第378図 3次調査区時期別土器重量分布(4)

SS1区では極めて散漫な出土状況にとどまっている。後期前葉になって、南西部を中心に極めて密な出土状況を呈するようになる。この時期に作られたと考えられる遺構はSS1区では検出されておらず、隣接する64・65号住居跡に関わるものが大部分と考えられる。とはいうものの、調査区南東部まで分布は及んでおり、何らかの遺構が構築された可能性は否定できない。後期中葉になると出土量はピークを迎え、調査区南半分全面に濃密に分布する。しかし後期後葉になると、量は相変わらず多いものの、出土域は中央部のやや狭い範囲に縮小する傾向が見られるようになる。大形住居跡の構築と機を一にしており、遺構の分布がこのエリア内だけで完結していくようになると考えられる。晩期になると出土量は極端に減少し、また、これまでとうってかわって調査区北東部に分布の中心が移る。環状集落の中心部に晩期の遺物包含地点が形成されるのに符合した状況といえる。

後期前葉



第379図 3次調査区時期別土器重量分布 (5)

SS 5 区 (第371～375図)

SS 5 区は東側貝層の南東側に当たり、やはり貝層近くからの出土が多かった。早期以前は他の調査区に比べ燃糸文土器の出土が目立った。前期から中期にかけては極めて少ない。後期前葉に至って多数の遺物が出土するようになる。SS 5 - 42貝層はこの時期であるが、それも含めた貝層近くの調査区西部に集中する。後期中葉も出土量は多いが、前葉に比べ分布の中心が北側に移るのが認められる。後期後葉になると出土量が減少し分布域が限定される。その中心は60号住居跡である。晩期になると出土量は激減する。集中域も観察されず、晩期には利用されない空間となったことが分かる。

3次調査区 (第376～384図)

3次調査区は馬蹄形を呈する貝層からは全く外れたエリアであり、それほど成果が期待された調査

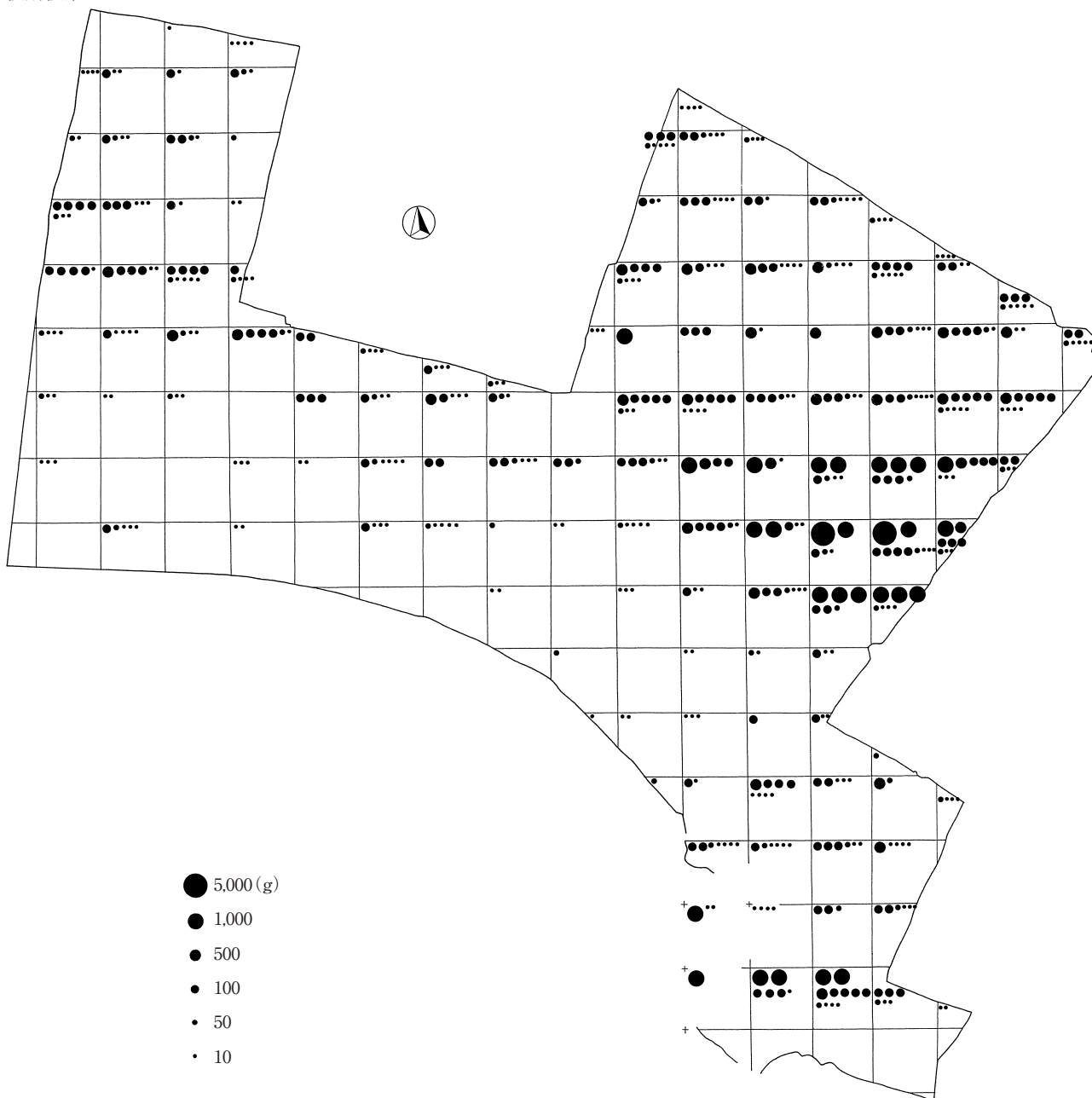
後期中葉



第380図 3次調査区時期別土器重量分布 (6)

区ではなかったようである。しかし、遺構こそ検出されなかったものの100箱にも及ぶ遺物が出土し、何らかの活動痕跡を認めざるを得なくなった。早期以前については全体に散漫で、積極的な評価はできない。しかし前期になると、他の調査区とは異なりまとまった集中域が認められるようになる。それらは貝塚本体の位置する調査区南東部ではなく、北東部に集中する。北側には白旗川谷が位置しており、そこに面した生活面が存在した可能性が指摘できる。特に1点ではあるが玦状耳飾が出土したことは、ある程度の規模をもった集落に類する生活空間も想定できる。中期は出土量が激減するが、僅かながら前半の遺物も出土している。後半になって出土量が増加するが、北東部のやや狭い範囲にとどまる。後期になって調査区全体に遺物の出土がみられるようになるが、密度が濃いのはやはり貝層付近の調査区南部である。後期中葉になって分布の中心は調査区東部に移り、それは晩期に

後期後葉



第381図 3次調査区時期別土器重量分布 (7)

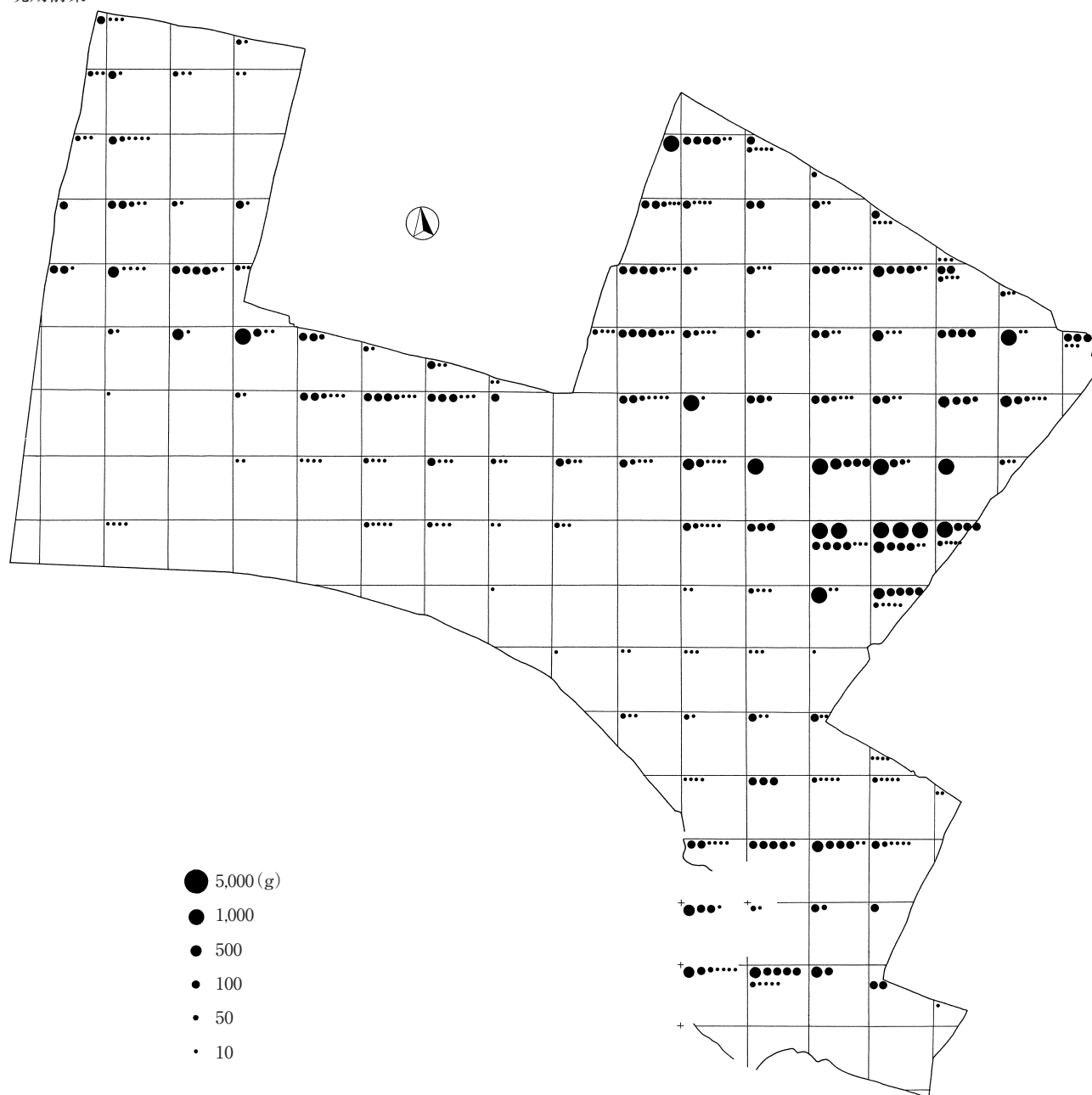
至るまで継続する。後期までは貝層と連動した形で隣接するグリッドにも集中域が観察されるが、晩期になると明らかに北側の台地平坦面に分布の中心面が移り、末葉まで続いていく。

以上をまとめると、貝層が形成される中期末から晩期前葉にかけては、貝層の範囲もしくは馬蹄形の集落の範囲に規制される（制約を受ける）形で遺物の分布や集中が観察されるが、それ以外の時期では全く異なる空間利用が行われたことが読み取れる。特に晩期に関しては、それまでの馬蹄形に規制された空間が、大きく変換していく様相が示されていると考える。そうした状況を促した要因は何か、現在進めている斜面貝層の整理を通してより詳しく迫ることができると思われる。

5 遺構群の変遷

ここまでの成果をふまえた、西広貝塚の時期別遺構配置を第385図に提示した。最後に、遺構形成

晩期前葉



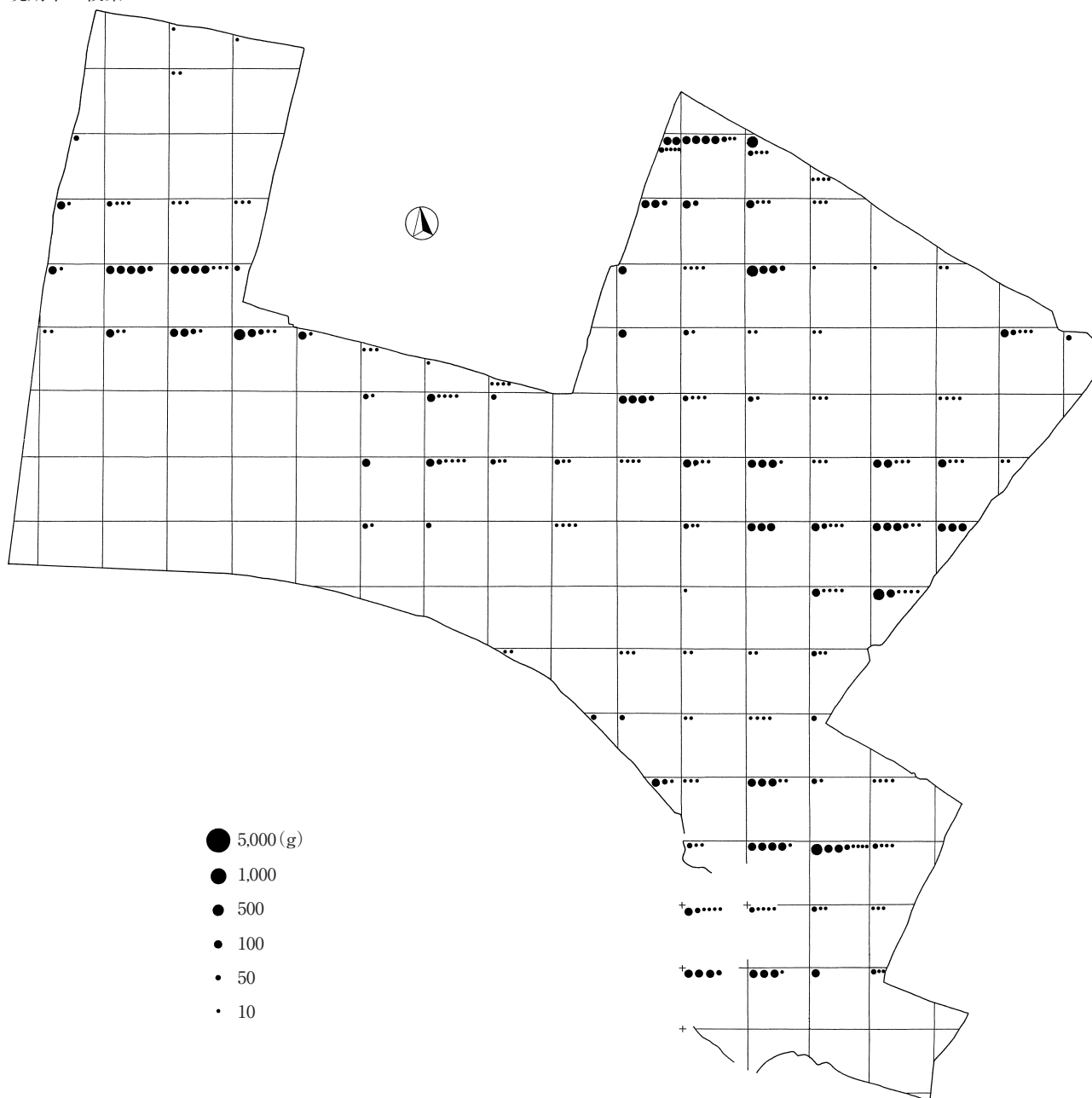
第382図 3次調査区時期別土器重量分布 (8)

時期以外も含め、縄文時代の西広貝塚の変遷を概観したい。

西広貝塚に人間の足跡が示されるのは、撚糸文期末葉が最初である。1次調査時に、数は少ないながら花輪台式の良好な資料が出土しており、今回も同時期の土器の出土を見た。花輪台式に混ざって、いわゆる金堀式に類似する一群の土器が出土している^(注7)。なお、いわゆる陥穴とされる土坑が6基検出されている。時期は撚糸文期を中心とした時期とされているが、今回検出された土坑が、土器と同時期か否かは分からない。

条痕文期の資料は従来あまり知られていなかったが、今回2次調査SS1区から炉穴の残骸と、同時期と思われる土器のまとまった出土があった。同時期の遺跡としては、国分寺台地区に諏訪台遺跡という極めて大規模な遺跡が存在するが、そこから1kmほど養老川を遡った場所に西広貝塚は位置し

晩期中～後葉

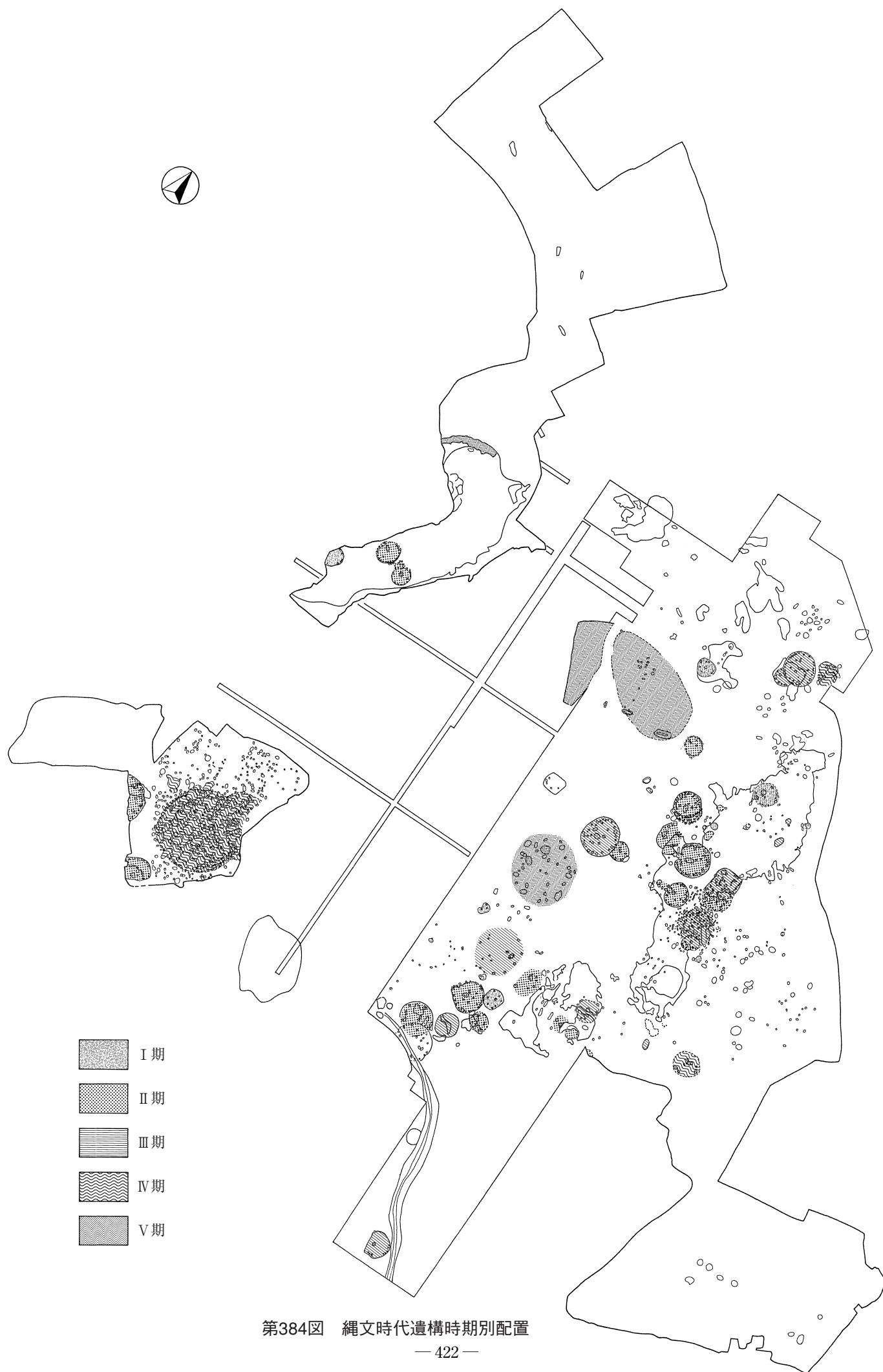


第383図 3次調査区時期別土器重量分布 (9)

ており、拠点集落とキャンプサイトという関係を想定することもできよう。

前期の資料は後半に集中する。従来この時期の資料は上総地区では少なく、その意味では貴重である。黒浜期の資料は少ないが、諸磯 a 式期から増え始め、浮島Ⅱ・Ⅲ式期にピークに達する。諸磯 b 式の出土量も多く、東京湾に面した市原地区の特質といえる。出土地区は第3次調査区に集中し、当該期の遺構が存在した可能性を指摘できる。

中期は、前半はもちろん、後半も加曽利 EⅢ式まで遺構が存在せず、遺物もほとんど出土が見られない。加曽利 EⅣ式期 (Ⅰ期) に至って遺跡北側を中心に、遺構と貝層の形成が始まる。中期末～後期初頭に限定すれば、遺構群は台地上に散在していたものと思われ、後の馬蹄形のランドスケープが意識されていたかは不明である。この時期は集落遺跡の分布に大きな変容が見られる時期で、中期に



第384図 縄文時代遺構時期別配置

栄えた大規模集落はほとんどが中期末までに姿を消し、逆に中期末に居住が開始される集落で、後期にいたって大規模化する例が多い。西広貝塚も後者の一例といえよう。前者の例としては、東側の谷を隔てて立地する山倉貝塚が挙げられる。この間、いかなる変革が起こったのか、また、両者の遺跡のつながりについても重要な問題である。

西広貝塚では後期の堀之内式期が最も多くの遺構が構築され、貝層の形成もさかんである。西側の斜面には堀之内1式古段階（Ⅱa期）に住居跡が構築されるが、これらは廃絶後時を経ずして覆土に貝層が堆積する。この貝層の形成は堀之内1式中～新段階（Ⅱb期）と考えられるが、同時期の住居跡が遺跡東側に構築され、全体として馬蹄形の景観がここで初めて成立する。東側の住居跡も、廃絶後すぐに貝層が堆積しており、住居の構築と廃絶、貝層の形成が間断なく行われたことが分かる。

その後堀之内2式（Ⅱc期）から加曽利B2式（Ⅲb期）までは遺構の数が縮小する。南西斜面からは、堀之内2式の住居跡の覆土に加曽利B1～B2式の貝層が堆積している状況が検出されている。また、2次調査区からも加曽利B2式の遺物がまとまって出土しており、遺跡南西部にこの時期の遺構群が存在した可能性は強い。東側貝層からは引き続き遺物が出土しているが、西側斜面では貝層の形成は限定的なものになる。Ⅱb期においては、馬蹄形の景観そのものが当時の人々をリアルタイムで結びつける規範としての役割を担っていたと考えられるが、Ⅲb期以降は先祖伝来より引き継がれた歴史的景観へと変化した可能性が強い。

遺構群の次のピークは加曽利B3式（Ⅲc期）～安行1式期（Ⅳc期）である。時期によって遺構の分布域は異なり、加曽利B3式期は東側貝層、曾谷式期は北東部と南東部にそれぞれ遺構が形成される。その中で南西部には加曽利B3式～安行1式にかけて、大形住居跡を中心とした遺構群が構築され、当該期の中心であったと推察される。やがて、晩期前葉にかけて遺構群は減少していく。この後、晩期中葉に再び活動痕跡が記されるが、主要な部分はシリーズⅢに係るため、今回は省略したい。

最後に、いくつかの問題点を示しておく。西広貝塚は、なるほど外観を見る限り大形の馬蹄形貝層をもち、拠点集落とみなすのに不自然さはないように思える。しかしながら、例えば土器石遺跡（武士遺跡）のように、堀之内1式だけで数百軒規模の竪穴住居跡が構築されるような遺跡が、近隣に同時存在していたことを考えると、貝層の規模に不釣り合いなほど遺構の数は少なく、いわゆる拠点集落の概念とは大きく異なる姿が浮かび上がってくる。また、遺構群にしても数のピークがいくつかあるものの、その間の空白期も目立ち、継続的に営まれたというよりはかなり断続した状況がうかがえる。一方で、例えば骨角貝製品の出土量は極めて膨大であり、これも通常の集落遺跡の常識を越えている。こうした特質が西広貝塚の性格を物語っていると考えられるが、なお、詳細な分析を必要とするところでもある。

以上、雑駁であるが縄文時代の遺構について、簡単にまとめてみた。もとよりこれは暫定的なものであり、繰り返しになるが貝層出土資料の成果は反映されていない。最終的にはそれらをふまえた西広貝塚の姿を示す必要がある。シリーズⅢに向けての課題としたい。

注

- 1 近年は、遺跡の分布や集落の動態に即した時期区分を確立しようとする試みもみられる。西野雅人 2004「(1) 貝塚」『千葉県の歴史 資料編 考古4 (遺跡・遺構・遺物)』千葉県参照。

- 2 加納 実 2002「南関東における堀之内式土器の様相」『第15回縄文セミナー 後期前半の再検討—記録集—』縄文セミナーの会。
- 3 概報の編集に当たって、この点は特に意識されたということである。大貫静夫氏、西田泰民氏の御指摘による。
- 4 菅谷通保 2001「『曾谷式』解題試案」『第14回縄文セミナー 後期後半の再検討』縄文セミナーの会。
- 5 この大塚論文には今回報告する資料の写真が掲載されているが、これは米田耕之助 1983「西広貝塚出土の安行Ⅰ式土器」『史館』第14号から転載されたものである。読者の便宜を図るため、ここで米田論文の写真と本書の図との対比を提示しておく。()は大塚論文の番号を示す。
図版1-1(図版Ⅱ-6)・第203図2、1-2(Ⅱ-4)・第187図1、1-3(Ⅱ-1)・第144図74、1-4(Ⅱ-5)・第197図1、1-5(Ⅱ-3)・第200図3、1-6・第187図3、図版2-1・出土地点不明のため未掲載、2-2・第201図1、2-3(Ⅱ-2)・第199図2、2-4・第205図1、2-5・第156図293、2-6・第156図294
- 6 菅谷通保 1999「住居」『千葉県市原市祇園原貝塚』市原市教育委員会
- 7 絡条体圧痕文による金堀式に対し、棒状工具による施文とみられる西広貝塚の資料は、東金市久我台遺跡などの資料に類似する。これが上総地方の様相なのか、施文技法の問題も含め検討する必要があるだろう。小笠原永隆 2003「千葉県内における押型紋土器出現期の研究展望」『利根川24・25』利根川同人参照。

第2節 埋葬動物遺体について

1 イノシシ幼体の検出について

縄文期のイノシシ幼体検出の興味ある1例に、千葉県松戸市平賀貝塚の縄文中期土器埋甕内出土例がある。本例は1966年の調査で、筆者は住居中央にあった炉跡の埋甕中にイノシシ幼体の全身骨格のあることを確認した。イノシシは歯牙萌出直前段階で、出産前後の新生児であったことが推測される。おそらく幼児の検出遺体としてはもっとも若い個体例であろう^(注8)。

平賀貝塚のイノシシ幼体が明らかに埋葬を意識したものであることは、検出の状況からも疑問の余地がないであろう。廃棄された住居が単なる廃屋のままではなかったのではないかと、ということも本例の出土から考え直す必要があるかも知れない。イノシシの遺骸は、新生児の状態であった故に飼育を試みたことはあったかも知れないが、おそらく日ならずして死亡したものと思われる。そのとき人々は、それを生まれて間もない自分達の子の死亡と重ね合わせたに違いない。生あるものへの慈しみの気持は、あまりに幼いものの死に際して、人の嬰兒の死の悲しみと重ね合わされ、遺体を埋葬することに異議を唱える者はいなかったのであろう。埋甕中の灰の中は嬰兒を納める格好の場所であり、人の胎児あるいは新生児について行ったいわゆる甕棺埋葬と同じ意識のなかでの行為であった。

ところで、イノシシ幼体の検出例が決してめずらしいことなく、1965、66年の千葉市加曽利(北)貝塚貝層保存施設の設定工事に伴う発掘調査時の出土資料中にしばしばみられたのである。この時の報告は、トレンチ、層位の動物遺体記載中にあったと記されているのみであるが、図版に掲載した1例は加曽利EⅡ期の頭骨を伴わない一括出土骨で、年齢的には先の平賀貝塚出土例と同じであったと思われる。この例では出土状況について詳細を知り得ず、全身骨格の埋存についての知見に欠けることが残念である。四肢骨が目につきやすく、頭部が見落とされることもあったかも知れない。あるいは、頭部を別に扱う方法のあったことも考えなければならないかも知れない。それにこう

した幼体がつねに埋葬されるとは限らず、遺体の扱い方が決まっていたわけではなさそうである^(注9)。

1987年、西広貝塚第7次調査の際の出土イノシシ幼体遺骸は、平賀貝塚イノシシの幼体の在り方の延長線上にあることは明らかであろう。全身の骨格が揃っていたことは、それが埋葬であることをよく示しているといえよう。第4乳臼歯が完出しようとする直前の段階、出産後間もない時期のものと思われる。母親の捕獲によってとり残された個体であったことも考えられる。あるいは短い間でも飼育された、あるいは飼育しようと試みられた個体であったかも知れない。別に検出されている多数のイノシシ遺骸中に、この段階のイノシシ遺骸をみることはほとんどなかった。このことから特別な扱いをされた個体であったことが推定される。それは偶発的な事件によって手に入れた個体であり、やはり先の平賀貝塚の埋葬イノシシと共通する意図、心情によるものと思うのである。

ところで、1979年に宮城県気仙沼市田柄貝塚の調査が行われ、興味あるイノシシ幼体の埋葬例が知られた。円形の墓坑中に首を後方に折り曲げる状態で出土している。体がほとんど曲げられていないのは、身体が短いためであろう。四肢骨も特に曲げられることはなかったようである。径26cm程の土坑中にすっぽり入るかたちであった。臼歯は第4乳臼歯と第1後臼歯が萌出した段階で、生後半年を経た個体であって、平賀貝塚、西広貝塚例に比べるとさらに3～4ヶ月ほど日数を経ている^(注10)。このような年齢の個体は狩猟捕獲と考えられる遺体中にも含まれるが、山梨県北巨摩郡大泉村金生遺跡(縄文晩期配石遺構中に伴う土坑中の検出標本)では、この年齢個体の下顎骨118個体分が焼土中にあった例もある。そして、検出の個体数は一般には多いものではなかった。埋葬とみられる扱いはされるものの、狩猟信仰との関連も問題となり、供儀としての意味も考えなければならないと思われる^(注11)。

2 イヌ科動物の埋葬について

西広貝塚から検出された埋葬犬は、長谷部分類の小～中小に相当し、山内の方法による推定体高が36～41cm程度の小型犬であった。死亡時の年齢相は、いずれも両下顎の第3後臼歯が萌出ないし四肢骨端部の癒合が完了する成犬であるが、1号犬のような比較的若齢と思われる個体から、歯牙の咬耗が進行する段階の個体までさまざまである。西広貝塚出土埋葬犬のなかで特徴的なのは、切歯や犬歯が破損・欠失するタイプと、歯周疾患を持つタイプが認められることであろう。埋葬犬が犬歯を欠失した要因については、①狩猟の際に破損した、②装身具の素材として人為的に抜かれたなどが考えられるが、いずれにせよ、歯槽部は完全閉鎖ないし閉鎖途中にあることから、欠失後も生存していたことは間違いない。しかし、歯に損傷を持つ埋葬犬には、肋骨に骨折治癒の痕跡と考えられる骨増殖が認められる個体があることからすると、①の可能性が高いのではないだろうか。一方、歯周疾患を持つ埋葬犬については、その発症原因についての検討を行う必要はあるが、死亡前まで狩猟犬として利用されていたとは考えにくく、縄文人によるイヌの利用が狩猟目的だけではなくことが想定される。散乱骨として検出される犬骨が認められることから、埋葬されるイヌとされないイヌがいたと仮定するならば、西広貝塚において埋葬されるイヌの条件としては、狩猟に大きく関わったものと病に冒されたものとがあったと考えることができるかもしれない。ただし、縄文人については歯槽骨の骨吸収が認められる個体が多く見られ、歯周疾患が頻発していたことが指摘されているが、最も古くから家畜化されたとされるイヌでは、どれくらいの頻度で歯周疾患が発生しているのかを検討する必要

があるだろう。

一方、イヌやイノシシ幼体以外の動物が埋葬されるのは非常に珍しい事例であろう。同様の事例としては、宮城県石越町富崎貝塚において検出されたキツネの埋葬遺構（金子2003）のほか、千葉県千葉市有吉北貝塚では埋葬された可能性のあるサルが検出されている（小宮1998）。1号埋葬タヌキの腓骨・基節骨には、骨折から治癒を示すと考えられる骨増殖が認められたが、これが野生状態のうちに起こったものか、あるいは西広貝塚人に捕獲・保護された後に治癒したのかは明らかではない。しかし、埋葬されるという事実からすると、西広貝塚出土のタヌキや富崎貝塚出土のキツネは、いずれも一時的に飼育されていた可能性も考えられよう。これらの動物は散乱骨として出土するのが一般的であり、この個体だけがなぜ埋葬されたのかという点が大きな問題となる。西広貝塚ではタヌキの犬歯を加工した垂飾品、富崎貝塚ではキツネの下顎骨を加工した垂飾品が出土していることから、これらの動物が呪術的な意味合いを持っていたととらえることもでき、犠牲獣としての可能性も考えられよう。

注

8 本資料については、調査に当たられた成徳学園教諭村上俊嗣氏の御厚意で実査しているが、本報告は刊行されていない。

9 金子浩昌 1977「加曽利貝塚の動物」『加曽利北貝塚』中央公論美術出版

金子浩昌・長岐 勉 1977『加曽利貝塚Ⅳ』中央公論美術出版

10 宮城県教育委員会 1986『田柄貝塚 宮城県文化財調査報告書第111集』

11 金子浩昌 1983「金生遺跡出土の獣骨」『金生遺跡Ⅱ 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第41集』山梨県教育委員会

ここでは焼獣骨についての記述は本旨ではないが、金生遺跡の関連資料として長野県埴科郡戸倉町における幅田遺跡群円光房遺跡について概要を述べておきたい。この遺跡では焼獣骨のまとまった出土が縄文前期諸磯B期からみられ、第1号土壇址と称された遺構内からの検出で、残存する部位は頭骨を主とするものであった。この土壇は長軸1.5m、端軸0.7mの楕円形を呈し、完掘時で深さは21cmであった。ここからは大量の焼獣骨が検出されたが、この遺構が骨の焼成場所ではなく、焼成後に集められたものであったことが先述の金生遺跡例とは異なる点の一つであった。さらに遺骸はイノシシの頭骨であって、0.5才～1才、1.5才～2才の個体最少14個体があった。さらに数は少なくなるが下顎骨、四肢骨も残されていた。イノシシの幼体、若体についての関心が縄文前期からあることを述べておきたかったのである。

第3節 中・近世の遺構と遺物

西広貝塚では平安末期から鎌倉中期にかけて、壺・水注など特殊用途品を主とする遺物の存在から、付近に非日常的な遺構群が存在したものと思われる。具体的には墓域・葬送や供養などに関わる空間が、台地麓に展開したのではないかと推測する。そして出土遺物の奢侈性から、開発地（村落）における特定階層者との関わりに限定できるのではないかとと思われる。該当期の墓域は、近接する山倉古墳群にも調査例がある^(注12)。ただし戦国期の遺跡から中世前期の遺物が若干出土する傾向は、近隣の台遺跡や山田橋大山台遺跡などにも類例があるため^(注13)、国分寺台地区を含む一帯に中世初期から前期の重要遺跡群が展開した可能性も指摘しうるが、明確なことは現段階で不明と言わざるを得な

い。地区の整理作業が進行するにつれ、次第に明らかになるであろう。

戦国期から近代初頭までは、日常雑器を中心にする遺物群が連綿と出土しており、これらが百姓居宅跡に付随した可能性がある。遺構の構造は脆弱ながらも、宅地の囲繞が明確であることから、独立した小経営を営む小百姓レベルが該当するのではないか。天目茶碗や青磁碗などの嗜好品が認められないことから、村落運営の核となった小領主階層や乙名百姓の流れを引くものとは考えがたい。

問題は、遺物群各型式の合計幅（約450年）に対し、ピット密度が薄いことである。仮に建物1・2あわせて計5回程度の建て替えがあったとしても、概ね100から150年程度の時期幅しか想定できない。調査区外へ敷地の小移動を想定すると、検出遺構がどの時期に帰属するのか、明確な答えは出せない。

しかし遺構群の脆弱な配列と規模から、これらは遺物型式幅における前期、戦国期からせいぜい江戸初期くらいまでに収まるのではなかろうか。戦国期に村落が台地に上がる傾向は広範に認められるが^(注14)、さらなる宅地移動の結果、現在見られる村落景観に発展したわけで、その一例として捉える余地があろう。本遺跡の場合、301号溝（道路遺構）に面した谷頭部が宅地化しており、台地上からの移動距離が少なかったため、旧来の屋敷地が畑地化した後も近世遺物が混入したのではないかと推測する。

注

- 12 本遺跡と同じ台地上に位置する山倉1号墳に、常滑4型式の大甕を棺に用い老人女性を葬った例があり、富豪農民クラスの墓ではないかと指摘されている（小橋健司2004『市原市山倉古墳群』財団法人市原市文化財センター編 市原市教育委員会発行）。
- 13 半田堅三2003『市原市台遺跡B地点』財団法人市原市文化財センター編 市原市教育委員会発行、大村直2004『市原市山田橋大山台遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第88集
- 14 台地上における戦国期の百姓宅地として、市内では椎津尾崎遺跡がある。遺物量は多くないが、古瀬戸後期様式期から大窯第1段階にかけてのまとまった遺物群がある。また、佐倉市高岡遺跡群、光町篠本城周辺の遺跡群なども顕著な例である。（桜井敦史2003「県内における中世村落の発展について」『市原市文化財センター研究紀要Ⅳ』所収、宮内勝巳1993『高岡遺跡群Ⅰ』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第71集、笹生 衛1999「東国中世村落の景観変化と画期」『千葉県史研究』第7号 財団法人千葉県史料研究財団編 所収）。ただし城郭に近接するなど特殊立地にある例が多いことも事実で、戦国期における一般農村の典型を示すか否かは、なおも検討の余地がある。また、全体に瀬戸・美濃大窯期の遺物が減少傾向にあり、特に16世紀中葉以降の遺物消費を評価できる状態にはない。

附章 資料

第1節 西広貝塚に関する文献

通常行政機関もしくはそれに類する組織が刊行する発掘調査報告書は、特定の目的（開発行為がそのほとんどを占める）に際し事前に行われたものを対象とする。現在の日本の埋蔵文化財行政が受益者負担の原則に貫かれている以上、受益者が負担した費用の範囲が報告の範囲になるのは当然のことと言える。この報告書の場合、その目的とは国分寺台地区土地区画整理であり、この事業に伴う調査が報告の対象であることは、例言ですでに述べたとおりである。

しかし、遺跡そのものは事業に関係なくそこに存在していたのであり、先人たちの調査・研究の対象ともなっていたわけで、学史上何らの地位を占めていたのは歴然たる事実である。整理に際してもそうした先人たちの業績に負うところは大きく、また、それらを見捨て遺跡を理解することはできないと考える。そこでここでは西広貝塚に関する文献のうち、区画整理事業が開始される以前に発表されたものを収録することとした。区画整理前の遺跡の状況が分かると同時に、遺跡の認識法や調査成果の研究法などを通じて、当時の学界の趨勢などもうかがえるのではないかと思われる。当然今後の課題や展望を見いだすことも可能であろうし、そのための努力も必要とされよう。こうしたテーマをより深めた考察が要求されるところであろうが、筆者の力量不足と、冒頭でも述べたが受益者が負担した費用範囲を大きく超えてしまう可能性があるので、原典収録にとどめることとした。御理解願いたい。

掲載に当たっては当時の版面をそのまま載せることも検討したが、版の大きさや、印刷の鮮明さなどの問題があったため、当報告書の版面にあわせて組み替えることとした。何よりも、読めなければ意味がないと考えたためである。文章は原文の通りとしたが、旧字体は新字体に改めている。また、明らかな誤字、脱字は修正している。挿図についてはなるべくそのまま掲載することとしたが、ページレイアウトは変更している。また、不鮮明なものは作り直している。写真図版については原本のまま掲載しているが、古くて不鮮明なものについてはご容赦願いたい。

1 “ON SAIHIRO SHELL-MOUND” M.Nishimura^(編注1)

Date…October 19th-22nd. 1937.

Locality…Saihiro, Ichihara-gun, Chiba Prefecture.

I Locality, Topography and Geology. (編注 第385図上段参照)

This shell-mound is a terrace lying to the south on Goi-town on the Bōsō railway line and stands of opposite Anegasaki and Amagumi^(編注2) terraces. The lowland that lies in between consists of paddy-fields; The Yōrō-river runs in front of this shell-mound and empties itself into Tokyo-Bay. It lies on the Quarter layer, strides from the top of the terrace to the paddy-fields. The total area is about 1,000 tsubo. We were divided into two group-A and B and engaged in digging and cutting off a part of the slope. The slope has a gradient of about 30° - 40° and the distance between the two points, A and B' was about 15m.

II Digging.

We first began to cut off a part of the slope. We could reach loam layer during the day, and

succeeded in exposing the shellheaps-5. 70cm in height and 2. 00cm in height and 3. 00cm in width at B. The sections of these heaps are as follows.(編注 第385図中段参照)

III Shell in the Shell-heap.

The shells almost remain in the complete original form. And most of them are marine shells.

They are as follows(編注3).

(A) Veneridae

- | | |
|-------------|----------------------|
| 1. Meretrix | Meretrix Linn'e |
| 2. Paphia | Philppinarum Ab & R. |
| 3. Dosinia | Japonica Reeve |

(B) Muricidae

- | | |
|-----------|----------------------------|
| 1. Rapana | bezoar thomasianus Crosse. |
|-----------|----------------------------|

(C) Buccinidae

- | | |
|-----------|----------------|
| 1. Eburna | Japonica Reeve |
|-----------|----------------|

(D) Solindae

- | | |
|-----------------------|--|
| 1. Solen gould Conrad | |
|-----------------------|--|

(E) Myidae

- | | |
|-----------------|---------------|
| 1. Mya arenaria | Japonica Tay. |
|-----------------|---------------|

(F) Mactridae

- | | |
|---------------------------------|--|
| 1. Mactra Veneriformis Deshayes | |
|---------------------------------|--|

(G) Arcidae

- | | |
|----------------------------|--|
| 1. Arca Sudcrenate Sischke | |
|----------------------------|--|

(H) Astracidae

- | | |
|--------------------------|--|
| 1. Ostrea gigas Thumberg | |
|--------------------------|--|

(I) Naticidae

- | | |
|---------------------------|--|
| 1. Polinices ampla philis | |
|---------------------------|--|

(J) Trochidae

- | | |
|-------------------------|--|
| 1. Umbonium moniliferum | |
|-------------------------|--|

IV Remains

i Pottery

During the three days we spent in excavation, we found and took out thousands of fragments of pottery from this shell-mound. They are all cord-pottery. Among those fragments there are two or three which return their original form. We first noticed that the vessels found in the upper part differ from those found in the low. And they are remarkably distinct at A point. We recognize that they have a close relation with the Horinouchi, Kasori and Angyo types. They will be of help for studying of features of the culture in Bōsō peninsula in those Stone Age. As the following I shall give a description of the pottery.

i Pottery in the Upper part

What I want to speak of in particular in the upper part is **a** and **b** at A point and a' at B point. The vessels can be gathered even on the surface of the ground, these sorts of the pottery are thinner and hard and subtle (編注 4) in baking. Most of the patterns are horizontal-line, -short, bow-line, parallel-line, connected-cord pattern etc. We also found the pattern in the inside of the ware. We have similar pottery in the shell-mounds of Kasori, Angyo and Horinouchi. As shown by the illustrations (illustrations) there are Angyo I, Kasori B and Horinouchi Type in the latter period. (編注 第385 図下段参照)

ii Pottery in the Lower part

The heaps that form the lower parts are **c** and **d** at A, and **b**, and Loam layer at B.

Against the former of the upper, we found thicker vessels from the heaps. They are thicker and roughly baked and larger in comparisons with the former. These have carved and straight lines of wonderful symmetry. And their patterns are almost length. So they are recognized to resemble the Horinouchi type the former period. As followed by the illustrations. (編注 第385 図下段参照)

iii Animal-bones

At the same time we dug out great many animal-bones, and most of them bones of deer. There were also many deer-bones and we found that they were utilized as tools. There is good evidence.

It is the horn adding work.

iv Besides

A shell painted with cinnabar was found from each point. At A point, it was in the middle heap and at the latter, in the upper heap. We investigated the cinnabar and found it to be Ferri Oxydum Rubrum. (Fe_2O_3). I think that it was used as a sort of Cosmetics and kept in the shells.

(According to Dr. S. Nishimura and Dr. E. Smith, it was utilized by means of religious. Dr. E. Smith says, in his book In the Beginning, Blood ((or blood-colored earth)) was one of the first life giving and death averting elixirs used for the protections of life and existence. Likewise Dr. S. Nishimura says that cinnabar was introduced from Anau, and Siberia to Japan.)

v Stone – tools

We obtained some stone-tools, such as axes, plates and arrowheads.

The axes are made of sedimentary ; arrow-heads, of obsidian, and plates, of igneous rock.

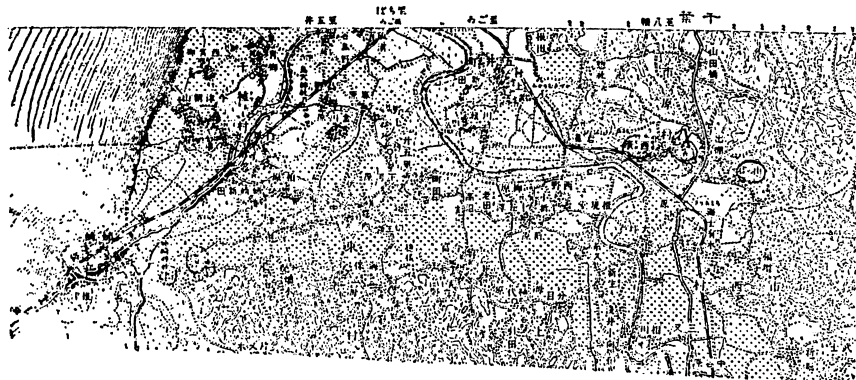
Consideration

As above stated, I think that I could briefly state what Saihiro shell-mound.

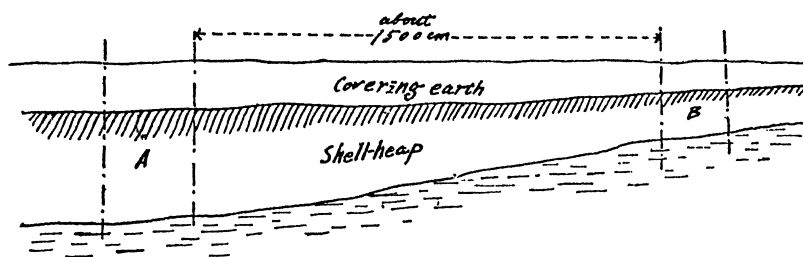
Observing that, I think that this shell-mound is from the middle period in those stone ages to the latter term and their culture came to move gradually along the sea-shore from distraction of east-Katsushika.

And then these inhabitants received culture of Kasori E, Horinouchi, Kasori B and Angyo.

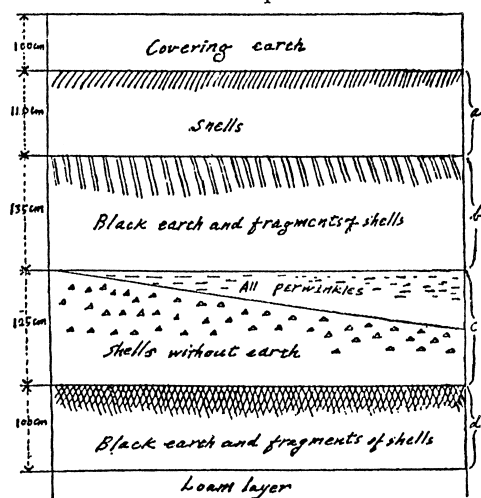
In conclusion, I express my sincere thanks for Dr. S. Nishimura who furnished me with number of useful referenced books and gave me valuable suggestions and guidance, professor Masuda who corrected my awkward manuscript.



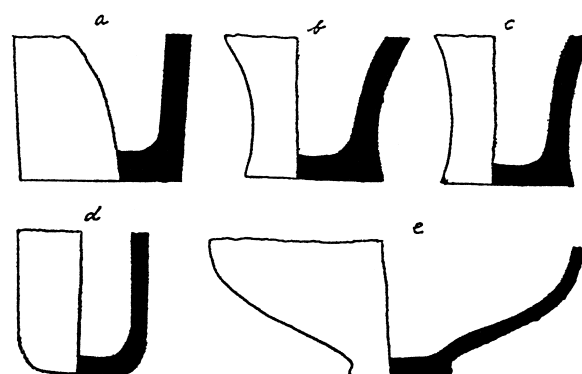
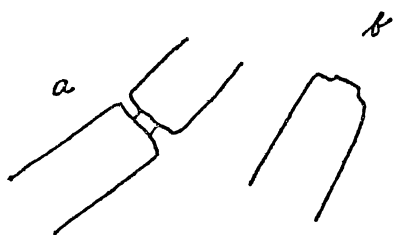
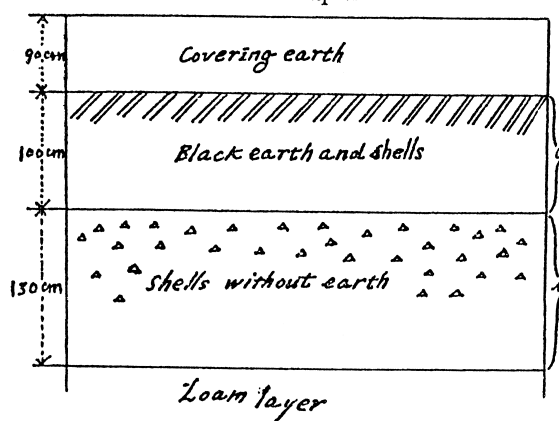
Relation of A and B



Shell-heap A



Shell-heap B

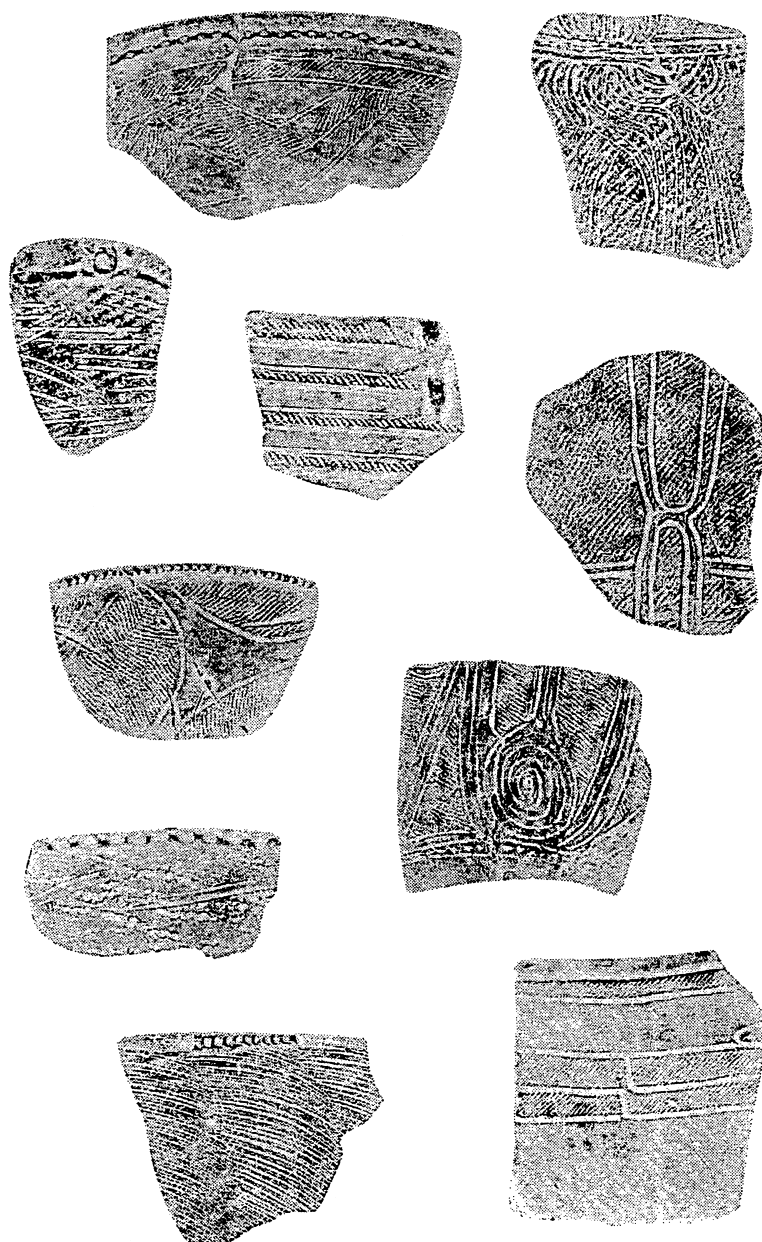


The Bottoms

illustrations.

第385図 Nishimura1938挿図 (1)

西廣貝塚出土土器片拓影



(註・二・三段右端図転倒)

第386図 Nishimura1938挿図 (2)

The list of pottery

	Angyo 3	Angyo 2	Angyo 1	Kasori B	Horinouchi new	Horinouchi old	Kasori E
a	—	—	6	10	—	—	—
a'	—	—	2	20	—	—	—
b	—	—	—	14	10	—	—
b'	—	—	—	10	30	25	—
c	—	—	—	15	6	—	—
d	—	—	—	—	2	44	—
c'	—	—	—	—	2	65	1(?)

(「早高史学」 1 1938)

2 「西広貝塚－市原村大字西広所在」 鈴木秀枝

(イ) 地勢 この貝塚の所在する台地は郡本、藤井の方面から福増の方面にかけて湾曲しつつ入り込む侵蝕谷と南の養老川溪谷とにはさまれた狭隘な場所である。南は広々とした養老川沖積地に面し、川を越えて君津郡の台地を望むこの貝塚は、往昔眼下に静かな入江を眺めた恰好の居住適地であったろう。

(ロ) 貝塚の状態 貝塚は舌状の台上から溪谷斜面にかけて構成され、貝殻の散布面積は大略二千坪に亘るものと思われる。そのうち南傾面に於ける貝層は最も厚く、それより東に廻った斜面にかけてもかなりの集積層を認める。今夏新制中学校校舎建築の為の土木工事にこの貝が多量に持ち運ばれて遺跡を攪乱したのは遺憾である。

(ハ) 発掘の経過 台上の畑地を避け、南斜面の貝層を出来るだけ広く露出させるために、貝塚の最も浅い一米二〇の西寄りの地点から次第に貝層の深まる東方にかけて幅一米五〇－二米、長さ一〇米のトレンチを掘り、純貝層を探したが見当らずただローム層近くに僅かに貝層の集積をみたにすぎなかった。

鹿角製角器（第三図ハ）ベニガラを容れたハマグリ（同図ロ）大形土器片等が出土したが、土器は貝層下褐色土層に多く上部の貝層中には少なかった。

このトレンチを更に東に一〇米余延長、二二米程の所迄は表土からローム層迄一米二〇程であったのが、二三米から東方に進むに従い急に深まる傾斜をみせ、二米三〇でロームに達する。然しハマグリを主とする純貝層はロームに近い少部分で、あとはキサゴ及び黒土混りの貝層であった。主な出土品は十三米地点で貝層下から堀之内第一式に相当する大形土器破片、二十三米地点で表土下二米、ハマグリを主体とする純貝層から同じく堀之内第一式に相当する注口土器の押しつぶされた破片、マフグの歯（第三図ニ）凹石等である。つづいて発掘を行ったが、ローム層上キサゴ層が主で、遺物の出土状態は常に悪く、僅かに土器片数十個と磨製石斧頭部一を得たのにすぎなかった。

以上で傾斜面東西二十三米のトレンチを露出し得たので、その略中央部に直角に台地上に向け、甘藷畑に長さ二〇米、幅一米のトレンチを入れたが、貝層は全くなく、黒土層二〇糎の中に僅かに貝が混入しているのにすぎず、遺物も皆無に近かった。尚このトレンチの一部で平地住居址らしいものに遭遇したが、時間の関係で調査を中止した。

(ニ) 遺物 A 自然遺物

貝類 1、ハイガイ、2、サルボウ、3、アカガイ、4、カガミガイ、5、オキシジミ、6、ハマグリ、7、アサリ、8、マテガイ、9、バカガイ、10、シオフキ、11、オオノガイ、12、サラガイ、13、マガキ（以上斧足類）

14、キサゴ、15、ウミニナ、16、ツメタガイ、17、ナガニシ、18、バイ、19、アラムシロ、20、イボニシ、21、アカニシ、22、ヒダリマキマイマイ（以上腹足類）

23、コウイカ（以上頭足類）

魚類 1、クロダイ、2、マフグ

鳥類 細片の為不明であるが、雁鴨科に属するものと思われる。

哺乳類 1、イノシシ、2、ニッポンシカ、3、ニッポンイヌ（?）

貝類ではキサゴ、ハマグリが最も多く、陸産のヒダリマキマイマイを除く外はすべて監水産の貝類

であり、ナガニシ以外すべて一米内外の浅海に棲息するものである。ナガニシは水の清らかな外洋性の貝で、本貝塚からは一個しか発見されなかった。尚朱を入れたハマグリが出土している。

動物の骨の発見は極めて少量であり、その中ではイノシシ、シカが多かった。昭和十八年西村は同貝塚でアナグマの下顎骨及びクジラの脊椎骨を発見している。其の他岩石の破片、黒燐石破片、炭、灰、ベニガラ（紅色顔料）等であった。

(B) 人工遺物

石器 附近は岩石に乏しいので石製品は極めて少なく、採集した遺物は磨製石斧頭部破片一個と凹石一個であった。前者は二三米地点の堀之内式土器の多く出土する下部ハマグリ層から発見された。石質は滑石で刃部は不明であるが三稜線胴形で、全体を美しく研磨している。後者は十三米地点、ハマグリ層から出土した。同じく堀之内式土器に伴うものであろう。石質は砂岩である。

骨角器 第二図（ハ）に示す鹿角製品一個のみであった。美しく磨きあげ、その基部近くに太い溝を巡らし、基部内部を削り孔をあけている。二米地点、発掘の際混乱された貝層中から発見された。土製品、土錘四個、いずれも土器の破片を利用して長さ四、五糎、幅三糎程で、角に丸味をもたせ、長径の両端中央部に浅い刻目をつけてある。二個は三米地点ハマグリ層中から、二個は出土地点不詳である。

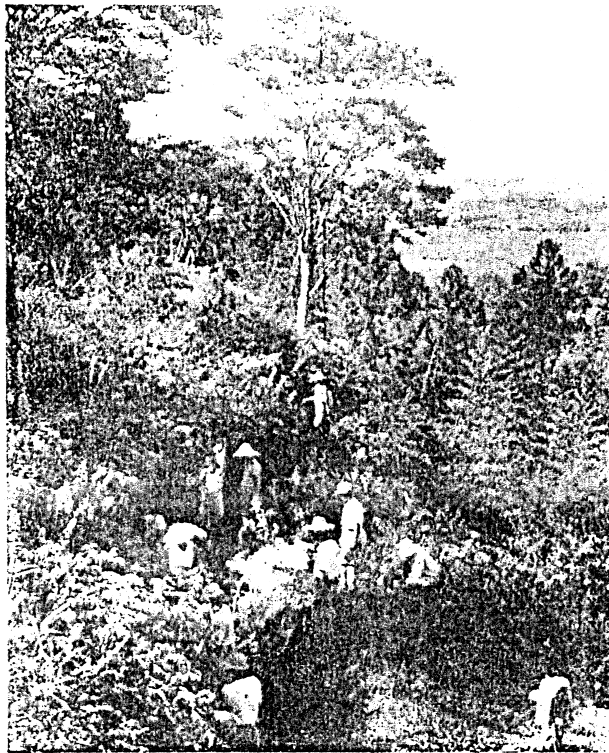
土器（第四図）完全土器を獲ることが出来なかった。第一群土器（総数七）、これ等は貝層下黒土層より褐色土層にかけ、次の第二群土器と共に発見された。今回出土した土器片中最も量の少ないものである。器形は一般に口縁部がやや内曲する深鉢乃至浅鉢形であると考えられる。赤褐色又は暗紫色を呈し、粘土は細砂を混じ比較的細密である。厚さは平均一二糎―一七糎、焼成は良好文様は比較的粒子の大きい単方向縄文を地文として口縁部、胴部のそれを幅広く磨消し、低い隆起線で区切っている。

第二群土器（総数五一七、前期一四一、後期三七六）、本遺跡の主体をなすもので、貝層上部より貝層下褐色土層にかけて多量に発見され、特に純貝層及びその下部に多く出土した。本土器群を前期と後期に分ける。前期は口縁部に二重縁、平縁が多く、器形は深鉢形が多い。製作は粗雑であるが、焼成は良好で赤褐色又は黒褐色を呈し、文様は口、頸部に施される単方向縄文又は結束状曲線文を主体とする、厚さは平均一〇糎。後期は前期に比して、原形を復原することは困難であるが、浅鉢が多い様である。制作は精巧、土質は比較的精選されて細かく、焼成は良好で赤褐色、黒色を呈する。厚さは平均八糎で、文様は磨消の手法を巧に利用した渦状沈線文や、口縁部に近く紐状隆起線を繞らし胴部に同じく磨消手法を用いた細い縄文を施したもの等がある。

第三群土器（総数一〇八）、貝層上部より表土にかけて発見されたが、第二群土器より量は少ない。口頸部の外反する甕形土器、比較的小型の皿形及び鉢形土器が多いようで、口縁は小波状縁、平縁を主とする。厚さは平均八糎で土質焼成共に第一、第二群土器に比して極めて良好で色は黒色或は黒褐色を呈する。滑澤があり、文様は磨消の手法による平行沈線文、太い沈線文を主体とする。

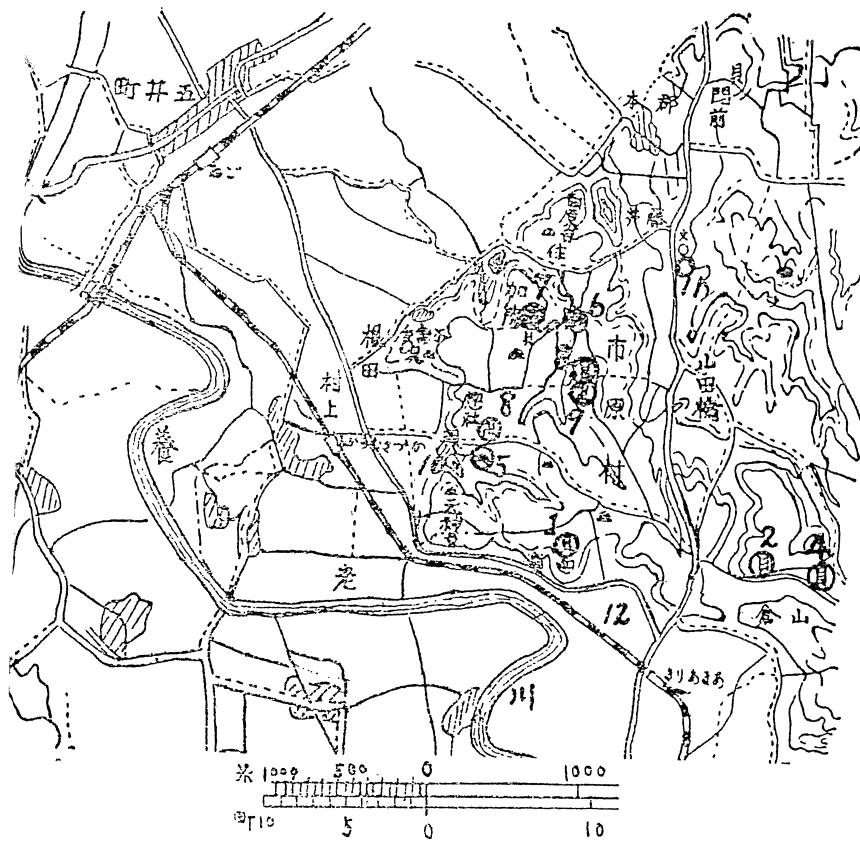
以上土器形式を三群に分けて考えてみたのであるが、元より斯かる分類は確定的なものであり得る訳はなく、その所属に迷うもの、第四群への移行形式と考えられるもの等も若干あったし、破片中無文の小片で所属不明のもの等計一八〇片があり、これを除外した。

第一群はその形式から考えて加曾利 E 式、第二群は堀之内式、第三群は加曾利 B 式と考えられ、



第一図版 発掘中の西廣貝塚

第一図 市原台地遺跡分布図



- | | | |
|-------------|-------------|-------|
| 1、市原村西廣貝塚 | 7、同 | 加茂住居址 |
| 2、市原村山倉貝塚 | 8、同 | 國分寺 |
| 3、市原村根田畠園貝塚 | 9、同 | 國分尼寺 |
| 4、市西村分廻貝塚 | 10、同 | 雷電池 |
| 5、市原村神門古墳 | 11、同 | 十三坊塚 |
| 6、同 | 12、五井町低地住居址 | |

第387図 鈴木1949挿図(1)



第388図 鈴木1949挿図 (2)

結論して本遺跡は堀之内式前期文化を主要文化年代とするといい得るであろう。

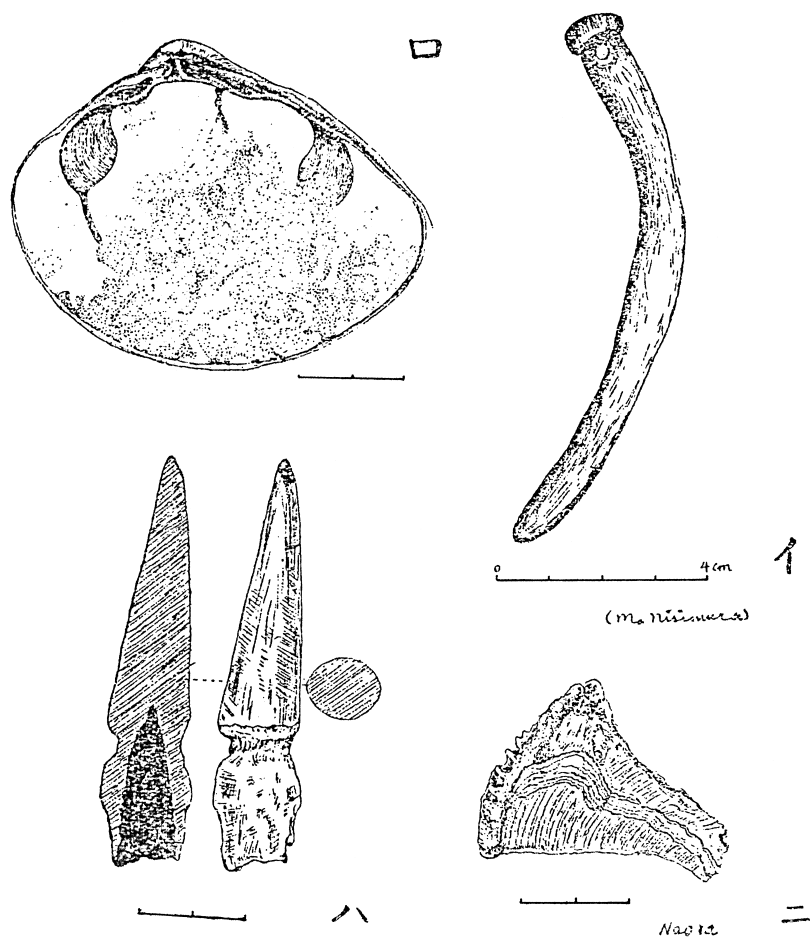
(ホ) 結語 今回の調査は種々の事情によって十分な検討を加え得なかった。従って将来の我々の調査に対して、その一時的予備知識として概要を述べたのにすぎない。このことを一言御断りして最後に如上の総合的考察を試みる。

一、本遺跡の性質はその地理的分布の位置より考えれば、市原郡洪積丘陵の養老川溪谷に面する内湾性貝塚である。貝の種類はハマグリ、キサゴを主とする故に主監貝塚である。

二、その遺物よりすれば、彼等の生活は漁撈、狩猟等食物採集の段階にあって、その文化年代は縄文式後期中所謂堀之内式期を中心としその初期は加曽利 E 式期に遡り、末期は加曽利 B 式或は安行式期に下るものである。

三、ベニガラ、黒耀石、緑泥片岩等の使用から当時の生活上の欲求を満たす為、遠隔地と交易をして

第三図



第四図



第389図 鈴木1949挿図 (3)

いたことは、本遺跡附近に点在する多くの貝塚と比較研究する上に総合的な調査として重要な意味を持つものである。(鈴木)

【註】本遺跡の発見は比較的古く、地主広川氏宅に緑泥片岩製石棒、頭部装飾付石剣、軽石製うき、数個の磨製石斧、土器等幾多の貴重な資料が蒐集されている。更に西村は昭和十二年以後数回菊地義次君等と共に本遺跡の調査を行い、鹿角製針一本(第三図イ)鳥骨製装身具一個、鹿角に環状の彫溝を環らした器具二個其の他土器多数を獲たがいずれも早大史学科資料室で戦災の為焼失した(編注5)。

(千葉県教育委員会 1949『千葉県史蹟名勝天然記念物調査報告書第1輯 市原遺蹟発掘調査概報』)

3 「千葉県石器時代遺跡地名表」平野元三郎、伊藤和夫、金子浩昌

通番号 233

番号 8

遺跡名 西広

所在地 市原郡五井町西広

地形 台地状及斜面

遺跡 貝塚

編年 加曽利E式・堀之内式・加曽利B式・安行I式(一)・安行II式(一)

遺物 貝類・魚骨・鳥骨・獣骨・磨製石斧・凹石・骨角器・石棒・石剣

備考 主要文献209(西村正衛“On Saihiro Shell-Mound”『早高史学』1,昭和13年)

(千葉県教育委員会 1959)

4 「日本貝塚地名表」酒詰仲男

通番号 986

地方番号 579

代表名 西広(さいこう)

異称 (空欄)

地名表 (空欄)

現所在地 千葉県(上総国)市原郡市原村大字西広,西広神社脇

現在存否 +

地形 台上

自然遺物 貝類,獣類,鳥類,魚類

鹹度 純鹹

文化遺物 土器,石器,骨角器

編年 加曽利E・堀之内・加曽利B

主要文献 鈴木秀枝「市原市西附近地勢西広貝塚」千葉県報1,昭和24.3

地図 姉ヶ崎

備考 (空欄)

(土曜会 1959)

5 「千葉縣市原市西広貝塚」市毛勲、戸田健

1. はしがき 2. 遺跡の概要 3. 調査 4. 出土遺物 5. 考察

1. はしがき

千葉県市原市は東京湾に面し、千葉市と木更津市の中間にあり、最近の京葉工業地造成の最も著しいところで、湾の埋立てばかりでなく、後背地における宅地造成も盛んである。遺跡は後背地に散在しているわけであるが、その密度は高い。

工業地あるいは宅地造成に伴い遺跡地に道路を建設することもあり、昭和38年11月に早稲田大学考古学研究室が発掘調査したモチ塚古墳は道路敷設によって今は見ることはできない。その道路は西広貝塚東端を走り、貝塚の一部を損っている。さらに貝塚も含めた地域に宅地造成の気運が生じ、そのため中村（恵）は市原市から測量などの調査を依頼された。調査は昭和40年1月5日から25日の期間に実施され、表記の調査員が参加した。

2. 遺跡の概要

西広貝塚は千葉県市原市西広字上の原2番地～58番地にあり、養老川を西方に望む台地の西端に営まれ、貝塚を降りると養老川の氾濫原に出る。貝塚は国鉄八幡宿駅から京成バスにて約20分、また小湊鉄道海士有木駅から徒歩約20分の所にある。（第1図）

附近には各時代の遺跡が多く、前記のモチ塚古墳は西広貝塚の西方約100mの位置にあった。上総国府・国分寺は北方1.5kmの所にあり、また山倉貝塚は東方約500mの所にあつて現在は山倉ダムの中島的存在の台地西端に位置している。（図版第1）

3. 調査

調査は、主に本貝塚の全体測量と貝塚の貝層の分布と濃淡の状態を知ることにより主力がおかれ、発掘は一応試掘にとどめ、本貝塚のもつ性格の一端を明らかにし、今後の本格的な発掘調査に備えるための予備調査であった。

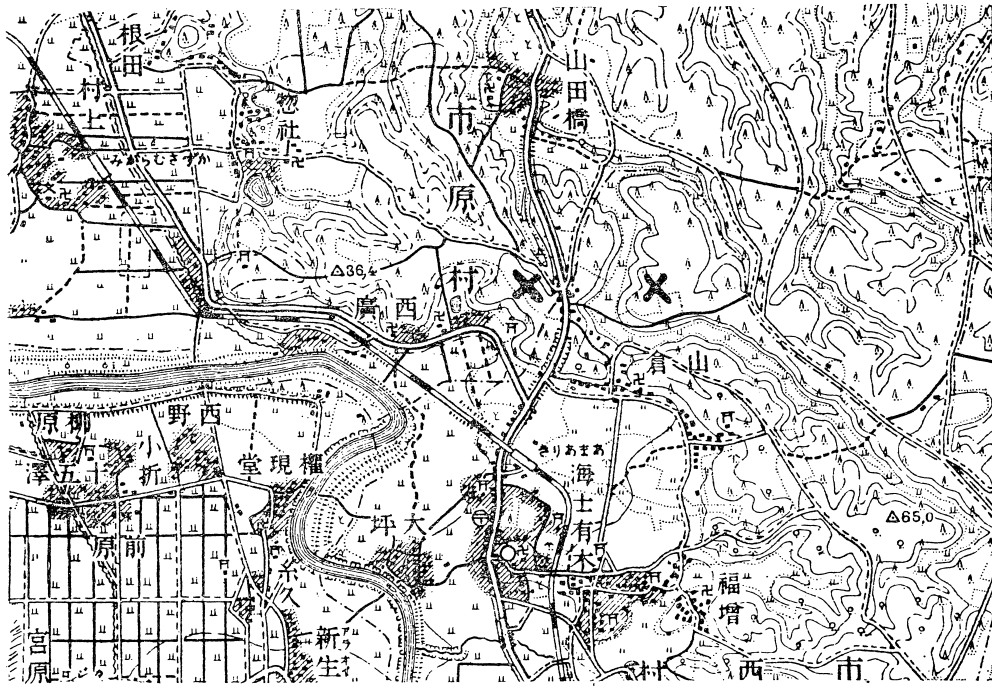
作業は、測量と発掘が並行して行なわれ、測量には市毛、横山がこれにあたつた。貝塚は、すでに道路よりと台下に臨む一部が破壊されている以外は、ほとんどプライマリーな状態にあるものと思われるが、現在畑地になっている関係上、あるいは耕作などによって貝層が攪乱されていることも考えられよう。第2図に示すが如く貝の散布している範囲は誠に広く、ほぼ台地上の畑一面にみられ、散布の状態から推して南西方向に口を開いた馬蹄形貝塚を形成していることがうかがわれるのである。

さらに貝層が堆積する地域は、特に台地の中央部に濃密な分布状態を呈し、また台下に接する地域に部分的に貝層が厚く堆積していることもわかった。所謂馬蹄形貝塚の開口した地域は、台地の中央部よりも一段低くくぼんだ様になっており、貝の散布はもちろんのこと、貝層は全く見あたらない。

発掘作業には、坂井、中村、戸田、金子、前田があつた。

<A トレンチ>

台下に近接したゆるい傾斜をもつ地点に2×12メートルのトレンチを設け、2×2メートルを1区画として6区画に分割し、A トレンチとした。1～5区までは、表土層から基盤のローム層まで中間層に黄褐色土層をはさんでわずか30～40センチの厚さにすぎず、耕作による攪乱をうけ、出土遺物も2、3の土器片を得たにとどまった。しかし、台下に近い6区において、良好な貝層を認め、西側と北側に約1メートルづつ拡張し、ここに主力を注いだ。第3図1.2および図版第2の1の貝層断面図にみられる様に、貝層の堆積状態はやや複雑さを示している。とりわけハマグリやキサゴの純貝層が平均30～50センチ堆積し、各所に認められ、又混貝土層、混土貝層も部分的にある。貝層がとくに



第1図 西広貝塚附近図

第390図 市毛・戸田1965挿図(1)

この6区附近に認められるのは、地形が傾斜しているためであり貝層が流れてここに集積したものと考えられる。

このことは、北壁断面(第3図2、図版第2の1)でもわかる様に基盤のローム層が急激な傾斜をもって落ちこんでいることから理解されよう。純貝層の堆積状態は、比較的ゆるく発掘を容易ならしめたが、ハマグリと純貝層は、大型のハマグリが顕著で溶解したカルシウム分が附着したものもかなりあった。出土遺物もこれらの貝層から出土したものであるが、良好な貝層に比して量的には出土量が少なかった様である。

<Bトレンチ>

一方Aトレンチに近い台地上に1.5×4メートルのBトレンチを設け、Aトレンチとの関係をみた。層序は、第3図4および図版第2の3で示す様に、表土層、純貝層、黒褐色土層、黄褐色土層、ローム層といった単純な層位を示しているが、第Ⅱ層の純貝層(ハマグリ、キサゴなど)に一部破碎された純貝層がみられ、又黒褐色土層を切り込んで破碎された貝が落ち込んでいる箇所も認められた。恐らく耕作か何かによって二次的作用を受けたものであろう。

表土層からローム層まで約1メートルあり、遺物はおおむね純貝層から検出された。貝の種類は、Aトレンチ程ではないが、南壁と西壁の接するコーナーにブロック状にマガキの純貝層(ハマグリを少量含む)を認めた。

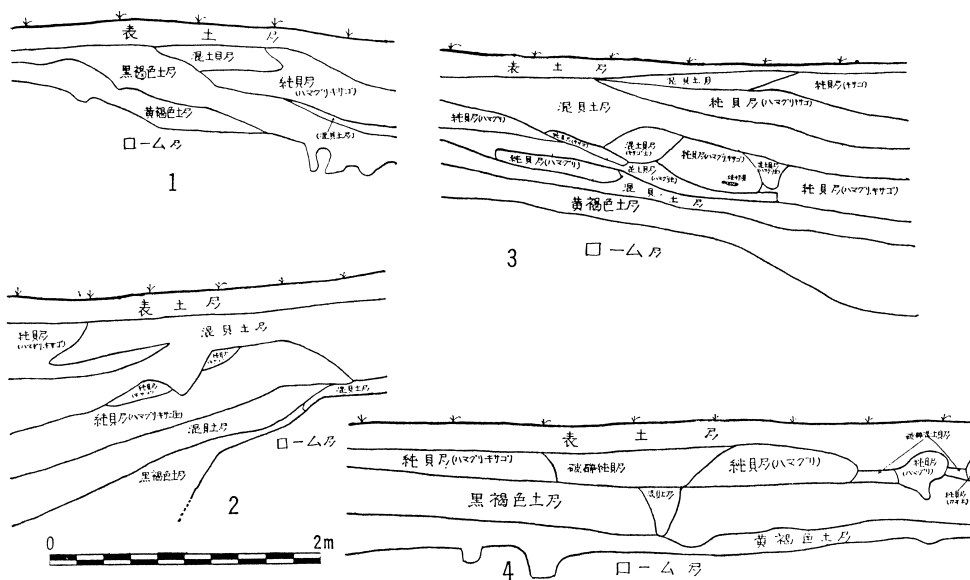
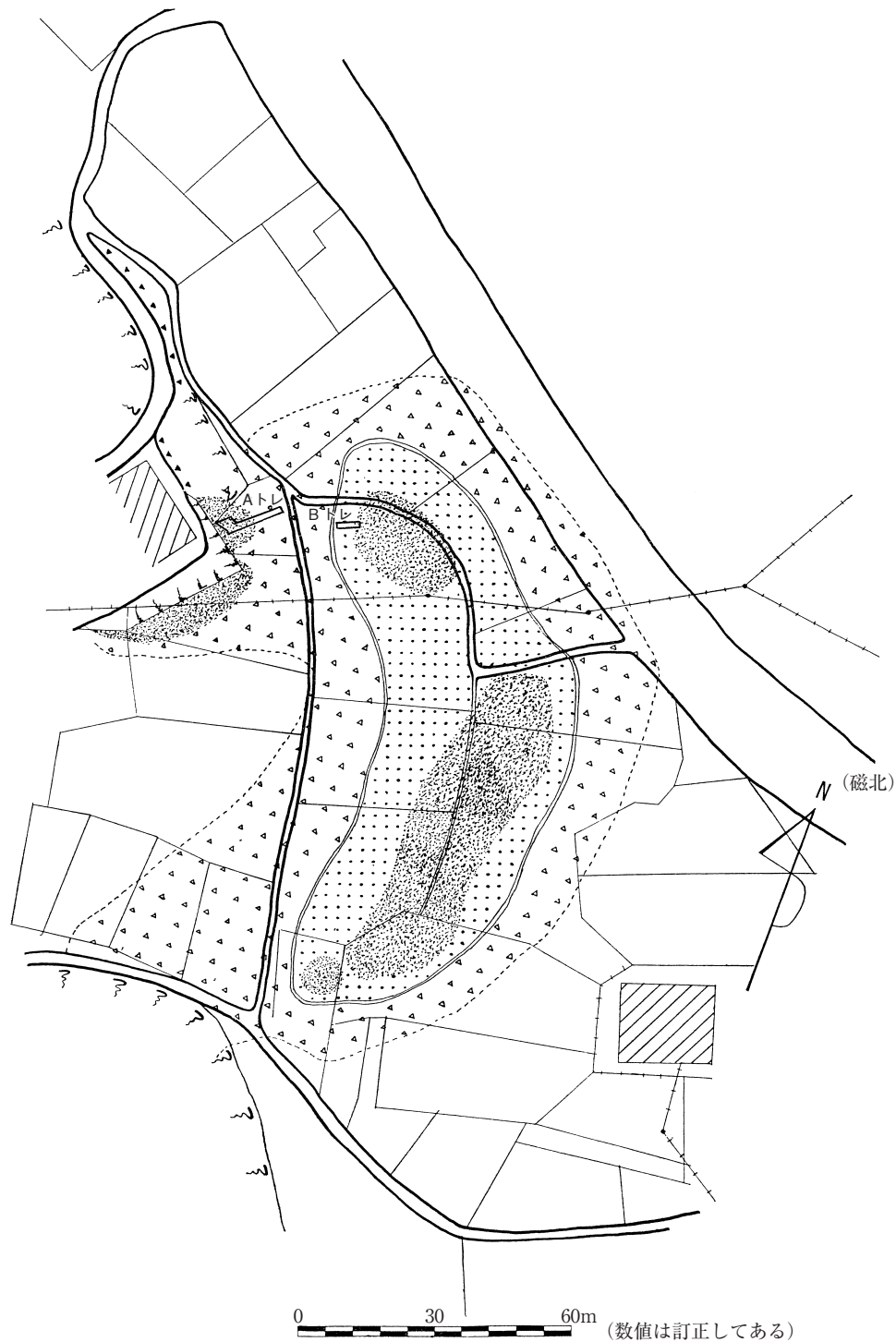
4. 出土遺物

A、自然遺物

貝類 二枚貝－ハマグリ、シオフキ、アサリ、カキ、ハイガイ、オオノガイ、カガミガイ、ホタテガイ、巻貝－キサゴ、アカニシ、ウミナ、バイ、ツメタガイ、サザエ、レイシ

以上 A、B 両トレンチ出土のものである。

魚類 マダイ、クロダイ、スズキ



第3図 貝層断面図

獣類 シカ、イノシシ

鳥類 鳥類

註 自然遺物は、貝類を除けば種類に乏しく、又出土量も僅少である。

B、人工遺物

石製品 軽石加工製欠損品（A トレンチ第Ⅱ層出土、図版第3の8、第4図7）

骨製品 鹿角の先端部を利用して二、三条の刻目を附した用途不明の未製品と同じく鹿角の両端を切り落した痕跡を有するもの。（図版第3の1A トレンチ出土、2-B トレンチ出土）

土製品 土鍾-計5ヶ、完形品3、欠損品1、未製品（裏面に1カ所刻目を有す）大型1、図版第3の4は、称名寺式期のものと考えられる以外は、全て時期は不詳である。（図版第3の3,4,6,7,9,第4図1～5）一応4についてのみ記せば、長軸の両端に刻目を附し長軸の長さ6.8センチ、短径4.8センチ、厚さ8ミリで内反している。

円形状土版-1ヶ、やや細い竹管具状のもので沈線を描いた土器片の周囲を粗雑に擦りつぶして円形状にしている（第4図6,図版第3の5）土鍾・土版ともB トレンチ出土である。

土器 人工遺物中、最も目立ったのは土器であるが、出土量が少ない上、型式判別可能なものもそれほど多くはなく、従ってその中より幾つかを選び出して説明に及ぶつもりである。

第1群（第5図1～3、図版第3の15）（編注7）

口縁部3片、加曾利E式土器である。口縁部に幅約2センチの無文帯を有し、更に微隆起線によって縄文は区画されている。器形は、浅いキャリパー状を呈する深鉢型土器と思われ、2には2つのコブ状突起があり、又2,3の内側に綾がある。1,2ともゆるい波状の口縁になる。色調は、黒色で器面は磨研され、焼成は、堅固である。

第2群（第5図4～10、図版第3の21）

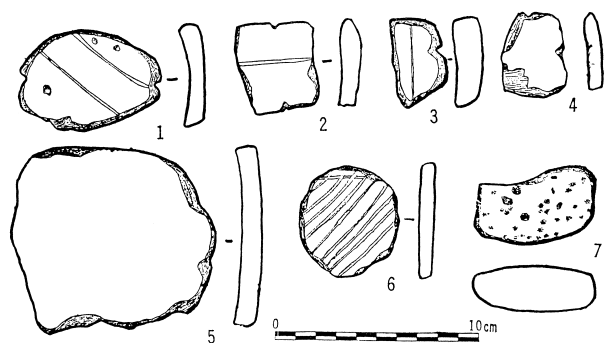
本群土器は、縄文式後期初頭の称名寺式土器である。4～6以外は、胴部破片である。4は、口縁部に幅約1センチの無文帯があり、文様は、地文に縄文を施してはいるものの沈線によってV字状に区画されたところは、縄文は磨消されて無文帯になっている。器形は、浅いキャリパー状の深鉢型土器で、内側に一条の綾を有する。6は、ゆるい波状口縁をなし、沈線によって凹字状に区画された部分は、無文帯である。器形は、4と同様であろう。4～6、8の文様手法は同じであるが、7と9は、沈線に区画された内を残して、他は、縄文を擦消している。10は、平行する縦の沈線にかこまれた内側に点列を施している。一般に器壁は、薄手で、色調は暗黒色のものが多く、磨研されている。焼成は、良い。

第3群（第5図11～21、図版第3の10～12、19、22）

11は、波状口縁を呈し、12～15は、地文の縄文の上に、太い縦の平行沈線と蛇行垂下線（あるいは連続S字状文とでも言おうか）との組み合わせにより、堀之内式土器の一般的特徴を備えている。その他、荒い縄文を地文として、数条の平行沈線を駆使した一種粗雑な感じを与える土器群である。20、21は、口縁が外反する平縁の深鉢型土器と思われる。やや厚手であり、茶褐色、灰褐色、赤茶色を呈するものなどがあり、焼成は、堅固である。

第4群（第5図22、23、第6図24～37、図版第3の13、16、21）

本群土器は、加曾利B式土器である。22～27は、口縁部や体部に幅広く、もしくは带状に斜格子



第4図



第5図



第6図

第392図 市毛・戸田1965挿図(3)

目文が施されている土器である。器形は、24～27にみられる如く、口縁部がやや外反し、頸部に至って多少つばまる深鉢型と考えられる。斜格子目文は、口縁部と体部との中間にあたる頸部が無文帯となっている外は、26の様に地文として縄文を施した場合もある。22、23は、裏面に一条の溝を有している。色調は、黒色で磨研されている。焼成は堅固である。28は、ヘラ状施文具による条線が主文様であるが、口唇部に刻目を附している。施文帯は、口縁部であり条線は羽状を呈している。器形は、口縁部のやや開く深鉢型であろう。29、31は、紐線文土器で、29は口唇部に、31は頸部に各々一条の粘土紐をめぐらせ、紐の上には指頭を押したくぼみを連続押圧するのが特徴である。そして、地文に縄文を口縁部から胴部にかけて施文し、更にヘラ状工具などで斜線文を施している。器形は29から考えれば、平縁で口縁のやや外反する深鉢型であろう。焼成は良好、色調は黒色である。32～36は、摩擦消縄文土器である。器形は、浅鉢型(32、33、34)、深鉢型(35、36)などである。32、34は、口縁部に一条の磨消縄文帯をもち(32には孔がある)、33は、口縁部に窓枠状の無文帯があり、その下に刺突文が横走している。35は、口唇部に斜めに刻目が附され、三条の磨消縄文がめぐらされている。又裏面に一条の溝を有する。36は、無文帯をはさんで二条の磨消縄文帯がめぐり、縦に連続8字状の文様が描かれている。37は、浅鉢型土器であるが、内側に平行沈線円形刺突文、弧状の沈線、密なる刻目などが巧みに組みあわさって特異な文様を呈している。色調は、灰褐色で器壁は薄手で旋成

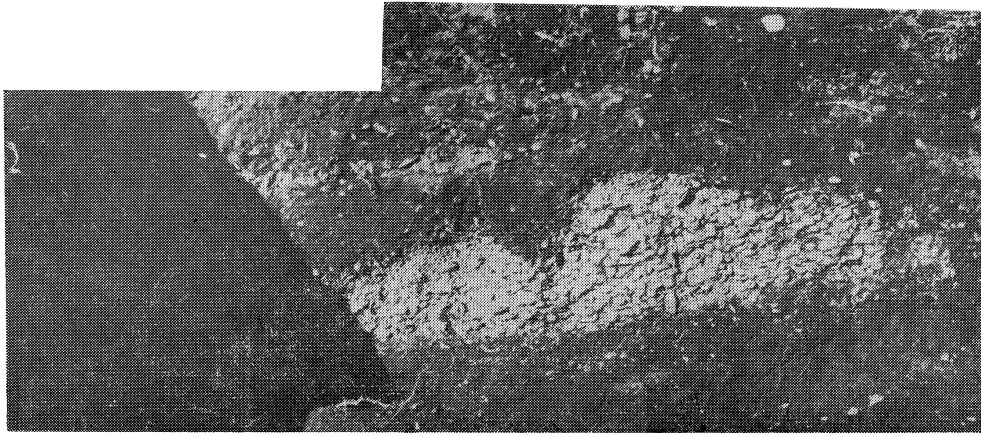


図版第1 西広貝塚附近航空写真
 (A：山倉貝塚、B：西広貝塚、C：モチ塚古墳)
 第393図 市毛・戸田1965写真図版(1)

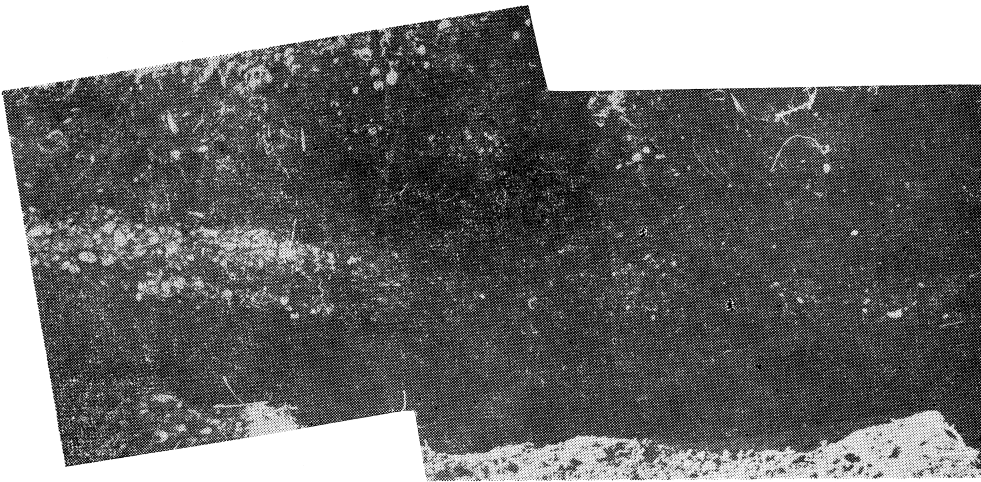
は良好である。

5 考察

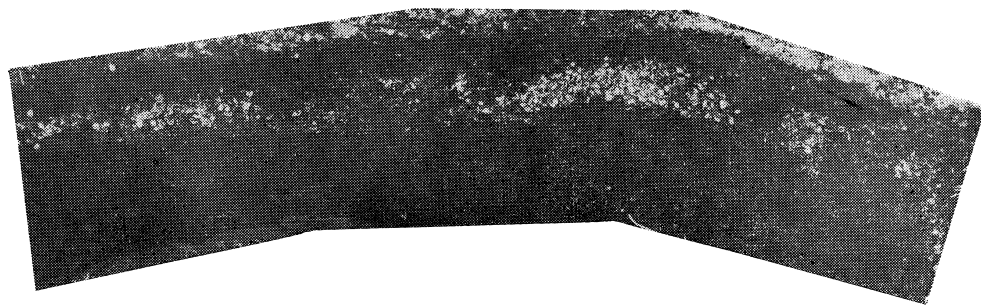
以上の様に西広貝塚は、測量の結果から馬蹄形貝塚であることが明らかになった。千葉県下における多くの貝塚の中でも、比較的面積の広い貝塚であろうと考えられるが、実際に貝層が分布している範囲は、貝の散布している範囲よりも狭く、また貝層自体の厚さも地点によって異なるであろうが、



①Aトレンチ北壁



②Aトレンチ西壁

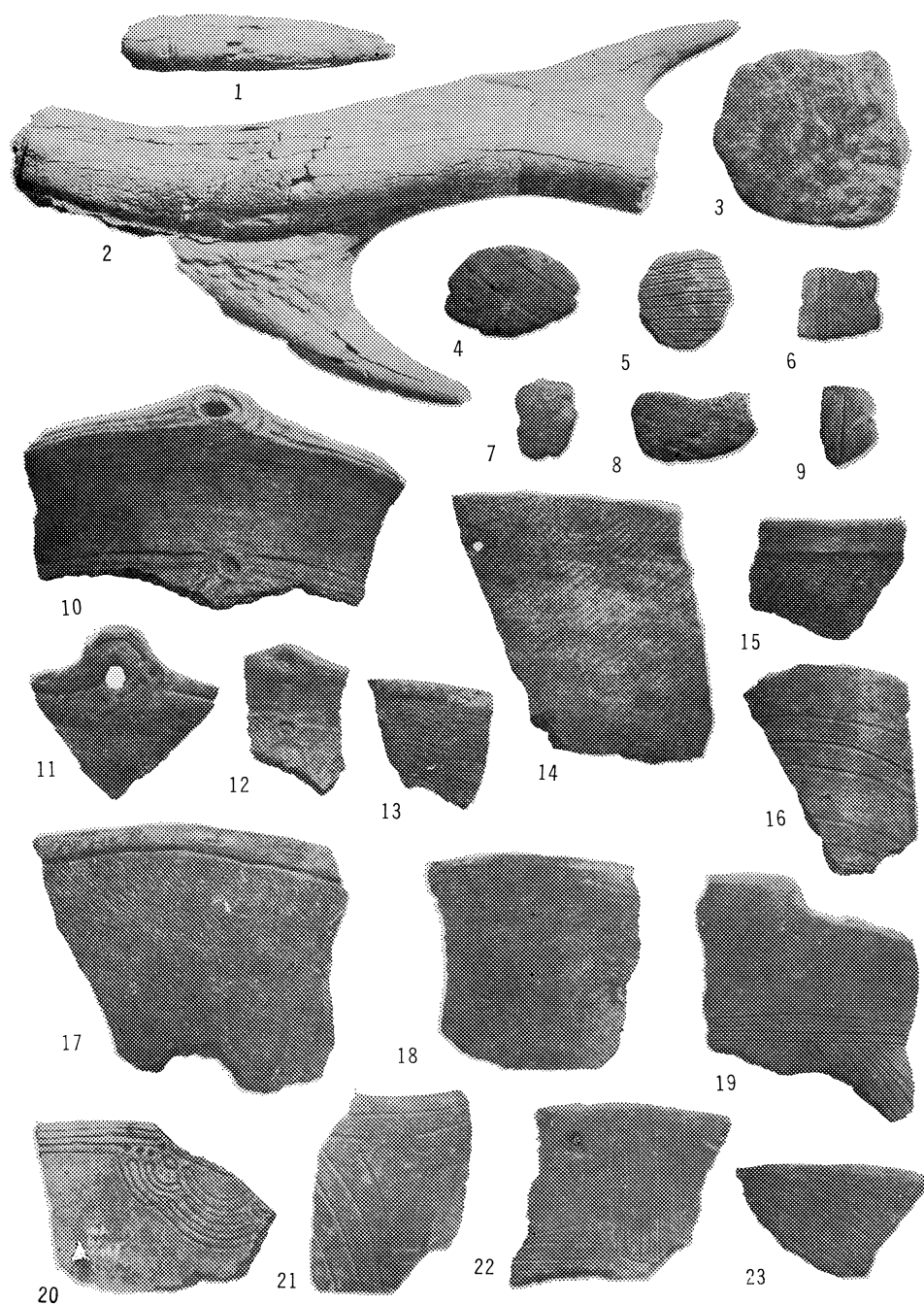


③Bトレンチ南壁

図版第2 貝層断面図

第394図 市毛・戸田1965写真図版(2)

平均40～60センチ程度であることが推察され、貝の種類もおおむね A・B 両トレンチで検出された様に、主にハマグリ、キサゴであって、その他幾種類かの貝類が少量ながらそれらに混入して貝層を形成している。そして、貝層の最も濃密な部分は、約1メートルに近い純貝層も存在することが予想され、本貝塚が純鹹の貝塚であることが貝塚を構成する貝類から言えるのである。こうした良好と思われる貝層をもつ本貝塚の性格は、今回の試掘でも一部明らかにされた様に、縄文式中期加曾利E



図版第3 出土遺物

第395図 市毛・戸田1965写真図版(3)

式、後期称名寺式、堀之内式、加曾利B式の土器を出土し、相対的には加曾利B式が量的に多かった様であり、いずれのトレンチにおいても層位的に出土はしていない。貝塚が形成された時期は、おそらく縄文式後期に至って盛んに形成されていたことが一応思考されるのである。今回の調査が貝塚の測量に伴う試掘ではあったが、出土遺物の点を考えれば、土器の出土が少ないこと、石製品、貝製品、骨角製品など殆んどみられなかったのは、発掘面積の小規模もさることながら、加曾利B式期主体の貝塚における以上のような事実は、この時期の一般的特徴なのであろうか。もちろん遺跡の立地景観や環境なども充分考慮に入れておかねばならないであろう。今後近い将来再び本貝塚が全面的に調査される日がきた時、さらにもっと精査することによって西広貝塚のもつ性格や学史的な意義が

明確にされようが、今は抄報として記録し、記憶の中にとどめておくこととする。附言すれば、西広貝塚は、昭和24年早大の西村正衛教授によって調査されたことがあり、また昭和36年千葉大の神尾明正教授等によって踏査されている。

なお、整理に際し、早大西村正衛教授並びに考古学研究会々員の皆様から御指導、御協力を頂き、ここに末稿ながら記して感謝の意を表する次第です。

参考文献

1. 西村正衛「On Saihiro Shell Mound」早高史学 1
2. 西村正衛・金子浩昌「千葉県香取郡大倉南貝塚」古代21、22合併号
3. 金子浩昌「千葉県君津都天羽町富士見台貝塚」古代42、43号
4. 伊藤和夫・金子浩昌「千葉県石器時代遺跡地名表」
5. 「西富貝塚調査報告書」藤沢市文化財調査報告書第一集 藤沢市教育委員会
6. 「日本原始美術Ⅰ」縄文式土器

附 山倉貝塚

西広貝塚の調査の折、近接して存在する山倉貝塚の踏査を行った。現在山倉貝塚は、山倉工業用水ダムの中島にあって数ヵ所盗掘をうけた痕跡を残しているが、殆んどその原形を保っている。貝塚は、その中心部がマウンドをもっており、厚く貝層におおわれている。貝の散布やボーリング調査による貝層の分布状態などから推して、ほぼ南西側に開口する馬蹄形貝塚であることが明らかになった。表面露出の採集から、貝は、キサゴ、ハマグリ、アサリ、アカニシなどであり、土器は、加曾利E式や後期の堀之内式、加曾利B式などがみうけられた。こうした点山倉貝塚は、西広貝塚と性格を同じくする様に思われる。(図版第1)

註 千葉県史蹟名勝天然記念物 第一輯・西村正衛

(市原市教育委員会 1965)

6 「西広貝塚」

市原市西広字上の原2～58番地に在る。南から北へ向けて台地を開析して進む養老川が大きく西へ曲る屈曲部の北岸台上にこの貝塚がある。山倉貝塚は、谷を隔てて西約600mにある。調査は昭和23年の上述の調査時行ない、昭和40年1月3週間を費して全体図作製と部分発掘を行なった。(「千葉県市原市西広貝塚」市原市教育委員会、昭40)以下両年度の調査の結果について略記する。

図の示すようにこの貝塚は典型的な馬蹄形であり、貝の散布する範囲はかなり広いが、貝層は狭くまとまり東西約60、南北約45mの南々西に大きく口を開く馬蹄形であったと思われる。図のように馬蹄の頂部が独立貝層になり、離れて左右の側部の貝層をつくるのは、この種の例として多い(編注6)。

貝は、純貝層はハマグリを主とし、その上部にキサゴと黒土の混る貝層がある。検出した貝は、ハマグリ、シオフキ、アサリ、ハイガイ、オオノガイ、カガミガイ、カキ、ホタテガイ、サルボウ、アカガイ、オキシジミ、マテガイ、バカガイ、サラガイ、キサゴ、アカニシ、ウミニナ、バイ、ツメタガイ、サザエ、イボニシ、ヒダリマキマイマイ、レイシなどであり、魚類としては、マダイ、クロダイ、スズキ、マフグ。獣類はイノシシ、ニホンジカ、ニホンイヌ。それに雁鴨科の鳥類の骨である。昭和18年西村教授は、ここでアナグマの下顎骨と鯨の脊椎骨を採集しておられる。以上の自然遺物の量が多い方ではない。

人工遺物としては、石器の数は少なく、磨製石斧、砂岩製凹石、軽石加工品などがあった。骨角製品は、鹿角加工品が少量出土している。土器以外の土製品では、土錘（土器片を加工したもの。）円形状土版があった。なお、土地所有者広川氏宅には緑泥片岩製石棒、頭部装飾付石剣、軽石製ウキ、磨製石斧数個が集められていた。また、昭和23年の発掘では、ハマグリのなかに朱を入れていた痕をのこすものが出土した、小容器として使用されたものである。

土器は、全般に加曽利 B 式が多く、主体をなすものと認められる。しかし、層序をなして土器の出土する地点の発見はできず、この貝塚の主要築成期をこの縄文後期に置くことを至当とする結論を得たということであって、中期の加曽利 E 式、後期の称名寺式、堀之内式に属する土器も出土している。

（千葉県 1967『千葉県史料原始古代編上総国』）

編者注

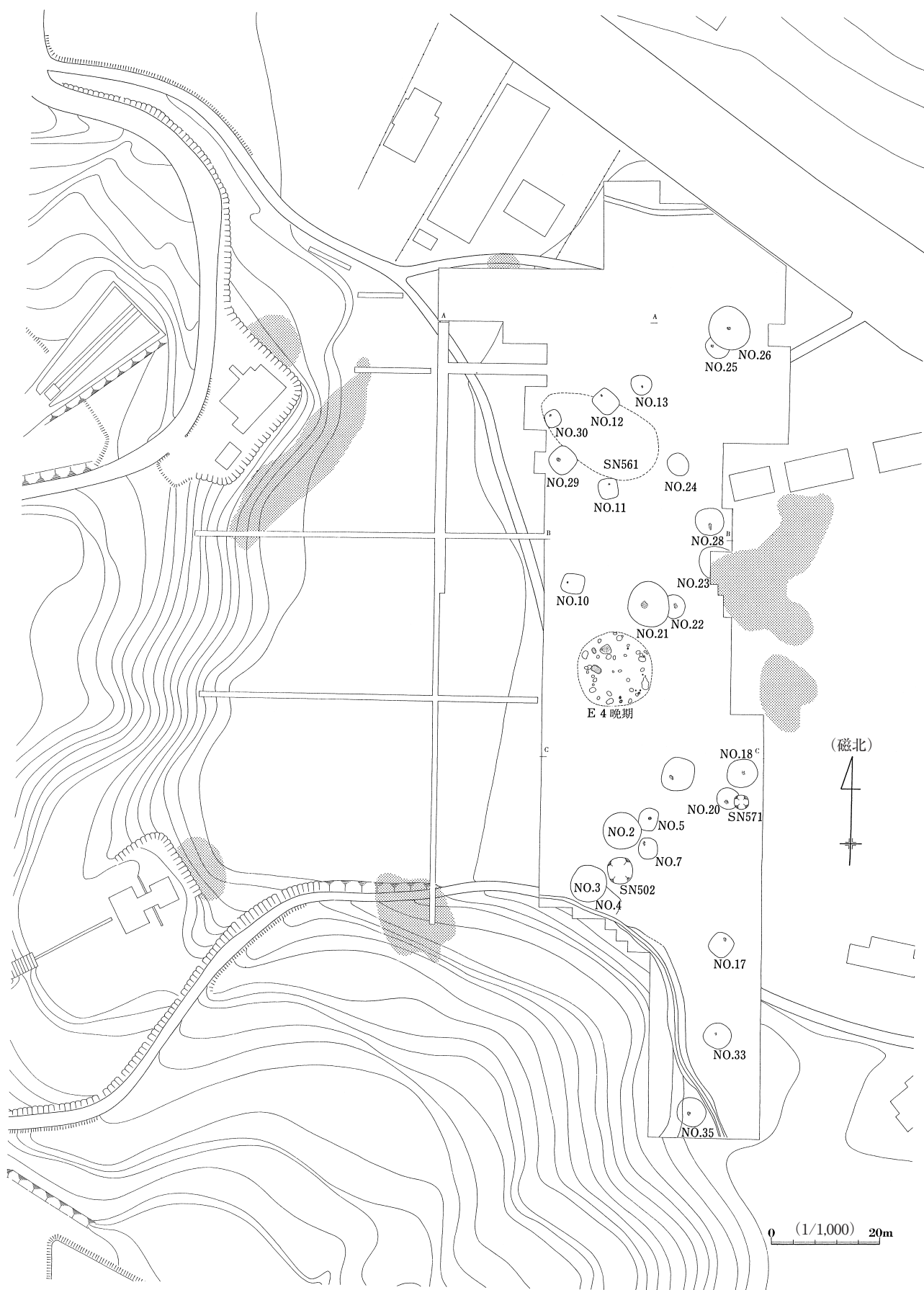
- 1 この文献はスペルミスもしくは誤植がかなりあったが、個別の訂正箇所の記載は省略した。
- 2 Amagumi がどこを指すのかは不明。
- 3 学名については当時と変わっているものが多く対比が難しいため、校正せず原典のまま収録した。
- 4 この単語の原文は *sabtle* となっていた。一応 *subtle* と訂正したが、*stable* の可能性もある。
- 5 このうち鹿角製針は戦災を免れ、現在早稲田大学會津八一記念博物館で保管している（鶴岡 2005）。
- 6 第 1 章で述べたとおり、この地図はスケールが誤っているため、ここでの数字は 2 倍に読み替える必要がある。
なお、挿図の縮尺は訂正している。
- 7 原文は土器の挿図番号が誤っていたため訂正した。

第 2 節 第 1 次調査中央部確認トレンチ平面図

第 1 次調査時に貝塚中央部に確認トレンチを設定していることは、報告書に添付されている図面から明らかであるが、どのような状況であったのかは図上にも記されておらず、報告書内にも記載がないため、全く不明であった。結局未調査のまま破壊されたため、この確認トレンチが遺跡中央部を知る唯一の情報となった。今回の報告にあたり 1 次調査の図面を精査した結果、略測ではあるが平面図の存在を確認したのでここに掲載する。

規模や形状、時期などははっきりしないが、複数の竪穴住居跡が存在するほか、溝状遺構や土坑などが存在することが分かる。北側のピット群は、B3・B4 区に続く中・近世のものと思われる。東側に存在する竪穴住居跡は、形状から見て弥生時代～古墳時代のもではなかろうか。南北に延びる溝が数条検出されているが、306・307号溝の続きである可能性がある。やや南側に存在する竪穴住居跡らしき遺構は、1 次調査の E4 遺物包含地点や SS1 区の晩期の遺物が集中するグリッドに近い。

1 次調査を担当された西田泰民氏によると、貝層中央部の北側は表土が薄く遺存状況は良くなかったが、南側はほぼ全面晩期の包含層であったという。これらも晩期の遺構であった可能性が強い。



第396図 第1次調査全体図



第397図 第1次調査中央部確認トレンチ平面図

第3節 概報掲載遺物対照表

ここでは、すでに刊行されている発掘調査概報に掲載された遺物が、本報告のどこに掲載されているかを表で示した。概報は2次～4次調査のものが刊行されているが、このうち4次調査の貝層出土のものはシリーズⅢで報告する予定なので、今回はそれを除いた遺物を対象とする。

第15表 概報掲載遺物一覧

調査次	概報		報告		出土遺構・グリッド	種別	備考
	図	番号	図	番号			
2	3	1	312	8	36号住居跡	弥生土器	
2	3	2	312	4	36号住居跡	器台	
2	3	3	312	6	36号住居跡	器台	
2	3	4	312	5	36号住居跡	土師器	
2	3	5	312	3	36号住居跡	土師器	
2	3	6	313	1	37号住居跡	手捏土器	
2	3	7	314	7	38号住居跡	弥生土器	
2	3	8	314	5	38号住居跡	弥生土器	
2	3	9	314	6	38号住居跡	弥生土器	
2	3	10	333	1	1号方形周溝状遺構	須恵器	
2	3	11	317	3	40号住居跡	土師器	
2	3	12	318	4	41号住居跡	炉器台	
2	4	1	248	64	SS5区グリッド	縄文土器	
2	4	2	89	11	60号住居跡	縄文土器	
2	4	3	251	133	SS5区グリッド	縄文土器	
2	4	4	224	1	SS5-24貝層	縄文土器	
2	4	5	89	5	60号住居跡	縄文土器	
2	4	6	88	2	60号住居跡	縄文土器	
2	4	7	91	59	60号住居跡	縄文土器	
2	4	8	89	7	60号住居跡	縄文土器	
2	5	1	335	8	SS5-35地点	炉器台	
2	5	2	335	6	SS5-35地点	炉器台	
2	5	3	335	7	SS5-35地点	炉器台	
2	5	4	335	3	SS5-35地点	土師器	
2	5	5	335	2	SS5-35地点	器台	
2	8	1	187	1	N204号土坑	縄文土器	
2	8	2	187	4	N204号土坑	縄文土器	
2	8	3	187	5	N204号土坑	縄文土器	
2	8	4	187	2	N204号土坑	縄文土器	
2	8	5	187	3	N204号土坑	縄文土器	
2	9	1	147	128	SS1区	縄文土器	
2	9	2	147	131	SS1区	縄文土器	
2	9	3	161	411	SS1区	縄文土器	接合
2	9	4	161	408	SS1区	縄文土器	接合
2	9	5	161	401	SS1区	縄文土器	
2	9	6	161	403	SS1区	縄文土器	
2	9	7	161	415	SS1区	縄文土器	
2	9	8	161	412	SS1区	縄文土器	
2	9	9	161	414	SS1区	縄文土器	
2	9	10	161	407	SS1区	縄文土器	
2	9	11			SS1区	縄文土器	所在不明
2	9	12	155	276	SS1区	縄文土器	
2	9	13	155	281	SS1区	縄文土器	
2	9	14	155	273	SS1区	縄文土器	
2	9	15	155	271	SS1区	縄文土器	
2	9	16	155	280	SS1区	縄文土器	
2	9	17	162	437	SS1区	縄文土器	19と接合
2	9	18	161	424	SS1区	縄文土器	
2	9	19	162	437	SS1区	縄文土器	17と接合
2	9	20	161	433	SS1区	縄文土器	上下反転
2	9	21	161	425	SS1区	縄文土器	
2	9	22	161	421	SS1区	縄文土器	
2	9	23	164	512	SS1区	縄文土器	接合
2	9	24	162	438	SS1区	縄文土器	
2	9	25	161	436	SS1区	縄文土器	
2	10	1	161	419	SS1区	縄文土器	
2	10	2	161	423	SS1区	縄文土器	
2	10	3	162	448	SS1区	縄文土器	
2	10	4					
2	10	5					
2	10	6					
2	10	7					
2	10	8					
2	10	9					
2	10	10					
2	10	11					
2	10	12					
2	10	13					
2	10	14					
2	10	15					
2	10	16					
2	10	17					
2	10	18					
2	10	19					
2	10	20					
2	10	21					
2	10	22					
2	11	1					
2	11	2					
2	11	3					
2	11	4					
2	11	5					
2	11	6					
2	11	7					
2	11	8					
2	11	9					
2	11	10					
2	11	11					
2	11	12					
2	11	13					
2	11	14					
2	11	15					
2	11	16					
2	11	17					
2	11	18					
2	11	19					
2	11	20					
2	11	21					
2	11	22					
2	11	23					
2	11	24					
2	11	25					
2	11	26					
2	11	27					
2	11	28					
2	11	29					
4	図版8	上段	107	2	63号住居跡	縄文土器	
4	図版8	上段	107	4	63号住居跡	縄文土器	
4	図版8	上段	107	7	63号住居跡	縄文土器	接合、上下反転
4	図版8	上段	107	8	63号住居跡	縄文土器	
4	図版8	上段	107	10	63号住居跡	縄文土器	
4	図版8	上段	107	11	63号住居跡	縄文土器	120°横転
4	図版8	上段	107	12	63号住居跡	縄文土器	90°横転
4	図版8	上段	107	14	63号住居跡	縄文土器	上下反転
4	図版8	上段	107	15	63号住居跡	縄文土器	上下反転
4	図版8	上段	107	16	63号住居跡	縄文土器	90°横転
4	図版8	下段	97	1	61号住居跡	縄文土器	接合

主要参考文献（著者50音順）

- M.Nishimura 1938” ON SAIHIRO SHELL-MOUND” 早高史学 1
- 朝比奈竹男 1995『企画展図録 縄文時代の技と祈り—異形台付土器の世界—』八千代市歴史民俗資料館
- 新屋雅明・大塚達朗他 1984『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書—人工遺物・総括編—』埼玉県教育委員会
- 石井 寛 1984「堀之内 2 式土器の研究（予察）」『調査研究集録第 5 冊』港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
- 市毛 勲・戸田 健 1965『千葉縣市原市西広貝塚』市原市教育委員会
- 市立市川考古博物館編 1982『シンポジウム堀之内式土器資料集—各地の堀之内式土器とその変遷—』
- 井上喜久男 1993「尾張陶磁(3)」『愛知県陶磁資料館研究紀要12』愛知県陶磁資料館
- 井上喜久男 1994「尾張陶磁(4)」『愛知県陶磁資料館研究紀要12』愛知県陶磁資料館
- 江原 英・青柳平人・初山孝行・谷中 隆 1997『寺野東遺跡Ⅴ（縄紋時代 環状盛土遺構・水場の遺構編）』
- 栃木県教育委員会、(財)栃木県文化振興事業団
- 大内千年 2001『主要地方道松戸野田線住宅宅地関連埋蔵文化財調査報告書—流山市三輪野山貝塚・宮前・道六神・八幡前—』財団法人千葉県文化財センター
- 大田区立郷土博物館編 1987『特別展図録 縄文の神秘注口土器』大田区立郷土博物館
- 大塚達朗 1983「縄文後期加曽利 B 式土器の研究（Ⅰ）—最近の成果の検討と新たな分析—」東京大学文学部考古学研究室研究紀要第 2 号
- 大塚達朗 1986「安行 1 式土器型式構造論基礎考」東京大学文学部考古学研究室研究紀要第 5 号
- 大塚達朗 1989「加曽利 B 式 3 細分における齟齬の解消—学史的な理解とは何か—」先史考古学研究第 2 号
- 大塚達朗 2000『縄文土器研究の新展開』同成社
- 大塚達朗 2001「曾谷式土器再考の視点—縄紋土器研究の脱構築として—」土曜考古第 25 号
- 大村 直・西野雅人・鶴岡英一他 2004『市原市山田橋大山台遺跡』財団法人市原市文化財センター
- 大村 直他 2005『上総国分寺台遺跡調査報告ⅩⅢ 千葉縣市原市根田代遺跡』財団法人市原市文化財センター
- 忍澤成規 1992『市原市山田橋亥の海道貝塚』財団法人市原市文化財センター
- 忍澤成規 1993「縄文時代後・晩期の装飾観念—市原市西広貝塚出土の骨角貝製装身具を中心として—」『市原市文化財センター研究紀要Ⅱ』財団法人市原市文化財センター
- 忍澤成規 1995『市原市能満上小貝塚』財団法人市原市文化財センター
- 忍澤成規・金子浩昌・森本岩太郎・平田和明・西田泰民・菅谷通保 1999『上総国分寺台遺跡調査報告Ⅴ 千葉縣市原市祇園原貝塚』市原市教育委員会
- 小高春男・渡辺修一 1989『房総考古学ライブラリー 4 弥生時代』財団法人千葉県文化財センター
- 金子浩昌・米田耕之助・鷹野光行 1976「第Ⅲ部 3 千葉縣市原市西広貝塚調査概要」『日本考古学年報27（1974年版）』日本考古学協会
- 金子浩昌・米田耕之助 1989『第 4 回市原市文化財センター遺跡発表会特別講演資料』財団法人市原市文化財センター
- 金子裕之他 1989『山内清男考古資料 1 真福寺貝塚資料』奈良国立文化財研究所
- 金子裕之他 1996『山内清男考古資料 7 曾谷貝塚資料』奈良国立文化財研究所
- 加納 実ほか 1998『市原市武士遺跡 2』財団法人千葉県文化財センター
- 九州近世陶磁学会編 2000『九州陶磁の編年』
- 小橋健司・櫻井敦史他 2004『上総国分寺台遺跡調査報告ⅩⅠ 市原市山倉古墳群』財団法人市原市文化財センター
- 近藤 敏 1987『菊間手永遺跡』財団法人市原市文化財センター
- 財団法人市原市文化財センター 1989「1. 西広貝塚」『第 4 回市原市文化財センター遺跡発表会要旨』財団法人市原市文化財センター
- 菅谷通保 1985「竪穴住居の型式学的研究」奈和第 23 号
- 菅谷通保 1987「縄文時代特殊住居論批判」東京大学文学部考古学研究室研究紀要第 6 号
- 菅谷通保・神野 信・山内利秋 2003『千葉県茂原市下太田貝塚』財団法人総南文化財センター
- 縄文セミナーの会編 1996『第 9 回縄文セミナー 後期中葉の諸様相』縄文セミナーの会
- 縄文セミナーの会編 1996『第 9 回縄文セミナー 後期中葉の諸様相—記録集—』縄文セミナーの会
- 縄文セミナーの会編 2001『第 14 回縄文セミナー 後期後半の再検討』縄文セミナーの会
- 縄文セミナーの会編 2001『第 14 回縄文セミナー 後期後半の再検討—記録集—』縄文セミナーの会
- 縄文セミナーの会編 2002『第 15 回縄文セミナー 後期前半の再検討』縄文セミナーの会
- 縄文セミナーの会編 2002『第 15 回縄文セミナー 後期前半の再検討—記録集—』縄文セミナーの会
- 縄文セミナーの会編 2004『第 17 回縄文セミナー 晩期中葉の再検討』縄文セミナーの会
- 縄文セミナーの会編 2004『第 17 回縄文セミナー 晩期中葉の再検討—記録集—』縄文セミナーの会
- 鈴木秀枝 1949「西広貝塚—市原村大字西広所在」『千葉県史蹟名勝天然記念物調査報告書第 1 輯 市原遺蹟発掘調査概報』千葉県教育委員会
- 鈴木公雄・林 謙作他 1981『縄文土器大成 第 4 巻晩期』講談社
- 鷹野光行 1978「前浦式土器の研究」考古学雑誌第 64 巻 3 号